紅蓮の御子は虹とともに

坂川　一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
紅蓮の御子は虹とともに

【Ｎコード】
Ｎ４６７４Ｕ

【作者名】
坂川　一

【あらすじ】
これは作者の前作、燃える翼と黒い竜の続編です。
悠二とシャナの娘二人と男オリ主に加え独自設定ののどかを中心に原作沿いで行きます。
この作品の都合上悠二やシャナの登場は少なくなります。
また、他作品のキャラが外見だけ、とか技を使ったりもします。独自解釈ありです。

とある少年のプロローグ

周囲を砂漠と岩山に囲まれた魔法界の辺境の一角にポツリと緑のある土地が存在する。
オアシスと南国風の植物、そして古代遺跡を思わせる石作りの建造物。それはここに暮らす一人の男の所有物である。

「くっそ！ゼンゼン効かねー。どうなってんだよ！？」

「ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ！ほらほらどうした。追いついちゃうぞ～」

そんな美しい光景に似つかわしくない、荒々しい光景は、ここ五年で日常となったものである。
追われているのはアマネ・オルディン。五年ほど前にこの土地を訪ねて以来ここに暮らす少年。
その外見は黒味がかった金髪に東洋風とも西洋風ともとれる顔立ちをしている。名前からわかるとおり、日本人の血が入っているらしい。
対するはここの主、ジャック・ラカン。二十年ほど前の大戦の英雄の一人で今はこの辺境の地で隠居生活を送っている。

「来たれ水精、風の精！光を纏いて暗き雲を撃ち払え！虹天剣！」

水、風、光の精霊がアマネの右腕に集中し虹色の輝きを放つ。
レアスキル・三属性融合による『虹』の光線は一直線にラカン目掛けて進んでいった。
虹天剣は雷の暴風と同系統の技。直撃すればただでは済まない・・・・ハズなのだが。

「気合パーンチ」

あろうことか、ラカンはこれを正面から、ただの右パンチで打ち消してしまった。

「どんなチートだ！」

思わず叫んでしまった。この五年でラカンのでたらめさは充分すぎるほど知っていたが、未だ見せられるたびに我が目を疑ってしまう。

「そら、敵から意識を逸らすなって」

――――――――――――――――――――――――――――――――しまっ

意識が浮上する。気を失っていたようだ。

「・・・・知らない天j」

「おお！目が覚めたか。早かったな！」

――――――――――――――――――――――――――――――――言わせろよ

内心の舌打ちを隠しつつ状況を確認する。
ラカンに強烈な一撃をもらって、昏倒。そして、今は岸辺の屋根つきベンチで寝ていたと・・・・

「どれくらい寝てた?」

「十分くらいだな。ずいぶん頑丈になったじゃないか」

「あんたと五年もいれば頑丈にもなる」

なにせ気まぐれにあのパンチが飛んでくるんだからな。

「そうそう。お前に言っておかなきゃならないことがあったんだ」

やっべ忘れてたーと頭をボリボリ掻く様子はとても大戦の英雄には見えない。

「お前明日から麻帆良行け」

「は?」

「麻帆良だよ麻帆良ぁ。知ってんだろ?」

「いや、どうしていきなり?」

明日からって唐突すぎんだろ。

「いやー。実は前から話はあったんだけどよ。すっかり言うの忘れてな~すまんすまん」

「忘れんなよ！めちゃくちゃ大事なことじゃねぇか！」

「まあ、いいじゃん？ほら、悠二んとこの娘も通うらしいし、幼馴染だろ。しかもヘカテーの弟子までいるときた！いいね、いいね、羨ましいねーこのこのぉ！」

「うっせ。黙れおっさん」

ゲヘゲヘ笑って来る筋肉達磨にパンチ。もちろん効かない。

とりあえずラカンを無視して自室へ向かう。

「もう決まってんなら行くしかないだろ。荷物まとめてくる」

ラカンは屋内へ消えたアマネを見送った。

「難しいお年頃ってか。素直じゃないねぇ」

ラカンは明日からと言っていたが、実は四月の新学期からということがその夜判明。ひと悶着の末に結局翌日ここを立ち、古巣のアリアドネーによって時間を潰してから日本へ行くことで決着した。

アマネ・オルディン。１５の冬（日本の季節）のことであった。

とある少年のプロローグ（後書き）

はじまりました続編。

ついにネギ時代です。はい。頑張っていきます。

とある少女のプロローグ（前書き）

さっそくですが鬱な展開です。要注意です。この時点で独自解釈バンバンです。

とある少女のプロローグ

初めては幼稚園のときだった。

お母さんが料理の最中に誤って浅く指を切ってしまったこと。

それがすべての始まりだったのだ。

そのときわたしは傷からにじみ出る赤い血を見て不覚にも思ってしまったのだ。

――――――――――――――――――――――――おいしそう
――――――――――――――――――――――――――――

と。

気がつけばお母さんの指を口に含んでいた。

口内に広がる鉄のような味は本来なら忌諱すべきもののなのだろうが、そのときのわたしにはそれが今までに食べたあらゆる食べ物よりも遥かにおいしく感じられた。

それと同時に不思議な高揚感があった。体のうちから力がわきあがり、今なら何でもできてしまうと、そう思わせた。

ちょっとしてからお母さんが「もう大丈夫」といってくれるまで血をなめ続けた。

傷にはツバをつけていれば大丈夫というふうによく言われる。お母さんはわたしがどこかでそれを聞いたからそういう行動をとったのだと解釈したようだ。

まあ、こんなことをいちいち覚えていてもしょうがない。思い返したらそんなことがあったなぁといった感じである。

実際、わたしもすぐに忘れた。幼いころの何気ない行動など積み重ねられる日常の一コマとして上書きされるだけだ。

でも、それをきちんと覚えていられたら、そして、自分の異常性をちゃんと自覚していたならもう少しマシな未来もあったかもしれない。

小学校二年生のとき、それまで仲のよかった家庭にヒビが入った。お父さんのリストラがきっかけだった。

職を失ったお父さんはしだいに酒に依存し暴力を振るうようになっていった。お母さんもわたしもはじめはすごい泣いたけど、それも少しずつ慣れてしまって、泣くことはおろか笑うことすら捨ててひたすら嵐が過ぎ去るのを待つ日々を送った。

そうした劣悪な日常の中でわたしは自分の傷を舐めることで自分を慰めるようになった。特に理由などない。ただそうすることが自然だと思ったから。もちろん人には言わない。他の人のことはわからないけど傷をなめる人は少数派だろうし、この年にもなれば吸血鬼という化物のことも知識として納めている。　自分が吸血鬼だなどとは言わない。ただ周囲に知られたらそうからかわれるに違いないと思ったのだ。なによりお父さんの暴力のことを人に知られないようにするためということもあった。

二年たっても状況は変わらなかった。いや、むしろ悪化したといえるだろう。この二年ですでに三回も引っ越している。理由は言わずもがな。転校を繰り返し学校に友達も居なくなった。この家庭状況にさらされてわたしは表情を失い、他者とのコミュニケーションもうまく取れなくなったため、新しい友達ができなかったのだ。

わたしは機械的に家と学校を往復する毎日を送った。家に帰ってもこの二年で日常となった日々が繰り広げられているだけなのだが・・・・・

ところが、新居に越してきて半年というところで事件が起こった。学校から帰ってきたわたしはいつもどおりアパートのドアを開け玄関に入る。中が暗いのはいつものこと。ただいつもと違うことがあるといえば、なにやら甘い香りがするということだ。嗅いだことがあるような無いような、芳しい香り。

その香りに疑問を抱きながらも短い廊下を歩きつきあたりのリビングのドアを開ける

我が目を疑った。それ以前に脳がソレを理解できなかった。コレはなに。何が起こってるの。

どうして?

どうしてお母さんとお父さんが倒れているの?

二人とも血まみれだった。ピクリともしない。もう息が無いのは疑いようも無い。明らかに致死量を超える出血量だから。

まるで足に根が生えたように立ち尽くすわたしの足元に赤い血が

流れてくる。その血が白い靴下に染み込んできたころになってはじめて悲鳴をあげた。

死因は大量の出血。お母さんがお父さんを刺し殺したの後、自害したのだそうだ。

わたしはそのあと施設に入れられることになった。

劣悪な環境から開放されたわたしを待っていたのは『苦痛』だった。

わたしは他者との関係を絶ち、自分の殻に引きこもることであらゆる苦痛から心を守っていた。

それが、あのあと様々な人から気にかけてもらえるようになったのだ。本来であれば喜ばしいこともこのときばかりは苦痛にしか感じなかった。

『大変だったねぇ』『大丈夫』『なにかあったら言ってね』

なんてことのない、陳腐な言葉にわたしの心はかき乱されていく。

わたしが一番苦しいときには誰も助けてくれなかったくせに!!

理不尽な怒りは心をどす黒く染め上げていく。人から声をかけられればかけられるほどにわたしは頑なに心を閉ざすようになっていった。

そんなある日、同じ施設の子がガラスで腕を切るというちょっとした事件があった。

遊んでいてバランスを崩し、窓ガラスに勢いよく突っ込んでしまったのだという。

傷口はパックリと開き大量の血が流れていた。

しかし、わたしにとって問題なのはそこではない。問題なのはその子が痛みで腕を引いたとき、飛び散った血がたまたま近くにいたわたしにかかったこと、そしてその血を『おいしい』と感じた自分がいたということだ。

衝撃だった。

そうか。『血』だ。

わたしは自分の傷をなめていた。ツバをつけるという意味合いではなく、血をなめるために。

お母さんたちが死んだとき漂ってきた甘い香りはなんだ?今なら間違いなく断言できる。あれは血の臭いだった。

お母さんたちの死体を見たときわたしの目はどこを見ていた?思い出した。わたしはあの時流れてくる血を見ていた。惹きつけられるように・・・・・

自分の異常性を理解してしまった。自分は明らかに他の人と違う。血を求める吸血鬼だ。

そして自分の異常な力に気がついた。わたしは思うだけで人と関わらなくてもいいようになる。話しかけられたくないと、関わりたくないと、そう思っただけで他者はわたしを認識できなくなった。都合がよかった。これで、心を荒らされないですむ、と。

そして、そのときのわたしはおかしかったのだろう。人を襲い始

めた。
理由は特に無い。強いて言えば八つ当たりだろうか。
姿を消し、忍び寄り、首筋に噛み付く。痛みはほとんど無いため蚊に刺されたようなものだ。はじめは、失敗も多かったが、徐々に慣れてきて、毎夜道行く誰かを襲うようになっていった。

そんな通り魔的なことを繰り返していたとき、ふと、テレビのニュースが目を引いた。
画面には見知った風景が映し出されていた。それもそのはず、わたしの住んでいる町だ。
地方のローカル番組が都市伝説を取り上げていた。
吸血鬼の話題だった。
サァッと血の気が引いた。それは明らかにわたしのことだったからだ。
姿は見られていない、気づかれてもいない。しかし、血を吸った痕は残る。
その痕を不思議に思った誰かが病院を訪れ、発覚したのだ。もちろん今は噂の段階。しかし仮に自分がやったとばれたら・・・・・・
パニックになった。わき目も振らずに走り出し、どこにいるのかもわからずひたすらに走り続けた。
気がつけば来たことの無い公園だった。帰り道もよくわからない。
そもそも自分のようなものが帰っていいのかどうかもわからない。

もはや、どうすることもできず、ベンチに腰かけ、うなだれることしかできなかった。

「こんにちは」

「？」

声をかけられた。他に人はいないからわたしであっているだろう。顔を上げてみると、高校生か大学生くらいの女の人が目の前にいた。

「あなたは誰ですか？」

警戒心を隠さず刺々しくたずねる。普通こういう対応はしないのだろうが、現在進行形で人間不信のわたしは自然とこうなってしまう。

そんなわたしのふてぶてしい問いにその女性はなんてことないようにこう言った。

「わたし？わたしは近衛史菜。通りすがりの魔法使い。ああ、業界ではヘカテーって呼ばれてるけどいろいろと面倒だから史菜さんって呼んで。お姉ちゃんでも可。さあ、わたしは名乗ったんだから次はあなたの番」

魔法使いなどと自分から言い放つ人間がこの世にいようとは思わなかった。

何の冗談だと、そう思ったのだがこの人を見ているとなぜか魔法使いでも不思議ではないような、そんなありえない雰囲気をまとっているような気がした。

こんな見ず知らずの人に名乗っていいものか迷ったが、名前だけならと一応名乗っておくことにした。

「宮崎・・・・のどかです」

それが、わたしとあの人たち、そして魔法との始めての出会いだった。

とある四人のプロローグ

季節は冬、もうすぐ年越しという時期で学校も冬休みという学生にとっての天国シーズンに突入していた。
今年の冬は例年にも増して寒い。ここ麻帆良学園にもうっすらと雪が積もっている。
雪といっても歩けば足跡がつくくらいで、豪雪地帯のような地獄絵図はまったく無い。

そんな日の学園長室。

「フォフォフォ。四人ともよく来てくれたのう」

「相変わらずデカイ頭だな、よくそれで異端審問にかけられないな」

「おぬしも相変わらずだの。いや、少し角が取れて丸くなったか？」

「うるせーよ」

麻帆良学園は広大な敷地をもつ日本一の学校群。いくつもの小学校から大学がひしめき合い、ひとつの都市を形成している。
つまり学園都市なのだ。
都市でありながらその構成員の大半が学生という異質な空間。
最も麻帆良が異質なのは他の理由もあるのだが。
その学園を統括する学園長は麻帆良学園女子中等部の校内に設置されている学園長室にいる。

そしてその人物は四人の目の前にいる。

白く長い顎鬚と、異常に伸びた後頭部が特徴のぬらりひょん。

学園長、近衛近右衛門。

学園最強の魔法使い。その人柄を一言でいうなれば老獪。なかなか腹のそこを見せない人物だという。

「では、さっそくで悪いが事務的なことを済ませてしまおうかの・・・・坂井恋君、坂井アテナ君。君たちの麻帆良学園入学を認めよう。おめでとう」

老人が話しかけたのは先ほどまで会話していた男性、垣根帝督の後ろにいた女子学生であった。

坂井悠二と坂井シャナの長女・恋（１４）と次女アテナ（９）

ともに一月の新学期よりこの麻帆良学園へ転入することになったため、今日この場に来たのである。

「よく言うぜ。どうあっても入れるつもりだっただろーが」

「それでも彼女たちはテストに合格しているのじゃ。ワシが手を出す必要も無かった。彼女たちの学力は同世代と比べても抜きん出ておるのじゃよ」

事実、恋もアテナもテストを難しいとは思わなかった。幼いころからいろいろと叩き込まれてきた成果の一つであった。

「さて、それと垣根帝督君。まさか美術教師の件、引き受けてもらえるとは思っていなかったぞ」

「俺に教師なんざ似合ねーがな。どうなっても知らないからな」

帝督は表の世界では、カリスマデザイナーとして知られている。世界中に多くのファンを持ちながら、あまり表に出てこない謎の芸術家だ。

この状況に一番困惑しているのは当の本人だったりするのだが。

そしてこの場にいる最後の一人、近衛史菜。裏ではヘカテーと呼ばれアイドルさながらの人気を誇る彼女は日本風の名を名乗って生活していた。ここでは女子寮の寮長を務めることになった。

「では、新学期から頼むぞ」

「ちょっと待て。この三人は寮に住むとして俺はどこに住めばいいんだ。教員用の寮に空きはないって話だったぞ」

「うむ。じゃから史菜君と同じ寮長室で暮らしてくれんか」

ｗｈａｔ？なんつったこのじじい。

「・・・・・・ＯＫここで頭ぶっ潰してくれってことでいいんだな？」

「フォ！？待て待て、落ち着くのじゃ。コレには深いわけがある！あの寮にはワシの孫がいての」

「あ？詠春の娘か。そういえばそうだったな」

「それに『彼女』もおる」

「・・・・・」

『彼女』ーーーーーーーーーーーーーーーーアスナ姫か

「広域指導員と兼任でよろしく」

「やっぱコロスかこのじじい」

学園長室を出た四人は寮を下見に行くこととした。

ちなみにアテナも寮長室で生活する。小学生は保護者といるのが基本だろう。

「なんかうまく乗せられちまったって感じだな」

「まあ、あのくらいの老獪さがあったほうが組織としてはいいかもね」

魔法使いの町、麻帆良。そこの長ならばたしかにそれくらいの外交術は必要だろう。

「だけど同じ部屋だぞ。いいのか?」

「わたしはいいよ。帝督のほうこそどうなの？わたしと一緒は嫌？」

「・・・・別に、お前がいいなら」

「あ！・・・もしかして照れてる？」

「んなわけねーだろ！」

「ふーん。正直になっちゃえば。ほらほらぁ」

ここ二十年で感情が豊かになった史菜は時折帝督をからかうほどになった。

いまもこうして訳知り顔で帝督の反応を楽しんでいる。

いつからこんな性悪になったのやら。

それ以前に女子寮に住むってのはどうなんだ？

というわけで女子寮到着。寮長室は当然玄関付近なわけで、ここで恋とわかれた。恋の部屋は上の階だからだ。

扉の鍵を開けて中に入る史菜とアテナ。そこに帝督が続こうとしたところ、いきなり呼び止められた。

「ちょっとアンタ！！」

「んあ？」

だれだ？と言おうとして言葉を失った。

勝気そうな顔をしたツインテールの少女の瞳はオッドアイ。
間違えようがない。かつて命がけで救い出したとある王国のお姫様。

「ここは女子寮よ。なんで男がいんのよ?」

驚いた。性格がゼンゼン違う。かつての人形のようだった面影はどこへやら、強い意思を宿した視線は並みの男程度なら簡単に萎縮させてしまえるだろう。

「一月から美術教師をすることになった垣根帝督だ。今度からここに住む。よろしく」

内心の動揺を隠して簡単な自己紹介。隠せてるよな。

「美術教師、先生なんですか。すいませんでした。てゆーかここに住む?」

なんだ敬語使えんじゃん。

「そ。ああ。ちなみに寮長はこの」

「近衛史菜です。よろしくお願いしますね」

「え、はい。こちらこそよろしくお願いします。二年の神楽坂明日菜です」

騒ぎを聞きつけてやってきた史菜を紹介して追及をさえぎる。
それにしてもキチンとした話し方もできるのは、タカミチの教育の賜物か。

その後適当な会話をして明日菜は去っていった。

「幸せそうでしたね」

「ああ、いいことだ。俺たちのことを覚えてないのは少し寂しい気もするがな」

それにしても恋とあの娘が同じクラスか。これは騒がしくなる気がするな。

（なんだろうこの感じ・・・）

さっき別れた二人。寮長の女性と新たな美術教師のことが明日菜の心に妙な引っかかりを覚えさせていた。

（なんか、なつかしい？）

もちろん明日菜はあの二人に会った記憶などない。それは当然なのだが、明日菜にとってあの二人は間違いなく初対面のはず。

（ま、いっか）

明日菜は気にしないことにした。
妙な懐かしさは時折あることだ。気にしてもしょうがない。
そういって過去への扉の鍵を明日菜はまた手放した。

設定（前書き）

ネタバレ満載です。

設定

・アマネ・オルディン

二歳のときに魔法界の紛争で両親を失った少年。現在十五歳。
両親を失ったあとに赤き翼によって救出され、稀有な三属性融合の持ち主であることから悠二たちの元にやってきた。
同じ三属性融合の使い手である帝督に師事したのち、七歳でアリアドネーへ行き、十歳から五年間ラカンのもとで暮らした。
日系人であるらしく名前のアマネは漢字表記で「周」となる。父親の残した手記によると日本の哲学者、西周からとった模様。

水、風、光を合成して虹属性を作り出す。

恋、アテナとは幼馴染、のどかとも面識があり、ベアトリクスとはアリアドネー時代の同級生。

・坂井恋（さかいれん）

悠二とシャナの第一子。十四歳。外見は恋姫の呂布をイメージ。
赤みがかった黒髪と眼をもつ。性格はおとなしいような活発なような、つまり気分屋。
炎属性を得意とし、母の技である「真紅」や「断罪」「審判」「飛焔」のほかに炎系統の魔法を多用する。
近接戦を好み、強化なしでも気を使用する刹那と戦えるくらいに強い。
その他、恋の真紅は初代焔髪灼眼のように炎を物質化し剣や槍、騎士団などを創ることが多い。

また審判は炎の瞳を作るのではなく、恋の眼が審判の能力を宿した魔眼となる。

両親の影響で人でありながら神性をもつ。
アマネと仮契約をしている。

アーティファクト『六面武帝』

両手首に装着する金色の装飾品。長さは十センチほどで手首部分をぐるっと覆っているためちょっとした篭手にもなる。
状況に応じて六種類の能力に切り替えることができる。基本は全身強化＋α。二種類の能力を同時に使用することはできない。

『拳』・・・基本形。全身を強化した上であらゆる拳法などの体術とヌンチャクなどの使用法をダウンロードできる。

『剣』・・・刀剣類や短い棒、ナイフなどを持つときに発動可能。全身強化＋腕力が上昇し、手にもつ武器を使う上でのあらゆる技法をダウンロードする。

『槍』・・・槍や棒のようなリーチの長い武具を持つときに発動可能。全身強化＋脚力が上昇し敏捷性もあがる。以下同文。

『弓』・・・弓や銃など射撃系をもっているときに発動可能。全身強化に加え、感覚が鋭敏になり集中力が上昇する。特に視力に重点を置いた強化がなされる。以下同文

『騎』・・・生物、非生物に関わらずあらゆる乗り物を乗りこなす技能をダウンロードする。
このさい乗り物も強化される。

『楯』・・・防具を持つ、もしくは生命の危機で使用可能。防御力の強化による異様なうたれづよさをもち、防具も強化される。また、生命力も強化され、重症も治癒させることが可能。ただし、傷が大きいと時間はかかる。

・坂井アテナ

坂井家次女　九歳。
名付け親はヘカテーもとい史菜。
外見はカンピオーネのアテナ。瞳は漆黒、髪は月を溶かし込んだような銀色と表現される。
ニット帽がお気に入り。
闇と地属性に才能がある。
悠二の才能を受け継ぎ、魔法において天才的な頭脳をもつ。この歳にしてオリジナル魔法を編み出すほど。
姉と同じく近接戦を好み、力も強い。
小太郎に対して上から目線になる予定。
時折言葉遣いが古風になる。
神性をもつ。

・宮崎のどか

原作と違い様々な能力を持っていてけっこう強い。
その本質は吸血。
作者の前作、燃える翼と黒い竜で登場した「真祖化実験」の被検体として扱われたことのある人物が先祖にいたために先祖がえりで

吸血能力を持って生まれてしまった。ただし「魔」ではなくあくまで吸血能力を持った「人」。
家庭事情から自暴自棄になっていたところを史菜に見つかり更生、弟子入りして力の使い方を学んだ。その後は史菜を後見人として麻帆良に入学、一般生徒としての生活を心がけている。
秘密を知っているのは開始時は学園長とタカミチのみ。
幻術を得意とし、姿と気配を消す明鏡止水、自分の分身を創る鏡花水月などの他、自己暗示によって身体能力を向上させたりする。
また、魔眼の持ち主で、超動体視力、解析能力をもち、簡単な魔法なら所見でコピーする（ただしレアスキルはムリ）。
血を嫌うと同時に血に引かれる。
吸血すると能力が大幅に上昇する。
念のためにアマネの血をカプセル状にした錠剤を持ち歩いている。

・垣根帝督

英雄の一人で旧世界でも一流の芸術家として知られている（本人はそんなつもりではなかった）
戸籍上は現在二十四歳
魔法界ではアイドル的人気
麻帆良学園では芸術教師、広域指導員としてはたらくことに・・・
・・

・近衛史菜

英雄の一人でヘカテーと名乗っていたものをこの名に改めた。理由としては苗字が必要になった際、思いつかなかったためテンパってこう名乗ったことに由来。
魔法界ではアイドル的人気。
現在女子寮寮母で戸籍上は二十四歳

・坂井悠二

恋、アテナの父。シャナの夫。
一応三十五歳だが異様に若い。長命種になった可能性あり。
この十年は行方不明ということになっていたが、その実育児に専念するために身を隠しただけ。
そのため娘の存在はあまり知られることがなかった。
麻帆良には来ていない。

・坂井シャナ

恋、アテナの母。悠二の妻。
三十二歳（サバを読んだ）。二十台前半以下に見えることから長命種の疑いがある。
母親らしく娘を見守る。
この十年は行方不明ということになっていた。
麻帆良には来ていない。

日常と非日常

とりあえず引っ越し作業がひと段落し、クリスマスも終わった十二月二十六日。
帝督と史菜は学園長室を訪れていた。理由はもちろん呼び出されたからだ。

「さて、今日の夜に君たちの紹介をしようと思ってな」

「紹介なら職員会議でいいじゃねぇか。なんでわざわざ夜なんだ？」

「フォフォフォ。先生としての紹介ではなく、魔法使いとしてじゃよ」

「としますと恋たちも呼ぶのですか？」

「うむ。むしろ彼女たちが本命じゃ。君たち二人のことは皆知っておるが、恋君とアテナ君のことはまだタカミチ君しか知らんからな」

基本的に恋とアテナのことは機密事項として秘匿されてきた。ナギの息子ほどではないにしろ、帝国が情報統制にからんでいては手の出しようが無い。

「じゃあそれを伝えとけばいいんだな」

「ああ、それとコレを渡しておこう」

学園長が帝督に差しだしたのは分厚いファイル。

「新学期から君が受け持つクラスの情報じゃよ」

「ありがとうと言っておこうか」

帝督が受け持つのは中学校だけではない、高校、はては大学の講義まで任されているのだ。

必然、資料は膨れ上がってしまう。

フォッフォッフォ～と小ばかにしたような笑いにピキッと青筋浮かべつつそれを受け取る帝督だった。

一方そのころ恋とアテナはというと。

「どう、恋、アテナちゃん。ここのケーキおいしいでしょ」

「確かに、甘すぎない感じ、そしてこのフルーツの酸味とチョコレートのハーモニーがなかなか・・・やるじゃないか、うん」

「おいしい」

のどかとケーキを食べていた。

のどかの案内でやってきた店は麻帆良の人気店、現在クリスマスシーズン在庫一斉処分セールの真っ最中。

暖房の効いた店内は主に女性客でごった返していて外には長い列ができている。

コレを食べるために朝から三人で並び続けたのだ。

「それにしても来るならそう言ってくれればよかったのに」

「ごめん。なにかと忙しくてね、のどかこそこっちの生活はどう？」

「ふつうに楽しいよ～図書館探検部っていうのに入っててね」

「図書館・・・探検？」

ここの図書館は探検するほど大きいのか。まあ魔法使いの学園でもあるし、そのくらいの広さはあるか。

それにしても『ふつう』か。

それがどれほど大切で壊れやすいのかのどかは知っている。

今の生活は普通ではない事情を抱えるのどかにとってやっとの思いで手に入れた宝物なのだ。

「え・・と、どうかした？」

「いーやなにも。あ、ほらアテナここついてる」

「むぅお、むに・・・」

アテナの頬についたクリームを恋がふき取る。

ほんとうに仲の良い姉妹と友人の日常風景だった。。

――――――――――――――――――――――――

その夜、世界樹前広場にて

世界樹前広場には深夜にも関わらず多くの人が集まっていた。
ただし、単なる遊びや散歩の類でここにいるわけではない。その多くがローブに身を包んだ魔法使いであり、広場一帯を覆う強力な人払いの魔法が一般人の侵入を阻んでいる。

「さて、よく集まってくれたのう。今日ここに集まってもらったのは新たにここにやってきた魔法関係者を紹介するためじゃ」

集まった魔法使いの前で召集の目的を話す学園長。

最もここにいる魔法使いたちに関しては驚くそぶりは見せていない。
慣例として新たな関係者を紹介するときは世界樹前広場となっているため、招集がかかったときにはその目的に察しが着いていたからだ。

「それで、学園長先生。新たな魔法関係者とはどなたのことなのでしょう」

質問したのはガンドルフィーニ。黒人の魔法先生であり、実直、生真面目で知られている。

「うむ。それが少し遅れているようで・・・・む?おお、来たようじゃの」

そこにやってきたのは四人の人影。長身の青年に、女性が三人。うち一人はまだ小学生くらいに見える。

「遅れてしまい申し訳ありませんでした」

遅刻を詫びる女性。しかし、魔法使いたちはその言葉が耳に入っていないかのようにザワザワと騒がしくなった。
四人のうちの二人に見覚えが有ったからである。

「フォフォフォ。では、まず自己紹介を頼もうかの」

学園長が目配せをする。
史菜は「はい」と頷いて一歩前に出る。

「近衛史菜です。女子中等部女子寮で管理人を務めることになりました。どうぞよろしくお願いします」

「垣根帝督。中学校、高校の美術、大学の臨時講師をすることになった。あと、広域指導員も兼任する。よろしく」

おおーと騒然となる広場。大戦の英雄の二人が現れたのだから当然と言えば当然である。

「おい。まさか、誰にも言ってなかったのか？」

「うん。そのほうが面白くなりそうじゃろ」

なわけあるか。あとじじいがうんとか言うな。キモいっての。

「それとじゃ」

学園長の言葉で全員が静かになる。こういうところは流石という感じである。

「坂井恋です」

「坂井アテナ」

最後の二人が自己紹介をする。「坂井」というワードに再び反応する魔法使いたち。

「気づいたものもいるかと思うが、この二人は黒竜の坂井悠二と坂井シャナの子供じゃ。恋君は中等部にアテナ君は小学部に通うことになっておる。なにか質問はあるかの？」

周囲を見回し特に質問が無いことを確認すると「ふむ」とうなづいて。

「それでは今日のところはこれで解散とする。刹那君、恋君とは同じクラスになるいろいろと教えてやってくれぃ」

「はい、坂井さん。桜裂刹那といいます。よろしくお願いします」

「うん。こちらこそよろしく」

解散になった後、四人は刹那とともに帰宅した。

「その剣。詠春の夕凪だよな」

刹那が持つ大太刀はかつて詠春が使用していたものだ。

「はい。詠春さまに弟子入りをしていまして、魔帆良に来るときに

いただきました」

「へえ。あなた詠春の弟子だったの」

詠春の弟子と聞くとどうしてもクルトを思い出してしまう帝督と史菜。

赤き翼がひろった戦災孤児の一人であるクルトは詠春から神鳴流の技を教わっていた。

政治の道を志した今でも鍛錬は怠っていないとか。

余談だがクルトの影の後援者の一人には坂井悠二の名があったりする。

「まさかお前たちがここにやってくるとはな」

帰路の途中で声をかけられた。

そちらのほうに眼を向けると、綺麗な金髪の少女と背の高い少女がいた。

「エヴァか。久しぶりだな」

「！！」

エヴァンジェリンの登場に表情を固める刹那。対する四人は平然としている。

「お前たちが『祭礼の蛇』と『焔髪灼眼』の娘か」

「うん。坂井恋。よろしく」

「アテナ」

「あ、そうだ。恋はあなたと同じクラスになるのよ。新学期からよろしくね」

「・・・・あまり、わたしに深入りしないよう言っておけ」

そういって最強の吸血鬼とその従者は去っていった。

日常と非日常（後書き）

バトルはなし！！口調が安定しないことが少し気がかり・・・・・

アリアドネー

五年間生活したラカン宅に別れを告げてから三日でアマネはアリアドネーに到着した。

かつてはここの学生であったが五年も前の話、自分の使っていた寮には新しい住人が入っている。

というわけで新たに宿を取らなければいけなかったのだが、そこは古巣だけあって当時のクラスメイトの家に泊めてもらうことになった。

そのクラスメイトとはアリアドネーを出てからほとんど連絡を取り合っていなかったが、仲は良かったように思う。

知り合ったきっかけなんだったか。

というわけで久しぶりに連絡を取ってみたらそこに泊めてもらえることになったのだ。

それから五日たった。現在アマネは家事手伝い的なことをしつつ生活している。

「それじゃあ、アマネ君。わたしは出かけてくるから家のことはよろしくね」

「はい、任せてください」

彼女はこの家の家長であるアイリス。

かの大戦ではヘラス帝国第三皇女つき近衛騎士団団長を勤めていたエリートで、『黒竜』とも私的なつながりをもっていたとも言われるほどの人物である。

そんなアイリスは終戦後に引退、アリアドネーに移住して魔法学講師や魔法騎士団候補生に対する実戦演習を担当する教官として活動している。

お国のお偉いさんが引退後にアリアドネーに移住することは多々ある。

それはこのアリアドネーがあらゆる権力から独立しているためで、政争を逃れることができるからとも言われる。

ただし、ここは学術都市であるためどれほど偉くとも学ぶ意欲が無ければ受け入れられないという側面もある。

アマネのクラスメイトというのはアイリスの娘のことであり、今は騎士団候補生として寮住まいなので、男のアマネが寝泊りしてもあまり問題にならないというわけだ。

「えーと・・・今日は買出しに、洗濯、掃除ｅｔｃ」

アイリスが用意したメモを見ながら一日のプランを構築する。

「ふむ。まず掃除と洗濯だな。そのあと買い出しに行って・・・・夕飯は何にしようか」

この五日で家政婦といての実力をメキメキとつけていくアマネ。最も家事全般とくに料理に関しては、ラカン邸で暮らしていたときに身に着けた。

十歳のガキに家事を押し付けるラカンの横暴さに関してはいったん置いておこう。

精神を砥ぎ澄ます。

右手に洗剤、左手にブラシ。

カッ！！

「アマネ・オルディンいっきまーす！！」

気合を入れてキッチンの油汚れに戦いを挑んだ。

場所は変わってアリアドネー総督執務室。

「それじゃあ新学期の教導メニューはこれでいいわね。ご苦労様アイリス」

「お疲れ様でした、総督」

アリアドネー総督のセラス。アリアドネーの騎士団最精鋭たる「戦乙女旅団」隊長として大戦の最終戦で最前線で戦った経歴を持つ女性。そのため、同じく大戦を経験していたアイリスとは旧知の仲なのである。

「ああ、アイリス。今日はもう上がり？このあとコーヒーでもどうかしら」

「お？いいわね。セラスは仕事いいわけ？」

「ええ、今日はもう終わり。授業も政務も無い日は時間が余るわ」

セラスは国家も長でありながら、授業まで受け持つ超人である。が、やはり息抜きは必要である。

「へえ、あの子帰ってきてるの」

「そうなのよ。やっぱり五年も経つとずいぶん変わるわ」

セラスの言うあの子とはもちろんアマネのことである。

五年前までアリアドネーに在籍していたと言うこともあるが、親友が入れ込んでいたこと、あの黒竜が関わる少年であったこともあって記憶していた。

「この五年、どこにいたのか知らないけど魔力もずいぶんと安定してたし、たぶん相当強くなってるわよ」

「あなたがそこまで言うなんて珍しいわね。確かに彼の『虹』は強力な能力ではあったけど」

伝説のスキルである三属性融合は長らく使い手が存在しなかったために忘れられていた。

それを復活させたのが黒竜のメンバーである垣根帝督である。大戦の終結後このアリアドネーでも三属性融合の研究がなされているが未だに謎が多い技能である。

ちなみにアマネが虹使いというのは秘匿事項であったため同学年にそのことを知る者は少ない。

「それだけじゃないわよ。たぶん戦闘技能も申し分ないと思う。実

際に目で見たわけじゃないけどね」

伊達に教導官をしているわけではない。そういうことを見抜く目には自信がある。

「それはそうと、これからアマネ君はどうするのかしら？」

「ん？三ヶ月くらいしたら旧世界に行くって話だけど」

旧世界の麻帆良学園にね。

「そう。ところでそのことは娘さんに言ったのかしら」

「そりゃもちろん・・・・・・・・・・・」

「・・・・言ってないのね」

「はあ、まったく仕事以外はてんでだめなんだから。今日から長期休業なのよ。彼女、家に戻るんじゃないの？」

「あ！？そういえば！やっべーどうしよ」

あちゃーとは言っているが悪びれる様子は無い。

かつての生真面目な雰囲気はどこへやら。

二十年の月日は良くも悪くも人を変えるには充分な時間であるようだ。

「ただいまーおかえりー」

ひとりあいさつで帰宅宣言をするアマネ。
ちょうど夕飯の買出しからもどったところだ。

「さぁてと、早速作ろうかね」

今日はピラフにサラダ、作っておいたゼリーはそろそろいい頃合だ。
今から作ればちょうど日が暮れたころに完成するだろう。
買い物袋を提げながらキッチンへ向かう。玄関から入って一番奥の部屋がキッチンとなっている。
トン、トン、トンとリズミカルに廊下を通る。が

「お母さん、帰っていたの？」

声がした。通り過ぎた部屋からだ。

「！？」

ドキッとした。
誰もいないと思っていた部屋から声がすれば誰だって驚くさ。
なによりもその声は明らかに女の子の声で、間違いなく寮にいるはずの元クラスメイトのものであろうから。
アマネの額に冷や汗が吹き出る。

「連絡もなしに帰ってごめんなさい。驚かせちゃった？」

向こうはこっちのことをアイリスさんだと思っている。
そして、あのドア。あそこは禁断の個室。絶対不可侵の領域への扉。

すなわち――――――――――――バスルーム

まさかそんなことはないだろう、洗面所でもあるし、と思いながらも、最悪の展開を予想してしまう。そうなっては人としていろいろと終わってしまう。
とにかくドアを開けないように促して、自分がここにいる理由を説明しなければ！
慌てて袋を下ろし、というかかなぐり捨てて叫ぶ。

しかし。

「ちょっとぉ！！」

ガチャッ――――――――――と無常にもドアが開く。

「え？」

遅かった。
予想は悪いほうに的中した。案の定シャワー上がりだった。幸いにもバスタオル姿なので危険な部位は見えないが、それでも半歩踏み出した足やほのかに上気した白い肌と水気を大いに含んだ黒髪のコントラストが妙に艶かしい。
彼女のほうは母だと思っていたために完全に油断していた。

二人そろって機能停止。状況が理解できないというよりも理解し

たくないといったための本能から来る停止だ。

「ッ！！」

ラッキースケベなる言葉があるという。たまたまHな場面に遭遇してしまった時に使用される言葉らしいのだが、それはあくまでも客観的にその状況を評した際の言葉であろう。

たしかにラッキーではあるのかもしれないしアンラッキーとしてしまえば相手の尊厳にも関わる。だが、こうした状況下ではそれがいかなる過程ーーーー事件だろうが事故だろうがーーーーーーであろうとも悪いのは主に男であって、社会的に死んでしまうこともある。

「装剣」

日夜訓練しているだけあって悲鳴はあげなかった。

そのかわりに右手に大きな片刃の剣が現れる。騎士団候補生が用いる発動体にもなる凶器。

「ま、まて！ビー！」

問答無用とばかりに静止するアマネに剣がつきだされた。

要約すると、本人からしたらやっぱりアンラッキーな出来事なのだ。

麻帆良友人帳

日本の冬は寒い。なんというかこう刺すような寒さというのだろうか。

露出している箇所は外気で赤くなってしまったりする。

というわけで、本日の恋はもくもくフードつきの白いロングコートにスカートではなくジーンズという出で立ちである。

この麻帆良は広い。二、三日では回りきれないほどに。

中世ヨーロッパ風の町並みではあるが、ときおりロボットを見かけたりする。いやもうＡ○ｂｏとかそんなレベルではなくちっちゃいガ○ダムみたいなのが稼働している。

学生の街であり、魔法使いの街であるにもかかわらず、科学技術が数十年ぶっとんでいるのはどういうことか。

そしてその街を恋は闊歩する。

まだ引っ越してきて数日。まだ見ぬ場所がこの麻帆良にはたくさんある。

今日の恋の目的はただの散歩ではなく、街の散策である。

そんな恋を街ゆく人はついつい見てしまう。美人と言っても過言ではない容貌。垣根帝督お手製の最高級コートをはためかせて歩く恋は、可愛いと言うよりかっこいい。

男女問わず視線を引きつける魅力が恋には備わっていた。

その視線に恋は気づいてはいるが興味を示すことはない。

今日の恋にはそこに何があるのかと言うことが問題であって、そこに誰がいるのかということはどうでもいい。

なにより、自分が何故注目されているのかわかっていないという

ことが大きい。

少々歩き疲れた恋はちょうど行きつけの屋台があったので休憩をとることにした。

超包子という名の屋台で学園祭と長期休業中にのみ開店している中華料理店だ。

その料理があまりにおいしかったのではやくも恋は常連になりつつある。

「小龍包五つ」

「恋さん、いらっしゃい」

やけに可愛らしいしゃべり方をするここの店主。

実は恋と同い年で、同じクラスになる四葉五月という少女だ。

ふっくらした体型とほんわかした雰囲気、そして達人級の料理で大人気だ。

「今日も街の散策ですか？」

「うん。五月はいつも大変だね。仕込みとか朝早いんでしょ？」

「ええ。ですが皆さんにおいしい料理を食べていただくためですから大変だとは思いません」

なんてすごい娘なんだろう。

将来を見据えてしっかりと努力する。そうそうできることではない。

四葉に会うたびに感心させられてしまう。

「がんばってね」

「恋さんも」

その後は昼時となって人の入りが多くなってきたこともあって四葉は調理場につきっきりになってしまった。

恋は小龍包を食べながら周囲の様子をうかがう。

この街の住人は世界樹という巨大な木を見ても何とも思っていないし町中にあるあり得ない科学技術にたいしても『それがあたりまえ』だと思っているようだ。

本来なら調理師免許の問題などがあって四葉が働くことなどできないが、誰も気にとめない。

「超高度な認識阻害結界が学園を覆っているってのはこういうことね」

魔法使いと一般人が共存するこの街には都市一つ覆うように強力な認識阻害魔法がかけられている。

この町で起きたことが普通に考えると不自然だと思うようなことでも、『それがあたりまえ』だと思うようになっている。

人の心に作用するという点ではあまり褒められたものではないが、恋としてはそれも仕方がないと思っている。

『魔法使い』と『一般人』本質的には差はないが、区別はつけるべきだと思っている。

いくら共存の場であろうともルールはルール。このくらいは仕方がない。

ただし、それが行き過ぎて魔法使い上位の考え方になるようなこ

とはあってはならない。魔法が使えないということは弱者ということには繋がらない。

魔法使いの中には極少数ながら正義に固執して暴走する者がいるという。

人間誰しも『自分の正義』を持っているものだがそれを『自分の正義』＝『全体の正義』と勘違いして他人の言うことに耳を貸さず我が道を行った結果だ。

とくにここ二十年はそれが顕著になってきているらしい。

大戦で明確すぎる『悪』が現れたことが原因なんだろうが、深く広い視点をもてないのは残念を通り越してかわいそうだと思う。

ただでさえ『正義』と言う概念は揺らぎやすいのだから。

『何が良くて何が悪いのか、自分の目で見て色々な経験をしてから判断しなさい』

父の言葉だ。恋は今まで普通の学校に通っていた。これからは魔法使いの社会に入る。

一般人と魔法使い。その双方を経験してから、『自分の正義』を決める。恋はそのためにこの街に来たのだ。

言ってみれば、様々な経験をした上で『自分の正義』を確立することが恋の修行である。

「ん？」

周囲を見回していた恋の視界に紫がかった髪の少女が飛び込んできた。

（あれは、のどかか）

学校の友達と思われる人物と談笑しながら歩いてくる。
身体的特徴と状況から察するに図書館島探検部の友人三人だろう。
ゆえにハルナにこのか。

（ちょっとあいさつしてこようかな）

物静か。読書家。恥ずかしがり屋。男性恐怖症。意外に運動できる。本屋。頭がいい・・・・・

およそ世間の人の宮崎のどかに対する評価である。
少し違うところもあるが大体は的を射ている。
友人も多いとはいえず、いつも同じメンバーで行動することが多い。
今もそのいつものメンバーで図書館に行ってきたところだ。

「ところでさーのどか」

「なに？」

話題を突然変えてハルナが話しかけた。

「最近機嫌いいじゃん。何かいいことあった？」

「それはわたしも思っていたです。どうなのですか、のどか？」

「えっとぉ。じつは麻帆良に来る前の友達がこっちに来ることになって」

とくに隠すことでもないので正直に話した。

「へぇ。昔の友達」

「それってもしかして男の子なん？」

「な、本当ですか、のどか」

「え、違うよ～」

嘘はついていない。アマネもこっちに来ると聞いたときはそりゃ喜んだが、今の質問では関係がないはず。

「ふーむ。パル様的には当たらずとも遠からずって感じかなー」

さすがハルナ。よくそこまで読み取れるね。

さらに追求しようとする三人に思わず後退したとき背後からドンという衝撃が襲ってきた。

「のーどーか♪」

「ひゃあ！！」

のどかはびっくりして声を上げてしまった。

「恋？」

それは恋だった。

忍び寄ってきた恋が勢いよくのどかの背中に負ぶさってきたのだ。
後ろからのどかに抱きつく形で。

「だ、だれですか、あなたは！」

一番小柄な少女が叫ぶように問いかける。

「お。そのしゃべり方は『ゆえ』さんかな？」

「！？どうしてわたしの名前を」

「のどかに聞いたから」

身も蓋もない。
さも当然のように答える恋
大体予想できていたけど夕映で間違いないようだった。

「うちはこのかってゆーんよ。もしかしてのどかのお友達なんですか？」

この娘が近衛木乃香。超重要人物だ。対応は慎重に。

「うん。坂井恋。よろしくねー」

のどかの首を左手でさりげなく決めつつ右手を握って開いてあいさつ。

「ほーお。わたしは早乙女ハルナ。愛と夢と薔薇を追いかけるしがない同人作家さ」

愛と夢はいいとして薔薇？深くつっこまないでおこう。

「綾瀬ゆえといいます。よろしくです。のどかとは・・・」

「小五くらいかなー。あの時のこいつ友達全然いなくてサー。で、いろいろあって今に至ると」

このメンバーの中ではその『いろいろ』の部分に追求してくる者はいなかった。

のどかは昔のことを話したがらないが、このメンバーには家庭のことはすでに話してあるようなので聞いてこないのだろう。

（のどかってばいい友達持っちゃって）

（うう。恋苦しいよ）

常人では聞き取れないような小声で会話する。もちろんこの二人は常人ではないので問題ない。

「ところでわたし達のことはのどかから聞いていたのですよね」

「うん。たしか哲学者みたいで堅苦しい話し方がどうとか・・・・」

「！！」

「んな！堅苦しい！？のどか、どういうことですか！」

「ち、違う・・・そんなこと言ってないよ！哲学者のおじいさんにあこがれてるとは言ったけど！」

「あれ？そうだったっけ？」

「恋！！」

拘束を解いて怒るのどか、ゆえの相手の片手間にわたし怒ってますという視線を送ってくる。

「アッハハハハハ。怒らない怒らない。ちょっとしたミスだって。お？メールだ。じゃあわたし帰るねーまたねー」

そう言って恋はさっさとその場を後にする。

後に残されたのどかは夕映をなだめるのに苦労したそうな。

「あれがのどかの守りたい平穏か」

関わらないことで平穏を守る。それがのどかの選択。

もともとのどかは一般人だ。知ってしまったからと言って関わる必要はない。

のどか達が見えなくなったところでメールを確認する。

学園長から仕事の依頼。魔法先生と魔法生徒に回ってくる裏の仕事。先生は義務。生徒は任意。

「わたしはわたしのやり方で平穏を守るよ。のどか」

内容を熟読してから参加する旨を返信する。

恋は携帯を仕舞って、ひとり歩き出す。

仕事までまだ時間がある。

それでも恋はもう散歩という気分ではなかった。

のどかの友達と会えたことが今日の大きな収穫。

これから恋は意識を切り替える。昼から夜。日常から非日常へ。

麻帆良の夜が恋を待っている。

麻帆良友人帳（後書き）

恋姫の呂布の面影は一切無し。恋の性格は個人的には思慮深いアスナ的な感

じで行こうかと思ってます。元気な姉さんです。

そのころの寮長室

恋が超包子で昼食をとっているころ寮ではちょっとした騒ぎが起きていた。

「こんにちは！報道部の朝倉和美です！取材させていただきたいのですが！」

ドアを蹴破る勢いで元気な少女がデジカメ片手に寮長室に押しかけてきた。

後ろには連れの少女たち（皆２－Ａであったと記憶している）が数人控えている。

「え、ええいいわよ。とりあえずあがって」

勢いに押されがちだが、史菜は和美たちを中へいれた。

（わたしとした事が、ちょっと実家に帰っている間に新寮長に新同級生、新教師がやってきていたなんて、今からでも記事作んなきゃ報道部の名がすたるってもんでしょ）

これが和美が寮長室を突撃訪問した理由だ。

チアリーディング部の三人は偶然拾っただけ。

「それじゃ史菜さんはどうしてここの寮長になったのですか？」

お茶をもらってから王道の質問を投げかける。

雰囲気からすれば天然系の美少女。
というか外見的には外国人にも見える。
簡単にあがらせてもらえたところから取材は割りとたやすくできるものと考えたが思っていたよりもずっと順調にことが運んだ。

「それは、この学園の学園長とは旧知の仲でしてその縁もあってこちらに来ました」

「ああ、ん？近衛というと」

「姓のほうは偶然ですね」

「そうですか」

んーこりゃたいした記事にならんかもしれないなーはずれかな。

「それじゃ趣味とか特技とかあったら教えてください」

「えーと・・・たいした特技もないけど、宮崎のどかさんのモノマネが得意かな」

え？宮崎というと本屋のことか・・・・まさか知り合い！？

「それじゃあ二人は知り合いｎ」

「本屋ちゃんのモノマネみたいです！」

「わたしも！」

それまで静かにしていた連中が質問の邪魔をしてきた。
そりゃまあ本屋のモノマネには興味があるけど。

「ん、ん・・・ではいきます。『宮崎のどかです。趣味は読書。好きな教科は外国語とくに肉体言語が得意です。口癖はいっぺん死んでみる？ですー』」

「すごい！チョー似てる！」

「おんなじ声だ！！」

「本物みたい！！」

「待ったー！違う違う、ちょっと違う！いや、ぜんぜん違う！」

危ない危ない。びっくりするくらい似てて危うくツッコミを忘れるところだった。なんだよ『肉体言語』って！いっぺん死んでみるなんて言ってるとこ見たことないよ。
よく聞けば素の声がもう本屋に似てるじゃん。

「肉体言語＝ボディランゲージです」

心を読まれた！！
つーかただの直訳じゃん。

「まあのどかが言うには『打撃系など花拳繍腿（かけんしゅうたい）、関節技（サブミッション）こそ王者の技よ』らしいわよ」

「嘘だ！！」

カナカナカナカナカナカナカナカナ・・・・・・・・・・

「まあ嘘ですけど」

「流された！？」

なんだこの感じ・・・・まるで空気だか水だかを相手にしているような・・・・完全に相手のリズムになっている。

クッ想像以上の強敵だ！このわたしが相手の力量を見誤るとは・・・・いやしかし、ここで引くわけには行かない！

「そ、それじゃあ噂の有名デザイナー垣根帝督との関係は！」

「はい、この件（くだり）パスで」

ちょっ・・・・

「うん？メールだ」

実にちょうどいいタイミングで来たメールは仕事に関するものだった。

わたしたちはその後もぬらりくらりとかわされて結局言いくるめられる形でインタビューを終えた。

「くっそーあんまいい情報は引き出せなかったなー」

「でもいい人そうだったじゃん」

「そうそうケーキも貰っちゃったしね」

買収されてることに気づいて。
あんたらちょうどいいところでわたしの質問を邪魔したり話の流れ変えるのにうまく使われてたんだって。
あれが計算にしろ天然にしろ恐ろしい相手であることは変わりない。
手を出すべきか否か・・・・・

「ここで逃げるのは麻帆良のパパラッチじゃないよね」

「どうしたの朝倉？」

「いやいや決意表明だよ、くぎみー」

「くぎみーって言うな」

相変わらずだねーくぎみーは。
さてさて楽しくなってきたね、こりゃ。

いかにして史菜から情報を引き出すか策を練る新たな楽しみを見つけた朝倉であった。

ちょっとして寮長室。

「インタビュー？」

「そ。報道部だって。帝督のところにも来るかもよ」

「そりゃ面倒だな」

心底いやそうな顔で帝督は呟いた。

実際、朝倉の報道部以外にも多くの報道関係の部活が帝督の元を訪れていた。

正直言ってうんざりしているのだ。

「で、話は変わるが今夜の見回りのこと聞いてるか？」

「ええ、まあわたしは今回は実働隊じゃないのでとくに仕事はないんですケド」

「俺も似たようなもんだ。まあここの中では魔物の類は簡単には活動できないし、できたとしても式神程度だろうな」

「ちょうどいいですよ。低級の式ならここの学生でも相手にできます。学園長は訓練感覚なんでしょうね」

何事もないまま終わるのが一番いいが、仮に生徒や一教員の手に負えないのが来たときが自分たちの出番なんだろうとあたりをつけつつ夜を待つのであった。

そのころの寮長室（後書き）

唐突に思いついたネタを入れたかっただけ・・・・・

麻帆良の夜

そして夜がやってきた。
恋とアテナは集合場所である公園にやってきた。
本来アテナは年齢的にこの手の夜間の仕事はしなくても良いのだが、本人の強い希望でここにいる。
予定時間よりずいぶん早く来たというのに、もう待っている人がいた。

「こんばんは」

「こんばんは、恋さん。高音・D・グッドマンです。お父様、お母様のことは尊敬しています」

「は、はじめまして。佐倉愛衣です」

「はじめまして。とりあえずお父さんとお母さんのことは横に置いておいてもらえますか？わたしはわたし、親は親ですので」

英雄の娘とか言われるのは御免だ。気持ちが悪い。

「もちろんわかっています。わたしはあなたが英雄の娘だからと言って贔屓目で見たりはしません」

高音はきっぱりとそう断言した。
正直、この前の自己紹介以来、魔法使いと思われる人物たちからなんというか気味の悪い視線を向けられて困っていたので、高音のように分別を持ってくれる人がいるのはうれしいことだ。
少し融通のきかなそうな雰囲気を持ってはいるが・・・・

「ああ、集まっているね」

そこにやってきたのはガンドルフィーニ教諭だ。

高音同様頑固そうだと恋は感じた。

「さてと、今日の見回りはここから大通りを進んで小学部方面へ、その後図書館島に向かって森沿いに行く。恋君とアテナ君は高音君と佐倉君から教えてもらいながらついてきてくれ」

そして、五人は出発した。

これはあくまでも見回りなので、特に何もないとしか言いようがない。

強いていうなればこんな遅くまでうろついている学生にガンドル先生が注意して回るのを眺めるくらいか。

まあ本当に大切なのは図書館島と特殊な事情を持つ生徒なので、大通りには用がない。魔法使い的には。

「それにしても何にもすることがないね」

恋はガンドルがパツ金少年と口論しているのを見ながらぼやいた。

うーん。予想どうり不良とは水と油って感じの先生だな。

アテナはもう歩きながら寝てしまいそうになっている。恋のコートの端を掴んでうつらうつら。

魔法の属性から来るものなのかアテナはわりと夜が好きなのだが、流石にこの時間は小学生には遅すぎる。

「いつもこんな感じですよ。わたしもこのお仕事を始めてから一度しか戦ってませんし」

「それでも一度は戦ってるんだ・・・・」

愛衣ちゃん戦えるようには見えないんだけど。

愛衣がアメリカのジョンソン魔法学校に留学中、魔法演習でオールAをとった秀才であると知って驚くのは少し後の話。

「生徒が見回りをするところまでは敵が来ないんですよ。侵入者を感知する結界があって、大抵は先生方に取り押さえられますから」

「まあ、そうでしょうね。この学校はずいぶんと質の高い術者が多いみたいだし。」

「メイ、恋さんもこれは遊びではなくれっきとした仕事。この麻帆良の平和を脅かす者達への牽制にもなるのですから真面目に取り組んでください」

お叱りを受けた。

まあ、少し言い過ぎな気もするが概ねあっていると思う。

見回りが無ければ侵入し放題だし。

「すいません。でもこう見えて警戒は怠っていませんよ。この目を見てください！」

恋が高音へ視線を向ける。

その双眸は燃えるような紅。気のせいか炎のように揺らめいているようにも見える。

「その瞳は？」

「母の探査魔法『審判』の能力を宿した魔眼です。魔眼といっても魔法による後天的なものですけど」

恋の母であるシャナの『審判』は頭上の少し後ろに炎の瞳を創って、魔力の流れなどを視るものだった。

一方恋の『審判』は炎の瞳がそのまま眼球を媒体に発動している。

「名づけて『紅蓮裸眼』！！」

「それはダメです！！」

ガッツポーズで自信満々に言い切ったらメイからダメだしを受けた。

「えーかっこいいじゃん」

「とにかくダメです。そのうまいこと言ってやったって顔やめてください」

「メ～イちゃ～ん」

「その言い方もやめてください！小学校のときすごい弄られたんですよ！」

ほう、同じことを考える輩はいるものだなあ。

特に金曜ロードショーの後の月曜とかすごそうだ。

「あなたたちやる気が無いでしょう・・・・」

高音たちが見回りを再開するのはその少しあとだった。

ともあれ一行は図書館島付近の森のある地点まで歩を進めていた。
ガンドルフィーニの説教が長引いたために予定を大幅にオーバーしている。
アテナは恋の背中で睡眠中。

と、そのとき

ピーピーピーピー

と手持ちの器具が警戒音を発した。

「！！」

「これは！！」

「？」

「侵入者です恋さん！！」

疑問符を浮かべる恋に高音が教える。
学園結界を越えた何者かがいるため、警報機が作動したのだそうだ。

「もっとも近いのは我々だ。いくぞ」

ガンドルフィーニを先頭に森の中へ分け入っていった。

「先生、状況は？」

「敵は三方面から入り込んでいるらしい。例のごとく陰陽師だ」

（例のごとくとかその辺りの説明を聞いてないんですが）

木々を掻き分けて進んでいく。

ここでアテナ起床。

「んに？ねえ、さん、これどういう状況？」

「敵が来たっぽい。先生！右から来ます！」

恋の『審判』が夜闇に隠れた敵影を捉えた。

直後に現れたのは『鬼』だった。

日本昔話とかに出てくるアイツらがそのまんまの姿で登場した。

その鬼は登場と同時に太い木の幹くらいはありそうな金棒を振り回した。

「う、おっと」

「ひゃあ！？」

かろうじてガンドルフィーニはその一撃を回避した。

対象を捉えそこなった金棒が木々をなぎ倒し、驚いた愛衣が声を漏らす。

「すまんなあ西洋魔術師。ここでつぶさせてもらうで。恨まんとい

てや」

「関西弁だとッ！？」

恋が驚愕する。

鬼にではなく、関西弁を話していることにだ。

「恋さん！！この状況で何を言っているんですか！？」

再び高音が叱責する。

それにしても今回はかなり大掛かりな襲撃のようだ。

魔物の活動が制限されるこの学園内でこれだけの数の鬼が活動しているというのは驚きである。

主犯はそれなりに力のある陰陽師なのだろう。

恋たちはあっという間に鬼に囲まれてしまった。

その数、ざっと五十ほど。簡単に召喚できる数ではない。

そうこうしている間に戦闘が始まった。

ガンドルフィーニがすばやく動き拳銃とサバイバルナイフによって鬼を還し、高音が影の槍で上空の鳥男（烏族というらしい）を貫いていく

（先生は対人戦闘に向いているのか・・・この状況では火力不足）

ガンドルフィーニの戦い方はＣＱＣすなわち近接戦闘を主としたものだ。それに対して今の状況は敵軍の真っ只中に五人だけ。広範囲を攻撃できる力が必須の状況だ。

「先生！わたしが正面の敵を一気に潰します」

「できるのかい！」

「もちろんです」

そして恋の周囲から炎が立ち上り、形を成していく。瞬きする間に紅蓮に輝く騎馬武者の集団が現れた。

「『真紅・武士団』」

炎を物質化する『真紅』で創り上げた武士の軍団。

総人数は二十騎ほど。細部にまでこだわった造詣で逆三日月の兜や愛の兜も見える。

普段は西洋風で騎士団なのだが今日は相手に合わせて和風テイストの仕上がり。

恋も馬に跨り、炎でハルバードを創って、自らを先頭にして突撃した。

陣形は魚鱗の陣。

恋を頂点とした紅蓮の三角形が正面の鬼に向かって殺到する。

猛った鬼が正面から迎え撃つが、恋はハルバードを一振り。

それだけで、先鋒の鬼のうち前にいた数体が空高く跳ね飛ばされた。彼らは地に落ちることなく溶けるように霧散した。

鬼が紙のようだ。

そして勢いをとめることのできなかった鬼は劣勢に回るしかなくなった。

恋のハルバードで上半身を消し飛ばされ、鉄蹄に踏み抜かれ、武士の長槍に突き刺され、あっという間に鬼の陣形は崩壊した。

「なんやあの嬢ちゃん!?出鱈目やないか!!」

「鬼がぶっ飛ばされてます!大将!」

「どっちが鬼かわからんわ!?」

恋の突撃で恐れおののく鬼達。

たった一人に数の差を覆されたという事実が鬼達の戦意を大きく削いでいた。

「わたしたちも負けていられません!百の影槍!」

「紅き焔!!」

鬼の戦意が削がれるのと反比例して高音たちの戦意は高揚していた。

恋の突撃に後押しされたのだ。

恋の周囲は燃える武士軍団と鬼集団が入り混じる乱戦となっていた。

このとき皆下馬している。乱戦の状況下では騎馬の機動力が活かせないからだ。

そして、ガンドルフィーニにとってこの乱戦は最も効率よく敵を倒せる場であった。

当初、五十近かった鬼は十分と立たず大半が還っていった。

「ぐむう。これほどとは」

鬼の別働隊が密かに後方に回り込んでいた。
少人数、小柄で闇にまぎれるのを得意とする者たちだ。
彼らは華やかに戦い散っていく仲間達を見て敗戦を悟った。

しかし。

（戦いもせずに還ることなどできんわ）

鬼なりの意地があった。
武勲を挙げたい。
一矢報いねば。

夜に溶け込み、首兜を獲ろうと忍び寄る。
狙いは最後部でただ見ているだけだった小さな少女。

（すまんな嬢ちゃん。恨むんならこんな場所に来た自分を恨んでや）

こちらに注意を払っていない今なら一撃で仕留められる。
その場にいる三体の鬼は皆そう思った。

しかし、目標まであと五メートルというところで突如として体が動かなくなってしまった。

原因は確認するでもなかった。

（石の蛇やて！？）

足元の地面から這い上がってきた石の蛇が鬼の体に巻き付いてきたのだ。
強靭な鬼の体がいとも容易く拘束された。
「敗戦を覚悟した上で向かってくるとは大した者だ」
その少女がゆっくりと振り向いた。
整いすぎた容貌に、美しい銀色の髪が月光で煌き、漆黒の闇を湛えた瞳が真っ直ぐに鬼を見据える。
芸術と言うべき美しさに名も無き鬼達は思わず見入ってしまった。
「できることなら力比べもしてみたかった。このような幕引きはいささか不本意ではあるが、仕方が無い。さらばだ夜の眷属よ。次があれば正面から雌雄を決しようぞ」
その言葉が聞こえたときには鬼の体は半ば消えかかっていた。
何をされたのかはまったくわからなかった。
ただ少女の言葉には最後まで戦った戦士への純粋な賞賛の意が込められていた。
(ほんまに夜の似合う御嬢ちゃんやな)
鬼の思考はそこで途切れた。

麻帆良の夜（後書き）

初めての戦闘でしょうか。

アテナが決めてくれちゃいましたが口調はもうこれで行きます。時折古風で

行きます。

出勤！！

新年を迎え、新学期を間近に控えた1月4日。
この日は特別な日である。すくなくとも帝督にとっては。
それはいったいどういうことなのか。それは。

「この学校で芸術を教えることになりました。垣根帝督です。よろしくお願いします」

この挨拶も今日で三度目。

麻帆良大学に朝一で挨拶に行き、そこで事務仕事を軽くした後、ウルスラへ、そして昼過ぎになってここ、麻帆良学園女子中等部に芸術講師として挨拶にやってきたのだ。

何度も言うようだが帝督は若くして世界に認められた芸術家。
周囲の反応は大体同じで、握手やサインを求められたり、芸術関係の教師からは意見を求められてそのつど真面目に受け答えしたために精神的な疲労がすでにピークを迎えつつある。

「はじめまして。新田といいます。2年の学年主任を勤めております。何かありましたら気軽に尋ねてください」

「ご丁寧にどうも」

白髪にメガネ。なるほど、これが鬼の新田か。
お調子者の生徒からの噂は悪いが、真面目な生徒からは尊敬もされているという。
帝督の第一印象は根っからの教育者というありきたりなものだっ

たが、間違いなく的を射ているだろう。

「俺が持つのは週に・・・・こんなあんのかよ・・・・」

授業予定を立てんのが面倒だな。まあ俺一人でやるわけじゃないけど、大学は出てるが教育学はやってないんだよな。

そして、帝督は名簿に目を通す。

ぱっと目に留まったのが２－Ａの名簿だった。

「ふーん。なんかきな臭いクラスだな。姫様に詠春の娘と弟子、エヴァ、忍者、お？のどかもこのクラスかやっぱそういうクラスなんだな」

まだ具体的な説明を受けていないから断言はできないが、十中八九関係者やその親族、関わっていないが何らかの能力があるかもしれない者を一箇所に集めている特殊なクラスであろう。

護衛対象を一箇所に集めてしまおうというのは単純だが、守りやすいのは事実なので素直に受け入れる。

ところで、護衛の優先度だが、明日菜が第一、このかが第二、のどかが第三となっているが明日菜とのどかについては学園長やタカミチクラスしか知らないので、ほとんどの魔法使い達はこのかを中心に守っている。

「お久しぶりです。帝督さん」

「タカミチ。久しぶりだな。ずいぶんと老けたじゃないか」

高畑・Ｔ・タカミチ

二十年前の大戦時に紅き翼に同行していた少年。だったが、二十年という時間が少年を青年、そしてオッサンへと変身させていた。

「ハハハ。それは言わないでくださいよ」

「ふん。無精髭にタバコ。ガトウみたいだな」

「・・・そうですね、僕個人の思い入れでもありますし、あの娘がね」

「神楽坂明日菜ね」

「はい」

紅き翼がばらばらになったときの詳しい状況はわからない。なにせ、あの時はもう別行動をとっていたから。ただわかっていることは、十年前にナギが消えて、ガトウが死んだこと。それだけだ。

「アレに関しちゃ驚いたぞ。あんな元気ハツラツになってるとは思わなかったからな」

「もう会ったんですか？」

「寮長室に住んでるからな。最初の日にいきなり絡まれたよ。『ここは女子寮よ！』ってな」

「ハハハハ！そうですか、そんなことが」

「マジびっくりだったよ」

「その名簿のこの娘です。雪広君。この娘がいい影響を与えてくれましてね、他にも近衛君とも親しくなってからはとくにね」

タカミチの示す写真には長い金髪の少女が写っていた。

「雪広あやか。もしかして雪広コンツェルンの令嬢か？」

「そうですね。彼女がこのクラスなのは本当に偶然ですが、それがいいほうへ行きました」

「それは、よかったな」

以前あったときはまるで人形のように感情の無い女の子だったのが、今ではクラスで友人と騒ぎ、時に取っ組み合いをするまでになったのだ。

しかも、自分で多少でも学費を返すといって新聞配達のアルバイトまでしているのだ。

本当にいい娘に育ってくれたんだなと今更ながらに感慨無量の気持ちである。

「ん？担任お前じゃん。しかも美術部顧問って」

「あ、ああそうですよ。あなたを前に美術部顧問と名乗るのは憚られるのですが。それに、あまり顔も出せていませんからね」

「いーんじゃねーの。先生っぽくて」

「あ、そうだ。今、今年最初の部活をしているころです。顔を出してみませんか？」

そういうわけで美術室。

「失礼するよ」

タカミチが教室に入る。それに続いて帝督も。

「あ、た、高畑先生！」

「あけましておめでとうございまーす」

「お久しぶりです！」

元気すぎる声が教室中から響いてくる。
思いのほか部員が多い。
百人はいるだろうか。
タカミチ曰くこの学園の規模から言ったら、コレでも少ないほうなのだとか。
学校を超えた範囲で活動するサークルなどは千人を超えることもあるのだとか。
そして、目を引くツインテール。

「タカミチ。姫さんがいんじゃねーか」

「はい。そうなんですよね」

他者に聞き取られないくらいの小さな声で会話をする。
少し不自然だったかもしれないが、女子中学生たちはさほど気にせず、というかまったく別のことに気をとられていた。
「はい！先生！そちらの方はもしかして・・・・」
「ああ、俺か。垣根帝督だ」

キャーー

教室が爆発した。
「ウソ！ＭＡ・ＺＩ・ＤＥ！？ほんとに来た！」
「イケメンキタ━━━(゜∀゜)━━━！！」
「あの人が垣根帝督。ガハッ！」
「せんせー！下蔵さんがうれしさ余って吐血しました！めっちゃいい笑顔です！」

「サインお願いします！あと、あくす！」

「ああ！早速！しかもかんでる！？」

「わたしも！あくす！」

一人が行動すると他の人間も一気に行動するようになる。

女子中学生の群れが雪崩のごとく押し寄せてきた。

姦しい集団に帝督はなすすべなく囲まれてしまった。

「おい！タカミチ！」

「ハッハッハ！それも先生の仕事ですよ」

「ウソ付けーーーー」

「あのー帝督先生ってすごい人？」

騒ぎに加わらずに自分の席から騒動を眺めている明日菜が近くの友人に尋ねた。

「知らないの！？」

「へ？そんな有名なの？知らないだけで異端を見るような目で見られるほどに！？」

むしろ女学生の目はすでに死んだ魚の目である。後ろに見えるはチョウチンアンコウ。

「美術部に入ってるなら常識よ。垣根帝督といえば、数ある有名なコンクールに出品しては賞を獲っていく日本が誇る芸術家！その領域はとどまるところを知らず、彫刻、絵画、アクセサリーをはじめ多種多様！海外の有名女優やモデルの中では帝督製のアクセサリーをつけてるのがある種のステータスになるくらいだよ！」

「そんなに！！」

「そんなにだよ！！」

ガッ！と女学生が明日菜の肩を掴み激しく揺する。

「確かに垣根帝督は頭に『謎の芸術家』がつく人ではあった。主に海外を活動拠点にしていたこともあって、なかなか芸術家として日本のメディアに取り上げられなかった！」

次第に感情が高ぶってきたのか肩を掴む力が強くなっていく女学生。

いつまでも女学生と呼ぶのは失礼に当たるので、以後彼女のことはマキナと呼ぶことにする。

特徴は色素の薄い腰まである長髪にベレー帽。

「あ、あの～」

「日本では芸術家を取り上げる番組が少なくファッションデザイナーという認識のほうが強いというのも事実、だが！授賞式に来ても知らない間にどこかに消えてしまう不可解さもあいまって、向こうでは注目の的！」

「ちょっと痛いってゆーか、こわい」

「しかし！彼の作品はどれもすばらしく、独創的で、美しい。それが、祖国で評価されないなどということがあっていいだろうか！いや、ない！！」

メリメリと明日菜の肩に指が食い込んでくる。

目が逝ってるよ、顔が近いよ。

マキナってこんなキャラだったっけ？

「帝督さんが日本に来たということは日本での注目度も今まで異常に上がるはず個展とかも見に行けるしとゆうかすでにイマドキの中学生高校生の間ではカリスマだけどそんな人の教えを受けることができるなんてしかもすごいイケメンでこれは神の思し召しに違いないわとか思っているんだけど明日菜はどうしてここにいるのにあの方を知らないの基礎中の基礎だと思うんですよはい」

と、マキナは一息に言い切った。

句読点が入り込む余地は微塵も無い。

そして、言いたいことを言うだけ言ったマキナは明日菜を開放し、帝督を囲む集団の中に駆け込んでいった。

それに対して取り残された明日菜は

「そーなのかー」

かろうじて感想が言えるというところまで衰弱していた。

出勤！！（後書き）

マキナの外見は原作9巻でさよがコンビニで悲しそうにしている所に描かれていた美術部員っぽい人です

閑話休題　アリアドネー

「いやーお母さん驚いちゃったわ。帰ってきたら、ビーがアマネ君をぶっ刺そうとしてたんだから」

「笑い話じゃないですよ！」

ラッキースケベによって命を危機を迎えたアマネではあったが、なんとか乗り越えて今現在キッチンに立っている。

タイミング的にはこれでもかというほどのナイスタイミングで帰宅したアイリスが見た光景は、自分の娘がほぼ全裸で居候の青年を刺し殺そうとしているなんじゃこりゃーというべきまさにそんな場面であった。

母の帰宅でわれに帰ったベアトリクス（ビーは愛称）は真っ赤になって着替えを取りに走り、事情説明を要求、そしてそれが終わって今はリビングでアイリスとお茶をしている。

この家はリビングとキッチンが一体となっているために、アイリスの言葉がキッチンのアマネにも届いたと言う訳だ。

「まったく、お母さんがキチンと説明してくれていればこんなことにならなかったんだから反省して」

「ごめんねー」

「そうですよ。ちゃんと反省してください」

「アマネも」

「はい」

理由はどうあれアマネも加害者になってしまったためベアトリクスに強く出ることはできない。
先の一件で家中の力関係は完全に決まってしまっていた。
ちなみに完全に許してもらったわけではない。

「はーい、完成しました。アマネ特性ピラフです」

作った料理をテーブルに並べていく。
ピラフ、サラダ、デザート、いろいろあったため予定を変更してその他付け合せをいくつか作っておいた。

「おおぅ。今日も美味しそうだね」

「結構料理できるんですね」

「どうぞ召し上がれ！奥様お酒のほう赤と白を用意しておりますが」

「それじゃあ赤のほうで」

「かしこまりました」

「なにやってんですか。あと、お母さんはお酒なら何でもいいんでしょう」

アイリスはどんなときでもまずは赤ワインから飲み始める。
これは、アマネがここに来たときからの経験でわかっていたことではあったが、とりあえず聞いてきただけ。ついでに言えばアイリ

スはザルであり酒豪なのであっという間に酒は無くなる。

「まあほらアマネ君も席ついて」

アイリスが促してようやくアマネは席に着いた。

「いよっし、じゃあ皆揃ったところで、カンパーイ！！」

「乾杯」

「乾杯」

一人乗りのいいアイリスに乗り気でない二人が追従する。

「・・・・これ、おいしい」

「お？ありがとう」

「これもこの五年間に身に着けたのですか？」

「大体そんな感じかな」

なにせ家事全般が日常の仕事だったからな。

ともあれ、身に着けたスキルが無駄にならなかったのは僥倖だ。

「ふっふーんビーちゃんはお料理できないから悔しいんでしょう？お母さんは何でもお見通しよ」

「違います！わたしだって料理くらいできる」

「へえ。例えば何？」

「そ、そのサバイバル系」

それは料理とはいえないんじゃ・・・・・・

騎士団の授業にあるのか？そういうのが。

「ビーちゃんってばそんなのばっかり、もうちょっと年頃の女の子らしい趣味を持って欲しいわぁ」

年頃の女の子らしいねぇ・・・・

見た目とか雰囲気、物腰なんかは女の子らしいのだが、さっきの一件でもわかるように微妙にずれてるっぽいんだよな。

裸を見られたときにキャーとかいって悲鳴をあげたり、平手打ちにしたりはわかるが、無言で串刺しにしようとするのはなんか違うよなあ。

「反省してます？」

「もちろんです」

読心術か！？

「顔に出てます」

「そうですか」

そうですかじゃねえよ。今のも完全にアレだろ。ここまで完全に読まれるとかドンだけだよ、俺の顔！

「そうそう。突然で悪いんだけどアマネ君。仕事を頼まれてくれない？」

「本当に突然ですね。まあお聞きしましょう」

「仕事といっても難しいことじゃなくてね、ちょっとした護衛なのよ。ほら、雑貨屋のおじさんが買い出しに行くらしいんだけどね、今回は魔獣の森付近を通らないといけないみたいなの。短い間だけど雇われてくれないかな？もれなくうちの娘も付いて来るから」

「聞いてないよ！？」

「あんた暇でしょ！これも騎士の仕事だと思いなさい」

「横暴すぎる！？」

母とはいえ教官に騎士としてなんて言われたら断りようがない。
ベアトリクスの未来は決まった。

「はあ。分かりました。やりますよ」

こうして、アマネとベアトリクスの旅は始まったのだった！
そんなに大したものではないけど・・・・・・

閑話休題　アリアドネー（後書き）

・　時にアリアドネーを入れながら進めていきます。短いですけど・・・

登校と弟子入り志願

冬休みが・・・・・・終わった。

それは多くの少年少女達を学校という管理社会へ強制的に帰還させることを意味する。

主に学校でしか友達に会えないという一般的な学校と違い、中学校から全寮制であるため、友達とは寮で会える。

そのため友達に会いたいから登校するという考えもなかなか浮かんでこないので、始業式の日は登校が億劫で寝過ごすものが多数おり、普通の登校日よりも数千人増しで生徒が道を全力で走っているという想像を絶する光景が広がっている。

「おはよう！みんな！聞いて驚け、なんとこのクラスに転校生がやってきます！」

元気いっぱい挨拶したのは報道部の朝倉和美。スクープ大好きっこである。

そして転校生ネタはいつの時代も学生にとっては大・大・大スクープであるはずなのだが、このクラスにしては珍しく『ええーーー』とはならない。というのも

「いや、恋のことだろ？」「朝倉いまさらやろ」「クリスマスのころから寮にいたじゃん」「歓迎会したでしょ」ｅｔｃ

となったからだ。

すでに、２－Ａに入ることが決定していたという恋はのどかの親友ということもあって、寮に入ったころには大体のクラスメイトに

挨拶をしていた。
そのため、このことは彼らにとってはスクープでもなんでもない。
もはや常識。

「それは分かってるけどさ、言っておきたいじゃん」

「まあ、たしかにそれもそうだね。あ、じゃあ提案あるよ！転入おめでとうパーティーをしよう！」

「それ、いい！賛成！」

「ヨッシャー乗ってきたねー」

佐々木まき絵の提案でクラスが盛り上がり、とんとん拍子で話が進んでいく。

（よくねーよ。だいたい前後の話が一貫してねーんだよ。おかしいだろそのノリ！）

ギリギリと歯を食いしばるメガネの女生徒がそこにいた。

キーンコーンカーンコーン・・・・

「お！みんなちゃんと来てるね」

ドアが開き担任のタカミチが入ってくる。

「起立。礼」

「「「おはようございます！！！」」」

彼女達は能天気ではあるが、決して不真面目というわけではなく、こうした挨拶などはこの世代にしては非常に良くできている。

「うん、おはよう。さて、もう知っているかと思うけど、このクラスに転校生が来ることになった。仲良くしてあげて欲しい。それじゃあ恋君、入ってきてくれ」

再びドアが開き、恋が教室に入ってくる。
教卓の横に歩み寄った恋はそこでクラスメイトに向き直り、一呼吸置いてから自己紹介をした。

「坂井恋です。よろしくお願いします」

「よろしくーーーーーーーーーーーー」

クラス能天気組の声が響き渡った。

「席は一番後ろの、エヴァの隣だ」

「はい」

クラスメイトの視線を一身に受けて、恋は一番後ろのエヴァンジェリンの隣の席に腰をかけた。

そして、エヴァンジェリンと目があった。

「よろしくな、坂井恋」

「はい、よろしくお願いします。エヴァンジェリンさん」

「む」

「どうしました？」

「わたしは闇の福音だぞ？それをわかっているのか？」

「ええ、分かっていますよ、闇の福音、魔法界の一部ではナマハゲ扱いの超有名人でしょ」

「ナマハゲゆーな、おまえいきなり口調変えたな」

「同級生だし」

「くうぅ、封じられてさえいなければこんな小娘」

「まあまあそう言わずに」

恋はエヴァンジェリンの頭の上で手のひらをポムポムと軽く弾ませる。

「ええい、黙れ！触るな！くそ！封じられてさえいなければぁ」

周囲の目を気にして小声でなければ話せず、凄むこともできないということがエヴァンジェリンにとって屈辱であった。

「マスターが楽しそう」

的外れな見解を示した従者が目の前にいた。

そして放課後

「恋ちゃん、恋ちゃん！今夜恋ちゃんの歓迎会やろうと思うんだけど、予定あったりする？」

「まき絵さん。うーんこれからやろうと思っていることはあるけど、それが終わってからなら。うまくいけば八時には終わると思う」

「八時か～ちょっと遅いけど、大丈夫だね！みんなー歓迎会は八時過ぎくらいだよー」

「おー！！！！！！」

寮であり、いろいろと放任されているのでちょっとばかり遅くなっても問題ない。何よりも寮長が史菜であることもある。

どうあっても彼女達は本気で怒られるまで騒ぐのだろうが。

用事があると言って一人、学校をでた恋は途中でアテナと合流し一路、森を目指した。

そこは森というよりも自然公園に近いような場所だが、そんな人気の無い場所にポツリと一軒のログハウスが建っている。

エヴェンジェリンの自宅だ。

呼び鈴をならす。インターホンでないのが風情を感じさせる。

「どちらさまですか」

ドアをあけて現れたのは、エヴァンジェリンではなく見るからにロボットのクラスメイト、茶々丸であった。

「こんにちは、エヴァちゃんに用があってきたんだけど、今、大丈夫？」

「はい、どうぞこちらへ」

多少訝しげではあるが、断る理由も無いと判断したのだろう、中へ入れてくれた。

「スゴッめっちゃファンシー・・・・・」

中へ入った恋の目に映ったのは、ログハウスらしい木の雰囲気に、大量のぬいぐるみのそこらじゅうに置いてある、シル〇ニアファミリーの世界のようだった。

手近なぬいぐるみを手に取ったとき上から声をかけられた。

「何をしにきた、坂井恋、坂井アテナ？」

声のしたほうを見るとエヴァンジェリンが階段の半ばからこちらを見つめていた。

「お願いがあってやってきました」

「願い？このわたしに？」

「はい」

学校とは違う、凄みのある口調。

魔力を封じられていようと関係が無い。

六百年の歴史の積み重ねが生み出した圧倒的な存在感。

故に言葉遣いもそれ相応のものに切り替える。

「わたしと妹に修行をつけてもらいたいのです」

「弟子入りか？お前と妹を弟子にしてわたしに何の得がある？だいたいお前達には垣根と近衛がいるだろう」

それを言われるとつらいところだが、恋にとってもアテナにとってもエヴァンジェリンの教えを受けることは決して悪いことではない。

「帝督さんと史菜さんにも稽古をつけてもらいましたが、それだけでは視野狭窄になってしまうのです。わたしたちはこの学園に自分達の正義を見つけに来たのです。そのためにあなたと関わりを持っておきたいにです」

「よくわからんな。悪の魔法使いに弟子入りして正義を見つけるだと。お前達は両親のような『立派な魔法使い』になりたいんじゃないのか」

「そういったことにわたし達は興味がありませんよ。それに一口に

正義といってもそれはいくつもあります。人種、宗教、国家、はては個人にいたるまで。六百年を積み重ねたあなたはそういったことを実際に眼にしているはずですからその知識をぜひとも授けていただきたいのです。わたしの両親ですら己の正義のために殺しあったくらいです。十四年程度の人生で正義を語るのはおこがましいでしょう」

「まて。聞き捨てならないことを言ったな。あの、坂井悠二とシャナが殺しあったことがあるだと？」

恋が思っていた以上にエヴァンジェリンは食いついた。

「ええ。そのように聞いています。わたしの知る範囲でよろしければこのことについてもお話しますよ」

「なるほど。取引か。まあ、いいだろう。十五年も封印されていて退屈していたところだ。正義に関する考え方もなかなかのものだし、弟子入りの件引き受けてやろう。ただし、わたしの修行は厳しいぞ。分かっているな」

「もちろんです」

「よろしくお願いします」

修行

弟子入りした恋とアテナはエヴァンジェリン宅の地下に案内された。

そこは一階と違い、壁も床も天井も石で作られた薄暗い通路の先に部屋があり、物置のように扱われている場所であるようだった。

その部屋に入ると、ガラクタを押し分けたように物が壁の押しやられ、中央にできたスペースにポツンと一つだけ何かが置いてあった。

それは、ガラスでできた大きなフラスコのようであり、ボトルシップのように中に塔が造られていた。

ガラスの表面にはＥＶＡＮＧＥＬＩＮＥ'Ｓ　ＲＥＳＯＲＴとある。

「これは？」

「お前達の修行の場だ」

「は？いや、中入れないって」

「いいから、こっちに来い」

エヴァンジェリンに従って球体に近づくと、足元に魔法陣が現れ、気が付くと南国にいた。

「なんじゃこりゃー！」

「どこ、ここ！？」

「ここはわたしの別荘だよ。しばらく使ってなかったが、さっき茶々丸に引っ張り出させた。修行はここでやる」

ものすごい高所でありながら、手すりの無い橋を渡って建物を目指す。

歩きながら得意げに話すエヴァンジェリンの説明によると、ここは一日単位でしか利用できず、中に入ったら丸一日外に出られないということ、ここで一日過ごしても外では一時間しか経っていないということ、ここではエヴァンジェリンも魔法を使用できるということ、などなど。

「ははあ・・・修行にはうってつけだね」

「まあな。だが、わたしのような存在意外が使いすぎるとかなりはやく老けることになるがな。タカミチはそれでおっさんになった」

「うわーお。どうりで」

そうこうするうちに広場までやってきた恋達。

「さて、修行するにしてもお前達がどれほどのものか見なければならん。ここでわたしと茶々丸と手合わせだ。2対2でちょうどよかろう」

先を歩いていたエヴァンジェリンが向き直り、茶々丸がその隣へ並ぶ。

「望むところ」

「全力で行きます」

ピリッとした空気が立ち込める。
互いににらみ合い隙を見せない。
最強の魔法使い相手に油断はできない。

「では、いくぞ！！」

空気が弾けた。
ゴウッとエヴァンジェリンを中心に魔力が爆発し、突風を引き起こす。

そして、次の瞬間エヴァンジェリンは恋の目の前にいた。

「ッ真紅！！」

「氷爆！」

真っ白な爆発が生じる。
霧ではなく触れたものを低温と衝撃で破砕する氷結系の魔法。

「ぶはっ！」

恋が白い空間から飛び出す。
真紅によって具現化させた、ロングコートで身を守ったのだ。

そして、後退する恋に氷の矢が迫る。その数は十七。

「飛焔！！」

この氷を紅蓮の炎で消滅させる。

「プラクテ・ビギナル、魔法の射手・連弾・火の十七矢」

恋の右手から火の矢が繰り出される。

これをエヴァンジェリンは氷楯で防ぐ。

そこに、すばやくアテナが飛び込む。

「ゼイ！！」

拳は黒い光を纏いエヴァンジェリンの顔面を襲う。

しかし、この拳が届く前に、アテナの体は弾き飛ばされてしまった。

茶々丸が割って入ったのだ。

「いいぞ！その調子だ！」

エヴァンジェリンが攻撃に移る。

闇が氷が戦場を飛び交い恋とアテナを追い込んでいく。

「そら、氷の矛」

エヴァンジェリンが上に手をかざすと、大気中の氷の精が手のひらに集まり氷の矛を創りだす。

そして、振り下ろされた手の軌道に従って恋にむけて矛が落ちてくる。

その射線上に今度はアテナが割ってはいる。

「斥力障壁」

アテナが矛に手を向けると氷の矛は空中で動きを止めた。
エヴァンジェリンの力で制御されている矛とアテナの力で生じた斥力場が拮抗しているのだ。

「アデアット！」

恋がアーティファクトを呼び出す。
それは金色の腕輪であり、手首を守る小さな篭手のようにも見える。

「アーティファクト！？」

驚くエヴァンジェリンを尻目に恋は手にはハルバードを創りだす。

『六面武帝』の『槍』

脚力を重点的に強化したその状態でエヴァンジェリンのもとまで一息に跳躍する。

「ハァ！」

接近し、思い切り振り下ろす。が、気が付けば転地が逆転している。

――――――――――――――――投げられた！

そう思ったときにはエヴァンジェリンの掌底が決まっていた。
息が止まり、地面に勢いよく叩きつけられ、そのままスリーバウンド。
それでもすぐに立ち上がる。魔法とアーティファクトの強化の恩恵でダメージは大きくない。

「姉さん！」

駆け寄ろうとするアテナに茶々丸が銃撃をする。
とっさにこれを重力で叩き落し、石の蛇を三匹作り出して向かわせる。

「ほう。斥力に重力、そして石か変わり者だなお前の妹は」

斥力魔法は重力魔法の一種であるが、本来重力に対応する力として斥力があるわけではない。
火や雷に対する考え方が科学と違うように、重力に関しても物理学とは少し違うところがあるようだ。
重力系はマニアックで高度な魔法だ。アテナの歳で使用できるのはやはり才能ゆえだ。

「さて、こちらも再開しようか」

空中に立っていたエヴァンジェリンが恋に向かって急降下する。

「断罪の剣」

エヴァンジェリンの近接戦用魔法。
万物を強制的に気体へ相転移させる非常に殺傷能力の高い魔法。
手刀のように指先をそろえた状態でそこから半透明な魔法の刃が

構成されている。

「『剣』！！」

恋はハルバードを西洋剣に切り替えて断罪の剣を受け止める。同時に押し切ろうとするエヴァンジェリンに対し、恋は刀身を滑らせるように受け流し、体を入れ替える。

「お？」

意外そうな顔をするエヴァンジェリンに恋は横凪の一閃を放った。しかし、これもエヴァンジェリンは防ぐ。六百年の研鑽は伊達じゃない。

（動きが変わったな。腕力も・・・・アーティファクトの力か）

エヴァンジェリンの分析の通り『剣』の状態の恋は基本となる全身強化に加えて、腕力の強化と剣術のダウンロードが行われている。最もダウンロードといってもその技をどのように使うのか、等あるので、結局修行が必要になってくるのだが。

「『弓』」

恋の剣が弓に変化する。
炎の矢を番えて引き絞り、放つ。
空気を切り裂いて迫り来る矢を断罪の剣で切り落とし、瞬動。

「ッ『楯』！！」

すばやく弓を破棄、楯を形作りエヴァンジェリンの蹴りを防ぐ。

ゴキィィィン！！！

すさまじい衝撃が恋の全身を駆け抜けていく。
あまりの力に恋の体は大きく跳ね飛ばされた。
楯で防ぎ、『楯』の状態であったため異常に打たれ強くなったので倒れることは無い。

（なんて強さ。これが『最強の魔法使い』・・・・）

膨大な魔力、圧倒的な魔法の力、極限まで鍛え上げられた体術。
まだ見ていないが、吸血鬼としての再生能力もあるだろう。
この人を封印するサウザンドマスターは本当に人間だったのだろうか？

「どうした、もう終わりか？」

「まだまだ！『騎士団（ナイツ）』！！」

全力の炎を込めて騎士団を創りだす。五十近い数の真っ赤に燃える西洋の騎士達。
剣を抜き、槍を向け、弓矢を構える。
彼らは炎。空中でも戦える。

「突撃！！」

エヴァンジェリンに向けて一斉に矢が放たれ、同時に騎士達が押し寄せる。
恋もその中に入り、炎の剣を構えてエヴァンジェリンに向かう。

小柄な少女が騎士団の中に消える。

「マスター！？」

茶々丸が意識をそらした。その瞬間を狙い、アテナが腹部を殴る。
ただのパンチではない。引力を用いた一撃だ。
狙い違わず腹に吸い込まれた拳はその衝撃で茶々丸を大きく吹き飛ばした。

「凍る大地！」

突如、地面から大きな氷柱が出現し、騎士達を飲み込み凍り付けにした。
後続の騎士は恋を含めて足を止めてしまう。

（わたしの騎士を氷付けにするなんて！？）

さらに、ゴバッと騎士の一部が上空に投げ出される。
騎士のいなくなった一帯の中心には悠然とたたずむエヴァンジェリン。

ここで恋の足元にアテナが落ちてきた。
茶々丸に投げ飛ばされたらしい。

「来たれ氷精、闇の精。闇を従え吹けよ常夜の氷雪。闇の吹雪！！」

危険を感じたときにはもう遅い。

エヴァンジェリンから強力な闇と氷が放たれ、残った騎士も根こそぎ吹き散らされる。

「きゃあああああああ！！」

恋とアテナも直撃を受けて足が地を離れる。視界が暗くなり、全身を強打する。

「チェックメイトだな」

地に伏す恋とアテナにエヴァンジェリンが話しかける。

「降参です」

「まいりました」

素直に負けを認める二人。

正直、もう限界を迎えつつある。しかし、相手のほうはまだ余裕があるようで、この戦いもずいぶんと手加減してもらっていたようだ。

「さすが。まったく歯が立たなかった」

「はっはっは！あたりまえだ。わたしは最強の魔法使いだぞ！この程度はまだ序の口だよ」

やけに上機嫌なエヴァンジェリン。

「まあ、お前達がわたしの想像以上だったことは認めよう。明日か

らはもっと厳しく行くぞ。いいな！！」

そしてその後、上機嫌なエヴァンジェリンはそのまま恋とともに歓迎会に出席。

クラスメイトたちの質問攻めでふたたび機嫌を悪くしてしまった。

お仕事　アリアドネー

ガタン、ゴトン、ガタン、ゴトン、ガタン、ゴスッ、ゴトン、ガタン、ゴトン・・・・・

「いま、頭打ちましたか？」

「いや、むしろケツ」

アマネとベアトリクスは今現在、雑貨屋のおじさんが操る馬車の荷台に乗り込んでいる。

馬車といっても引いているのは馬ではなく鳥のような頭を持った四足歩行のなにかだ。

「ったく、この荷台物積みすぎなんだっての、狭すぎるわ」

「仕方がありませんよ。商売人の商売道具なんですから人が乗ることはそもそも想定していません」

「おまえは楽してっからそんなことが言えるんだろ」

端っこにいるベアトリクスの周りは物がない。わりと広々としているし、搬入用ではあるが窓まである。

一方。アマネのいる場所は異常にものが多い。倒れたり散らばったりしないように魔法がかかっているからその点は大丈夫なのだが、揺れによってちょくちょく頭や尻を強打している。

それもこれもあのおっさんが

『お嬢ちゃんの場所はキチンとあけておかなきゃな。ヤロウはどっかその辺でも乗ってな』

などとのたまった結果アマネは劣悪な環境に押し込められることになったのだ。

「それにしても魔獣の森のそばを通るだけで護衛ですか。だいたい、わたしの力では魔獣をどうこうすることはできませんし」

「護衛がいるっていう安心感が大事なのさ。危ないことに変わりはないし、このあたりの森の生態系もなんかおかしくなってるらしいじゃないか」

「ああ、その話は前に聞きましたよ。この辺りにいなかった生物が入り込んでるということでした。繁殖までは確認できていないらしいですけど」

「ただでさえ近づき難かった森がさらに訳分からなくなっているのだから、おっさんみたいな一般的な商人は買出しにも行けないよな」

魔法使いといっても誰もが強力な力を持っているわけではない。大多数の人は魔法を便利な生活のツールというように認識している。

魔法を使って戦う、というのは拳闘士か騎士団などに所属しているものくらいの少数派なのだ。

よって、一介の商人であるおっさんは魔獣の森で何かあったときの対処ができないといってよい。

そのための護衛である。

普段は別ルートから安全に仕入れるのだが、今日に限って緊急を要する案件があったために暇をもてあましていたアマネたちが駆り出されることになったのだ。

荷台の後ろから顔を出して外を確認するアマネ。

この荷馬車には認識阻害や障壁を張ってあるので魔獣に感ずかれることは基本的にない。

外の様子も魔法でわかる、が、やはり暇であるし目視も大切なので時折顔を出すようにしている。

後ろから外を見るアマネの目には正面にアリアドネーの市街地、左手に魔獣の森、右手に広々とした草原が広がり、遠くに低い山脈が見える。

「何かありましたか？」

「特に何もないな」

だだっ広い草原と森があるだけ。

これが、仕事でないなら、ここでピクニックもアリかもしれない。

「もうじき、魔獣の森を横切ります。認識阻害の強化を」

「分かってるって、そっちこそ障壁の強化を忘れんなよ」

ベアトリクスが魔法の立体映像で地図を確認しながら言った。

今回の目的地はアリアドネーの市街地から魔獣の森を挟んだ反対側にある街だ。

直線距離は五十キロないくらいの短距離で、箒ラリーの中継地点

にもなっている騎士団候補生とってはある意味なじみのある街だ。
その街への最短ルートは魔獣の森のど真ん中をとおる道だが、あまりに危険。かといって最も安全な道を通ると時間がかかりすぎてしまう。そのため今回は、魔獣の森の南側にそってすすみ、途中に森を切り開いた道があるので、そこを通って、目的の街まで行く。こうすれば、魔獣の森は十キロほどですみ、時間も守ることができる。

「まあ、このあたりは盗賊も出ないし、唯一危ないのが森だからな。ここさえ抜けてしまえば仕事は終わったようなもんだろ」

そうして、馬車は森に入っていった。

道はほぼ直線。さっきまでの違いといえば、両脇が森になっているということだけなのだが、いつ魔獣が飛び出してくるのか分からない不安は精神衛生上よろしくない。

しかも

「ウッ！ガ！痛てえ！」

道の整備が行き届いていないのだ。ガタガタとさっきの倍以上の振動が伝わってくる。

「おじさん。大丈夫ですか？」

「おお、お嬢ちゃん。今んとこは大丈夫だぜ」

ベアトリクスは魔法生物を駆るオッサンに念話で会話をする。
少しでも不安を取り去るための措置だ。

基本は安全運転。下手に速度を上げて魔獣に気づかれてしまっては元も子もない。アマネやベアトリクスの魔法を持ってしても完全に魔獣の知覚をすり抜けられるとは限らないのだから。

「今のところは問題ないようです」

「ああ、そうか」

たったも十キロくらいの道のりだ。

このままいけば無事抜けられるだろう。と、そう思ったそのとき。

ガッタン！

今までにない大きな揺れが起こった。

魔獣の出現ではなく、単に荒れた道に開いた穴にタイヤが引っかかっただけ。

「う・・・む？お」

この予想外の振動で、アマネはバランスを崩し、荷台の端まで倒れこむように吹っ飛んでいた。

ーーーーーーーーー柔らかい？

右手に伝わる感触。

それは荷台に積んであった売り物にはない感触だった。

とりあえず起き上がって確認してみる。

「んな！？」

ベアトリクスがいた。アマネの下に。
そしてアマネの右手はベアトリクスの胸の上。

何の奇跡か、偶然か。奇しくもアマネはベアトリクスを押し倒す形になっていた。

「ッ」

「う、うわあああああああ!?」

あわてたアマネは体をどけて、反対側まで移動する。

起き上がるベアトリクスと視線が合う。
頬が羞恥で赤くなっている。

「ご、ごめんなさい」

視線をそらしたベアトリクスの口が動く。

「・・・・・・・・」

ボソッと声が漏れるが聞き取れなかった。

「この仕事が終わったら・・・・覚悟しておいてください」

その目は死んでいた。

「ごめんなさい・・・・・」

ネギ、先生？

「今日はこのくらいでいいだろ」

「う～ん・・・」

魔法球内部での修行が一段落つき、恋とアテナはぼろぼろになって地に伏していた。

エヴァンジェリンに弟子入りして早くも一ヶ月が経った。

「ぜんぜん勝てない・・・二対一なのに」

「化物（モンスター）」

「当然だ。お前達のような十数年しか生きていない小娘にそうそう追いつかれるものか」

自信満々にそう言い放ち、ベンチに向かうエヴァンジェリン。

エヴァンジェリンは息も上がっていない。この吸血鬼にとってはまだまだウォーミングアップにもなっていないという段階である。

「そうそう。なんてったって数百年生きてるんだもんね。年の功ってやつ」

「ええい、黙れ！！だいたいなんでお前がここにいる！？ヘカテー！！」

「史菜って呼んでよ。わたしはその二人の保護者なんだもん、ここにいるのは当然でしょ」

「当然なものか、ここはわたしの別荘だぞ！勝手にはいるな！」

史菜としては恋とアテナは尊敬する義兄、義姉の娘達なので心配でしょうがない。

基本は放任という教育方針とはいえ、初日からエヴァンジェリンに弟子入りするとは思っていなかった。

周囲の目もあるので一応監督という形で入り込んでいる。

しかしエヴァンジェリンは認めていないからいつも口論になる。

それでも本気にならないのはこの二人がそれなりに長い付き合いだからであり互いに暗い部分を背負っているからでもある。

「そんなこと言うんだったら今度からキティーちゃんって呼ぶよ」

「それはヤメロォ！！」

小さな体を大きくふくらませてエヴァンジェリンが叫ぶ。

エヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウェルが彼女の本名である。

ちなみにｋｉｔｔｙには子猫という意味の他にふしだらな娘という意味もあるようなので使うときは注意が必要だ。

「さて、それはいいとして。そろそろあの子が来る頃だけど」

「あの子？」

テーブルでお茶をしていた恋が要領を得ないというように聞き返す。

「ネギ・スプリングフィールドだったか。奴の息子は」

スプリングフィールド。

魔法界に知らぬもののいないファミリーネーム。

「お父さんが言ってたサウザンドマスターの息子さん？」

「ああ、たしかアテナと同じくらいじゃなかったか・・・・・ウェールズの魔法学校を飛び級でしかも主席で卒業。ギフテッドというやつなのだろうな。奴とは真逆だな」

「顔立ちはそっくりなんだけどね。タカミチが言うには内面は母親似らしいよ」

「アテナと同い年くらいなんだよね。転入ってこと？」

「いや、それがね。先生やるんだって」

パードゥン？

「せんせい？」

「そ」

「いやいやいや、それはおかしいでしょ！？十歳でしょ。先生って労働基準法はどうした！？」

たしかにイギリスの魔法学校を首席卒業ってくらいなら学力はあるんだろうし、ＡＬＴって扱いもできなくはないかもしれないけど、

でも十歳はない。そんな簡単に教えられるんなら教育学部は必要ない。

「だいたい年下に教えられるって」

「それは麻帆良だからとしか言いようがないな」

「それに受け持つのは恋のクラスだし、あそこなら簡単に受け入れるでしょ」

「わたしのクラスッ！」

「そこで、目下注意しなければならないことは、ネギ先生が子供であり、魔法使いの社会しか知らないということ、魔力コントロールに難があるということ、そして」

史菜がいったん言葉を切って、エヴァンジェリンを見つめる。

「あなた」

エヴァンジェリンはナギ・スプリングフィールドに破れて以来、この学園に封印されている。

よって、ナギの息子にたいしてどのような行動に出るのかと学園の魔法使いが心配しているのである。

「フン！それで今日は釘を刺しに来たということか。心配はない。多少血はいただくがな」

エヴァンジェリン曰く、ナギの封印を解くためにはその親族の血が必要なんだとか。

前途有望な少年は赴任前から目をつけられているのである。

「あんまり派手に行動しないでよ。強硬な行動に出そうな人もいるんだから」

「しったことか。お前のほうこそいいのか。友人の息子だろ？」

「まあ、思うところはあるけど、いろいろときな臭い動きをしてる連中もいることだし、荒事に慣れといてもらった方がいざというときに守りやすいの」

「第二の英雄にするつもりはないのか？」

「もちろん。わたしはね、あれの息子だからこそ平穏に暮らして欲しいと思ってる。でも、情勢的にそうもいかないかもしれないから、彼は魔法使いとして成長しなければいけないの。ということだから、恋もアテナも初めのうちは静観しててね」

という話があったのは数日前のこと。

「あれが、ネギ・スプリングフィールド」

「ああ、思っていたよりずっと子供だな」

隣のエヴァンジェリンと小声で会話する恋。

ネギ先生の初日、英語の授業中。黒板に板書しようとしているところをアスナに消しゴムで妨害されているところだ。

入ってきたときも超連続トラップでえらい目に遭っていた。

このかが言うには朝もアスナとトラブルを起こしたようだし、はっきりいって魔法使いとしての意識が甘い。

「いいぞーやれやれー」

ついにアスナと委員長が取っ組み合いを始めた。

「アスナに五円」「委員長に百円」「いけいけー」

ネギは流されるままあわあわとしているだけだった。

そしてチャイムが鳴り、ネギ先生の初授業は最悪の形で幕を下ろしたのだった。

「大したことはなさそうだな」

「ちょっとかわいそうだったね。まあ新任教師にこのクラスはキツイかな。崩壊しているようなものだしね」

ネギ、先生？（後書き）

ネギ君登場。ついに原作入ります。

歓迎会　ｆｏｒ　ネギ

キーンコーンカーンコーン・・・・・

本日の授業の終了を知らせるチャイムが構内に響き渡り、とたんに学校が騒がしくなる。

あるものは部活へ走り、またあるものは友達と駄弁る。

「れんー」

「？のどか、どうした？」

「六時からネギせんせーの歓迎会するって。どうする？」

「それなら行く」

「エヴァちゃんと茶々丸さんは？」

隣で帰り支度をしているエヴァンジェリンに尋ねた。

普段はサボりまくっているが今日はネギの赴任ということもあって最後まで出席していた。

「いかん。それと、なんでわたしはちゃんで茶々丸はさんなんだ」

「ん？なんとなく」

「コイツ・・・」

「私もマスターが行かないということなので、遠慮します」

ということで、本日六時より、歓迎会に行くことになった。

今日は修行もない日なので、それまでの間暇なのである。

そこで、いろいろと不安を抱えるネギ先生を観察することに決めたのだが。

「あー結構落ち込んでる・・・・」

恋の見つめる先には、広場にあるモニュメントへ続く石段に座って、出席簿を眺めため息をつくネギの姿。

（そりゃ、初日からあれじゃあ落ち込むか。当然っちゃあ当然か）

しかし、落ち込むということは先生という仕事に対してキチンと向き合っているということでもあるし、単に修行の一環という安易な考えでないともとれる。

（前途多難でなによりだ、少年）

と、そのとき、突然ネギが杖をもって立ち上がり、魔力を逆らせた。

（！？）

ネギの杖が向いているほうを見ると手すりのない階段から体勢を崩して多量の荷物とともに落下するまき絵がいた。

その高さは十数メートル。普通ならば即死、良くても大怪我は免

れない。
しかし、最悪の悲劇は起こらなかった。
まき絵は地面スレスレでふわりと勢いを殺し、その僅かな時間にその体をネギが受け止めていた。

（咄嗟に風の無詠唱・・・見習いとは思えない）

呪文を唱えずに発動する無詠唱魔法は非常に高度な技術を必要とし、一朝一夕で身につくものではない。
才能のおごらず努力した証である。

とにかく、まき絵を引き取って、今回の記憶をいじっておこうとしたとき、ツインテールの少女がネギに掴みかかり、連れ去ってしまった。

（今のは、アスナ・・・まさか見られてた！？）

まき絵に走りよって、有無を言わさず記憶操作。
忘却というよりも霞がかかってよく思い出せないというものを使用する。やっつけ仕事なのでなんかよくわからないけどネギに助けられたらしいというところでストップする。
今はそれ以上をする余裕はない。とにかくアスナを探さなければならない。

「あ、あれーネギ君は？」

副作用でポケーとしているまき絵を放置して走り出す。
短距離走で世界記録が余裕で出せそうな速度である。

（おいおい、初日から魔法バレかよ・・・前途多難だなほんとに）

そこで、魔力を感知。
間違いなくネギの魔力だ。しかもこの感じは・・・・・

「なんかしらの魔法か。安易な忘却は勘弁してよね！」

魔法がバレたのなら、間違いなく記憶を消そうとするだろう。
それが基本的な魔法使いのルールだから仕方がないが、未熟者が使うと余計なものまで消える恐れがあるし、うまく調節しなければ、仲の良い友人達に怪しまれることにもなりかねない。

（あ、いた！）

茂みに隠れてよく見えないけど、間違いなくアスナだ。

「ふたりともこんなところでなーにやってるの！？」

できるだけ普通を意識して、突っ込む。普通はこんなところにいないが、そこは気にしない。
茂みを突き破って現れた恋に驚く二人。
しかし恋はもっと驚いた。

「！？」

「恋！？」

「はぅわ！？」

それは大誤算だった。
恋の目に映るアスナは制服の上着を残してぽぽぽぽーんだった。

しくった！まさか記憶じゃなくて服消してるとは！

本当に余計なものが消えている。物理的に。

「・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

痛い沈黙だった。

「えと・・・なんかごめんね」

「ぐぬぅ」

羞恥に顔を染めたアスナがネギをにらむ。

恋は荷物からジャージを取り出してアスナに渡そうとするが、そこでさらに悲劇が起こる。

「おーいそこの三人、なにやってるんだ？」

タカミチが茂みから現れた。

もう一度言おう。今のアスナはぽぽぽぽーんである。

そしてアスナはタカミチに惚れている。

当然

「あ・・・ひっ・・・いやあああああ！！」

となって、アスナは恋からジャージの下を引ったくり、器用に走りながら履いて立ち去った。
ネギがその後を追っていく。

二人を見送って恋がタカミチに話しかけた。

「アスナさんに魔法がバレたようです」

「・・・・・・みたいだね」

「？」

予想外の反応だった。
複雑な心境といったところか。

「今回の件は、ネギ先生の注意不足でありましたが、ああしなければまき絵さんは大怪我を負っていた可能性が高く、不可抗力であると思います。それにわたしもその場にいて何もできませんでした。申し訳ありませんでした」

「うん、大丈夫。仕方がないよ。処分とかは考えていないから」

「そ、うですか」

意外といえば意外。処分を考えていないということはアスナに対しても何もしない方向で行くということだろう。
彼女には何かある。そう直感した。

「それでは失礼します」

「うん」

恋は踏み込まないのが賢明であると判断し、その場を後にした。

「カンパーイ！！」

そして宴会が始まった。

ネギとアスナだが、一緒に教室に入ってきたところを見ると関係はそこまで深刻ではないようだ。

アスナにしても魔法を言いふらすそぶりはないようだし。

（言いふらすってのはないか・・・・・おかしなヤツって思われるだけだし）

「のーどか」

「あ、恋」

「分かってると思うけど、ネギ先生は魔法使いだから気をつけて」

「うん」

のどかは普段から魔力を抑えているし、注意もしてるから大丈夫とは思うが、一応教えておく。

「なに二人してこそこそしてるのさ」

「なんの話をしていたのです？」

ハルナと夕映がやってきた。

最近はこのメンバーで行動することが多くなっている。

「こそこそなんてしてないよー」

「そうだぞ、こそこそなんてしてないぞ」

「言い方が変です」

「なんの話をしてた！はけー」

紙コップ片手にほろ酔い？のハルナが問い詰めようとするが。

「おおーまき絵がもう先生にアタックしてるぞー」

「なぬ！？」

その歓声を聞いて走り去っていった。

その後、あやかが見事なネギの銅像を披露し、馬鹿にしたアスナと取っ組みあいが始まった。

と、思えばアスナがネギに肘撃ち。ごにょごにょした後、ネギがタカミチに走りよってタカミチの額に手を当てて何か尋ねている。

（どー考えても読心術・・・・高畑先生も抵抗（レジスト）すればいいのに）

ネギの分かりやすすぎる行動にややあきれつつもしばし静観を貫

く。

ネギがアスナとタカミチの間を二往復したところでアスナが教室を飛び出していった。

その後をネギが追うというさっきと同じ展開。

「またかあの二人」

今回はみんなの目の前ということもあって、全員興味津々である。

「どうする、追ってみる？」「すぐ戻ってくるっしょ」「わたしは追うよ！ジャーナリストとして！」

ちょっとしてから、先遣隊が派遣された。恋もそれに続く。

ドアを開け、階段に向かう。

そして、見てしまった。

髪を下ろしたアスナがネギを抱きしめているという衝撃の光景を！！

パシャパシャ！とカメラのシャッターを切る。フラッシュがたかれ、アスナもこっちに気が付いた。

「あ・・・・」

「あ、あ、アスナさん！あなたこんな小さな子を連れ出して一体何をしているのですか！？」

あやかが掴みかかった。

必死に否定するアスナだが、あいにくと説得力がなさすぎる。

「だからこれは違うんだってー」

「アスナ、アスナ」

「何、恋」

救いの手か？とアスナが期待の目を向ける。

「相手がロリじゃなくてショタでも都条例に引っかからないわけじゃ・・・・」

「あんたは何を言ってる！？」

残念ながら見当違いもはなはだしかった。

「ほら、あんた・・じゃなかった。先生からも何か言ってくださいよ」

「えーと、えーと・・・・っ記憶を失えー」

「やめーい！！」

テンパッて杖を振るネギにおもしろがって群れる女子中学生。

騒ぎが収まるには少し時間がかかるようだ。

ちなみにアスナがネギを抱いていたように見えたのは頬をつねっているだけだったことが判明した。

歓迎会　ｆｏｒ　ネギ（後書き）

ネギが助けるのはのどかではなくまき絵です。さすがにこの話ののどかは落ちねぇだろと思って・・・・

青春はドッジボールだ！！

「学校掛け持ちしてっと、移動に時間がかかっちまうんだよな」

と、ひとりごちながら帝督は大学での講義を終えて中等部に向かっている。

ここに来てから、帝督は似合わないスーツに身を包み、大学、高校、中学で授業を行う忙しい日々を送っている。

最近では、ネギが引き起こした惚れ薬騒動の対処にまわったりと魔法使いとしてもキチンと仕事をこなしている。

ネギが来てからというものくだらない事件が多発していて辟易しているのだが。

時刻は一時十分前。ちょうど昼休みが始まったころで広場では女子中学生が昼食をとったり、走り回ったりと非常に騒がしい。

「そういや中高と史菜が走り回ってるところは見なかったな・・・・ん？」

帝督は妙に騒々しい一画を見つけた。

あきらかにけんかをしている。

しかも女子中学生ｖｓウルスラの女子高生。

「また２－Ａか、騒ぎしかおこさねー連中だな」

アスナとあやかが高校生に果敢にも取っ組み合いを挑んでいる。

そして、なぜかネギは女子高生側に捕縛されている。

「なにやってんだアイツ」

ネギは完全におもちゃにされていた。
すると、騒ぎを聞きつけたのか、タカミチ現れたのだが、帝督と目が合うとお譲りしますのポーズをとって引っ込んでしまった。

「元担任だろうがお前は・・・・」

といいつつも止めに向かうのは先生のお仕事にそれなりに入れ込んでいるからなのか。

「先輩風吹かしてんじゃないわよ！」

「ネギ先生をお返しなさい！！」

「ガキのくせに生意気なのよ！！」

「み、みなさん落ち着いてくださいー」

（あぶぶ・・どうしよう、僕先生なのに。なんとかしないと・・・）

けんかを止めようするネギであったが、子供ということもあってここまでヒートアップした年上の女性を落ち着かせることなどできるはずもなく、右往左往することしかでいなかった。

「この・・・」

手を出そうとしたアスナとあやかの襟を誰かがぐいっと引っ張って遠ざけた。

「元気すぎんだろ、お前ら」

「垣根先生！」

「垣根先生だ」

「どうしてここに？」

教師の登場で一気に静かになる。
けだるげな顔で周囲を見回す帝督。
帝督はウルスラでの授業もしているので、自分が受け持っている生徒も多く関わっていることが一目で分かった。

「神楽坂、雪広。お前らはもう少し自重しろ」

自覚があるのか二人揃って静かになった。
ネギの騒ぎは常にアスナも関わっているし、ショタ好きのあやかも最近はいつになくはっちゃけている。

「お前達も、三つも年下の相手に大人気ないだろ」

「すいません」

「あまり、騒ぎすぎると呼び出しなんてことにもなるから気ぃつけろ」

「え？垣根先生のですか」

おい、そこの。なぜ嬉しそうにする？

「いや、竹中先生のだ」

「うげ、それは・・・」

竹中Ｔとはウルスラにおける生徒指導主任のことだ。
鬼竹中と呼ばれ恐れられている。
ちなみに女性なので、変態等のレッテルを恐れることなく指導することができる。

「ほら、授業が始まる。解散だ！」

パンパンと手を叩いて教室に戻ることを促す。
みんなそれぞれの校舎へ、引き返していった。

その日、２－Ａの六限は屋上でバレーボール。

「ねえねえ、やっぱ垣根先生ってすごくない？」

「確かに頼りにはなるよねーかっこいいし」

着替えを終えて屋上へ向かう。

「なにかあったん？」

「高等部と場所の取り合い」

この学園は生徒数のわりにコートが少なく、場所の取りあいが頻発するのが問題となっている。

来年度には新コートが整備される予定なのでそれまでの辛抱なのだが。

「げ！」

「あんたたち！」

屋上には例のウルスラ集団がすでに入っていた。

昼休みの腹いせにやってきたようだ。

「大人げ無！」

恋もついそうもらしてしまった。

中学生あいてに何をマジになっているんだと。

一触即発の雰囲気の中で、体育の先生のかわりに来てつかまっていたネギがくしゃみとともに突風を放った。

「な、何今の？」

突然生じた突風にみんな目が点になる。

「あ、えーと・・どんな理由があっても暴力はだめです。だから、両クラス対抗でスポーツで決めるのはどうでしょう？」

ネギがそう提案した。

たしかに、悪い案ではない。
双方ともに体育がダブルブッキングしたのだから、一緒に汗を流せばよいと、そういうことなのだ。

「おもしろいわね。私たち高等部が負けたらここから出て行くし、今後、昼休みにあんたたちの邪魔をしないわ。それでどう？」

今後とか言っているが、彼女達はもうすぐ受験生。
基本エスカレーターとはいえ、ウルスラの生徒達はより高いレベルを求めて、大学受験をするのが通例なので昼休みに遊んでいられなくなるだろう。
特にウルスラの進学コースはそれなりに厳しいのだ。

「そんなこと言ったって、年齢も体格もぜんぜんちがうじゃんー」

「たしかにその通りね。じゃあ種目はドッジボールにしましょう。こっちは十一人。そっちは倍の二十二人でかかってきていいわよ」

「いいわよ、やってやろうじゃないの」

「後悔するなよー」

「ただし、私たちが勝ったら、ネギ先生を譲っていただくわ」

こうして、麻帆良学園聖ウルスラ女子高等学校２－Ｄと麻帆良学園本校女子中等学校２－Ａのドッジボール対決が始まった。

「おお、刹那君参加しないのかい？」

恋は壁に寄りかかって座っている刹那に話しかけた。

「そういう恋さんこそ参加しないのですか？」

「いやー。つい本気になっちゃいそうだから」

「おまえが本気になったら、怪我じゃすまなそうだな」

そう返したのは刹那ではなくその隣にいる真名だ。

何回か『仕事』をしていく中で話をするようになった。中学生らしからぬ外見と高い射撃能力をもち、報酬しだいでどんな仕事も請け負うと豪語する仕事人。

裏に関わっている人間が参加したら不公平極まりないのだ。むこうに関係者はいないはずだし。

「この前の一件は・・・・」

「帝督兄さんが処理したって」

「そうですか」

刹那の言う一件とは惚れ薬のこと。

どういう経緯なのかネギが惚れ薬を誤飲して２－Ａがネギに一時べた惚れするという騒動があったのだ。

そのさい第一の犠牲となったのがこのかであり、その護衛を勤めている刹那はそれが口惜しくてしょうがないといった感じになっている。

ちなみに最後の犠牲者はのどかであり、のどかがネギを押し倒し

ているところに恋はアスナと突撃し、モップの柄でだるま落としのように下のネギを弾き飛ばしたりした。

（まったくのどかってば普通を意識しすぎて抵抗（レジスト）忘れるなんて、なにやってんだか）

試合はウルスラペース。

投じられたボールは大したこと無いにもかかわらず複数の２－Ａメンバーを外野送りにする。

「ちょっとみなさん！いまのはたいしたボールではないでしょう」

「だって、こんなにぎゅうぎゅうじゃ動けないって」

あやかの指摘に、当てられた和美が反論する。

どーんと衝撃が走る。

「しまった！ドッジボールで数が多いのはゼンゼン有利じゃない！的が多くなって当てやすいだけ！！」

「じゃあ二十二対十一ってハンデにならないじゃないの！気づきなさいよーーーー」

「委員長だってその条件飲んだじゃい！」

見れば分かることに今さら気づく２－Ａ。

基本抜けているメンバーであった。

「負けるもんですか！！」

アスナがボールをキャッチ。
全力投球する。

唸りを上げて飛ぶボールをウルスラリーダー英子は難なくキャッチする。

「そんな、アスナの馬鹿力の全力投球をあっさり！」

「馬鹿力、馬鹿力うるさいわよ！」

「この程度で全力投球とは笑わせるわ」

バッと制服を脱ぎ捨てるウルスラ生。
その下は体操着ではなくユニフォーム。

「ドッジボール関東大会優勝チーム麻帆良学園ドッジ部『黒百合』！！」

バーン！！

「高校生にもなってドッジって」「関東大会ってあいつらしか出なかったんじゃないの？」

ヒソヒソ・・・・

「う、うるさい！余計なお世話よ！ビビ、しぃトライアングルアタックよ！」

外野とあわせて三角形をつくる陣形。

「何か来ます。気をつけてネギ先生。この雪広あやかが迎え撃ちますわ！」

あやかが先頭に立って挑発する。

「くらえ！」

ボールはあやかに向かわず、ビビの元へ、さらにそこからしぃ、そしてあやか。

「あうっ」

先陣切ったあやかはあっけなく散った。

「いいんちょぜんぜんだめじゃん！」

このトライアングルアタック。
つまらない技のくせに２－Ａに対して意外と効果的だった。
ポコポコと当てられ気が付けばほぼ同数。

「フフ、残ったのはほとんどチビとところそうなのばかり、次は神楽坂明日菜よ」

しぃがボールを上に高く投げる。
そして英子が高くジャンプ。バレーボールのスマッシュに体勢。

「必殺、太陽拳！！」

「しまった！太陽を背に！」

逆光でボールを見失ったアスナにピンポイントでバールが叩き落された。

バシィ！！

しかし、ボールはアスナには当たらなかった。

「本屋ちゃん！？」

のどかが見事受け止めていたのだ。

「な！？あんなにトロそうなのに」

これにはウルスラ勢も驚いたようだ。

のどかを見た目で判断してはいけない。こう見えて体育の成績は五段階評価で常に５だ。

「いいんちょさん」

「さすがですわ、宮崎さん。いきますわよ、それ！！」

外野のあやかにパス。あやかはそれを敵の一人に当てて復帰した。

「みなさん、アスナさんたちにばかり任せないでみんなで頑張りましょう！前を向けばボールを取れるかもしれないんですから！」

「ネギ君」「先生・・・」

のどかの頑張り、あやかの復帰、そしてネギの言葉で火がついた。

（やるじゃんネギ。みんなのやる気を取り戻したわね）

「みんな！いくよ」「おう！！」

そこからは怒涛の快進撃。

各々の得意分野を活かし、敵を討ち取っていく。

なかには弾丸ボレーやリボンの使用といった反則技も合ったが審判がいないので気にしない。

終了のチャイムが鳴り響いたときには、十対三となって中等部が勝利した。

「やったー」「高等部に勝ったー！」「本屋ちゃんすごかったねー」

喜びを分かち合う２－Ａ。

しかし、そうはいかないとばかりに英子が立ち上がり、再びスマッシュの体勢へ。

狙いはアスナ。

「まだロスタイムよ！」

いち早くネギがそれに気が付いた。

「危ないアスナさん！」

ネギは射線に割り込み、ボールを受け止める。

「こんなことしちゃ・・・・・だめでしょーーーーーーーー」

ぽすっとネギがボールを打ち出した。
ネギが放ったボールは英子の手に止められたが勢いは死なず、少林サッカーのキーパーのごとく、腕から服が破れていき、終には下着を残して花弁となってしまった。
取り巻きの二人も巻き添えを食った。

「キャーなによこれー！！」

「覚えてなさいよー！」

こうして中等部を震撼させた、ウルスラ勢はネギの活躍によって見事撃退された。

「改めて試合終了ー」

「やったー！」「勝ったー」「ネギ君軽いー」

ネギの周りに集まりみんなでネギを胴上げ。

「うまくいったみたいだな」

「ははは、しかしあれでは先生と生徒というよりは遊び友達ですね」

屋上の入り口で帝督とタカミチがそのようすを見守っていた。

後日、ネギはドッジ部にスカウトされた。

青春はドッジボールだ！！（後書き）

一巻の内容が終わりました。惚れ薬はほぼスルー。

図書館島で迷子が出たらしい

月が改まって三月。ネギの授業もある程度落ち着いてきた今日この頃。

全国の学生を悩ませる危機が麻帆良にも着実に近づいていた。

すまわち、『期末試験』

「そうか、なかなかうまくやっておるのかネギ君は」

「はい、学園長先生。生徒とも打ち解けていますし、授業内容もがんばっていますわ」

学園長としずながネギについて話している。

「この分なら指導教員としても一応合格点は出してもいいと思いますが」

「フォフォフォ　そうか、けっこうけっこう。では四月からは正式な教員として採用できるかのう。ご苦労じゃった、しずな君」

学園長は席を立ち、しずなと握手。その際、わざとらしく頭を胸にうずめる。

「ネギ君には最終試験を受けてもらおうかの。立派な魔法使い候補生としての」

頭から血を流しながら意味深な発言をする学園長であった。

「今日のホームルームは大勉強会にしたいと思います！！次の期末試験はもうすぐそこまで迫ってきています。うちのクラスが最下位脱出できないと大変なことになるので、みなさん頑張りましょう」

ネギが異様なやる気を見せ始めた。

あまりにも唐突であったのだが、そんなことに興味を示すクラスではない。

「はいはい」

「桜子さん」

「お題は英単語野球拳がいいとおもいまーす」

「おお！いいぞ」「やろやろ」「よくねー」「あほかー」

大多数の人間は肯定的に受け入れている模様。

それもそのはず、このクラスにおいて知識を競うゲームではそうそうひどい目にあうことはない。

なぜならば、バカ五人組（レンジャー）と呼ばれる五人がいるため大多数は早く抜けることができるからだ。

神楽坂明日菜、佐々木まき絵、古菲、綾瀬ゆえ、長瀬楓の五人がバカレンジャーである。

「わたしはもう帰っていいんだろうか」

「だめじゃないかな、ネギ先生も頑張ってるし」

「空回りしているがな」

エヴァンジェリンと恋の前で、案の定、服を剥かれたバカレンジャーがさらし者になっていた。

野球拳をしよう・・・教師が言った時点で即免職ものの発言だ。

ネギはどうやら、ベースボールを取り入れた勉強法と解釈したのだろうが、実態は負けたものが服を脱ぐ宴会芸だ。

ちなみに脱衣はラジオに始まり、コ○ト５５号の欽ちゃんの番組の影響で爆発的に広まったらしく、本家は脱がない。

「先行きがすごく不安だ・・・・」

阿鼻叫喚は一時間目がはじめるまで続いた。

その夜、自室でテスト勉強をしていた恋の携帯に着信があった。

『もしもし、恋!』

珍しく早口で、慌てたように話すのどかを恋は不思議に思った。

なにかあったのか。

「どうした、のどか?なんかあった?」

『ネギせんせー達が、行方不明に・・・』

「は?」

行方不明？ネギ先生が？

『図書館島に魔法の本を探しに行くっていって・・・・そしたら、突然連絡が・・・・』

電話越しののどかはかなり焦っているようだ。

落ち着かせて状況を詳しく聞きだすのに時間がかかった。

のどかによると、学年最下位になったクラスは解散という噂を鵜呑みにした例の五人組と探検部の夕映とこのかが頭が良くなる魔法の本を探しに図書館島の地下に潜入。行方不明ということ。

最後の連絡は『魔法の本発見！！ｙａｈｏｏ！！』だったとのこと。

「わかった。わたしもそっちに向かうから」

そういって恋は部屋を飛び出した。

この件、いろいろと出来すぎている。魔法に関する噂は上が神経磨り減らして操作しているはず。それがあのメンバーにピンポイントで伝わったとすれば、明らかに人為的な干渉があったのだろう。

学園長あたりのがあやしい。

『ご、ごめん。まさか本当に魔法の本があったなんて』

「のどかのせいじゃないよ。あのメンバーなら多少の修羅場は乗り越えられるから大丈夫」

恋は電話を切って、体を強化し、図書館島を目指す。

（あれは・・・刹那）

進行方向に刹那を発見。急いでいるようだ。このかがいなくなったことで探そうということなのだろう。

「刹那！！」

「恋さん！！」

合流。アイコンタクトで事情を把握し、夜の街道を疾走する。

やっと、到着。図書館島の入り口までやってきた。

しかし、待っているはずののどかがいない。

「のどかとハルナさんはもう戻ったわよ」

のどかを探していたところで声をかけられた。

史菜だ。

「史菜さん！？」

「史菜姉さん」

史菜がここにいるということはやはりそういうことか。

「ネギ先生たちは」

「ここにの地下。安全は保障されているわ。まあこれからわたしが確認に行くけど、学園長の発案だから心配しなくても大丈夫」

ほっと胸をなでおろす刹那。

普段ほとんど誰ともコミュニケーションをとろうとしない刹那で

あるが、話してみると意外ときさく。
心配性でこのかのために命を張る、真性の侍のような人物。

「テストがあるでしょう。今日は帰りなさい」

「・・・はーい」

「史菜さん。お嬢様をよろしくお願いします」

史菜にまかせる形で、二人は寮へ戻った。

「さてと、いきますか」

史菜は足元に展開した魔法陣の光に包まれてその場から消えた。

そして、図書館島最下層。
地下でありながらも光が降り注ぎ、百メートル以上上の天井から伸びる巨大な木の根がまるで天井を支えているかのよう。
西洋風の建物が広大な湖に浮かんでいるように建っており、貴重な本が棚ごと水に沈んでいる光景はおとぎの国のよう。

「まったく、よくもまあこんなものを創ったものです」

遠くにネギたちを確認して、史菜がつぶやいた。
地上から転移して、ここまでやってきたのだ。

「・・・確認したし、報告に帰りますか」

そして、転移しようとしたとき。

「おや。もう帰ってしまうのですか？」

「！？」

背後から声をかけられた。

慌てて振り返ると、見覚えのある人物。十年前から、いやそれ以前からまったく姿を変えていない怪人。

「アルビレオ・イマ！？どういてここに・・・・」

「お久しぶりです、ヘカテー。おっと、いまは近衛史菜でしたね」

アルビレオ・イマ。

大戦の英雄の一人であり、十年前、紅き翼に何かあってから消息を絶っていた人物。

「あなたはずいぶんと変わりましたね。二十年前とはまるで別人です」

「二十年もたてば人は変わるわ」

だいたい、大戦中の史菜は感情が出来上がっていなかったのだから、今とまったくの別人といわれても仕方がない。

「わたしとしてはあの頃のほうがよかったですねぇ。なんというかこう体格的に」

「爆死してください変態」

あの頃の史菜は外見五歳児だ。

つまり極度のロリコン。いや、ロリを含めたあらゆるものが好きなので、つまるところ偉大なる変態なのだ。

相変わらずの変態ぶりを発揮してくれて逆に安心した。

「アル、なんでここに？」

「わたしはここで十年間司書をしていますからね。それとわたしのことはクウネルと呼んでください」

「え、司書？ここで」

「ええ。なにぶん簡単には動けない身なもので」

十年前のなにかはアルビレオからそれだけの力を奪ってしまったということか。

この得体の知れない変態を追い込むほどのなにか。

「十年前になにがあったの？ナギの行方は？」

「ナギに関してはなんとも。十年前のことはまだ言えません」

「そう」

（さすがのアルもナギのことはわからないか。十年前のことも話すようには見えないし。コイツの生存確認しただけでもよしとするか）

「仕事があるから帰ります」

「ええ、ではまた。ああ、それと私のことは秘密にしておいて下さい」

分かった、と返事をして史菜は地上へ戻っていった。

（すみませんね、ヘカテー）

アルの見つめる先には神楽坂明日菜と教鞭をとるネギ・スプリングフィールド。

（もう十年ですか・・・・あなた達が残したものはこんなに大きくなりましたよ）

見目麗しい老人はかつての戦友と想い出に思いを馳せる。

長き生の中で最も強く心に刻まれた、あの日々に・・・・・

その後、試験に少し遅刻してきた図書館島組であったが、無事試験を突破。

驚くべきことに学年一位になるという快挙を成し遂げたのだった。

図書館島で迷子が出たらしい（後書き）

期末かーわたしのところももうすぐ期末ですよ。

数日前

「この授業テストあるから」

「!?聞いてねえ（授業も）」

お仕事　アリアドネー　後編

アマネの乗る馬車はアリアドネー市街地を出てから数時間で、目的の街に到着した。
危惧していた魔獣との出会いもなく、安全な旅路であった。その過程で大切な何かを失いはしたが。

「よお、アマネ。まだ嬢ちゃんと仲直りできてないのか？」

馬車の近くで番をしていたアマネに依頼主である馬車のおっさんが話しかけてきた。
アマネとベアトリクスの様子から何かあったと悟ったのだ。
取引も終わり、少し休んだら市街地へ戻る予定になっている。

「いちおうはしたんですけどね」

ず～んと沈んだ様子で答えるアマネ。
この街についてから、アマネは謝り倒し、なんとか許しを得た。
が、やはり、気まずいところがあって満足に話せていない。これが、どこぞの漫画の主人公であったならドタバタコメディの後にうやむやになって、なぜか以前よりも親密に・・・ということもあったであろうが、残念なことに現実は厳しい。うやむやになることはなく、責任を取る形で散財させられてしまった。

（あいつ、菓子食いすぎ・・・いや、俺が悪いけどさ）

飽きもせず、甘いものばかりパクパクと食べて平気だったんだろうか。
現在、ベアトリクスは荷台の整理の真っ最中。

「まあ、なんだ。女の子が機嫌悪いときは基本、男が悪い。だから、お前が全面的に悪いんだろーが」

「たしかに俺が原因ですけど・・・それは言いすぎじゃ」

「いや、こんくらい下出に出なきゃ家じゃあやっていけんのだよ。有史以来、男は政治的に上になったことはあっても本質的に女に勝ったことは一度もないというのが妻の言い分でな」

「尻に敷かれてんじゃないですか」

「尻か、それならまだましだったんだろうな・・・今じゃあ足で踏まれてるようなもんだぁ」

昔はアイツも・・・と目じりに涙を浮かべ遠い目をするおっさん。いろいろと苦労が多いようだ。

「何の話です？」

「おおぅ！？」

いつの間にやらベアトリクスが近くにやってきていた。会話は聞かれていなかったようだが。

「？」

大げさに驚いたアマネに不審がるベアトリクス。

「いやいや男の話だよ嬢ちゃん。整理のほうは終わったのかい？」

「はい。とりあえずは」

「そいじゃ、確認して帰ろうかね」

おっさんが荷物の最終確認を終えて、アマネたちは帰ることとなった。

帰宅ルートは、急ぐ理由も無いので、来た道を通らず、より安全な反対側の道を行くことになっている。

途中までは、箒ラリーでも使用する道を行き、魔獣の森を迂回する形で出てきた門とまるっきり反対の門から街に戻る。

その帰り道。

「・・・・なあビー」

「なんです？」

やっぱり非常に気まずい。

気まずさを感じているのが俺だけかもしれないが。

「本当にすまなかった！」

「それはもういいですって。いろいろ奢ってもらいましたし、もう許します」

アレ以来少し冷えた感じだったベアトリクスの雰囲気が和らいだ気がしてアマネは胸をなでおろした。
それからは今まで話しをしなかったのがウソのように放し始めたのだが、それも長くは続かなかった。

ズウウウウウウウン・・・・という地響きと、うわあああああああ!!というおっさんの悲鳴。
馬車が足を止め、警報(アラーム)がけたたましく鳴り響く。

外に顔を出した二人は目を見開いた。
進行方向に真っ黒な巨体の生物が立ちふさがっていたのだ。

「うそ・・・そんな、黒竜・・・」

「なんでここに!!」

魔獣の森とはいっても生息する竜種は亜種の鷹竜(グリフィンドラゴン)や虎竜(タイガードラゴン)などの下位種しか生息しておらず、真性竜種のような上位種は確認されていない。
彼らが暮らすには魔獣の森は小さすぎるのだ。
しかし、それが今、目の前にいる。

「グルルル・・・」

「ひぃ!」

黒竜が馬車をにらみつけ、おっさんが恐怖で縮み上がる。

ボッとその口の中からに炎がこぼれる。
火炎系の竜(ドラゴン)の吐息(ブレス)

「まずい！ビー、風陣結界だ！！」

「えっ、はい」

呆然としていたベアトリクスに指示を出すと同時にアマネが飛び出して竜の前に立つ。

その直後に炎が来た。

「ゴアアア！！」

「水流障壁（ウンダンス・バリエース・アクアリウス）！！」

「風陣結界（リーメス・アエリアーリス）！！」

黒竜のブレスをアマネが呼び出した多量の水で構成された障壁がさえぎり、発生した水蒸気と熱をベアトリクスの風が吹き散らす。

「おっさん！一気に走り抜けろ！！」

「お、おう！そら、行け行け！走れ！」

馬車を引く魔法生物を叱咤し馬車が走り出す。このままここにいても食い殺されると彼らも分かっていた。

アマネは馬車につかまりながら、魔力を滾らせる。

「風よ」

風を操って、大気中に発生した多量の水蒸気を竜の顔まで運ばせ、目くらましにする。

目標を見失った竜の足元をすり抜け、脱出に成功する。

「いよっしゃ、抜けたあ！！」

おっさんが喜びの声を上げる。

命を危機を脱してつい緊張のたがが緩んだのだ。

（すごい・・・基本魔法だけで黒竜を出し抜くなんて）

ベアトリクスもアマネの機転の良さ、冷静さ、そして魔法の力に驚きを隠せなかった。

しかし、危機が去ったわけではなかった。

当然ながら、すぐに黒竜が反転して襲い掛かってきた。

「くそ、やっぱり来るか」

「生態系の異常といってもアレがここにいるはずがありません！」

「あいつはたぶん人間に敗れて住処を追われたんだろうな、そしてここに迷い込んだ」

アマネはすれ違うときに黒竜の体についた無数の傷跡を見つけていた。

野生ではよくあることとはいえ、成獣の黒竜とまともに戦おうというのは人間くらいのものだ。

「連中はプライドが高いからな、人間に復讐くらいするかもしれんぞ」

「そんな・・・・」

だとしたらもう逃げられない。そう言葉は続かなかった。

ただ、目の前の脅威に対する絶望感だけがベアトリクスの胸中を占めていた。

街までまだ数十キロ、とても逃げられない。

「ここで倒すしかない」

「ッ正気ですか、黒竜を倒す!?真性の竜種ですよ!!」

「それしかないだろ。角さえ折れば何とかなる。ビーはこのままおっさんと馬車を護衛して街まで行け!!」

「だめです、無謀すぎます!!」

ゴアアアアアアッと黒竜の咆哮が響く、もはや一刻の猶予もない。

「護衛が今回の仕事だ!訓練を受けてないおっさんを一人で行かせられるか?無理だろう!かといってこのままじゃあやられるだけだ。守りながら戦うのは厳しすぎる。でも俺一人なら戦える」

「し、しかし!」

「そういうことだから。後よろしく!」

そういってアマネは馬車を飛び降りた。

「待って!アマネ!アマネーーーーーーー!!」

背後からの呼び声に振り返ることなくアマネは黒竜に向かっていった。

竜種の特徴としてまず最初に挙げられるのが角が弱点ということだろう。

角を折られると、一時的に気絶してしまう。これは竜種全体に言えることだ。

「さて、ドラゴン君。その角貰い受ける！！」

黒竜の顔面に、数十本の魔法の矢をぶつける。

効果はないが気を引き付けることはできた。黒竜は予定通りに馬車からアマネに目標を変えた。

「グルアアア！！」

二十メートルを優に超える巨体がアマネに踊りかかる。

体重は数十トン。まともにぶつかるだけでもただではすまない。

「チィッ」

大きく跳躍して攻撃範囲から逃れる。
竜が着地した地面は大きな音を立てて陥没し、その周囲は衝撃で無数のひび割れが生じた。

「三属性融合『虹』生成・・・・戦いの旋律・虹の鎧！！」

ゴウッと魔力の風が吹き、アマネの体を虹色の魔力が包む。
能力としては咸卦法に近い。難易度はそれ以上。アマネが先天的に持っている、虹の属性による身体強化だ。

「ゴオアアアア！！」

竜の吐息が吐き出される。
アマネはそれを、真横に飛んでかわす。

「フルール・ド・リス・ビフレスト！来たれ虹精、天に橋を渡して弓と成せ！『インドラの神弓』！！」

アマネの手に虹色の弓が現れた。
番える矢は虹色の雷。虹は雷神インドラが雷の矢を放つときに弓になるといわれる。それを魔法で再現した。
アマネは矢を放つ。同時に三本。
放たれた矢は極太の光線となり、ゴゴン！！という音とともに竜の側面に着弾し巨体を揺さぶる。

「ギャアアアア！！」

しかし、頑強な表皮と障壁を持つ黒竜は倒れない。
むしろダメージを受けて怒り心頭の様子。

（チッ、これ結構強い魔法なんだけどな・・・・うまく障壁を突破できれば角を折れるんだが）

思案しながら炎をよける。

幸いなことに黒竜の攻撃手段はブレスと巨体による打撃しかなく、読みやすい。

「グルウ・・・」

黒竜の口に炎が溜まる。

そこでアマネは瞬動。虹の鎧を纏ったアマネの瞬動は通常状態よりも数倍の速度が出せる。

アマネの移動先は黒竜の下顎の下。勢いのまま下顎に体当たり。

衝撃で竜の口は閉じ、その中で炎が炸裂する。

「ゴ、ガアア」

口から煙を吐き、苦悶の声を上げる。

そこに畳み掛けるように次手を打つ。

「水精大瀑布（マグナ・カタラクタ）！！」

黒竜の頭上から大量の水が滝のように落ちてくる。

その圧倒的な大質量にさすがの黒竜も膝を付き動きを止める。

「氷の精よ、集い来たりて生あるものをその内に封じよ、凍て付く足枷！！」

黒竜の周囲の水が足元から凍りつき、その巨躯を固定する。

水精大瀑布によって生じた水も利用した氷結。

黒竜は足から分厚い氷に捕まり、逃れようと身を捩っていた。

（あの障壁を破るには、強い魔法を連続して当てるしかない）

「七色精霊陲（イーリス・デコイ）」

アマネが七人に分身する。一人一人がそれぞれ違う色の魔力光を纏っている。

「オオオオオオオ！！」

七人による、一斉体当たり。

各々が魔力の爆弾となり、動けない黒竜にぶつかっていった。

「グガアアアアッ！！」

黒竜の叫びとともに、アマネは障壁が砕け散ったのを確かに感じとった。

今なら、黒竜を守るものは分厚い表皮しかない。そしてアマネが狙うのは、むき出しの角。

「フルール・ド・リス・ビフレスト！来たれ水精、風の精！光を纏いて暗き雲を撃ち払え『虹天剣』！！」

虹色の閃光が奔り、黒竜の右角を直撃、撃ち砕いた。

クオオオン・・・・という声を発して黒竜は気を失った。

その後は黒竜出現の報を受け取ったアリアドネーの精鋭部隊がやってきてアマネを保護、アリアドネーに戻るまでに事情聴取や検査、治療を受けて、家に戻ったのは夜遅くになってからだった。

家に入ったとたん、ベアトリクスに抱きつかれた挙句泣き出され、オロオロするアマネをアイリスが生暖かく見守っていた。

黒竜事件のあと、魔獣の森には本格的な調査隊が送り込まれ、外来種は捕縛、殺処分という少々過激な対応がなされた。
住民の安全に直結する問題であるので徹底しなければならないというのも分かるが。

あの後、ベアトリクスとの関係は改善されたようで、長期休業が終わって、寮に戻った後も時々連絡を取り合うようになっていた。
そしてアマネはというと、この三ヶ月の間にちょっとした有名人になっている。
黒竜の単独撃破という話が伝わり、その上、簡単な依頼をいくつかこなしていたので、顔が知れて、街を歩けば声をかけられるようになっていた。

「おいーす。アマネ」

「あら、アマネちゃん。今日はどうしたの？」

というように話しかけられ。

「あれが噂の・・・・」

「結構イケメンかも」

と噂される。
ここは、旧世界に比べて、個人の戦闘能力というものに民間レベ

ルで注目が集まる。
大戦期の紅き翼や黒竜の活躍から分かるとおり、魔法界の戦闘は、個人の戦闘力で一軍に匹敵する者も極まれにいて、それらが英雄になったものだから、そういった考え方が生まれるのも致し方ない。
小さな子供についても将来強くなりそうだと親が話していたりと、強さというものがある種のステータスになるのだ。
その傾向は拳闘士を抱える街や、アリアドネーなどの騎士団や軍隊を保有している土地に特に見られる。

といってもアマネに関してはそういうヤツがいるぞ、くらいのものであってこれといった生活上の変化はない。
強いていうなれば騎士団への勧誘くらいか。

アマネは現在荷造りの真っ最中。
朝一でメガロメセンブリア行きの船に乗って、そこから麻帆良を目指さなければならない。
先ほどまで、寮から戻ったベアトリクスやアイリスと壮行会を行っていたのだ。
この三ヶ月が思っていたよりも充実していて、別れるのが惜しい。

「あっという間の三ヶ月だったなぁ」

ふと、あてがわれた部屋の窓から外を眺めてみる。
日は暮れたが、夜遅いというわけでもない。道行く人、町並み、星空。すべてここに来てから当たり前の風景となったものだ。
この窓から見る景色もこれで見納めかと思うと感慨深いものがある。

「おっと、手が止まっていた」

アマネは作業を再開した。
と、そこにアイリスがやってきてこう言った。
「アマネ君、ちょっとリビングに来てもらって良いかな」
「はい、いいですよ」
特に断る理由も無いので二つ返事でリビングへ向かうアマネ。
着いてみるとベアトリクスがテーブルについていた。
「はい、アマネ君はそこね。はいよろしい。では、ここで大切な話があります」
アマネが席に着くのを確認しアイリスが話し出す。
「アマネ君は次にいつ戻ってくるのか分かってないのよね」
「はい。向こうで何をするのかはっきりと聞いていませんが、一度出たら手続きも煩雑ですし、当面は戻らないのではと思っています」
なるほどなるほど。とわざとらしく大きくうなずいて、二人を指差してこんなことを言い出した。
「あんたら仮契約して」

「「はい？」」

時が止まった気がした。

「だから、仮契約（パクティオー）よ仮契約（パクティオー）。ほら、実はもう魔法陣用意してるから。わたしって準備が良いでしょう？」

「いや、だからなんで？」

「そう！なんでそんな話に！？」

状況が分からないアマネに顔を紅くして叫ぶベアトリクス。

仮契約にもいくつかの手段があるのだが、そのうちの一つにキスによって契約を結ぶものがある。

床に現れた魔法陣は明らかにそれだ。

他の方法に比べて非常に簡単に契約できる上にキスという契約方法が恋人同士に好まれていたりするのだが、この二人は付き合っていない。突然キスしろといわれて出来るはずもない。

「うーん、そうね。アマネ君はうちとしても欲しい人材なのよ。ほら、アリアドネーって人材不足でしょ？」

アマネとしてはそんな話は聞いたことがない。
人材不足を国が公表するのもどうかと思うし、世界中から学生が集まってくるから人材は豊富にある気がする。それは学生であって、戦力ではないということなのか。

「だから、従者（ミニステル）の一人でもここにいれば帰ってこないっていう気は起きないんじゃないかな？」

「そ、それで娘を差し出すッへぷ！？」

一瞬にしてベアトリクスのそばに瞬動したアイリス脳天に手刀をいれた。
イスに座っていたはずなのにどうなっているのだろう。イスは動いていなかった。
さすがは戦技教導官。驚異の技だ。
と、感心している間にアイリスはベアトリクスを別室に連れ去ってしまった。
ベアトリクスの座っていたイスは動いていない。本当にどうなっているのだろう。

別室ではアイリスが愛娘にバックチョークかかけている。

「まったく、アンタって子は！アンタって子は！」

二回ゆった。

「せっかく、お膳立てしてあげてるんだから、ガッツリ行きなさいよ」

「な、ななに言って」

「いったいわたしが何年アンタのお母さんやってると思ってんのよ、ビーが生まれてからずっとよ。解るもんは解るのよ」

興奮してメリメリと絞める力が強くなっていく。

「聞けば向こうにもう従者（ミニステル）がいるそうじゃない。このままでいいの？帰ってこないかもよ。楔は打ち込んでおくべきじゃないかな？」

「いやっそれは」

「この三ヶ月は特に成績伸びたわよね。魔法実技。アマネ君の影響かしら」

「ッ！？それはそんなんじゃ・・・」

黒竜事件のときのふがいない自分が嫌だったから。そう言おうにも母に止められてしまう。

「仮契約すればアーティファクトが手に入る。次はアマネ君を守ってやる、くらい言いなさいよ。大丈夫、契約の許可はもうとってあるから」

簡単に強力なアイテムが手に入る仮契約は行政上の許可申請が必要になる。

届出を出して承認を受けないといけないのだ。が、アイリスは元・帝国第三皇女近衛騎士団隊長にしてアリアドネー騎士団候補生の戦闘技術教導官長。総督の友人。この程度の手続き容易く行える。

あらゆる『外部』からの圧力に屈しないアリアドネーも『内部』の権力には弱いのか。

「アマネを守る・・・・」

「そう！そして彼が帰ってきたときに驚かせてやるのよ。どれだけ強くなったか見せ付けてね！」

「・・・・・・・・・・・・」

「女は度胸！さあ行きなさい！わたしは出かけてくるから！」

「・・・・・・・・・うん・・・・・」

ベアトリクスはいとも簡単に陥落した。

そして

「ビー、何があった？」

リビングに戻ってきた。ベアトリクスにアマネは話しかけた。

アイリスがさっき外出したのは無駄に大きい声で「いってきまーす」と叫んでいたことから解ったのだがその過程がわからなかった。

「うん・・・その・・・ね」

「どうした？」

上気した顔でもじもじとするベアトリクスに疑問を呈するアマネ。

（度胸、度胸、度胸、度胸、度胸・・・・・）

脳内でひたすらリフレイン。

「仮契約（パクティオー）しますよ！！」

「ええ！？」

ベアトリクスはそう宣言した。

「どうしたんだよいきなり！アイリスさんに何言われた！？」

「別に何も言われてなんていません！なんかもうよく分からないですけどッ！チャチャッとしましょう」

「よくわからんってそれじゃだめだろう！！」

「お願いします！騎士団候補生として力が欲しいんです！あのときみたいに逃げたくないんですよ！」

「それは！そうかもしれないけど・・・・」

いろいろとテンパっているようではあるが、言っていることは理解できなくはない。

黒竜の件は相当堪えていたようだから、そういう思いになるのもうなずけるというもの。

「いいのか？本当に」

「大丈夫です」

ベアトリクスなりの覚悟を受けてアマネも決心した。

ここで仮契約すると。

二人でアイリスが敷いた魔法陣の中央に立って、暫し見つめあった後、唇を重ねた。

「ん・・・・」

魔法陣が輝き、ここに契約が成された。

出立前日。アマネに二人目に従者が誕生したのだった。

・ベアトリクス・モンローアーティファクト

「盾色花弁」

七枚の花びらを呼び出す。

一枚一枚を盾として使用でき、大きさも数十センチくらいから五、六メートルくらいまで変化させることが出来る。

またこれは手に持つ盾ではなく浮遊しており、意思によって自在に操ることが出来るため、空中で足場として使用することも出来る。

防御力が極めて高いが、その分高位の魔法具なので、今のビーでは使いこなすことが出来ず、呼び出せる枚数が少なかったりする。

その硬度ゆえ、叩きつけて攻撃もできなくはない。

アリアドネーからの旅立ち（後書き）

のどかよりも先にビーの強化話が出てしまった。

エヴァのチートさに比べれば二対一なんてかわいいものよ

その日、大会議室には重苦しい空気が漂っていた。
普段は飄々としている学園長も気を引き締めた表情で座っている。
室内には非常に大勢の人がいるが、そこにいるのはただの先生や生徒ではない。
一人の例外もなく魔法使いである。

「大体集まったかの・・・」

学園長が端から端まで視線を滑らせて話し出した。

「すでに知ってのとおり四月十五日の夜八時から十二時まで麻帆良学園は一斉停電をすることになる」

毎年二回の大イベントであり、教職員はそれに伴う諸問題、治安の維持や夜間外出禁止の呼びかけなどに大忙しとなるが、この会議はその際に生じる大問題への対策会議である。

「停電とともに、学園結界も大きく力を失ってしまう。そのため外部勢力の侵入が容易くなり、使い魔の類も使用できるようになってしまう」

この学園を狙うものは多い。彼らが狙うのは貴重品から重要な人材まで多岐にわたる。
その外部勢力を普段は学園結界が退けたり弱体化させているのだが、電力に依存しているということもあって、毎年大停電の時期にあわせて大規模な襲撃が行われるのである。

「幸いなことに昨年は襲撃はなかったが、二年前のようなことも考えられる。各々気を引き締め、油断しないように。よいな？」

「「ハイ！！」」

「二年前に何があったの？」

恋が隣にいたメイに話しかけた。

学園都市に来てまだ三ヶ月とすこし、細かい事情までは入り込めていないのだ。

「わたしも今年初めてこの作戦に参加するのでよく分からないのですが、過去最大の激戦だったみたいですよ。重症を負った方はとても多いそうで、噂ですけど一般人の女の子が巻き込まれて背中に深い傷を負ってしまったとか・・・お姉様なら参加していたから何か知っているかもしれないですけど」

そういって人数の関係で離れた場所にいる高音に視線をやる。

生真面目な性格であるがいつになく真剣である。というか鬼気迫る雰囲気。

「学園長、ひとつよろしいですか？」

「なんじゃ？」

中年の魔法使いが挙手し、発言の許可を求めた。

恋の目から見てもなかなかの実力者のようだ。

「ここ最近桜通りの吸血鬼という話が話題になっていますが、これは？」

「エヴァンジェリンの活動が活発になっている件に関してはこちらから手を出すことはない。担任であるネギ君に課した魔法使いとしての試練の一つと捉えてよい。何かあればすぐに垣根君が動けるように配置する」

桜通りの吸血鬼・・・・このところ女子寮を中心に噂になっている吸血鬼事件。

その犯人はエヴァンジェリンで、恋のクラスメイトでも、すでにまき絵がその毒牙にかかっている。

恋はエヴァンジェリンに師事しているため他の面々に比べて情報が多くあり、昨晩も亜子を狙ったところにネギが駆けつけ戦闘となり、なぜかアスナに蹴り飛ばされるという事件があったようだ。

おかげで今日の授業は散々だった。ネギが。パートナー云々口走ったときには危うく炎剣を叩き込もうかと思ったくらいにして。

今頃はクラス総出で、ネギ君を元気付けよう逆セク大会が行われているはずだ。

「ほかに質問は？・・・・ないかの、では解散じゃ」

とたんにガヤガヤとにぎやかになる会場。しかし誰の顔にも緊張が浮かんでいるのが目に見えて分かる。

その後、恋は帰寮途中の刹那を見つけ、情報交換をしながら寮に戻った。

そして二日がたった放課後。

十五日までは特に何も仕事がないので気ままに外を歩いていた恋であった。

件のネギも大きな動きはせず、とはいってもまき絵との仮契約騒ぎやオコジョの使い魔が現れたりと小さな問題はあったようだが、アスナのサポートもあっておとなしくしている。

「お？」

見れば茶々丸が例のごとくいいことをしている。

川に流された子猫を助けたり、木に引っかかった女の子の風船を取ってあげたりと日常的にボランティア活動をしている茶々丸であるが、今は公園の猫にえさを与えている。

猫にえさをあげることがいいことなのかどうかは別としても茶々丸自身はとてもいい人？であることは間違いようがない。

この公園の猫はずいぶんとなついているようだ。

と、そこへネギとアスナがやってきた。杖を片手に茶々丸と話している。

茶々丸がエヴァンジェリンのパートナーであることは知られているはずなので、交渉か戦闘か。

（二人掛りでパートナーから倒す。戦術としては良いけど、先生としてはどうなのかな？）

一瞬茶々丸に加勢しようかとも思ったがエヴァンジェリンの件には不介入が基本なので見守ることにした。

素人二人掛りでは茶々丸は倒せない。そんな安心感があった。

「・・・・・それじゃあ茶々丸さん」

「ごめんね」

「はい」

ネギとアスナが戦いにくそうな顔で茶々丸に対峙する。
二人ともこの作戦には乗り気ではないが、相手がエヴァンジェリンということもあり、オコジョの話に乗せられる形で戦に臨んだのだ。

「いきます！契約執行十秒間！ネギの従者『神楽坂明日菜』！！」

アスナにネギの魔力が流れ込み、身体能力を常人とは比べ物にならないくらいに強化される。
アスナは高速で茶々丸に迫る。ただでさえ身体能力がバケモノ染みているアスナに身体強化がなされたのだからそれは十分脅威になる。

（なにこれ、体が羽みたいに軽い）

アスナ自身その変化に驚いていた。
アスナは一息に間合いに入ると右手で茶々丸の左手を弾き、茶々丸が防御する前に左手でこピン。
まだ、体の動きに意識がなれていないのかワタワタしているが、

その動きは素人とは思えないものだった。
茶々丸も素人と思って油断したのが災いし、劣勢になった。

（ガキは嫌いじゃなかったの、アスナ！）

戦況を見守る恋も気が気でない。アスナが仮契約していることがなによりも想定外だった。
普段の茶々丸ならそれでも問題なく勝てるのだろうが、完全に油断して揚げ足を取られた今はどうなるか分からない。

そうしている今も戦況は変わり、後退する茶々丸の側面に回りこんだネギが呪文を唱える。

「魔法の射手・連弾・光の十一矢！！」

光の魔弾が茶々丸を襲う。
光属性は破壊に特化した系統。今の茶々丸は直撃すれば大ダメージではすまない可能性もある。

（それはまずい！真「やっぱりダメ！もどれー」！？）

恋が加勢しようとした瞬間にネギが光の矢を戻し、あまつさえ全弾自分に直撃させてしまった。

「アニキー何やってんだよ！？」

「保健室、保健室ーー！！」

ネギが倒れている間に茶々丸は戦線離脱した。

エヴァのチートさに比べれば二対一なんてかわいいものよ（後書き）

俺、これが終わったら勉強するんだ・・・・・

明日期末です。

Die Erste Walpurgisnacht　1

そして四月十五日。
日は西へ沈み、魔法使い達が配置につく。
大停電による、学園結界の弱体化。その隙を突いての襲撃に備えるためだ。
恋は刹那と森林地帯、四月より高等部に入学したアマネは図書館島外縁部に配置されている。

「結界の探知機能も停止しちゃってるもんだから、かなり厳しいよね」

「そうですね、普段から頼りきっている面もありますし」

「便利なものには頼りたくなるのが人間なのだよ。おお、そろそろ時間だね」

恋が手元の時計を確認する。長針はすでに十二の箇所を微妙に過ぎている。
恋の時計は数分早いので、そろそろ刻限ということになる。

そしてーーーーーーーーーバツンッと街の明かりが消えた。

辺り一帯を闇が包む。頼れる明かりは月の光のみ。
麻帆良学園は夜でも電灯や研究機関の明かりが煌々と輝いているので都心とまではいかずともそれなりに明るい。
しかし今は人口の明かりの存在しない、原初の夜が立ち込めている。
今ここにいるのは恋と刹那を含めた戦闘要員が数名。

「さすが、御早いお着きで・・・・」

「やけに血気盛んですね」

二人が睨み付ける先から、次々と鬼がやってくる。
目算で三十はいるだろうか。
大小さまざまな鬼の集団が、我が物顔で学園の森林の中を歩いてくる。

「ほう・・・まずはこの嬢ちゃんが相手か」

「うちの召喚主はあんたらに恨みでもあるみたいでなぁ出会ったら潰せぇなんて言われとる」

ガタイの大きな鬼が一歩前に出て恋たちに語りかける。

「悪いが加減できん!!」

ブウンッと人の胴回りはあろうかという金棒が大きく振り回された。
恋と刹那は飛びのいてかわすがそれを合図に鬼達が襲い掛かってきた

「神鳴流奥義、雷鳴剣!!」

刹那の大太刀が雷を放ち鬼を消し去る。
夜の闇に弾けるスパークが眩しい。
神鳴流は退魔の剣。日本を代表する妖である鬼にとっては天敵中の天敵。

「刹那、のっけから飛ばし過ぎだって！！」

恋は刹那に忠告する。

この敵だけならあっというまに送り返すことが出来るのだが、停電は四時間もある。初めからハイペースで戦えば後々厳しくなるのは目に見えている。

尚且つ今夜の戦いは学園全体での戦闘だ。いざというときに援軍を期待するのは難しい。

「弓、斉射！！」

炎の弓を十組ほど腕ごと創り、矢を浴びせかける。

これは騎士を創るよりも燃費がいいうえに威力もそれなりにある。

矢自体も爆発するので、一発で数体を相手にできる。

「ぬ！」

狐の仮面をかぶった小柄な妖が刹那と火矢を抜けてきた。

恋は妖に向けて指を鳴らす。フィンガースナップ。火花が走り、妖のいた空間が爆発する。

特定の行動によって呪文の代わりとする、『代替呪文』。

恋の術はフィンガースナップを合図に指定空間を爆破する、単純ながら効果的な魔法だ。最も、威力に関しては見た目ほどではなく、まだまだ改善の余地がある。

同行していた魔法使い達も攻撃を行う。

森林部での第一陣は、あっという間に殲滅された。

しかし、戦は終わらない。

第一陣をかたずけた直後に、もう次がやって来ていた。

「弓・斉射!!」

恋の指示に即座に反応する腕が弓を引いて放つ。

先制攻撃で相手の足をまず止める。

（戦力の逐次投入。質より量でこっちを疲弊させる気か）

本来、戦力の逐次投入は最も幼稚な戦法といって忌諱されるのだが、それは人間どうしの戦争の話。

相手は丸一年この日のために準備を進め、『替えの利く軍団』の大量生産によって、戦うための資源に乏しいこちらを圧倒しようとしているのだ。

（まあいい、やることは変わらない）

四時間ひたすら敵を倒し続けるというきわめて困難なミッション。

それでも、恋の闘志が消えることはなく、逆に大きく燃え上がっていた。

「魔法の射手・連弾・光の二十九矢!!」

アマネが放つ魔弾が鬼を撃ち抜く。

図書館島が浮かぶ湖の外縁部。図書館島へ向かうには一本しかない橋を渡らねばならないため、そこに守りを固めていたのだが、想

定外の事態が起きた。
　他の区域の守りが突破され、鬼の一部が湖まで到達してしまったのだ。
　鬼だけならまだしも、その中には空を我が物とする烏族までいる。湖を渡る力を持つものがいる以上そちらに迎撃をまわさねばならない。
　その迎撃班にアマネも入っているのだ。

「まったく、飽きもせずにのこのこと！」

「ああ！もう、きりがねえなあ！」

　続々と現れる鬼に、アマネ、そして高音も苛立ちを隠せない。
　戦闘開始から一時間弱。
　妖の数はそれなりに多いが、その力はまちまちで有象無象といってよい。
　そんな奴らを各個撃破しなければならない、単純作業の繰り返しが、兵士達の集中力を削いでいる。

（あるいはそれが狙いか・・・・）

　アマネと同じく前線で戦っている神多羅木が敵の狙いを思案する。
　仮にも長年の敵対者、一年間という準備期間を考えるとそれほど大規模な策を取れるとは思えないが・・・・

「みんな少し落ち着け」

　最後の鬼の首を風刃で断ち切って、神多羅木が声をかける。
　こちらの作戦がうまくいけば早めにケリがつく。失敗したところで、残り三時間で結界は復旧する。それまでの辛抱だ。

そのとき、背後の湖が俄かにあわ立ち、発光した。
辺り一帯が真昼のように照らし出され、夜が消える。
光の正体は巨大な召喚陣。直径は三十メートルはあろうか、輝きが強すぎて空の雲にまで届いている。

「ッ」

あらわれた『それ』を見て、周囲が騒然となる。
見えているだけでも二十メートル以上。下は海中に隠れているが、相当の大きさを想像させる。

「大蛇（うわばみ）かッ！！」

神多羅木がサングラスに隠れた目を見張る。
そう、それは巨大な蛇だった。

「どうやらうまくいっているようだな」

「みたいっすね」

女子中等部エリアにいる不審な二人組み。
二人ともスーツを着込み、ビジネスバッグを持っている。
一般的なサラリーマン風の格好でこの麻帆良でも珍しくはないが、それは平時の話であって、大停電中に女子エリアを大の男がウロウロしているのは不審といって差し支えない。

「狙うのはなんてヤツだったかな」

「近衛木乃香っす。ここの学園長の孫娘」

「確かに麻帆良の学園長の孫ならどこぞの社長令嬢よりかいい金になりそうだ。それにしても魔法か・・・空想の中だけのものかと思っていたがなぁ」

この二人組みの狙いはこのか。

鬼で戦い、密かに潜入していた一般人が誘拐を行う。

この二人は金で雇われたいわゆる傭兵であり、停電前に入った一般人であるからこそ、この状況下で学園を守る魔法使い達は見逃してしまっていた。

「俺も驚きました。魔法なんてありえね・・・」

しかし、その先は言葉にならなかった。

月明かりに煌く鉱物が体を覆い、今にも飲み込もうとしていたからだ。すでに口もふさがれている。

「!?」

「話は後でゆっくり聞こう。『宝玉の封じ手』」

とっさに懐に手を伸ばした男だったが、彼が何かする前にその体は巨大なダイヤの柱に閉じ込められていた。

捕らえたのはもちろん垣根帝督。

『紫炎の捕らえ手』『流水の縛り手』と同系統の捕縛魔法。酸素も供給しているので窒息することはなく、四肢の動きまでも完全に封じているので上記二つの魔法よりも拘束性が高い。

大戦から二十年。当時は感覚に頼り、槍、礫を中心に扱っていた

魔法だが、自身の特性を掌握し、研鑽した結果、一般的な魔法に属性を応用することが出来るようになった。

「気の毒だが次に目が覚めたときは牢の中だ。恨むんなら連中か自分を恨むんだな」

コンコンと自分が創ったダイヤの柱を叩いて語りかける。もちろん意識などないから意味はないのだが。

「ん？」

女子寮から人が飛び出してくるのが見えた。
明るい髪のツインテール。神楽坂明日菜だ。肩にオコジョが乗っているのが見える。

「ああ、ネギを助けに行くのか」

ネギとエヴァンジェリンは学園の端のある大きな橋の上で戦っているはず。
そして自分の与えられた役割はそれの監視。

「ここは他のヤツに任せていいかな」

寮付近には寮生を守るための班がある。
帝督はその班に連絡をいれてアスナの後を追った。

武蔵麻帆良にある教会には魔法協会の総本部が設置されている。
今現在麻帆良中から戦況が逐一報告されており、本部内も戦場さながらの様相を呈していた。

その教会の屋根の上に史菜が一人でたたずんでいた。
右手には釈杖型のアーティファクトであるトライゴンを持ち、足元、前後左右に水色の魔法陣を浮かび上がらせている。

（ここでもない）

史菜が心の中で念ずる。
彼女の目は今閉じられており、その脳裏にはいくつもの映像が同時に流れ込んでいる。
史菜の知覚は今、学園を覆うほどに広がっている。
探しているのは敵の痕跡。具体的に言うと、魔物を召喚、維持している魔法陣もしくは力の流れ。

（痕跡なし。やはり学園内ではなく外での召喚・・・・それなら）

史菜は強引に探査の式を組み替える。『目視』での捜索は困難と判断し、力の流れそのものを辿るようにしたのだ。
魔物を召喚するにしてもとにかく魔力は必要となる。
これだけの大攻勢を維持するには膨大な魔力を調達しなければならない
必然、そこには大河のように魔力が流れ込んでいなければならないのだが。

（これはッ）

魔力の流れを感じ、また驚愕する。

（探査の妨害。かなり高度な技術）

史菜の知覚に現れた魔力の流れは、不規則に乱れ、あらぬ方向へ

流れていく魔力の小川のような光景。
学園中を網の目のように流れていくそれを辿っていくのは困難を極める。

（この程度でわたしを欺けると思わないことです）

姿の見えない敵の用意周到さ、術の構成に驚いても、けっして脅威とは思わない。
史菜はまず、知覚に干渉する魔法に絞って解析を始めた。

時は少しさかのぼる。

女子寮の一室。

「やっぱり、もう待てない・・・」

手にしていた携帯をしまうと、とたんに部屋が真っ暗になる。位置的に月明かりの入らないこの部屋では、光源は一切存在しない。
先ほどまでついていた蝋燭も今は吹き消してしまった。
光にない室内に蝋燭の煙がほのかな香りを広げていく。
そんな暗い室内を彼女は躓くこともなく歩き、玄関のドアを開けた。

Die Erste Walpurgisnacht 1（後書き）

テスト終わったぜ、ヒャッハー！

夏休み突入ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
！！

Die Erste Walpurgisnacht 2

どこまでも続く闇を掻き分け、のどかは走る。
学園は今戦場と化している。戦いを避けてきたのどかがわざわざ外に出てきた理由。それは、一通のメールにあった。

『図書館島に忘れ物を取りに行くです』

文面を見れば分かるとおり、夕映のメールである。
これが届いたのは停電の少し前。恐ろしいことに激戦地と思われる場所に戻っていくというのだ。後にすばいいと返信したもののそれから音沙汰がない。
さすがに心配になって飛び出してしまった。

（今日は一段と・・・・ひどい血の臭い）

のどかはその匂いに顔をしかめる。
誰が怪我をしたのか、どの程度のものなのか、気になることは多々あれど、それ以上に、風に乗って運ばれてくる匂いに反応している己の血の昂ぶりが特に気がかりであった。

「いよっし、行けるで！」「進め進め」「チンタラすんな」「追い立てえ！」

麻帆良学園の中央から見て東の端から異形の群れが大挙して押し寄せてくる。

そこは、恋たちの守る森林地帯よりもさらに緑豊かな山の中。魔法使いの防衛網は崩壊寸前。飛び交う魔法と斬戟をその身に受けてなお止まらず、我先にと魔法使い(てき)ののど元に食いつかんとする。

「おい、そこ逃げるな！」「踏みとどまれ、ここを抜かれるとまずいぞ！」「近距離戦が出来るヤツはもういないのか！？誰か、あいつらの足を止めてくれ！！」

ジリジリと後退する戦列。時とともに負傷者は増えていく。

本来はもっと先で戦っていた魔法使い陣営。事前に用意されていた防衛拠点は、逸った一部が打って出た隙を突かれて制圧されてしまった。結果、長期戦のための計画(プラン)は崩れ去り、前準備なしの野戦で、体力、数に勝る相手と戦い続けるという状況に陥ってしまった。

「や、やはり数の差が・・・・止め切れません」

「そうですか」

後方から駆けつけた援軍（といっても掻き集めた少数でしかないが）の指揮を任された男に報告がなされる。

体格は細身。スーツにネクタイというまったく戦場に会わない服装の中年男は報告を聞き終えるとすばやく指示を出す。

「では、前線の皆さんにわたしよりも後ろまで下がるように伝えてください。攻撃が出来る方は出来る限り多くの魔法の射手を放ってください！鬼の足止めをします！」

「はい！！」

指示が通るとすぐに色とりどりの閃光が空を舞い、放物線を描い

て前線の鬼集団に突き刺さる。
それでも完全に抑えられるわけではない。体の頑丈な鬼が我が身を盾に軍を進めようとしている。今回召喚された鬼は決して無知ではない。自身の特性を理解し有効活用した上で、目的達成のための最善を尽くそうとしている。

「心苦しいのですが、あなたに手伝ってもらわないといけないようですね。アテナさん」

「もっと早く出してくれてもよかったのですが」

そう答えたのは脇にいる銀色の髪の上にニット帽をのせた女の子。アテナの服装もまた初等部の制服という戦場らしからぬ格好だ。
実力はあるのだが、歳の関係で今まで戦うことを見送られていたのがここに来て駆りだされた形となる。麻帆良側も追い詰められてきたということだろうか。

アテナは重力などないかのように軽やかに跳ぶとふわりと最前線に着地した。
女の子一人現れたとて、戦いの熱気に浮かされた者たちは気にも留めない。
しかしながらその女の子の力はこの戦況を覆すだけのものがあった。

「石槍連陣」

地面から石の槍が次々と突き出し、近づく鬼を突き殺していく。
槍の戦列はアテナを中心として左右に広がり、撤退戦をしていた魔法使い達と追撃をしていた鬼集団とをうまく分離させた。（このとき、突出して中に入ってしまった鬼は他の魔法使いが駆逐した）

続いてアテナは地面に手を付けて、凍結していた術式を開放する。
石の槍が突き出た大地がそれを下から押し上げる形で盛り上がり、高さ十メートルほどの石壁となった。
「うおお！？」「なんじゃいこれは！」「出城たぁ卑怯やなあ！」
「かまわん、そんな壁崩してしまい」
鬼の集団は新たに築かれた石の防壁を攻略しようと組み付く、が。
「ぐお！」「ぎゃああ」「うごあ！！」
組み付くそばから打ち倒され、還されていく。
壁の上から魔法使い達が狙撃しているのだ。さらにこの壁自体が攻撃能力を有しているのか、はたまたアテナの意思か、壁の一部が突然槍状になったりと鬼を寄せ付けない。
それはあたかも黒い大水を押しとどめるダムのようにも見える。
「ふふっ思いのほか効果があったな『ジシュカの丘』は」
アテナは自分の魔法が想像以上の戦果を挙げていることに対し、笑みを浮かべて呟いた。
ジシュカの丘。
石を呼び出し、任意の建造物を構築する魔法であり、その真価はこういった集団戦において最も発揮される。いかなる場所でも砦を構築できるからである。
「舐めんなぁ」

一体の鬼が太い金棒を強力を持って振るい、石壁を叩く。
ガァン！！という音とともに打たれた箇所が砕け石片と粉塵、そして闇色の火の粉が舞う。
しかし、穿たれた穴は黒い炎を上げて、見る見るうちに、修復され、元の状態に戻ってしまった。

「な、に！？ガッ！！」

その様子に驚き、同時に撃たれて鬼は消えた。

「これは、すごいですね」

指揮官もまたアテナの魔法に驚愕していた。
一瞬にして自分達にとって有利な状況を作りだしてしまうアテナの力。
野戦を強いられていたこちらとしては、再び篭城戦に持ち込めたことが、救いであった。

麻帆良学園都市から少し離れたマンションの一室。
学園都市の外であるため停電の影響を受けず、よって室内は明るい。
その部屋の中にいる男達が一箇所に固まって口論していた。

「まだ、学園は落ちないのか」

「なかなか手強いですね。もう少し多めに召喚できませんかね」

「いや、学園の霊脈から力を盗んでいるからな、これ以上は流石に

バレるだろう」

男の数は三人。それが口々に意見を述べる。

「かまわんだろう。奴らは今それどころではない」

「こちらは残り時間が少ないのだ、そろそろ全力を投入しようじゃないか」

毎回毎回、停電のたびに学園を襲撃してきた彼らだが、四時間の壁を越えることが出来ず、逃げ帰るという辛酸を舐め続けた。

今回は時間をかけた策により、かつてない戦果を期待できる。うまくすればここで積年の恨みを晴らせるかもしれない。

そういった、期待と高揚が彼らを油断させることになった。

「残念ながらこれ以上は好きにさせませんよ」

「おとなしくしてくれないかい？」

「！？」

三人の男は驚いて声も上げられなかった。

部屋の中に本来いるはずのない人間が二人も入り込んでいたからだ。

「高畑ッ！？」

「どうやってここを！！」

破られるはずがないと考えていた術が破られ、居場所に乗り込ま

れるという失態。
ありえない状況が彼らを混乱させた。

「ああ、それなら辿ったんですよ。魔力の流れを」

答えたのはタカミチとともにこの部屋に転移してきた史菜だった。
しかしその答えは彼らにとって信じがたいものであったのも事実。
その証拠に彼らは激高して叫ぶ。

「バカな！あの細工は完璧だったはずだッ！逆探知などされるはずがない！！」

「確かにあなた方の術は巧妙で厄介でした。魔力の流れがまるで小川のようになっていてそれが何本もまったく別のほうに絡まりあいながら流れていくのをいちいち辿っていったのでは埒が明きません」

「それなら、どうやって・・・・」

「すべてを同時に辿りました。結局、どれか一つはあたりなのですから」

しれっと事も無げに言い切った史菜に男達は言葉を失ってしまった。タカミチですら信じられないといった面持ちである。
そもそも、一つの魔力の流れをはっきりと捉えて追跡することすらそれなりの修練を必要とする。
何十もの流れを同時に捌ききるなど名人芸で済まされる話ではない。脳の処理能力的にいっても限界というものがあるのだ。
史菜がしたのは、阿弥陀くじのすべての始点に自分の名前を書いたようなもの。
その時点で、絶対に外れることはない。

「ああ、これはわたしのアーティファクトに手伝ってもらったから出来たことですよ」

シャラン・・・という音とともに錫杖が揺れる。

神秘的な音色が室内に響き、自然、視線を運ばせる。

そして、それを見て、それが何であるかを悟った男達は顔面を蒼白にさせて後ずさる。

その錫杖はあまりにも有名だった。その持ち主が誰であるのかを彼らが理解するには十分すぎるほどに。

「ま、まさか『頂の座』なのか？」

業界の関係者であれば誰もが知るその二つ名。

大戦の英雄の一人。見知った外見とは違うが、それは二十年お前の話。

だとすると男達にとっては最悪の相手である。タカミチだけでも詰みであるのに、それ以上の相手が共にいるということは。

もはや彼らに逃亡の余地は残されていなかった。

「これが司令塔となる魔法陣ですか？」

いたちの最後っ屁。抵抗する三人を軽く捻ってから彼らが囲んでいたタカミチが陣を見る。

青紫色の円の中に凡字が浮かぶ、東洋魔術。

「そのようですね。この魔法陣は学園から魔力を取り込み、その魔

力を持って鬼の使役等に使っていたのでしょう。そして、コレ」

史菜がタカミチに数枚の紙を見せる。
机の上に置かれたそれを史菜が確保したものだ。

「これは？」

「敵の作戦レポート。守る時間はもう終わりました。これからは反撃の時間」

本部はまさに狂乱状態。
はいってくる情報は大半が悪い話。控えておいた予備戦力も小分けにして、投入しなんとか戦列の維持を図っている。

（図書館島方面は苦戦しているか。ウワバミを何らかの術式で強化しているのか？東はアテナ君のおかげで持ち直してくれたみたいだな）

明石は表示される画面をすばやく見回して情報を整理する。
このままではジリ貧。早いうちに決定的な一打を与えたいところ。
そこに一報が入る。

「明石教授！近衛さんと高畑先生から報告です！敵アジトを一つ抑えたとの事！またその際に敵作戦の具体的な資料を入手。今、モニター出します！！」

モニターに表示されたのは複数の資料。
敵作戦の詳細が事細かに記載されている。

（これは、麻帆良学園を中心に置いた五芒星（セーマン）！そうか、これで学園全体を魔法陣に取り込んでいたのか！）

儀式の呪術おいて魔法陣の上というのは特別な意味を持つことが多い。それは結界であり一つの世界。悪魔を呼び出すときは魔法陣から出てはいけないとされるものもあるくらいだ。
学園内の魔物を使役する上でも、魔法陣の上に魔物がいるほうが圧倒的に操りやすい。
そして学園外に存在する五芒星（セーマン）の頂点こそが敵呪術師のアジトなのだ。

「ガンドルフィーニ先生と葛葉先生の隊に敵アジトの情報を送ってくれ！高畑先生と近衛さんにはそのまま次を落とすように連絡を！それから全隊に連絡、敵アジトの場所を特定！攻略に入る！もうすこしの辛抱だ！」

明石の指示とともにオペレーターたちが一斉に動き出した。
戦局が今、動き出した。

「！？」「なんや力が・・・」「まさかこっちが落とされたんか！？」

異形の徒たちの間に次々と焦燥が広がっていく。
魔力の供給が途絶え、己の力が大きく減衰していくのがわかる。
もはや敵陣のなかに孤立したに等しい状況に士気は低下する一方であった。

そして鬼の士気が低下するのに反比例して魔法使い側の士気は上昇していた。
守勢から攻勢へ一気に転換する。

「ガンドルフィーニ先生が拠点を制圧。同時にこちらの鬼に対する魔力の供給の遮断が確認されました」
「そうですか。みなさん、今こそ攻めるときです！彼らにはもう増援はありません！！」

アテナがジシュカの丘を前方に爆ぜさせ、飛び散る破片で鬼を打ち倒すと同時に、突撃のための道を作る。粉塵が晴れる前にもう魔法使い達が飛び出していった。

「今度はこっちが攻める番だ！」「よくもやってくれたな雷の斧！！」「うおっアブねぇ！この死にぞこないが！」

勝敗は決した。
魔力に依存する召喚魔たちは、その力を発揮できず、先ほどまでの攻撃がウソのように追い散らされていった。

シャアアアアア！！

学園島の湖に現れた怪蛇が苦悶の声を上げる。
体中を影の槍で貫かれ、己の体がつかる水が氷となり、身動きを封じられた。

「アマネさん！今です！」

「押よ！」

高音の声にアマネが飛び上がる。

「フルール・ド・リス・ビフレスト」

右腕に虹色の光を宿し、ウワバミの頭の高さにまで上がる。

「虹天剣！」

虹の奔流が蛇の頭を呑み込み、砕き、打ち消した。

「騎士団（ナイツ！！）」

恋が大量の騎士を呼び出し、掃討戦を開始した。

今までの鬱憤晴らしとでも言うように紅の騎士達が手当たりしだいに鬼を狩っている。

もうどちらが鬼か分からない状況である。

「ハッハー！手間ぁ掛けさせてくれやがって。片っ端から潰してやらあ！」

「恋さん、キャラ変わってますよ・・・・」

その最前線で鬼のように、それでいて嬉々としてハルバードを振るう恋に刹那が力なくツッコム。

「っく、斬岩剣！」

切りかかってくる魔物を間一髪切り捨てる。
恋の狩りもらしだろうか。
さらに、後ろに数体の気配。

「後ろに逃げたのか！！」

迂闊だった。攻勢に転じたことで後方ががら空きになっている。
刹那は慌てて気配を追った。

「はあはあはあ・・・・」

のどかは走る。途中、魔法使い達を何度か見たが、そこは能力を持って切り抜けた。

ガサッ

隣の茂みが揺れ、突然、筋骨隆々の大鬼が飛び出してきた。

「！？」

鬼が目の前ののどかを一瞥し、そしてこう言った。

「ちぃ。もう追っ手が。しゃーない、死んでくれや！」

問答無用で繰り出された金棒。

人の大人の軽く上回る太さの鉄の棒が空を切ってのどかに迫る。

「ッ！！」

のどかは回避行動をとるまもなく上半身に横殴りをくらい、砕けた。

「ぬ？」

のどかを砕いた鬼は奇妙な感覚を覚えた。

かつて、己の強力を持って人間を砕いたときとはまるで違う感覚。

人間の女を撃ち砕いたはずの腕に、まったく手応えがない。

「これは」

そして自分が殺したはずの女を見る。

そこには血を流す死体は存在せず、砕けた体が湖面に浮かぶ月影の如く、揺らめいている。

「幻術ッ！？」

どこだ！？と探す前に見つけた。

なにせそいつは、金棒の上に乗っていたのだから。

鏡花水月

宮崎のどかの得意とする幻術。

相手の攻撃にあわせ分身と入れ替わり、ヒットしたと錯覚させたところを狙うカウンターアタック。

攻撃を当てたこと、もしくは手応えがないことへの不審。それら

が心をよぎったとき、それは大きな隙となる。

のどかは猫のように金棒に四肢をついていた。伸ばした前髪から覗く双眸は金色。

そしてその状態から鬼の顔目掛けて一気に伸び上がる。

「ーーーーーーーーーーーーーーー邪魔」

一閃。

すれ違いざまに強化した爪で鬼の首を落とした。

のどかは空中で一回転すると音もなく着地し崩れ落ちる鬼を見た。

「ッ！！」

そして目を見張った。

消えていく鬼の後ろに、その鬼を追ってきた桜咲刹那がいたからだ。

刹那もまた驚愕と不審を貼り付けた目でのどかを見ていた。

（今のはなんだ？あれは間違いなく宮崎さん。しかし）

あまりの衝撃に刹那は状況の理解が追いつかない。

そしてのどかも一部始終見られていたことに対するショックから抜け出せないでいた。

（見られた。しかも桜咲さんに！！）

どう言い訳すべきかすばやく考えるもまったく案が浮かばない。

幻術まで使って鬼を仕留めたところを見られた以上、言い逃れの

しようはなかった。

「宮崎さん。あなたはいったい・・・・」

大太刀を構えた刹那がのどかに問いかけようとした。

そのとき、二人の間に炎の剣がガガガガガッと、何挺も突き刺さった。

「うっわッ!?」

「きゃあ!!」

熱を帯びた衝撃が四散し、二人を撫でる。

(炎剣!?これはまさか)

左腕で顔をガードしていた刹那が視線を走らせる。目当ての人物はもうそこにいた。突き刺さった炎の剣の柄頭に真っ直ぐにたたずむ恋の姿。

「恋」

「のどか。何で出てきたの!!」

「あ、う、夕映が図書館島から帰ってこなくて、それで」

はあ~とため息をついて頭を抱える恋。ちなみにこのときはもう剣を消している。

「刹那にバレちゃったじゃないの」

「う・・・・・」

「まってください」

と刹那が割って入った

「これはどういうことですか？なぜ、宮崎さんが」

「んーそれは、とその前に図書館島に停電時も居残っていた生徒は眠らせて保護しているはずだから大丈夫のはずだよ」

「本当！よかったぁ」

図書館島の生徒の安否を聞いて幾分か安心したようだ。

「さてと。のどかのことだけど」

「まって、恋。わたしから話す」

恋がのどかのことを話そうとしたとき、のどかが待ったをかけた。

「わたしから言わないとダメなことだから・・・」

意を決してそう言うと、のどかはポツポツと自分のことを刹那に語った。

吸血鬼のこと、家庭のこと、史菜に弟子入りしていたこと、魔法に関わらないようにしていたこと。

語り終えたとき、のどかは不思議な開放感を感じていた。

胸に抱えていた秘密をばらしてしまったからだろうか。

「すみません。そんな事情だとは」

刹那が申し訳なさそうに頭を下げた。
同じような悩みを抱えるものとして、のどかの事情に深入りしてしまったことに罪悪感を感じていた。

「いえ、いいんです。」

開き直ったわけではなく、確固とした意思を持った様子でのどかが言う。

「ふう・・・刹那、そういうことだからこのことは」

「はい、分かっています。口外しません」

そのとき、街灯の光が戻った。
停電から復旧し、街が明かりを取り戻したのだ。
同時に学園結界も万全の状態に戻っただろう。

「うっひゃー久しぶりの電気の光はキツイわ～」

「これで、全部終わりですね。生き残りの鬼も活動が制限されているはずですし」

案の定、恋と刹那の携帯に作戦終了のメールが送られてきた。
今回は二年前以上の激戦ではあったが、重傷者はほとんどいなかったはずだ。後方の治癒術者の配備を徹底したおかげだ。
この日のための準備をしてきたのは敵だけじゃないということだ。

「じゃあ、解散だね。寮に戻ろうか」

恋たち三人はそうして寮へ戻っていった。

寮に戻り、各部屋へ向かうとき、のどかは刹那にこう言った。

「桜咲さん、わたしは魔法には関わらないって言いましたけど、友達よりも優先させるつもりはないんです。だから、何かあったら言ってください、微力ながらお手伝いします」

この言葉が現実のものとなるのにそう時間はかからなかった。

Ｄｉｅ　Ｅｒｓｔｅ　Ｗａｌｐｕｒｇｉｓｎａｃｈｔ　２（後書き）

のどか魔法バレの回でした。

隣の部屋で中一の弟がヤンデレ妹をおそらくｙｏｕ○ｕｂｅのヤツなんだろうがイヤホンなしで聞いているのは、一応注意したほうが良いんだろうか？せめてイヤホンはつけて欲しい。

外伝　恋　0歳六ヶ月　～悠二とシャナの子育て奮闘記～

それは本編開始の十四年前にさかのぼる。

「ちょっと悠二！」

「どうした、シャナ？」

普通に居間でくつろいでいた悠二の下にシャナが慌てた様子で駆け込んできた。

大戦から六年。身長は百五十センチ中ごろまで伸び、多少大人びた顔立ちになったもののそれ以外での大きな変化はなかった。残念ながら。

「恋がいなくなった！！」

「ブーーーーーーーー！？」

飲みかけのお茶を盛大に吹いた。

坂井恋。半年前に生まれたばかりの坂井家長女。

「なんで！？どういうこと！？」

「知らない！目を放した隙にベッドから消えたのよ！探して！！」

悠二はそんなバカなと言おうとしたが思いとどまった。心当たりがありすぎる。

最近腹ばいで動くようになった恋はそれと同時に魔力量を急上昇させた。同世代を軽く上回る力は時に暴発し、食器等が粉砕したり、

動き回った後がナメクジの動いた後よろしく黒く焦げていたりして、強すぎる力が未発達の恋を傷つけることを恐れて、つい最近、魔力を抑える措置をとったところだった。
抑えていたはずの魔力の暴走があったのかもしれない。
だとしても悠二が感知できなかったことの理由が分からないが。

「とにかく探そう。結界に反応はなかったから、家の中からは出ていないはずだ。僕は一階を探すからシャナは二階をお願い」

悠二は早速捜索に乗り出した。
愛する一人娘の危機に立ち上がらない父親がいようか、いやいない。
本人は認めないが、例に漏れず親バカ思考のある悠二はまず、真っ先に寝室を確認、そしてその隣の部屋から順に家財道具をひっくり返す勢いで探しはじめた。

（くそっ居ない！どうなっているんだ、いくら恋でもこんな風に隠れることがあるのか？ハッ！まさか誰かがこっそり入り込んで連れて行ったとか！？いくら恋が可愛いからってそんな強硬手段に出るヤツがいるとはッ！許せん！！）

少々、いや百八十度考えがずれている悠二だが、それが功を奏したことも事実。すなわち、ここに来てやっと自分の感知能力に思い至ったからである。

「こっちか！」

微弱な恋の気配を察知し、その部屋に駆け込む。
そこは、洗面所だった。
これといった高級志向のない夫婦なので、この部屋は一般家庭と

同じくらいの広さ。洗面台に、洗濯機、そして風呂場。唯一のわがままが天然ヒノキの風呂であるということくらいか。

築二年。

結婚と同時に建てた家であり、風呂場からはかすかなヒノキの香りが未だに漂ってくる。

ところどころに恋の手形が焼きついてしまっているが、ちゃんと管理しているので新品同然の趣がある。

「どこにいるんだ?」

悠二の知覚は確かにこの部屋に恋の存在を感じている。

少し見回して、気づいた。

「まさか・・・・」

洗濯機。蓋が閉じているため中が見えず、そんなところにいないだろうという先入観がその答えに辿りつかせなかった。

悠二は洗濯機に近づき、蓋を開けて中を覗き込む。

「いた」

中には丸まってすーすー寝息を立てる恋の姿があった。

は〜、と安堵のため息を吐いて座り込む悠二。心配して損したとは言わないが、余計な気疲れをしてしまったような気分だ。

そして二階のシャナを呼ぶ。

やってきたシャナは洗濯機の中で眠る恋を見ると。

「ゆ、悠二、デジカメ、デジカメ持ってきて」

と言って、悠二にカメラを持ってこさせ、写真を撮りまくった。

結局、恋がどうやって洗濯機に移動したのかということについては、はっきりとは分からなかったが、今回は身体強化系となって発動したのでは、という結論に落ち着いた。

そんな風に子育てに悪戦苦闘している悠二たちは、一家総出で京都にやってきた。

もちろんその中には史菜や帝督もいる。この二人は現在十一歳。地元の小学校に通うピカピカの五年生。帝督がランドセルを背負って、黄色い帽子や赤白帽子をかぶっているところを見たときは迂闊にも吹いてしまったものだ。当時の史菜が声を漏らして笑みを浮かべていたことがその光景の威力を物語っている。

この時点で詠春は関西呪術協会の長の就任している。気立てのいい奥さんの家に嫁ぎ、苗字も近衛に変わって、恋と同い年の娘がいる。

その恋だが、今は史菜の背中でぐっすりと眠っている。

千本鳥居の階段を上り、本邸に足を踏み入れる。

「ああ、みんなよく来てくれた」

「よ、詠春。久しぶり」

長、詠春直接の出迎えだった。

客間に案内され、荷物を置いて、一段落。

恋が目を覚ましたが泣き出す様子はなく、興味深そうに辺りを見回している。

「よくいらしてくださいました」

そこにやってきたのは詠春とその妻である木乃葉。

アレの娘とは思えない淑やかな女性。

その手に抱かれているのは娘のこのか。

「んーーあう、あっ」

同世代の気配を感じたのか、恋が伸びたり縮んだりして史菜の手から脱出を図る。

史菜は恋を落とさないように気をつけながら畳の上に寝かせると、同じく畳の上に寝かされたこのかとじゃれあいだした。

「ははははっ仲がいいな」

微笑ましい光景についつい頬が緩む大人たち、が、その直後。このかが持っていたおもちゃをポイッと投げ、それが運悪く恋の頭に当たってしまった。

赤ちゃん用のおもちゃなのでやわらかく怪我はないのだが、びっくりした恋は泣き出してしまった。

「ああ！こらこのか、そんなことしたらあかんやろ！」

慌ててこのはがこのかを抱き上げ注意し、シャナが恋を抱き上げてあやす。

何とか落ち着きを取り戻し、恋が再びこのかと遊びだす。赤ちゃんのうちから同世代と交流を持つことは、その後の発達に良い影響をを与える。

そういうこともあって、このかとの交流は恋にとって望ましいものであるのだが、見ているとその自信が揺らぐ。

このかが恋のおしゃぶりを強奪。恋泣く。このかが自分のおもちゃがあるにも関わらず恋のおもちゃを強奪。恋泣く。このかが恋を倒し、マウントポジション。カエルが潰されたようなヴェ～という悲鳴とともに恋泣く。

「・・・・・・詠春。言っちゃ悪いが、僕はこのかちゃんの将来が不安になってきたよ」

「・・・・・・大丈夫だ。このかは俺たちがちゃんと育てる」

宣言する詠春だったが、その頬には冷や汗が流れていた。

そうして一時間後、恋とこのかは仲良く夢の中。

のんきなものだ。大人たちの都合などまったく気にしない。

子どもが寝静まったので母親組み＋史菜と帝督は昼食の準備に取り掛かっている。普段はお手伝いさんが用意するのだが、悠二たちが来たときはこうして母達が用意する。

はじめは家事が出来なかったシャナがこのはに弟子入りして料理を学んだことがきっかけだ。

そして親父組みは客間で眠る子どもを見張ると同時に、井戸端会議。

「それで、詠春の目から見て恋はどうだ？」

「そうだな、いいお子さんだと思うが？」

「そういうことじゃあない。分かっててていってるだろう」

今日、悠二たちが詠春を尋ねたのは何も子どもの交流のためだけではない。

先日の一件。魔力を抑えたはずの恋が力を行使したことについて呪術的な見解を求めてやってきたのだ。

「このかは極東最強の魔力の持ち主だ」

急に何を？といぶかしむ悠二を制止して詠春が続ける。

「だがそれは純粋な人間としての観点だ。そして恋ちゃんはその範疇から逸脱していると言っていい」

それは悠二にとって衝撃の内容だった。

恋が人間の範疇から逸脱している？

「それは、どういうことだ」

「信じられんことだが、恋ちゃんは神性を持っている。おまけに生来の強い魔力。この二つがうまく重なり合えばこのか以上の力になる可能性もある。たぶんお前達の生い立ちが影響したんだろうな。半神半人と言ったところだよ」

「半神半人・・・・」

悠二はその語を飲み込もうと咀嚼するように繰り返した。

まさか、自分達の生い立ちが娘にまで影響するとは思わなかった。

いや、ある程度は覚悟していたことだったが、そこまでとは思っていなかったのだ。

「だが、心配することはないだろう。歴史上神性をもった人間はそれなりにいたがその生涯が人間から逸脱したことはほぼない。恋ちゃんの神性もそういう特殊能力があるという程度でいいと思うぞ」

「そうか、それを聞いて安心した」

恋の神性がどのような影響をもつかは分からないが、信仰に根ざしたものではない以上、少なくとも世界の理を捻じ曲げるようなトンデモ能力は持たないはず。せいぜいがブースター程度のものになるだろう。それでも強力な力であることは変わらないが。

「お前のほうはどうするんだ？このかちゃんはいい術者になると思うが？」

「・・・・少し迷っているんだ。この力を持って生まれた以上、間違いなく狙われる。血筋のこともあるしな。だが、かといって遠ざけていいものか、とも思っている」

安全のために魔法から遠ざけ、一般人として暮らす。そういう選択肢もあれば、魔法使いとして活動するという選択肢もある。もちろん魔法使いだから危険と言うわけではないが、このかは血筋や立場上関わってしまえば行くところまで行ってしまう。血というのはある種の呪いとも言い換えられる。

娘の安全と才能や将来、どちらを取るかという瀬戸際にいるのだ。複雑な父の心境。

「ところでナギのほうはまだなのか？」

「そうみたいだな。まったく何をやっているのだか。真っ先に結婚したくせに」

「そら、何っつったらナニだろ。ん、もしかしてしてないのか？」

「こら、止めろ。しかしそれもそうだな。まだというのはそういうことなのか？」

「まさか、アレじゃね！ほら、エヴァンジェリンのこともあるしさ、外にいるんじゃ」

「な、に。まさかそんなことは、しかしそれが本当なら許せん。姫様という人がいながら・・・男の風上にも置けんバカはやはり斬らねばならんか」

酒が少し入っているために本人達がいたら噴火確定、修羅場確定

の親父トークをあっさりしてしまう。　悠二も詠春も六年前とは違う。する事して娘がいるため、そっち方面の恥じらいが希薄になって来ている。
しかし、口は災いの元。二人の後ろにはすでに修羅がいた。

「悠二、なんて話をしてる・・・」

「あらあら、いややわ、詠春はん～娘達の前ではしたない」

「「！？」」

冷たい殺気が親父を包む。
ギギギと角ばった動きで振り向く二人の前には美貌を般若に変えた妻が仁王立ちしていた。

「あのーシャナ贄殿遮那はさすがにやばいって言いますか」

「このはさん、爆符トンカチは危険すぎではないでしょうか」

「問答無用！！」

親父達の命乞いは四文字の漢字だけで打ち消された。
恋とこのかは図太いのかこの修羅場の中でもぐっすりと眠っていた。

詠春がこのかに魔法を教えないという判断をしたのはその四年後。
ナギの死とともに、反西洋派が活発になってきた頃のことだった。

外伝　恋　0歳六ヶ月　～悠二とシャナの子育て奮闘記～（後書き）

こんな感じでちょくちょく挟んでいきます。

次の外伝は帝督たちの中学か高校生活になるか、それとも恋の小学校生活

になるか・・・・

修学旅行編

「おっはよう！みんなー！」

「おはよう恋。元気だね」

「そりゃあ、今日は修学旅行だからね。だれだって元気になるって」

駅の集合場所に飛び込んだ恋に、はやく来ていた桜子や亜子が返す。

恋はかなり早くに部屋を出たのだが、すでにいくつかのグループが、駅構内に到着していた。

「おはよう、恋」

「おう、のどか！おっはー」

恋がやってきた直後からぞろぞろと人がやってきた。

まだ集合時間まで時間があるというのにクラスの半数が集まりつつある。

皆すでにお祭りムードを漂わせている。

とはいっても恋までそれに浸ることが出来ないのが現状。

なにせ行き先はあの京都なのだから。

「恋さん」

「刹那班長、どうしたの？」

適当に駄弁ってるところに刹那がやってきて恋に声をかけた。
刹那は恋と同じ班であり、またこのかの護衛という秘密の任務に就いている。

怪しまれない程度に離れて、会話をする。

「このかはまだ来てないんだけど。先に来ちゃってよかったの？」

「はい。お嬢様には神楽坂さんが付いてますし、式もつけているので。それよりもまずは車両のほうを見ようかと・・・」

「ふーん・・・て、まさかもう見てきた？」

刹那の体から気の残り香を感じる。何らかの術を行使した可能性がある。

「はい。今しがた陰形術を使って」

行動はえーと思いながらもさらに確認する。

「問題はなかった？」

「車両に呪術的な仕掛けは施されてはいませんでした。ですので注意すべきは術者が車内に入ることでしょう。もっとも新幹線の中で何か動きがあるとは思いませんが」

「それもそうね」

このかを攫おうとするのなら新幹線の中ではどうにもならない。

なにより自分から京都に来てくれるのだから待ち構えていたほうがずっといいということだ。

「おはようございます！わあ、みなさん早いですね！！」

ネギがやってきた。なぜだか京都行きに一番喜んでいたのが担任であるネギだった。

「とにかく三日もてばいいんだしね」

「ええ、ネギ先生もいることですし、大丈夫だとは思いますが」

ネギとアスナが契約していることは刹那には話してある。おそらく、いや絶対に学園長も知っているだろう。

ネギは未熟だがその潜在能力には目を見張るものがある。

手加減していたとはいえエヴァンジェリンに打ち勝ったのがその証拠だ。

「みなさーん。集合してくださーい」

集合時刻となり、点呼を取った。

欠席は学園から出られないエヴァンジェリンと付き従う茶々丸だけであった。

そして新幹線へ乗り込んでいく生徒達。

「ネ、ネギ君自由行動日わたし達と遊びに行かない？」

「いえ、あの・・」

「佐々木さん！抜け駆け・・いえ、ネギ先生はお忙しいのですわよ」

修学旅行は開始直後から騒がしい。

特に３－Ａは図抜けて騒がしい。そういうメンバーであるから仕方ないということもあるが。

このかは五班。アスナや図書館島メンバーと一緒のグループである。

「神楽坂さんと宮崎さんがいてくれるのは心強いですね」

「あの二人はなかなか出来るからね、アスナは素人とは思えない動きをするしね」

師匠エヴァンジェリンが言うには真祖の障壁を無効化してしまったようだし、このかと同室ということからしても絶対にアスナには何かある。

もはや恋はそれを確信した。

そして六班は恋、刹那、ザジの三人だけ。エヴァンジェリンと茶々丸が抜けてしまったからだ。

どうすれば良いのか刹那がネギに確認をする

「ネギ先生。わたし達六班はエヴァンジェリンさんと茶々丸さんが欠席のため、恋さんとザジさんとわたしの三人だけになってしまいました。どうすれば良いでしょうか？」

「わかりました。それじゃあ他の班に入れてもらいますね。ザジさ

んはいいんちょさん、恋さんと刹那さんはアスナさんの班でお願いします」

「わかりましたわ、ネギ先生」

「はいはい」

（なるほど、それは好都合。図らずして自然とこのかの班に入り込めるとは）

「・・・あ、せっちゃん。一緒の班やなあ」

「あ・・・」

このかがおずおずと刹那に話しかけるが当の刹那は一瞬動揺し、しかしそれを明確に表すことなく一礼して、何も言わずに立ち去ってしまった。

「ちょ・・刹那・・それじゃ先生また」

恋が刹那を追う。

取り残されたこのかは物憂げな表情のまま、アスナとともに席に向かった。

そして発進。

新幹線が動き出すと同時に喧騒が広がる。

今の彼女達にはちょっとしたことが話の種になる。

「まったく刹那ってばさっきの態度は何!?せっかくこのかと同じ

班になったってのに！」

「それはそうですが、やはりわたしは陰ながらお守りするのが任務ですから」

「それは普段ならそうでしょうが同じ班なのに距離をとったら不自然すぎるでしょ！逆に！守るんなら出来るだけ近くにいたほうがいいじゃない。あんた剣士なんだし」

これから京都に入るにあたり、護衛対象のそばにいなければならないのは至極当然のことであった。

それでも刹那はうんとは言わない。

頑なな頑固者だ。

「はぁ、まあいいや。あんたに昔のこととか吹っ切れとは言わないけど、ちゃんとするべきことはできるんだよね？」

「もちろんです」

その言葉には確固とした意思が感じられた。

そして異変が起こる。

奇妙な呪力の流れ。

「恋さん、少し見てきます」

「うん、こっちはわたしが見ておく」

そういって刹那は別の席を立ち、別の車両に移動した。

かなり微弱ながらそちらに『気』を感じるのだ。

そして刹那が出て行った直後、恋のいる車両に突如カエルが大発生した

「ギャーーーーーーーーーーーー！！！」

突然現れたカエルを見て、女性との悲鳴が響き渡る。
状況からして、どうやら車内の食べ物がカエルに変化したようだ。

「くだらねー！」

何がくるのかと待ち構えていた恋はあまりの幼稚な攻撃にやる気を見る見る失っていった。
ただ気味が悪いだけで実害のない、小学生くらいの魔法使いがよくやる悪戯。

「待てー！！」

「ん？」

見ればネギが鳥を追いかけている。
鳥が咥えているのは封筒。

「そういえば、学園長が親書を託したとか何とか・・あれか」

と言いつつも手は貸さない。向こうには刹那がいるし問題なかろうと、とりあえずこのかを見ておく。
この密室空間では転移魔法以外はたいした脅威にならない。それが発動する前に潰す自信もある。

カエル騒ぎが収まりつつある中で自然を装いこのかを見るのだが、

ふと目が合った。そして逸らされた、明らかに・・・

「何故だ？」

恋はただ首をひねるばかりであった。

「親書をかえしなさーい！」

ネギが親書を奪った鳥を追って、車内を走っている。

「アニキ、あれは「式神」だ！」

ネギの肩に乗っているオコジョ妖精カモが叫ぶように言った。

「シキガミ！？」

「おうよ、日本の使い魔（ファミリアー）・魔法（マジック）！！いや、あれは紙だからペーパーゴーレムってところだな」

そうしている間にも式神はドンドンと先を行く。

このままでは逃げられてしまう。

ネギは懐から短い杖を取り出す

「くっラス・テル・・わあ！？」

「きゃあ！？」

車内販売員のおねえさんのカートにぶつかってしまう。

「う・・ま、待て！！」

体勢を立て直し、追いすがる。
端まで走り、ドアを開け、飛び込む。

「ネギ先生」

「桜咲さん？」

そこにいたのは刹那だった。

「あの・・」

「これ、落し物です」

そういって刹那が手渡したのは、ネギが盗まれた封筒だった。

「ありがとうございます！助かりました！」

「それは先生のものですか？・・・気をつけたほうがいいですね、向こうについてからは、特に」

そう言って刹那はその場を後にした。
ネギはネギでなんだかよく分かっていないようであったが、ありがとうございますとお礼を言った。

「おい、アニキ。これ見ろよ」

「？」

カモが指し示したのは地面に落ちている紙切れ。
鳥の形をした紙が頭から尾まで真ん中を真っ二つにされていた。

「式神の紙型だ。つまりヤツが術者だよ」

「え、じゃあ・・」

「あいつ、西のスパイかもしれないぜ」

「そんな・・・・」

刹那の思いもよらぬところであらぬ疑いがかけられてしまったのだった。

修学旅行編（後書き）

やっと修学旅行か・・・

狙われたのは・・・・

京都・清水寺

金閣や嵐山とも並ぶ京都の観光名所であり、平安遷都以前からの歴史を持つ数少ない寺院。
さらには日本有数の観音霊場というありがたいお寺である。

「ここが噂の飛び降りるアレか！」

「だれか飛び降りれ！」

「では拙者が」

残念ながら女子中学生には仏像やお寺よりも観光地に来たと言うことのほうが重要であったらしい。
信仰心は欠片もない。
それなりに日本文化が好きな恋としては少し残念。

そして清水寺は「清水の舞台」以外にも名所がいくつもある。
その一つが今、一行の前にある恋占いの石。

「目を瞑ってこの石からあの石までたどり着ければ恋が成就するんですか」

「遠！二十メートルはあるわよ」

恋占いと聞いて黙っていないのが女子中学生クオリティ。
早速挑戦者たちが名乗りを上げる。

「ではクラス委員長であるわたくしが」

「わたしもやるよ！！」

まずあやかとまき絵が。そして。

「わたしが出ないわけには行かないでしょう」

「わたしもー」

恋とのどかが入る。

「坂井さんと本屋が！？」

「好きな人いんの！？」

（やはりくるかのどか！）

（恋にだけやらせはしないよ！）

ギュピーンとアイコンタクトで意思疎通。

見えない火花が二人の間に激しく散る。

ｒｅａｄｙ　ｇｏ！！

先に飛び出したのはあやか。

目を瞑っていながら彼女は確かに目標を捕捉している。

雪広あやか流恋の心眼術。ネギへの異常な愛がそれを可能とした。

「させん！武芸百般のわたしを舐めるな！」

恋が追随する。

あらゆる武芸に精通している恋には、その完璧な体バランスと頭脳を持って一度目にした目的地までを後何歩で到達できるのか理解する。

歩幅は完全なる一定。

（ふはははは！これでアマネはわたしの物だ！！）

「ずるーいいいんちょと恋ってば目開けてるでしょ！」

まき絵が後ろで何か言っているが気にはしない。もうゴールはすぐそこだ。

と、そのとき。

唐突に地面が消えた。

「！？」

「きゃあああ！」

「へぶう！」

落とし穴。しかもカエル入り。

「またカエルー」

「えーんぬるぬるー」

三人揃って穴の中に落ちてしまったのだ。

なんとか穴から這い出た頃には一人生き残っていたのどかがたどり着いていた。
そして恋を見るのどかはあからさまなドヤ顔。まるでこみ上げてくる笑みを押し殺しているかのような・・・・

「ぐぬぬぬぬ！」

歯軋り歯軋り。

そして３－Ａ一行は音羽の滝でも悪質ないたずらを受ける。なんと三つの滝の一つ、縁結びの滝に酒が混入していたのだ。もはや魔術に一切関係ない嫌がらせだがいままでで一番大きな被害が与えられてしまっていた。
酒を飲んでしまった生徒達がみんな酔いつぶれてしまったのだ。

寝込む生徒達と不審がる新田たちとの間を奔走するネギに嘆息をもらす刹那。と、そこに恋が後ろから飛びついた。

「せっつなーん」

「ひゃあああ」

「おっふう、せつないいこえだすのーうぇへっへっへぇ」

瞳を潤ませ、頬を染めた恋が普段とまったく違う声色でささやくように言った。
吐息が酒臭い。

「まさか、恋さん飲んだんですか！？」

「駆付け三杯！飲み干せ二倍！」

両手の三本指をたててチョキチョキ蟹のようにしている恋の表情はにへらっと緩みきっており、明らかに悪酔いしている。

「意味分かんないですから！どんだけ飲んでんですか！？それじゃあお仕事できないでしょ！！」

「らいじょーぶ、わたしには清めの炎がありゅ！あらゆる老廃物お燃やすんじゃー炊飯ジャー試しにぼわっとやってみるかーい？・・・ふにゅ！？」

そういって魔力を練る恋に刹那が顔を青くして首筋に手刀を叩き込んで気絶させる。

何をしでかすか分かったものではない。

刹那は強くやりすぎたか、と思ったが相手が恋なので大丈夫だろうと特に心配することなくバスまで連れ帰った。

恋、パーティー一時離脱。状態・酔い。

その後予定を早めて嵐山のホテルに戻った３－Ａは大半の生徒が酔いつぶれていたこともあって平時よりもずっと静かであった。

そして刹那は一人露天風呂に足を運んでいた。

桶で湯を汲み、体の汚れを落とす。

空は雲ひとつなく、月が綺麗に見え、広い露天風呂は天然の岩を用いた風情ある眺めをかもし出す。

しかしそんな環境にあって刹那の表情は晴れない。

（本当に困ったな、あんななんて事のない罠に恋さんと宮崎さんが潰されるなんて）

最大戦力である恋と未知の実力者のどかがよりにもよって術ですらない罠で戦闘不能に陥ってしまったのは大誤算だった。文字通り二人は潰されてしまった。恋は盲目とはよく言ったものだ。

「・・・後は魔法使いであるネギ先生だけか・・・」

ついつい漏らしてしまうのも無理はない。

しかし、刹那は気づいていなかった。ここは混浴であり、すでに先客がいたことに。

すなわち。

（ええーやっぱり刹那さんは関係者）

（アニキ、あいつ後はって言ってましたぜ！つーことは今日のは）

（ッ！刹那さんはスパイなの！？）

ネギが岩陰に隠れていた。

しかも、もとから持っていた疑念をさらに深めるような形となって。

ネギは手持ちの杖を握り締める。

「誰だ！！」

刹那が僅かな敵意を感じ取り、夕凪を手にネギに向かって駆ける。

「しまった見つかった！」

「神鳴流奥義、斬岩剣！！」

ネギの隠れる岩が横に一閃。切り落とされた。

「風花武装解除（フランスエクサルマティオー）！」

一陣の風が吹き、刹那の大太刀が弾かれる。

風系の武装解除呪文。

それでも刹那は止まらない。右手でネギの首を掴み、左手で紳士を掴むと脅すようにこういった。

「何者だ、答えなければ捻り潰すぞ」

「あわわわわ」

ネギはあまりのことに顔面を蒼白にさせていた。当然と言えば当然か。なにせ紳士を人質に取られているのだから。

しかしながらそこで刹那もやっとそれがネギであることに気が付いた。

「す、すいませんネギ先生」

慌ててネギを開放する。

まだネギは恐怖と混乱から抜け出せないでいる。

「やい桜咲刹那、やっぱり関西呪術協会のスパイだったんだな！！」

「ち、ちがう誤解です。先生！！」

「なにが違うもんか、ネタは上がってんだとっとと白状しろい！！」

「わたしは敵じゃない、先生の味方です！！」

「え？」

それってどういう・・・そうネギが尋ねる前に脱衣所のほうから悲鳴が聞こえてきた。

このかの悲鳴である。

刹那がすばやく走る。

脱衣所に飛び込んだ刹那たちの前では、小さなサルの群れがアスナとこのかに群がり、衣服を剥ぎ取っていた。

「この小猿どもぉ！お嬢様に何をするか！！」

「きゃ、桜咲さんなにやってんの、その剣ホンモノ？」

「だめですよおサルを切ったらかわいそうです！」

ネギが刹那を抑える。

このサルたちは新幹線での鳥と同じく式神で、切ってももとの紙に戻るだけなのだが、未熟なネギにはそれが分からないようだ。

そしてその隙に刹那も服を剥ぎ取られて転倒してしまう。

「このかがおサルに攫われてる！」

アスナの指し示す先で数匹のサルが露天風呂のほうへこのかを運んでいた。

そのまま外に連れ出すつもりのようだ。

「お嬢様！！」

刹那がこのかを追う。

一糸纏わぬ姿であることなど省みる余地はない。

「神鳴流奥義・・・」

気を練り上げ、速度を増し、剣を強化する。

「百烈桜華斬！！」

高速の刃が縦横無尽に奔り、サルの群れを駆逐、紙切れに戻していった。

「せ、せっちゃん？なんかよーわからんけど助けてくれたん？」

「あ、えっと」

パッと刹那は抱えていたこのかを湯船に落として走り去ってしまった。

「なによ、アレ？」

「さあ・・」

事情が呑み込めないアスナとネギ、悲しそうにするこのかだけがその場に残された。

狙われたのは・・・・（後書き）

まさかの恋離脱。

酒は飲んでも飲まれるな！！！

あとわたしは個人的にカエルは大好きですよ。アマとかシュレとか

一日目　夜

このかから刹那との関係を聞いたネギとアスナは刹那から直接話を聞くべく一階ロビーにやって来ていた。

「いたいた」

刹那が入り口の自動ドアの上部分になにやら札を貼り付けているところだった。

「なにやっているんですか刹那さん？」

「これは式神返しの結界です」

尋ねるネギに刹那が答えた。

「刹那さんも日本の魔法を使えるんですか？」

「ええ、剣術の補助程度ですが・・・」

「なるほど、ちょっとした魔法剣士ってとこか」

周囲に人がいないためにカモも普通にしゃべっている。

「ネギ先生は優秀な西洋魔術師と聞いていたのでうまく対処してくれると思っていたのですが意外と対応がふがいなかったので敵も調子に乗ったようです」

刹那もなかなか毒を吐く。

「あう、すみません。未熟なもので」

「じゃああんたは味方・・」

「ええ、ですからそう言っているでしょう」

「ごめんなさい。僕も協力しますから襲ってくる敵について教えてくれませんか？」

刹那としても元よりそのつもりではあった。

ここまで敵が積極的な行動に出たのであれば、情報を共有し共同戦線を張ったほうがいいのは明白である。

「わたし達の敵はおそらく関西呪術協会の一勢力、陰陽道に特化した「呪符使い」です」

刹那は自分の持つ情報を脳内でうまく整理しながら話し始めた。

「日本の呪術は民族宗教の神道に大陸由来の仏教、そしてその二つに中国の五行思想と占術や道教を組み合わせて発展した陰陽道などに別れ、それが時に習合し時に分裂して今に至ります。今回の相手は陰陽師たちでしょう。彼らは呪文を唱えている間は無防備になるという点では西洋魔術師と同じ。従者の代わりに善鬼や護鬼といった式をつれていることが多いのです」

「はあ・・・」

分かっていないという感じのネギとアスナ。

日本の呪術はとてつもなく面倒なので素人ではやはり理解は出来

ないだろう。
　重要なのは敵がどういう攻撃をしてくるのか、といった戦闘面でのことになる。

「さらには呪符使いの護衛として神鳴流が付くこともあり、そうなってしまえば非常に手強いと言わざるを得ません」

「それじゃあ神鳴流ってやっぱり敵！」

「はい、向こうからすれば東についたわたしは言わば裏切り者。でもわたしの望みはこのかお嬢様をお守りすること、だから・・・・それさえ出来たのなら、わたしは満足です」

「刹那さん・・・」

　裏切り者のレッテルを貼られてまでこのかに尽くす、それがどれほどの覚悟なのか、なにが刹那にそこまでさせるのかネギにもアスナにも分からない。
　ただ一つ分かるのは、何があろうとも刹那はこのかを裏切らないという一点ははっきりとしていた。

「よーし分かった！あんたがこのかを嫌ってないってことが分かれば十分友達の友達は友達だからね。わたし達も協力するよ！！」

「じゃあ決まりですね！みんなで関西呪術協会からクラスのみんなを守りましょう！！じゃあ僕は外の見回りに行ってきますね！」

　そう言ってネギは飛び出していった。

アスナと刹那はこのかを守るために部屋に戻った。
その十数分後、早速異質な気配を刹那は感じ取った。場所はもちろんこのかのいる五班の部屋。

「神楽坂さん！このかお嬢様は！？」

「そこのトイレに入ってるけど・・・」

アスナが言うのは部屋についているトイレ。

「どれくらいになりますか？」

「もう十分くらいになるかな」

刹那がその答えを聞きながらドアをノックする。

「入っとりますえー」

返事があった。

「このかさん！もう！」

「大丈夫ですかお嬢様！？」

トイレ待ちの夕映と刹那でドアを叩く。すると・・

「入っとりますえー」

返事があった。しかし・・

「入っとりますえー」

？

「これは！」

刹那もアスナもさすがにおかしいと気づき、ドアを力ずくで開けた。

するとそこにはこのかの姿はなく、便座に札が貼り付けてあり、なんとその札がこのかの声色でしゃべっていた。

「しまったやられた！」

「刹那さん、追いかけよう！！」

二人でホテルを飛び出した。

事前に仕込んだ術式のおかげでこのかの魔力を辿ることができる。

相手がそれに気づく前に追いつかなければならない。

走っていると、小猿の式神に襲われているネギを見つけ、合流した。

「どうしてこのかを攫ったりすんのよ！ただの嫌がらせじゃなかったの！？」

「実は以前からこのかお嬢様を東の麻帆良学園へやってしまった快く思わない輩がいて・・・敵の目的はおそらくお嬢様の力を使って関西呪術協会を乗っ取ることです」

「え！？」

それはネギたちにとって極めて意外な内容だった。
つまりこのかにはそれだけ強大な魔法使いとしての価値があるということだからだ。

「人払いの呪符！やはり計画的な犯行か！！」

このかを攫ったのはでかいサルの着ぐるみを着た人物。
このかを抱えたまま無人の駅に乗り込んで行き、それを刹那たちが追う。
電車に飛び乗り、前の車両に追い詰めようと走る。

「ほな、二枚目の札ちゃんいきますえ・・お札さんお札さん、うちを逃がしておくれやす」

サルの着ぐるみが投じた札から大量の水が発生し、一瞬にして刹那たちの車両を水で満たした。

（この水の中では剣は振れない・・・・このかお嬢様・・・）

そのとき、刹那の脳裏に、かつての記憶がよみがえった。
川で溺れたこのかを助けられなかったときの記憶が・・・

（斬空閃！！）

水中での一閃は斬撃の衝撃波を生み出し、前方のドアを破って水を外に出すことに成功した。
同時に駅に停まる電車。

「はぁはぁ・・早くお嬢様を返せ、デカ猿女」
「なかなかやりますな、でもお嬢様は返しまへん」

刹那たちがこのかを追いかけているころ、恋はというと。

「おえ・・・気持ち悪、頭痛っ・・・」

ちょうど目が覚めた頃だった。
酒が回り、頭痛と吐き気が襲っている。まわらない頭でそれがいわゆる二日酔い的なものであると確認し、またやられたっと思いながらトイレに駆け込む。
嘔吐のためではない。

「清めの炎・・」

個室の中で、恋の体を炎が包む。それも一瞬のこと。炎はすぐに消え、体調を幾分か回復させた恋はふっとんだ記憶をなんとか思い出そうとする。
すると、ポケットから札が飛び出し、ポンという音を立てて小さな刹那が現れた。

「おぅわ!?」

これには恋も驚いた。
三頭身ほどの刹那が目線の高さに浮いている。

「なるほど式か」

「はい、チビ刹那と言います。恋さんが目覚めたときに何かあった場合に起動するように設定されていました！！」

ちっちゃい手で敬礼しながらやけに元気にしゃべるチビ刹那を興味深げに眺めた後チビ刹那に尋ねる。

「つまり、あんたがいるってことは何かあったわけね」

「はい、このかお嬢様が誘拐されました」

それを聞くや否やトイレから飛び出し、廊下を駆け抜けホテルの外に出る。

「道案内できる！？」

「任せてください！！」

後に続くチビ刹那にナビを任せるが、聞くところによると、電車に乗って移動しているらしい。今から走っても到底間に合わない。

「お！いいもんめっけ！」

恋が走りよったのは一台の大型バイク。

黒塗りの車体はところどころ改造が施されているようにも見える。

「アデアット」

「恋さん、なにを?」

アーティファクト、六面武帝を両手首に装着し、バイクに跨る。

恋がハンドルを持った直後、鍵も無いのに独りでにエンジンがかかり、車体を恋の魔力が覆っていく。

「よし!行ける!」

恋の六面武帝の『騎』の力によって、バイクが支配され、恋のアーティファクトの一部となった。もはやこのバイクは恋の手足に等しい。

最初からアクセル全開。物理法則さえ無視した機動を持って一気に夜道を駆ける。

三百馬力を超えるモンスターマシンが、さらに強化され、疾風となった。

そこは長い階段。このかを攫った猿女は着ぐるみを脱ぎ、刹那たちと対峙していた。

「よーここまで追ってこれましたな。そやけどそれもここまでですえ。三枚目のお札行かせてもらいますえ」

猿女が札を投じる。

させじと飛び掛る刹那であったが彼我の距離は一息で駆け抜けら

れるほどではなく、相手の術のほうが早かった。

「三枚符術京都大文字焼き！！」

刹那の目の前の階段に巨大な大の字の炎が発生し、進路を妨げる。

「うっあぁ！」

「刹那さん！！」

勢い余って炎に飛び込みそうになる刹那を、アスナが襟を掴んで引き寄せる。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル　吹け一陣の風！風花風塵乱舞（フランスサルタティオ・プルウエレア）！！」

ネギの突き出した杖から強烈な突風が逆り、地獄の業火を一瞬にして吹き散らした。

「契約執行１８０秒ネギの従者神楽坂明日菜！！」

アスナをネギの魔力が包み込む。それはまるで輝く炎が揺らめくようだ。

「桜咲さん、行くよ！！」

「はい！！」

アスナと刹那が同時に走り出す。

「アスナさん！仮契約カードを出して、アデアットって言ってください！たぶん武器が出ると思います！」

「武器！？契約カードって・・・あのときのヤツか！」

ネギと話していたとき、万一のときのためにと持つように言われていたカードを取り出し、ネギの言うとおりに叫ぶ。

「アデアット！！」

カードが光り、形を変えてアスナの手に現れる。

「何コレハリセンじゃない！！」

アスナのアーティファクトはまさかのハリセンだった。

銘は『ハマノツルギ』かなり硬質のハリセン。

その成り立ちからしてかなり特殊なアスナのためだけに存在するアーティファクトなのだが、彼らがそれを知るのはまだ先の話。

「仕方ないわね！」

アスナと刹那が同時に切りかかる。

が、その進路上に熊と猿の大きな着ぐるみが入り込み呪符使いを庇う。

「何コレ動いた！気ぐるみじゃなかったの！？」

「気をつけてください！これが善鬼と護鬼です。間抜けなのは見てくれだけ、相当手強いはず！！」

「うちの猿鬼と熊鬼は強力ですえ！一生そいつらの相手でもしていなはれ！」

呪符使いがこのかを肩に担いで逃げようとする。

「このか！この・・どきなさーい！！」

アスナの強烈なハリセンが猿鬼を引っ叩くとその上半身から上が弾け、続いて体も夜の闇に溶けるように消えてしまった。

「な！うちの猿鬼が送り返されてしもた！？」

「なんか知らないけど行けそう！その熊は任せてこのかを！！」

「ありがとうございます！」「くまっ！？」

階段を上りきり、このかを取り戻そうとする刹那だが、今度は目の前にファンシーな格好をした二刀流の剣士が現れた。

「どうも、神鳴流の月詠いいます。おはつにー」

「おまえが神鳴流？」

「はいー見たところ先輩みたいですが、雇われたからには本気で行かせて貰います」

刹那に向かって走り出す月詠。
それを迎え撃つ刹那であったが、月詠は想像以上の手足れだった。
さらには小回りの効く二刀は刹那の大太刀と相性が悪かった。

「くっこの！」

「ざーんがーんけーん」

少しずつこのかから離されてしまっている。アスナはアスナで大熊だけでなく、例の小猿の群れに集られ身動きが取れない状況。

「魔法の射手戒めの風矢！！」

しかし、ネギはノーマークだった。
放たれた十一本の拘束魔法が呪符使いの女に迫る。

「ひーお助けー！！」

事もあろうに呪符使いはこのかを盾にした。
たとえ拘束用の魔法であっても、ネギにこのかごと魔法を当てることなど出るはずも無く、魔法の矢は全弾ギリギリのところで逸らすことになった。

「このかさんを盾にするなんて卑怯ですよ！離してください！！」

「ほーほほほ！アマちゃんやなぁ。人質ごと撃ち抜けばいいものを」

確かに戦場においてネギの甘さは枷になる。
現に今こうしてそこに付け込まれているのだから。

「このぉ」

ネギはこのかを人質にされて手も足も出ない。
何とか出来そうな二人はそれぞれの相手で手一杯。万事休す。
どうすれば・・・・そう思ったとき、不意にバイクのエンジン音が聞こえてきた。
音が聞こえてほんの数秒後にバイクはその場に飛び込んできた。
そして勢いのままにアスナを掴んでいた大熊を跳ね飛ばし、ドリフト駐車。

「ギリギリ間に合ったー！！」

バイクから降りたその人物はネギたちのよく知る人物だった。

「恋さん！！」

「え？恋！？どういうこと！！」

「んーやっぱバイクの登場は怪人跳ね飛ばしに限るね！！でも、欲を言えばあんなヘンテコなヤツじゃなくてグロンギみたいなのがよかったなー」

ネギとアスナの驚く声には答えずにとりあえず言いたいことだけまず言ってしまう恋。

「おいそこの誘拐犯。あんたのせいでわたしまで悪いことしちゃったじゃないどうしてくれる？飲酒、窃盗、無免許、ノーヘル、スピード違反！とりあえず潰させろ！！」

恋に飛び掛ってくる熊を見もせずに強力な炎で焼き払い、呪符使

いに向けて走り出す。
　このかをさらに盾にしようとする敵に刹那がついにキレて月詠を弾き飛ばして接敵する。
　障害をなくしたアスナとネギも追随。

「この！！」

　札が投じられて猿の群れがあふれ出すも、恋のハルバードの一振りで一匹残らず薙ぎ払われた。

「風花武装解除（フランスエクサルマティオー）」

　武装解除呪文が相手の札と衣服を花弁に変え、このかを弾く。弾かれたこのかは刹那がうまく受け止めた。
　さらに追撃でアスナのハリセンが顔面を捉え、恋の右ストレートが炸裂。吹っ飛ばした。

「くっ・・・覚えてなはれー」

　呪符使いは新たに大猿の式を召喚し、メガネを探す月詠を連れて逃げようとする。

「逃がすか！」

　恋が前方に大きく跳躍して逃がすまいと追いすがる。そのときだった。

「！？」

　空中の恋を狙い打つように側面から何かが飛来した。

寸前で気づき、身をひねりながらハルバードで叩く。ギインという音とともに恋は錐揉みしながら墜落し、うまく受身を取って着地した。

それと同時に離れたところに飛来物が突き刺さる。

（石の槍・・・）

それは紛れもない石の槍（ドリュ ペトラス）。自分の妹がよく使う魔法の一つである。

（めんどいのが後ろにいるな）

あのタイミングで事前に恋に悟らせずに術を行使したとなると相当強力な西洋魔術師が関わっていることになる。

しかし、関西は西洋が嫌いなはず・・・うーんと首を捻っていると刹那が階段を駆け下りた。

このかと何か話したようだが、いきなり仲良くするのは難しいか。

「ああーそうだ恋！あんたあれはどういうこと！？」

思い出したようにアスナが食いついてきた。本当にこのかの安否以外は気にしていなかったようだ。

「なにって、わたし魔法使い」

「そうだったんですかー！」

「ええーー！！」

ネギとアスナが驚愕を口にする。

しかしながらここにはこのかもいるので詳しくは後日ということにしてそこはとりあえず収めた。

「あ、そうだあのバイクどうしたのよ？」

「急いでいたからそこらへんのをちょっと借りたの」

「それって泥棒じゃないですかー！」

「ちゃんと返すから大丈夫。何か言われても担任が何とかしてくれるでしょうしね」

「それって僕じゃないですか！ダメですよーー！」

そんなことがあって一日目は何とか乗り切ったネギたちであった。

一日目　夜（後書き）

当初の予定では恋がバイクを盗んだところであの曲のネタを入れるつもりで

した・・・中三だし、ちょうどいいじゃないですか！

そんな矢先にまさかの！まさかの！せっかくのネタがぁ！！

まあしょうがないですね、著作権って言われちゃったらどうにもならんです。

大事ですからねそういうの・・・・

二日目の班別行動は奈良の見物であり、ネギを含めた五班は東大寺などを見て回った。

がっしりこのかを固めていたためかこの日の襲撃はなく、純粋に修学旅行を楽しんだ一日だった。

そして就寝時刻を回ったころのこと。

「表の見回り終わったわよ」

「特に異常はありませんでした。もうじき恋さんも戻ってくるでしょう」

「ありがとうございます、じゃあ今度は僕がパトロールに行ってきますよ」

アスナ、刹那、恋で外のパトロールに行ってきたところだ。

いつ何時敵が来るか分からない状況の上、今日はネギの魔法が朝倉にバレるという災難が重なり、ネギの心労もそろそろピークを迎えていることだろう。

「でも、こんな時間にネギが一人でいなくなったら他の先生が心配するんじゃない？」

「それならこれを使うと良いですよ。身代わりの紙型です」

「わあ、ありがとうございます！」

刹那がネギに手渡したのは数枚の紙。
どれも等しく人の形に切られている。

「それでは、わたしたちはこれで」

「なんかあったらすぐに連絡しなさいよ」

アスナと刹那は自室に引き返していった。

「あーテステス・・・皆さん聞こえてますか、実行委員の朝倉和美です。聞こえていたらマイクのスイッチをオンにしてください」

監視カメラまで設置しての大規模な作戦を実行する行動力はもはや脱帽。

「もういちどルールを説明するよ、その一、各班二人の選手を選んで旅館内にいるネギ先生の唇をゲットすること。その二、新田に見つかったものは即失格、朝までロビーで正座が待っている。その三、攻撃は枕のみ、その四、アスナには内緒で、スタートはアスナが寝込んでから十分後！近衛、アスナの様子は？」

「もう寝とるよ。薬が回ったみたいで朝までぐっすりや～」

「薬！？い、いや・・では、選手紹介！一班、鳴滝姉妹！二班は楓とくーちゃん！三班、いいんちょ、そしてなんと千雨ちゃんだあ！」

おおーーーーーー！！！

「そして四班、まき絵、明石ペア！最後に五班！宮崎、近衛選手！」

のどかとしては不本意な出場だったが、目の色変えて勝ちにこだわるこのかに恐れをなして出ることになった。

目の前でアスナが始末されたことはさっさと忘れてしまいたい一幕だった。

「それじゃあ準備はいい！？らぶらぶキッス大作戦・・スタート！！」

戦いの火蓋が気って落とされた。

「なんでわたしがこんな・・・」

「ぶつくさ言ってないで先を急ぎますわよ、千雨さん！」

やる気ゲージが１００パーセント違う千雨とあやかペアと

「でも、無理やりキスッてのは、ネギ君の気持ちとか・・」

「まき絵！そんなこと言ってたら他のに先を越されちゃうよ！！本気ならガツンと、だよ！！」

もじもじと恥らうまき絵を引っ張る裕奈ペアが

「あ！」

「お！」

出会った。

「チェストー！！！」

「へぼ！？」

あやかの強烈な枕落としがまき絵の顔面を捉えた。
出会ってから攻撃まで所要時間わずか０．５秒以下。ネギに好意を寄せるものを自動で攻撃する秘儀が発動。ほぼ反射で敵を攻撃している。

「ナイスまき絵！！隙だらけだよいいんちょ！」

「くっ！裕奈さん！お退きなさい！」

裕奈とあやかの激しい攻防が始まった。
するとそこに褐色の肌の少女が飛び込む。

「トリプルチャイナアターク！！」

古である。
投じた三つの枕は狙い違わずあやか、裕奈、千雨にヒットした。

「ぐぐ・・やりましたわね」

「あたたぁー」

まき絵も加わり四人による大乱闘となった。

「ガキかってんだよ」

一人戦列を離れた千雨が自室に戻ろうと廊下を歩いていた。
そもそも乗り気でないのだから手伝ってやることもない。ネギにも興味はない。
しかし、この世はなんと理不尽なことか。そんな彼女にこそ悲劇は降りかかる。

「長谷川なにをやっとるかー！！」

「ぎゃぴいいいい！！」

奇しくも新田の最初の犠牲者は千雨だった。

「この声は！」

「まずい！鬼の新田だ！逃げるよ！」

乱闘を終わらせてとっとと逃げる六人。
しかしここで裕奈が古と接触、倒れたところを新田に捕縛された。

「ごめん裕奈」

「死して屍を拾うものなしですわ・・・まき絵さんここは」

「同盟だね！裕奈の思いを無駄にはしないよ」

3・4班合体!!

「さっきの千雨ちゃんやなー」

「かわいそう、無理やり参加させられて朝まで・・うう・・」

ネギのいるであろう職員用の部屋に向かいつつこのかが状況分析をする。

のどかは強制参加の同志の死に胸が張り裂けそうであった。

「たぶん今はロビーやから・・今のうちやね」

「そうだねー」

とりあえず相槌を打っておく。アスナの二の舞は御免だ。

そんな二人の前に天井から縄梯子が落ちてきた。

顔を覗かせたのは鳴滝姉妹。

「上から!?」

「何やってんですかー!?」

さすがののどかも度肝を抜かれた。

そして、降りてきた姉妹と戦闘開始。枕で叩き合ううちに楓と古も合流、大規模な戦闘へと発展した。

そしてのどかは見た!エレベーターが動いている。この時間に乗っているのはおそらく・・・

「みんな逃げて！！」

「！？」

のどかの声に反応した選手たちが慌てて撤退する。

古と楓は身体能力を駆使し、鳴滝姉妹は梯子を上り、のどかはなんと明鏡止水で身を隠した。

逃げることにおいてのどかは一流である。

刹那にバレてからは魔法に対するタガが少し緩んだようだ。

「え？え？」

そして取り残されたこのかは・・・・

「近衛・・・お前まで」

「そんなーーーー！！」

やってきた新田に回収された。

「おおーと！またしても脱落者が！親友に一服もってまで参加した近衛選手、無念のリタイアだー！！」

「なんの、騒ぎだ？」

パトロールを終えて旅館に戻った恋を待っていたのはロビーで正座をさせられている三人の姿だった。

「あ、恋。まさか抜け出してたん?隅に置けんなー」
「このか・・・何してんの?」
そこで恋は初めてらぶらぶキッス大作戦の概要を聞くのだった。
「まったく、朝倉め。こんなときにくだらん騒ぎを・・刹那もアスナも何をしてるんだ」
護衛対象のこのかがロビーで正座などどうなっているのか。
もっとも恋とてロビーにいることは出来ない。
新田先生に説明できないし、不審がられるわけにもいかない。遠見の法を使ってロビーを監視するしかなかった。
このときの恋にはまだこの状況が何を意味しているのか想像も付いていなかった。
「あ、恋?」
「のどか」
廊下を歩いているとのどかに出会った。
大作戦ではこのかと組んでいたはず。
「ねえ、アスナとか刹那のこと知らない」
「いや、えーとぉ・・・・」

アスナはこのかに一服盛られましたとはなかなか言い出せなかった。

ちなみに刹那は「このちゃんが・・・・このちゃんが・・・」と茫然自失状態。アスナを始末したことがよほどショックだったらしい。あの分では明日には記憶ごとあの事実を消しているだろう。

「のどかさん、坂井さん」

「んあ？ネギ先生？」

「ネギせんせー？」

突然現れたのはネギだった。

しかし、恋ものどかもこのネギが偽者であると見抜いていた。

まさか、本体に何かあったのか？

焦燥に駆られ次の言を待つ恋。しかしネギ（偽者）の口から飛び出したのは予想の斜め下を滑空していくものだった。

「キスしてください」

「・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・」

とりあえず聞かなかったことに・・

「キスしましょう」

お願いから提案に変わった。

「キスします」

「だ・ま・れ！！」

身の危険を感じ炎を出そうとする恋だったが、それをのどかが制止した。

「恋、ダメ！カメラが動いてる！！」

「ぬ、ぐぅ・・」

姿を消す程度ならカメラの誤作動とでも言って誤魔化せるが、さすがに炎でネギを焼いてしまうところを３－Ａの生徒に見せるわけには行かない。

「ぶん殴れば止まるかな？」

「さ、さあ・・」

とっぴ過ぎる状況に逡巡しているとニセネギが動いた。というか跳んだ。

「チュー」

なぜか手が伸びている。

「ヒィーーーーーーー！！」

「きゃあああああああ！！」

いかな恋といえどもうら若き乙女である。

キッスを迫ってくる魔物相手に嫌悪感を感じずにはいられない。

全力で逃げ出した。

「に、逃げるしかない！」

「手が！手が伸びて！ゴム○ムの実？！」

とにかく逃げることを優先した。

廊下を走りぬけ、角を曲がり階段へ向かう。その二人の左右を肌色のロープが追い抜いていった。

すぐに分かった。このロープはニセネギの腕だ。伸びた腕は恋とのどかの前方の階段に設置されている手すりをがっしりと掴んだ。

「まさか、これは・・・」

「え？ほんとに・・」

走りながら振り返った先に目を光らせたネギがいる。

「ゴム○ムのぉ・・ロケットッチュウ！！」

地面から足を離したネギが一気に腕を縮めて高速で突っ込んできた。

「いやあああああああああああっうっぐふぅ！？」

「ふぶ!?」

まずニセネギがのどかの腹部に強烈な頭突きをかまし、勢いのまますぐ後ろにいた恋を巻き込んで二人を下り階段に跳ね飛ばした。

それは愛しいものの胸に跳びこむと言うよりは、サッカーの試合でダイビングヘッドによるゴールを決めたと言うほうが的を射ているだろう。

「ヌギでした」

偽者はそう言うと爆発して消えた。

ワールドクラスのダイビングヘッドを決められた二人はガタガタと階段を転がり落ち、のどかが恋を押し倒すような形で止まった。

「う、ん?」

「ふぐ!?」

そして二人同時に目を剥いた。

互いの目がすぐそこにある。そしてこの唇の感触は・・・

「なあああ!?」

「はううう!?」

まさかの接吻だった。

「どどどどどどどどーいう」

「なん、でー！？」

完全に想定外の展開に驚天動地の二人。

あわあわとすることしかできなかったが、そこで光の球が現れカードとなったことで全てを理解した。カードに描かれていたのはのどかの絵。それは「恋とのどかの仮契約カード」の出現だった。

「なるほど・・・・・・・・あんのクソオコジョがぁ」

犯人は分かりきっていた。こんなことをするのはカモ以外にはいなかった。

同時に恋は自分の迂闊さをのろった。

この旅館全体が仮契約の魔法陣の上にあるのが今ならはっきりと分かる。

刹那と恋がとにかく結界や防護の法をかけていたことから混線して分かりにくくなっていたのだ。

あの小動物絶対に焼いてやる。

恋は心に誓った。

そして大作戦はと言うと・・・・

ネギの偽者の登場で混乱をきたしていたが、みなそれぞれ最寄のネギを捕まえてキスをして、爆発撃破という結末を辿っていた。

「どうしよう・・・偽者君にも会えてない」

まき絵はネギを探してロビーにまでやって来ていた。

「ネギ君を見つけて・・・キスかぁ」

まき絵は迷っていた。果たしてこんなことでネギとキスをしていいものかどうか。

もうすこしロマンチックさが欲しいとかいろいろと考えてしまっていたのだが。

「ただいまー・・・なんか変な気配がするなー」

そんなときにちょうどネギのホンモノが帰ってきた。

杖を持っているから間違いない。

「あ、ネ、ネギ君」

「え、まき絵さん?こんな時間にどうしたんですか」

「えーと・・・お願いがあって・・・・その・・」

まき絵はここに来てもまだ迷っていた。

心臓が早鐘を打っていてうるさい。

脳内に裕奈の言葉が響く。

他のにとられる・・・・・

「お願い!目を瞑って!」

「え?は、はい・・・」

どういうことなのかネギにはまったく分からなかったが、目を瞑る程度に抵抗はなく、すぐにまぶたを閉じた。

「ネギ君、ごめん！！」

そしてまき絵がネギにキスをした。
マウス・トゥ・マウスで。

その瞬間、勝者が決まった。

「まき絵が勝ったー！！」「やるうまき絵！！」「まき絵にかけてたヤツ！・・ハッ桜子あんたまさか！！」

それは同時にネギが新たな従者（パートナー）を得たということでもあった。

「全員朝まで正座ー！！ネギ先生もです！まったく生徒と一緒になって、何をやってるんですか！？」

朝倉をはじめ、関わった者たちが新田の粛清を受けることになった。
階段で捕まった恋も一緒である。

「どうしてこんなことに・・・のどかもそう思うでしょ！」

小声で隣ののどかに話しかける恋、しかし答えはない。
不思議に思ってのどかのほうを見ると、なんとそこは蛻の殻。人がいた痕跡すらない。

「あれ？のどかは？」

「そういえば・・・てゆーか捕まってたっけ？」

「どうかなあ？いたような気もするけど・・ここにいないって事はうまく逃げたのかなあ？」

尋ねてみてものどかがここに座っていたことを確認したものは誰一人としていなかった。

すなわち、恋が捕まったときにはすでにのどかは逃亡していたということだ。

ご丁寧に僅かばかりの気配を残して。

「のどかーーーーー！！！」

近所迷惑にならない程度に加減して、しかしそれでいて確かな怨念を込めて小さく叫んだ。

らぶらぶキッス大作戦！！（後書き）

まき絵が契約しちゃった！

新メンバー加入でネギパーティーも大きくなっていくよ！

その覚悟を問う

「ちょっとどうするのよこんなにカード作っちゃって！」

「えう！僕ですか！？」

修学旅行三日目朝。
旅館のロビーでのことである。
アスナが昨晩の騒動によって生じた契約カードを手にネギをしかりつけているところである。
ちなみにアスナも刹那も昨晩のことは覚えていない。
知らぬが仏という言葉もある。

「あーいいじゃん儲かったんだし」

「そうだぜ、姉さん」

「朝倉とエロガモは黙っててて！」

ここには一連の事件の首謀者である朝倉とカモも同席している。

「まったく・・イベントの景品みたいだから複製を渡すのはいいとして、マスターカードは渡しちゃダメよ」

「魔法のことも秘密にしたほうが良いですね」

「そうですね、まき絵さんには魔法については話さないようにします」

アスナの意見に刹那が賛同する。
純粋一般人であるまき絵が仮契約してしまったという異常事態。
それに対しては教えないと言う方針で固まった。

「しかたねーな、あのカードなかなか強力そうなんだが・・それじゃ姉さん、カードの使い方をおさらいしとくか？あんときは必死だったしな」

「ああ、あの武器を出すやつ、たしかアデアットだったっけ？」

アスナが恐る恐る唱えると、カードがハリセンに変化した。

「やっぱりすごい！手品に使える！」

「しまうときはアベアットだぜ」

アスナたちがアーティファクトで盛り上がり始めたとき、今まで一言も発していなかった恋がおもむろに口を開いた。

「じゃあそろそろわたしも話させてもらうけどいい？」

「話すってなにか問題があった？」

「恋さん、どうしました？」

「いや、そろそろ覚悟を問う頃かなと思ってさ。朝倉にも知っておいて貰わないといけないこともあるし」

恋は軽くアスナたちを威圧して先ほどまでの浮いた雰囲気を押し殺していく。

「まず仮契約のことだけど、朝倉は自分のしたことをもっと重く受け止めたほうがいい」

「えと、それってどういう・・」

恋の言葉に和美が問い返す。

「そうね・・まずこれを見て欲しい」

そう言って恋が取り出したのは仮契約カード。描かれているのはもちろん恋の絵である。

「アデアット」

そして恋はアーティファクトを召喚した。

六面武帝。金色の腕輪が恋の手首に装着された。

「え？恋さん仮契約してたんですか！？」

「ネギじゃないよね、誰と！？」

「そんなことは今関係ない。問題にすべきはアーティファクトが正真正銘の魔法のアイテムなんだって事！」

恋が声を張り上げる。

ロビーにいたほかの生徒が不審なまなざしを送ってくるので、コホンと咳払いをして腰をおろす。

「わたしのアーティファクトはざっくばらんに言うとあらゆる剣や

槍、弓、銃みたいな武器や乗り物を操る上で必要な情報をダウンロードする力よ」

「え!?それってかなりすごいんじゃない!?」

「うん、すごいよ・・その気になれば最新鋭の戦闘機だって操れるくらい」

あっさりと言った恋の言葉にアスナの顔が引きつった。ほかの面子も声を失う。

戦闘機を操縦する女子中学生。シュールだ。

「アーティファクトってそういうのもあんの。アスナのだってかなり危険な武器でしょ?」

「いやいやいや!わたしのはただのハリセンだって!そんな物騒なもんじゃないわよ!?」

「それならもう一度カードを見てみなさい・・アスナが持ってる武器は何?」

「え?」

そう言われてアスナは自分のカードに視線を落とす。

カードには自分の絵が描かれているがそのアスナが手に持っているのは白いハリセンではなく。

「でっかい剣?」

「そう、それがアスナの本当のアーティファクト」

「！！」

「本当のってどういうことですか？」

大剣が自分の武器だと言われて絶句するアスナに本当のアーティファクトという点に食いつくネギ。

それにたいして恋は出来るだけ分かりやすいように言葉を選んで説明し始めた。

「アーティファクトといっても仮契約しても必ず出るとは限らないらしい。マスターの魔力量とか従者の実力とか性質とかが関わってくるんだけど、アーティファクトが出ても、従者が未熟だと同じ系統の低いランクの道具が出たり、弱まったりして出るんだって話よ。今のアスナは魔法に関わったばかりだからハリセンしか出せてないってことなんだと思う」

「それじゃあ、わたしが強くなったらこの剣も使えるようになるってこと？」

「うん。ただし、その剣にもハリセンと同じ能力があるはず。つまり式払いの力がね。それがどういうことか刹那とかネギ先生なら分かるでしょ」

「！？」

「ッ！！」

やはりこの業界に身をおいているだけあってその武器の危険性にはすぐに気が付いたようだ。

「ちょっと、どういうことよ？説明して」

アスナは分かっていないようなので恋が続けていく。

「魔法使いって障壁っていう見えないバリアーで身を守ってるんだけど、アスナのアーティファクトはこの障壁を紙切れみたいに切れるんだよ。簡単に言うと、アスナの武器を使えばどんな魔法使いでも真っ二つに出来るってことよ。殺せるって事ね」

「う！」

アスナが顔を青くして自分のカードを見つめる。それが事実なら、知らず知らずに超危険な武器を与えられていたことになる。魔法使いの天敵となりうる大剣。それも見たところ重量も相当ありそうだ。振り回せるかどうかは持ったことのない今は分からないが、仮に振るえたとすれば、こんなものが直撃してただで済むはずがないということは誰にでも分かることだった。

「朝倉はそんな危険物をまき絵に渡したことになるのよ」

「それは・・・」

遊び感覚の延長線上であった朝倉としては恋の指摘に言葉が出ない。

そもそもカモからはそんなアーティファクトなどという説明も受けていなかった。

「それに、そんな危険な儀式だから仮契約するときはお役所に届け出て厳しい審査を受けないといけなかったりするのよ」

「たしかに、何も知らない一般人ですら強力な力を得ることができるとあっては規制するのは当然ですね」

刹那が納得したと言うように相槌をうつ。

恋のアーティファクトもキチンとした届出をした後に結んだものだった。

「じゃあ、アスナさんとの契約も・・・」

「それは大丈夫じゃない？特例ってのがあって、命の危険にさらされている場合とかは認められてるのよ。あの『闇の福音』に狙われてたなんてそれだけで特例に引っかかるわよ。」

「よかったー」

ネギが安堵の表情を浮かべる。

気が付けば犯罪者、などということになっていたなど笑い話にもならない。

「ただし、今回のことは特例には引っかからないよ。もちろん先生は直接関わってなかったからそういう罪には問われないと思うけど、監督責任は追及されるかもしれないから覚えておいて。朝倉も魔法に関わるんならちゃんとそういうことも自覚しないとヤバイことになるわよ」

「・・・わかった。気をつけるよ」

「あとお前はそのうち処理するからその覚悟もしてなさい」

「堪忍してくだせえ！恋姉さん！！ぐえっ！」

恋は冷ややかな視線でカモを射抜いた直後に手持ちの縄で雁字搦めに縛り上げてしまった。

「自業自得よ」

アスナが苦笑しつつそんなカモ見ていた。

しかし、次に恋はアスナに矛先を向けた。

「アスナもこれ以上関わるんなら覚悟は必要よ。時には人の命を奪わなければいけないこともあるかもしれないし自分の命を狙われることもあるかもしれない。それでもあなたはここにいる？今ならまだ引き返せるわよ。ありふれた日常に」

「それは・・・」

これは少し意地の悪い問いではある。魔法使いに関わったとて、それがイコール危険とはいえない。

だが、英雄の息子であるネギの従者という観点からすればそれだけで危険を呼び込むことにもなりえる。奇妙な能力の持ち主であることからしても特に強い覚悟を持つ必要がアスナにはあった。

アスナは多少考えこんだが、すぐに首を振ってこう答えた。

「恋が心配してくれるのはありがたいけど、わたしはやっぱりここにいるわ」

それは想像通りの回答ではあった。

アスナの性格的に引き返すことはないだろうとは思っていた。

「いいのね」

「当然！命だなんだと言われたってわかるわけないでしょ。だったら自分の目で見て出来るだけのことをしたほうがいいに決まってる。生憎とゴチャゴチャ考えるのは苦手なのよ」

結局のところ何も考えていないわけだが、恋の目的もある程度は達成された。

自分の口から関わると言った以上それは確かな覚悟となってアスナに刻み込まれたはずだ。

これから戦闘が本格的になるであろうことからも互いの意思確認という作業をしておかなければならなかったのだ。

「よし、ちょっと試してみよう」

まき絵は人気のないことを確認してから呟いた。

手に持っているのはネギとの仮契約カード。

実はまき絵。ネギたちの会話を偶然盗み聞きしてしまっていたのだ。話の内容はまき絵では分からなかったが、それでも大切な部分は確かに聞き取れた。

「アデアット」

まき絵がはじめてアーティファクトを使用した瞬間だった。

その覚悟を問う（後書き）

こういう話はちょっと苦手ー

がっつり独自設定ですよ、はい。ちなみにまき絵のアーティファクトはオリジナル予定。

のどかがふとホテルの廊下を歩いていたとき、偶然にもそれを見つけた。

「んしょんしょ・・にー！」

まき絵がなにやら伸びたり縮んだりしている。周囲に人目はないが、もしあったなら怪しすぎて必ず人を呼ばれてしまうであろう。

「？」

「はあはあ・・どうしよう、何コレ？取れない・・・・」

どうやら体や腕にくっ付いた何かを取ろうとしているようだ。引っかいたり摘んだりしているが状況は芳しくない。

「どうかした、まきちゃん？」

「あ、本屋ちゃん！！た、助けて」

「？」

助けてとは尋常ではない。とりあえずまき絵の手首に視線を向けると、白い包帯のようなものが見える。

しかも、魔力を帯びている。

それが、昨晩の大作戦で与えられたアーティファクトであるとのどかはすぐに理解した。

「どうしてそんなことに！？」

いくらネギでもまき絵にカードの使い方を教えるとは思えなかった。

では、なぜまき絵がアーティファクトを使っているのか。

「ふえーん、この包帯みたいのぜんぜん取れない」

まき絵の両袖を捲し上げて見てみると、白い包帯のようなものは手首だけでなく腕全体に隙間なく巻きつき、さらに上半身にまで及んでいる。そこだけ見ればミイラ女の様である。

「えと、これってカードのヤツですよね」

「え？本屋ちゃん知ってるの！？」

やはりか。

まき絵は何らかの方法でアーティファクトの出し方を知ってしまった。それを試したはいいが、しまい方が分からず悪戦苦闘していたということだった。

「それならまず、アベアットって言ってみてください」

「うん？・・アベアット」

まき絵がそう言うと、すぐにまき絵を悩ませていた白い包帯が消えて、カードに戻った。

「あ！戻った！？すごい！！」

カードが元に戻るや一転、目を輝かせるまき絵にのどかは心の中で嘆息を漏らし、こう言った。

「まきちゃん。そのカードなんだけど、絶対に人前で使ったりしたらダメだよ」

「え、どうして？」

「えーと・・・」

どう説明したらいいのか・・・まさか魔法のアイテムだからと言うわけにも行かないし、唯一の救いは、この不思議カードに対してまき絵が疑問なく受け入れてくれたことだろう。

わりと何でも受け入れてしまえる麻帆良生に対してもっとも効果的な誤魔化し方は・・・

「工学部の秘密の技術で作ったカードなんだって」

「工学部の？そっかー」

信じた！？やはり工学部。さすが超の工学部。魔法と科学が交差した学園都市の工学部なだけのことはある。そしてそこに住む大抵の麻帆良住民は工学部と言えばなんでも信じる傾向にある。まき絵もまた然り。

「まだまだ秘密が多くて一般に出回らない非売品を特別に貰ってきたのだから他の人に見せるのはよくないんだって。ネギせんせーにも迷惑がかかっちゃうし、見せないようにしてね」

「ネギ君にも？それならしょうがないよね」

「そうそう。しょうがないしょうがない」

うまく言いくるめてまき絵を納得させたのどかのおかげで当面の危機は去った。

そして、それから少しの時がたち、ネギと五班は嵐山のゲームセンターに来ていた。

当初の予定としてはネギとアスナだけで親書を届けようとしていたのだが、ハルナに感づかれたためにゲームをして、その隙に抜け出そうというのである。

つい先ほどまでネギは学生服を着てとニット帽をかぶった地元の少年と対戦していたところだった。

「それじゃ桜咲さん、恋、あとはよろしく」

「はい、二人とも気をつけてください」

「用心だけはしておいてね」

ハルナたちがゲームに夢中になっている間に抜け出して、アスナとネギで親書を届けてしまおうというのだ。

そうして、抜け出すことに成功したアスナとネギは一路、関西呪術協会の総本山を目指した。

「ここが関西呪術協会の総本山？」

「伏見神社ってのに似てるな」

「なんか出そう・・・」

ネギたちの前には何本もの鳥居が立ち並ぶ石段が存在していた。
ここが関西呪術協会総本山の入り口であり、この石段を登っていった先にネギが親書を渡すべき協会の長がいる。
ちなみにここにカモがいるのはネギが恋に頼みまくって仮釈放してもらったからである。

「神楽坂さん、ネギ先生。大丈夫ですか?」

そこにやってきたのはちびせつな。

「誰よアンタ!?」

「刹那さん!?」

身の丈十五~二十センチほどの刹那がアスナの面前に浮かんでいるのだから、泡を食うのも当然。
そんなアスナたちにちびせつなが掻い摘んで説明をする。

「はい、連絡用の分身のようなものです。心配なので見に来ました。ちびせつなと呼んでください」

「はあ・・」

「この先には確かに関西呪術協会の長がいるとは思いますが、おとついのこともあります。罠などに十分注意してください」

「わかった。役に立つか分からないけど一応ハリセンも出しておく

わね」

そう言うとアスナがハリセンを召喚する。
細身なハリセンはやはり武器には見えず、頼りない印象をもってしまう。

「よし、いくわよ」

「はい！」

アスナとネギが鳥居の中に駆け込んでいった。

そのすぐ後のこと・・・・

鳥居の前にのどかがやって来ていた。
のどかの眼は最高ランクの解析眼である。それは開放していないときでも魔力の流れを捉えることが出来てしまうほどに強力だ。
のどかはゲームセンターで見かけた少年が只人ではないとすぐに見破ることが出来た。なんというか刹那に似た気配を持っていたのだ。
だから、のどかはアスナとネギを追ってきていたのだが、彼らが鳥居を潜ってしばらくしたところで姿が消えてしまった。

「これは、結界！？」

瞳を金色に染めて、恐る恐るアスナたちが消えた鳥居付近を見回す。そこには確かに眼では見えない世界の境界が存在していた。

「入ってみよう」

のどかは警戒しながらも足を踏み入れる。が、次にのどかの眼に映ったのは眼下に広がる住宅地。千本鳥居を背後に背負っている。

「!?」

中に入ったとたんに外に出てしまったのだ。

「これは・・・」

日本の呪術に疎いのどかはこの正体までは分からないが、空間に作用し、ループさせる隔離型であることは容易に予想が付いた。自分が中に入れないのはそういう別の術がかけられているのか、外部からの侵入を防ぐ機能がもともとついているのか・・・・

「しかたない・・・アデアット。魔眼開放・術式解析」

のどかはいどのえにっきで出来るだけネギの状態を確認しつつ、眼に魔力を送り込み、結界を解析し始めた。

「まったく、なんなのよ、あのガキは!!変な耳くっつけてバカじゃないの!?」

アスナがいらいらと地団太を踏む。

鳥居の罠に引っかかり、無限ループから抜け出せなくなったネギたちはついさっきまで鬼蜘蛛を引き連れた少年と戦っていた。その少年はのどかが危惧していたゲーセンの少年であり、その戦闘能力の高さに翻弄され逃げるのが精一杯だったのだ。

「あれは狗族ですね」

「クゾク？なによそれ」

「狐や狼の変化・・・つまりは妖怪の類ですね」

「またバケモノの敵？勘弁してよね」

「すいません」

「なんで刹那さんがあやまってんのよ」

妖怪変化の話をしていたところでちびせつながしゅんとしてしまった。アスナは理由が分からず？を浮かべるだけだった。

「そんなことよりこれからどうするかだぜ、姉さん」

「そうですね、とにかくあの少年は何とかしないと。たとえこの結界から逃れても追ってくるでしょうし」

「それなら僕に考えがあります」

ネギが顔を上げてアスナたちを見る。そこに諦めといった感情は浮かんではいない。

「可能性は五分五分ですが、うまくいけば倒せるはずです」

ネギとアスナは再び参道にもどった。
もうすでに少年ーーーーーーーー犬上小太郎と名乗っていたーーーーーーーーーーは目視できる距離にいる。
小太郎は戦士系。対するネギは遠距離型の魔法使い。得意とする距離が違う以上いかに自分の土俵で戦えるかが勝負の決め手となる。

「風精召喚！剣を執る戦友！迎え撃て！！」

八体の風の精霊を召喚。各々がネギに酷似した外見を持ち、剣や槍、ランスを携え小太郎に迫る。

「ハッ！やっと本気か、チビ助！！」

対する小太郎も負けてはいない。千本鳥居の上を軽やかに飛び移りながら風精を蹴り、殴り、忍ばせていたクナイで破壊する。戦士系の面目躍如だ。

「魔法の射手、連弾・雷の十七矢！！」

その小太郎に十七発の雷撃が襲い掛かる。
物理的な破壊力を持った魔法の矢。直撃すればただではすまない。

「うお！？」

小太郎は魔法の射手を手持ちの守りの護符で辛うじて防いだ。
しかし、小太郎はここで大きなミスを犯した。接近戦を得意とする小太郎は少しでも早くネギの元に辿りつかなければならなかった。
足を止めてしまっては遠距離を得意とするネギの格好の標的になっ

てしまうのだ。

「白き雷（フルグラアルゼカンス）！！」

「うおおおおおお！？」

ネギの手の平から発せられた熾烈な電撃が鳥居の上の小太郎に直撃。小太郎はそのまま前のめりに倒れ、地に落ちた。

「やった！やるじゃないネギ！！」

「フェイントを入れた三連発。対戦士魔法戦闘の基本だぜ！」

「まだです！！」

ちびせつなの言うとおり、小太郎は健在だった。地を蹴り、猛スピードでネギたちに向かって駆けてくる。

「今ので決められんかったんは失敗やな・・・俺の勝ちや！！」

ネギが次手を打つ前にもう小太郎はネギたちの懐までたどり着いていた。アスナのハリセンを潜り抜け、詠唱しようとするネギの腹を殴り、顔を殴り、地面に叩きつける。戦いの流れは小太郎のほうに一気に傾いていった。

「ネギ！！」

「あっ、そうやねーちゃん。俺は戦士ちゃうで。狗神使いゆーんや覚えとき」

小太郎の影から何匹もの黒い犬が湧き出し、アスナに向かって飛び掛ってくる。

「いやー！なによこの犬！？」

アスナは黒い犬に体中舐められ身動きが取れなくなり、カモとちびせつなは前足に踏みつけられて行動不能。そうしている間にも小太郎はネギに目にもとまらぬ高速の連激を浴びせかける。

ネギは手も足も出ない。

小太郎の攻撃は気によって強化された体を最大限に活用しての体術。その一撃は岩をも砕くほど。

このままでは近いうちにネギの障壁が耐えられなくなり、直接の一撃を貰うだろう。そうなれば命の保障は出来ない。

「護衛のパートナーが戦闘不能なら西洋魔術師なんてカスみたいなもんや！遠距離攻撃をしのぎ呪文を唱える時間をやらんかったら怖くもなんともない」

背後の岩に追い詰められ、更なる拳の雨を浴びせられるネギ。

「勝ったで！これでしまいや！」

小太郎の渾身の右パンチがネギに迫る。

ここでネギが動いた。

「契約執行０．５秒間、ネギ・スプリングフィールド」

ネギの左腕が小太郎の拳を受け止めていた。

と、その直後。ネギは右を振りぬいた。ネギの右手は小太郎の顔面を確かに打ち抜いて、その体を上に跳ね上げた。

「闇夜切り裂く一条の光、我が手に宿りて敵を喰らえ」

落ちてくる小太郎の背に手を当てて、最後の一節を唱える。

「白き雷」

ゼロ距離で雷光が迸り、小太郎の体を突きぬけ、跳ね飛ばした。

地に伏した小太郎は感電の影響からか体がうまく動かせなくなっていた。

「やったぜ兄貴！！」

「ネギ！！」

「どうだ、これが西洋魔術師の力だ！！」

小太郎に向けネギが力強く宣言した。それは実質勝利宣言といっても良いだろう。アスナたちも犬神の拘束から逃れている。ネギが残り、小太郎が敗れた。誰もがそう思うだろう。

しかし、そうはならなかった。

「ま、まだ終わらへん。こっからが本番や」

学ランを脱ぎ捨てた小太郎はその姿が大きく変化していた。黒かった髪は白く変色し、手は長く強靭になり、足も人のそれから犬のような形状に変化していた。

獣化である。

「なにそれ反則！」

「やはり狼男！この状態で戦うのは危険です！」

獣化した小太郎は一歩でネギの懐へ、筋骨隆々となった腕を振り下ろした。

「キャー！！」

「くう・・」

間一髪かわしたネギとアスナだが、その一撃の威力の大きさには眼を剥いた。さっきまでの数倍にまで跳ね上がった小太郎の拳は地面を砕き、大きな石片があたりに吹き飛んだ。

「滅茶苦茶だ！こんなのほっといて逃げよう！」

それでもネギは逃げなかった。再び自分の体に魔力を供給し強化する。それは賢明な判断だろう。脱出方法も分からない現状でこの相手から逃げてもどこまでも追撃されてしまうし何よりも速度で劣る。逃げ切ることは出来ないだろう。

「いいぜ、ネギ。もっとやろう！！」

小太郎が速度（アクセル）を全開にした。

姿がぶれ、ネギの視界から消える。早すぎて眼で追えない。

「もらったで！ネギ！！」

小太郎がネギの胴に爪を付きたてそのまま引き裂いた。

「ネギー！！！」

「兄貴ィー！」

「！！」

アスナとカモが悲鳴にも似た声で叫び、ちびせつなが息を呑む。

しかし、驚いていたのは小太郎のほうだった。なにせ、手応えがなさすぎた。おまけに自分が打ち倒したはずのネギが揺らめき溶けるように薄くなっていく。

「まぼろし！？」

「この術は！？」

刹那がその正体に気が付いた。以前一度だけ見たことのある術だった。そしてその使い手は。

「ふう、間に合いました」

アスナの隣にいた。ネギを小脇に抱えている。

「本屋ちゃん！？」

「のどかさん・・？」

アスナとネギが信じられないとばかりに眼を見開く。

しかしそこにいるのは紛れもないのどかで。

「宮崎さん！大丈夫なんですか！？」

事情を知るちびせつなが心配して問いかける。

「この状況ですし、しょうがないですよ。とにかく今はこの結界から脱出しましょう。向こうに向かって全力で走ってください」

のどかが指すほうには相変わらず無限に連なる鳥居があるだけ。

「脱出方法が分かるんですね！」

「とにかく走ってください！！」

のどかが有無を言わせずに指示を出す。

なんとでもなれとアスナが駆け出し、後をネギが追う。そしてネギに併走するようにのどかが走る。

「どれだけ封鎖されていようと、必ず脱出路はあるものです。それは外界からの入り口であり出口でもある、魔力を入れ替える換気口とも言うことのできる場所が」

走りながらのどかが説明する。

外界と切り離した結界であろうともその維持には魔力が必要であり、それを結界の内側だけでどうこうするのは難しい。必ずといってよいほど外とつながっている場所があり、そこから魔力を取り込み、古い魔力を排出することで結界を維持しているのだ。そしてそういった穴は術者本人が外部へ逃れるときに使用されることも多い。

のどかははじめ結界を解除しようとしたが思っていたよりも複雑な術式であったために、一度侵入してネギたちを連れ戻すという方

針にシフトさせたのだった。

「魔法の射手、連弾・光の三矢」

のどかが放った光の矢はとある鳥居に真ん中と左右に一発ずつあたった。

それが鍵となって鳥居の内側が白く光りだした。空間の亀裂だ。

「逃がすかー！！」

小太郎が追いすがる。流石に速い。このままでは脱出前に追いつかれる。

「眠りの霧」

「うぷ！？」

ネギが機転を利かせて魔法を使う。相手を眠らせる魔法で、なかなか戦闘では使えない魔法だが、不意打ちに近いこの状況なら多少の効力はある。何より眼くらましになる。

「神楽坂さん！」

「まかせて」

アスナがハリセンで結界の亀裂を破壊し、外に飛び出した。

それに続きネギたちも外に出る。

「結界を閉じて逆に封じ込めます」

ちびせつなが術を行使、再び無間方処を発動させ、小太郎を閉じ込めた。

「くっそお、やられてしもた」

小太郎が仰向けに倒れ悔しそうにつぶやく。

「ネギ・スプリングフィールドか・・・・つぎは俺が勝ったる・・・・」

そういって小太郎は重いまぶたを閉じた。

千本鳥居の罠（後書き）

結界云々の話はこの小説内の結界の基本設定だと思ってください。ただのどかもそこまで知識があるわけではないです。これ以外の性質の結界も存在します。のちのち出していく予定。

まき絵のアーティファクトは胴体部分はさらしを巻いたような感じでやっていきます。つまり胸から下は巻いてないって事ですね。

「はあはあはあ・・・」

「ぜえぜえ・・・」

街をひたすらに走る刹那たち。

刹那と恋は息を切らせていないが他のこのか、ハルナ、夕映はそろそろ限界が近い。

「くっ！」

背後から鉛筆大の鉄杭が飛んでくる。恋はそれを気づかれないようにすばやく獲ると懐にしまいこんだ。

「刹那、これはまずいね」

「はい、このままでは皆さんの体力が続きません。どこかで休みを取りたいところですが・・・」

追手は白昼堂々攻撃を仕掛けてくるような連中だ。迂闊に足を止めてしまえばこのかだけでなく、ハルナや夕映にまで危害が及びかねない。

「なんとか・・・！ここは」

「ここってシネマ村!?刹那さんここに来たかったの!?」

京都の観光名所のひとつであるシネマ村。この時間帯は特に人の

出入りの激しい時間帯。うまく紛れてしまえば撒けるかもしれない。
そう考えてからの刹那は早かった。このかと楽しみたいという旨を伝えてこのかを抱えたまま金も払わず壁を飛び越えて中に入ってしまった。

「ええー！！」

「なんてジャンプ力」

ハルナと夕映が驚いている間に恋は刹那との打ち合わせ通りに動く。

「それじゃ、ハルナ、夕映。わたしはちょっとはずすわ」

「へ？」

「どうしてです？一緒に行けばいいのでは？」

「ちょっと思うところがあってね、じゃ」

そういうと恋は二人を残してその場を後にした。

「どーなってんの、コレ？」

「さあ」

取り残された二人は首を捻りながらもシネマ村に入場した。もちろん金を払って。

「はー刹那せんぱい・・・お仕事でなくても仕合いたいひ人やわ」

電柱の上に立ち、刹那たちの入ったシネマ村を眺めているのは、二刀使いの剣士、月詠。先ほどの襲撃もこの月詠によるものであった。

その月詠の背後に影が突然現れた。

「ほへ？」

「ダアアアアアアア！！」

恋が紅く幅の広い西洋剣で切りかかったのだ。初手から殺しにいく勢いで剣を叩き付ける。

ガアアアン！！というまるで鉄骨を叩きつけたかのような壮絶な音が響き、月詠の小柄な体が吹っ飛んでいく。しかし体が真っ二つにはなっていない。間一髪のところで刀を盾にしたようだ。

月詠は空中で体勢を整えるとなんでもなかったかのように住宅の屋根に着地して恋を見る。

「確かバイクに乗ってた人やったなー」

「覚えててくれて何より。こんなところで悪いけどこのかに近づけるわけには行かないの」

「そう言われてもな。こっちも仕事やし、引けませんえ」

「だったらここで倒れろ!!」

恋が電柱を強く蹴って、月詠に向かって一直線に跳んでいく。
月詠はあえて避けようとはせず、剣を交差させて恋の炎剣を受け止めた。

「ほよ?」

が、月詠の想像していたよりもずっと勢いがあったのか、体が浮き上がり、恋に再び弾かれることとなった。

「おねーさん強いなー。ふふっこれは、切りがいがありそうや」

月詠は頬を蒸気させ、楽しそうに、それでいて恍惚の表情を浮かべて恋を見つめる。

「なに?コイツ」

そんな月詠に見つめられた恋は背筋が凍りついたかのような錯覚を覚えた。間違いなく本質的な部分でこの少女は異質、異常であると恋の第六感が告げている。
人を切ることに対して悦を見出しているのだ。
剣筋も退魔というよりは対人に特化しているように思える。

「ほな、行きますえ・・・愉しませて」

「月詠さん、そのくらいにしようか」

「!?」

月詠が刀を構え、いつでも切りかかれるという体勢を整えたところで、白い髪の少年が現れた。
ここに至るまでまったく存在を感じさせなかったことからもその実力はきわめて高いのだと推察できる。

「えーフェイトはんのいけず～」

「君には君の仕事があるだろう。それをまず片付けてくれないかな」

一見、フェイトが頼んでいるようだが、そこには明確な上下関係が見て取れる。すなわち、月詠に指示を出せる立ち居地にいる人物ということだ。

（月詠よりも格上か。一昨日の石の槍はたぶんこいつだな・・・・とすると結構やばいわね）

見た目は妹のアテナと同じくらいの少年であるが、その実力は圧倒的に上であろう。少なくとも今まで戦ったことのないくらいの強敵。

「はあ・・・しゃーない。おねーさん斬りたかったんやけどな。まあ刹那せんぱいと仕合えるしええか」

そういうと月詠は跳躍して屋根から下りると、シネマ村のほうへ駆けて行った。
しかし恋はそんな月詠には眼もくれず目の前の少年を睨み付ける。

「追わなくていいのかい？」

「君に背を向けられるんなら追う」

「なるほど・・・やはり君は一番やっかいだ」

フェイトが構えを取る。中国拳法の構え。対する恋は炎で長槍を作り出して構える。得体の知れない相手に距離をとりつつ、手数で攻めるつもりだ。

両者ともに様子をみる。僅かな物音すら騒音に思える、静寂と緊張が辺りを包んでいた。

そして最初に動いたのは恋だった。

「追いつきましたえー刹那せんぱい」

「!?」

着物を着込んだこのかと新撰組の衣装を着た刹那に貴婦人風の女の子が話しかけた。無論月詠である。

「お前・・・恋さんはどうした!?」

月詠の元には恋が向かったはずだ。それなのに恋がこないで月詠がやってきた。これは恋が負けたということではないのか。

そんなことは無いと自分に言い聞かせる刹那だが、状況を見る限り否定できる材料のほうが少なかった。

そんな刹那の内心の焦りをあざ笑うかのように、月詠は派手な扇で口元を隠すと、くすくすと笑ってこういった。

「あの人は恋はんって言うんどすか～すごく斬りがいのあるえー身体してはったえ」

「貴様ァ！！」

頭に血を上らせた刹那が月詠に切りかかった。このかの制止の声も聞こえない。しかし、この月詠にそんな我武者羅な攻撃が通じるはずも無く、あっけなく跳ね返されてしまった。

「っくう」

「そんな心配せんでも、恋のおねーさんはうちの知り合いがお相手しとります」

「恋さんは無事なんだな」

「さあ。なんせあの人は強いからなー今頃どうなっとるか・・・お仲間を助けに行きたいのならうちを倒してからにしてください。ただし、うちが勝ったら、お嬢様はいただきますえ」

月詠が自分の手袋を刹那に投げつける。中世騎士風の決闘の申し込み。

刹那がよく分からないという顔をしていたところにこのかが近寄ってきてこう言った。

「せっちゃん、これ劇や劇」

「なるほどそういうことですか」

劇に乗じてお嬢様を堂々と連れ去るつもりか。

「そうはさせない。お嬢様はわたしがお守りする！！」

「キャーせっちゃんかっこええ」

このかが刹那の腕にすがりつくようにくっ付いた。敵の作戦通りに劇だと思い込んでいる。

周囲の見物客もヒューヒューとはやし立てる。

「ほな、いきますえ」

ぞくり、と背筋が震えた。それと同時に刹那は夕凪を顔の高さに地面と平行になるように構える。そこに斬撃がきた。

「おお！」

最初の瞬動を見切られたことへの驚きが月詠の口の端から漏れる。

刹那はそのまま横に剣を振って月詠と遠ざけた。

「お嬢様はお下がりください！！」

「あ、せっちゃん！！」

今度は刹那が攻めかかる。

野太刀の大きさを活かした上段を踏み込みの勢いのまま放つ。

これは月詠の右手の剣で防がれたが、リーチを活かすべく月詠に踏み入らせぬよう連続で剣を振るう。

「にとーれんげきざんてつせんー」

「チッ」

月詠の奥義に刹那は攻めの手を止めねばならなかった。二人の剣がぶつかり合い、鍔迫り合いになる。

「おまえは何故向こうに着いた？目的はなんだ！？」

「目的？そんなん決まってますやろ・・・強い人を切ってみたいだけ」

「戦闘狂（バトルマニア）、いや、それ以上に性質が悪いな！」

互いがほぼ同時に距離を取り仕切りなおす。彼我の距離は刹那も月詠も一歩で詰められる程度だが、迂闊に攻め入って手痛い反撃を受けるかもしれない。今は互いに様子を見る段階。と、そこにちびせつなと同じくらいの大きさのちびねぎが現れた。

「刹那さん！この状況は！？」

「ネギ先生！？」

ネギの登場に驚くも隙を見せないように気をつけて問いかける。

「どうやってここに？いや、そんなことよりもこのかお嬢様を連れて安全なところまで逃げてください」

刹那はすばやくちびねぎを等身大に変化させこのかを連れて行くように頼んだ。

「わかりました！このかさん、行きましょう！」

「ネギ君？いつの間に」

すぐにネギはこのかの手を引いてその場を後にした。

雑踏にまぎれてしまったので刹那のほうからはもう見えない。

「お話は終わりましたかー」

「律儀に待つことも無かっただろうに」

「いややなー尋常の勝負の最中ですえ、無粋な真似はたぶーや」

今、月詠にはこのかは眼中に無かった。恋との愉しみをお預けにされたこともあって、刹那と愉しむことのみを目的として剣を握っている。

「ざんがんけん」

「斬岩剣！！」

同種の奥義が火花を散らせてぶつかり合った。

そのころネギとこのかは城のセットの中にあるのぼり階段を駆け上がっていた。

「あ！ネギ君、部屋や」

「よし、あそこに隠れましょう」

前方の空き部屋に襖を開けて入り込む。

しかし、そこにはもう先客がいた。

「ふふ、ようこそお嬢様」

このかを誘拐しようとしたお猿の女であった。ネギたちはまんまと追い込まれていたということだ。

「くっ」

ネギはこのかの手を引いて再び駆け出した。階段を下りようとしたのだが、そこにはもう敵の式神が待ち受けていて下れない、しかたなくネギは上に上っていった。

「おいかけっこは終わりか？ぼーや」

ついにネギとこのかは天守閣の上にまで追い詰められてしまった。実体の無い今のネギではどうにもならない。魔法も使えなければ、空を飛ぶこともできないのだ。

「ふん。これが見えるやろ？一歩でも動けば撃たせてもらいますえ」

猿や熊の式神とはまったく違う、本当にごつい鬼が弓に矢を番えてこのかを狙っていた。

（なんてことだ。刹那さんは僕を信じてこのかさんを託してくれたのに）

ネギがそんなことを思っていると、不意にこのかが話しかけてきた。

「ネギ君大丈夫や。せっちゃんがおる。せっちゃんはどんなときでも助けてくれるんや」

このかは笑顔だった。不安などというものは何一つ抱いておらず、刹那を心から信じているというそんな笑顔。

このかとてこれがただの劇ではないということはうすうす感づいていた。もしかしたらすごく危険なことに巻き込まれているのでは、という思いもある。だが、それでも刹那という幼馴染の存在がこのかの不安をすべて消し去ってくれていた。

「このかさん・・・」

そのとき、ゴウッと突風が吹いた。ここは周囲に風を遮るもののない天守閣の上。強い風が吹いてくるのは至極当然。バランスを崩したこのかを支えようとネギが動いたとき、命令に忠実な鬼が引き絞っていた弦を放し、矢を射ってしまった。

「あー!!なんで射つん!?お嬢様に死なれたら困るやろ!!」

矢が空気を裂いてこのかに迫る。ネギが慌てて前に出てなんとか矢を止めようとするも、実体のないネギでは矢を止めることなどできるはずも無く、射ち抜かれてしまった。

「このかさん!!」

しかし、このかの命を奪うはずの矢は、このかには中らなかった。刹那が射線に割り込み身を呈してこのかを庇ったからだ。結果、

矢はこのかの変わりに刹那の左肩に突き刺さった。

「せっちゃん！」

「ぐ」

刹那は苦悶の表情を浮かべたまま、矢が突き刺さったときの衝撃で屋根から真っ逆さまに転落した。

「刹那さん！！」

そのときこのかは刹那を追って身を投げ出した。魔法の使えないこのかではこの高さから落ちて助かるはずも無い。

このかは落ちていく刹那を抱きとめ、念じた。ただひたすらに親友の無事を。

「うちがせっちゃんを助けなあかん」

奇跡が起きた。

このかの決意に、思いに呼応して、膨大な魔力があふれ出した。大気を押しのけるほどの力はこのかを中心に発生し、池の水を大きく波立たせ、二人はふわりと着地した。

「すげえ！」「ほんとにＣＧか！？」「ちくしょーカメラ忘れた！」

見物客も大いに盛り上がっている。なにはともあれ魔法だとは気づかれていないようだ。

「お嬢様・・力をお使いに？」

刹那は無事だった。

弩砲並みの威力の矢に貫かれながらも、すでにその傷はふさがっていた。

このかの秘めたる力の片鱗であった。

「せっちゃん。大丈夫やった？」

「はい。ありがとうございます」

「刹那さん」

そこにちびねぎとその上に乗ったカモがやってきた。

「敵の数が多すぎる。一度落ち合おうぜ」

「そうですね。お嬢様、これからご実家のほうに参りましょう！神楽坂さんと合流します」

「・・・どうやら、向こうは終わったようだね。なら、僕がここにいる意味は無い。引かせてもらうよ」

そう言うとフェイトは足元の水溜りに沈むようにして姿を消した。

「はぁはぁ・・・ギリギリだった。今のわたしじゃまだ勝てないか」

フェイトが消えたことでその場に膝を着いて休む恋。
あの少年の実力は恋をして圧倒的だった。
それはエヴァンジェリン戦以来の完全敗北だった。

シネマ村　お嬢様争奪戦（後書き）

うっし、ちょっと本山行ってくる！！！

書きながらおもった。ちょっと恋が変なのに好かれちまった！？と。

一時の安息と強襲

（なんなのこの状況はーーーーーーー！？）

アスナがネギを背負いながら心中で叫んだ。

時を遡ること数分前。

シネマ村襲撃のことを心配しながらもねぎの回復のために休憩を取っていたときのことだ。

「桜咲さんだけで大丈夫？助けに行ったほうがよくない？」

「大丈夫だと思いますよ。シネマ村からは無事脱出したと聞いてますし」

刹那たちを心配するアスナの提案にネギが答えた。

合流してから本山に行くという事は刹那のほうから携帯で連絡してきたことだ。その際に休んでおくようにとも言われている。

「～でも・・」

「あ！ほら来ましたよ」

ネギが見たほうからは数人の人影。

刹那、恋、このか・・・・だけでなく朝倉、夕映、ハルナ、そしてなぜかまき絵まで混ざっている。

「えええええーーーーーーーーー！！」

ということがあって先ほどのアスナの心中に繋がっている。

「朝倉！あんた危ないって知ってんでしょ！！」

「いや、そうなんだけどね、パルたちが桜咲のことを追跡してるっぽかったからさ。まーあれよ、なんかやばくなったらフォローして一緒に逃げるし。あと佐々木がいんのは成り行き、他の班員とはぐれたとか言ってた」

「逃げるってそんな相手じゃ」

「おー！あれが目的地！？よし、わたしが一番乗りだ！！」

アスナが朝倉と話している間に到着したようだ。

ハルナが真っ先に駆け出していく。

それは大きな寺社の山門であり、それを潜った先には神社というよりはまるで平安貴族の邸宅のような建物が密集して建てられていた。

関西呪術協会総本山。

そして。

「お帰りなさいませ、このかお嬢様」

このかの実家でもあった。

ネギたちが通された場所は檜の床板が張られた、体育館並みに広い場所。端では幾人もの巫女が雅楽を奏でている。

ネギたちは正面の階段に向かい合うように座布団の上に正座して長を待った。

数分の後に階段を下りてきたのは、細身の男性。

「お待たせしました。このかのクラスメイトのみなさん。そして担任のネギ先生」

近衛詠春。大戦を駆け抜けた英雄の一人であり、このかの父親。そして関西呪術協会の長である。

「東の長、近衛近右衛門から西の長えの親書です。お受け取りください」

ネギが差し出した親書を詠春は受け取ると、中を確認し、こう言った。

「東の長の意を汲み、東西の仲たがいの解消に尽力するとお伝えください。任務ご苦労。ネギ・スプリングフィールド君」

紆余曲折はあったものの、ここにネギの任務は達成された。

「今から山を降りては日が沈んでしまいます。今日は皆さんここに泊まると良いでしょう」

ええーやったあ！と和美やハルナが盛り上がる。相手は一組織の長なのだが、彼女達からすればこのかの父親以上のものはないのだ。

「ああ、それと恋くん。妹さんが来ているから、まずはそっちに行くといいでしょう」

「はい」

その日の宴会はそれはもう豪勢なものだった。日本のどこにホンモノの巫女さんたちとどんちゃん騒ぎをしながら食事をするところがあろうか。

「あれーこの娘誰？」

そんな中恋のところまでやってきたハルナが恋の隣に座っている少女に目をつけた。綺麗な銀髪の上に青い猫耳ぽい形のニット帽を乗せた十歳くらいの女の子。着ている衣服が懐かしの麻帆良小の制服だったから気になったのだ。

「この娘はアテナ。わたしの妹」

「坂井アテナです。よろしくお願いします」

ペコリと箸を持ちながら頭だけ下げるアテナ。

今日アテナがここにいるのは五年生必修の学校行事である京都旅

行で京都を訪れ、その過程で抜け出してきたのである。ちなみに学園長から許可を取っている。

「あ、そっかそっか寮長室の前で時々見かけたあの娘だねー。恋の妹だったんだ」

「でもなんで髪が銀色？恋は黒いのに」

「あ！コラまき絵」

恋が注意する間もなかった。それを聞いたアテナが箸を取り落とす。そして、その表情が見る見る翳っていく。

「・・・わたしだって黒が・・・好きで銀になったわけじゃ・・・・」

アテナは急速に鬱状態（ネガティブ・モード）に陥っていった。

「あ、あれ？」

「まき絵！アテナが気にしてることを！」

「ゴメンなさーい！！」

まき絵があたふたとしているが、これといって打開策があるわけではない。なにせバカピンクこと佐々木まき絵は悩みとは無縁の生活をしていたのだから、家族の中で一人だけ髪色が違うという悩みに共感することは出来なかった。

「ほらほら、おーよしよしお姉ちゃんが付いてるよー」

恋が生気を失ったアテナの頭を抱き寄せて、頭をなでる。
アテナも気持ちよかったのか恋の胸に顔をうずめる。
しばし、もぞもぞとした後、アテナは顔をうずめたままつぶやいた。

「・・・・・・・・・・ちゃん」

「ん？」

「胸、大きい」

「今関係なくね！？」

アテナもいろいろと気になる年頃のようだ。

宴のあとは各々が自由に行動していた。

刹那はこのかに魔法のことを話すために風呂場にいるし、アスナはこのかを迎えに行った。和美やハルナ等は部屋で騒いでいることだろう。恋とアテナは姉妹水入らずで過ごしていいという配慮からか他の面々とは別の部屋を宛がわれていて、風呂上りの火照った体を冷ましているところだった。

「はー、やっぱり良いお湯だったね。アテナ」

「うん。広いしね」

畳に座り両足を前にだらっと投げ出したアテナの髪を、立ち膝の恋が櫛で整えながら話している。

アテナは服を私服に着替えている。制服は嫌いなのだ。

「うちの風呂場はそんなに大きくないし、お姉ちゃんの手形とか付いてるからね」

「それを言うならアテナの握った所だって凹んでるからね」

坂井邸の風呂場は娘達によってかなり酷いことになっているようだ。

恋もアテナも幼い頃は力を制御できず、家の物品をいくつも破損させていた。もっとも両親は恋が生まれてからアテナが生まれるまでの四年間でいろいろな経験をしたのでアテナにはそれなりの対処をはじめからしていた。よって、壊した物自体は恋のほうがずっと多い。

風呂場に関してはそう簡単に取り替えられないということもあって、そういった歴史を今に残す貴重な品となっている。

「はぁ〜京都いいわー。なんと言うか、歴史ある古都でありながらも発展してるところが好き。歴史だけを売りにしてもコアな人しか来ないよね、島根みたいに」

「まあ、出雲大社くらいしか、ってコラ、アテナ、島根県民に謝りなさい。歴史を売りにして成功してるところだってあるでしょ。平泉とか、会津とか。愛知なんて江戸時代の大名の七割を輩出してる信長のお膝元」

「それはそうだけど、活かしきれてないところも多いってゆーのか、新潟なんてガッツリ東北だし、緯度的に」

「それは、たぶん言っちゃいけないことじゃないかな・・・新潟ちゃんも「東北だけはちげえー」って叫んでたし」

「電気は東北電力だけどね」

「ガスは北陸ガスだよ」

不毛だ。そう思ったとき、アテナの感覚に何かが引っかかった。

「？」

一瞬遅れて恋も感じた。不穏な気配。

「これは！？」

外を確認してみると、アレだけ騒がしかった本山内が異様に静かになっている。気づかなかったのが不思議なくらいだ。

恋とアテナは慌てて飛び出していった。

恋とアテナが異変に気づく、その少し前。

「ちょ！夕映、毒沼パネルにポイズンファラオってえげつな！？し

かも自分はサンクチュアリ!?わたしサイトだよ!HP500しかないってのに!!」

「対戦でプリズム&フォレストボム使ってくる人に言われたかないです!」

ハルナと夕映が遊んでいるのは懐かしのGBA。

とくにエグゼ2が図書館島探検部でちょっとしたブームになっていたりする。懐かしいゲームをしてみたらハマッタっという感じだ。

「あーくっそぉ夕映反則ー」

「戦術です。のどかは?」

「わたし?二人が戦ってる間にフォルテSP倒しちゃったよ」

ちなみにハードモードのフォルテSPである。

「それ、早くね?」

「わたし、チャージショットが必殺だし。しかもアクア」

「スタイル合体!?」

「チートです!?」

スタイル合体。ショット一発でいかなる敵も葬り去るトンでもスタイルを手に入れることが出来るのだ。そしてのどかのアクアはショット最速で誘爆機能付き。

エグゼ2はチート技が多くて困る。名作だが。

「なんかよくわかんないけどみんな反則だよね」

眺めていたまき絵がそう漏らした。

そして、事態は急に動き出す。

コンコン・・・

部屋の障子戸がノックされた。それに応じたのはハルナ。戸を開けた瞬間にボン！・・・灰色の煙がハルナを包み、そして、石に変えた。

「！？」

「こりゃあ」

のどかと和美は状況をすぐに理解した。

石像となったハルナの脇を通って現れたのは白髪の少年。

「君たちにも眠っててもらうよ。石の息吹」

石化の煙が室内を満たした。

フェイトが石の息吹を使うほんの僅かな間にのどかは外に飛び出すことに成功していた。

傍らには何とか連れ出すことの出来たまき絵がいる。

「なななんなのこれ、本屋ちゃん!?」

「これは・・・まきちゃん、とにかく山を降りて。逃げて!」

「え?え?ど、どうして?」

突然のことにまき絵は混乱をきたしている。のどかはそんなまき絵の頬を叩いて、話を聞かせる。

「ちゃんと後で話します。今は逃げて」

のどかの真摯なまなざしと説得を受けてまき絵は何も言わずに頷いて山を駆け下りていった。

のどかに従わねばならないとまき絵は直感したのだ。

「もしかして君かい。小太郎を邪魔したというのは」

背後にフェイトが現れる。

月明かりに照らされた顔に表情は無く、冷たい印象を抱かせる。

人間らしさが感じられないという言葉がこれほどしっくりくる人にのどかはあったことが無かった。

「!?」

のどかは半ば反射で首を捻る。頬を何かが掠めた。フェイトの腕だ。それは、のどかの顎を狙った掌底だったのだ。

のどかは身を翻し、フェイトと距離をとると同時にポケットに忍ばせていたケースからカプセル状の何かを口に入れて呑み込んだ。

「？」

怪訝そうにするフェイトの前でのどかの魔力が上昇する。
同時に瞳も金色に染まる。

「なるほど、ドーピングの類か。その瞳を見る限り半魔か何かだったようだね」

そう、ドーピングだ。のどかが飲んだカプセルにはアマネや恋に提供してもらった血液が封入されている。直接吸血するよりは力が弱まるが、緊急時に摂取する分には使える。
にらみ合いは数秒も続かなかった。瞬動でフェイトが急接近し、今度はボディブローを打ち込んでくる。

「ッ」

のどかは眼を最大に使って、一瞬先を視る。フェイトの右腕の軌道から体をずらし、左手で向かってくる腕を押すようにして逸らした。

「！？」

結果としてフェイトの攻撃は空振りに終わる。
次に射程に入り込んだフェイトにのどかが反撃する。フェイトの脇腹を目掛けて強化した手刀を叩き込む。が、この腕をフェイトにつかまれた上に放り投げられる。

「何？」

驚愕したのはフェイトのほうだった。
確かに掴んで投げたはずなのに、その感覚が無かった。まるで蜃気楼のようにのどかの姿が揺らめく。

「幻術か、くだらない」

「あ、がッ！？」

背後をとったのどかの鳩尾にフェイトの肘が吸い込まれるように入った。

（息が・・・『できる』！）

歯を食いしばり、気力で踏ん張りながら、一瞬止まった息を自己暗示によって無理やり再開させる。武道を極めたものが呼吸法などで体の潜在的能力を引き出すように、のどかは自分に対する幻術という方法を持ってこれを行う。ただし、体を酷使するこの方法はめったなことでは使えない。

（せめて、恋が来るまでは時間を稼がないと）

「魔法の射手、連弾・砂の十一矢」

フェイトから砂の塊が弾丸のように飛んでくる。のどかはその軌道を読みきって回避。
視ればフェイトが次の術の準備をしているのが眼に映る。

「「石の槍」」

フェイトとのどかの両方の足元から尖った石柱が突き出し、お互

いを砕きあった。

「驚いたね同じ術とは」

フェイトは気づいていないがのどかが同じ術を使えたわけではない。恐ろしいことに、石の槍を習得したのはたった今のことだ。単純な魔法ならこうして所見でコピーしてしまうのものどかの魔眼ならではのことだ。

「魔法の射手、収束・光の二十九矢！！」

のどかの手から収束し一条の光線と化した魔法の射手がフェイトに向かって放たれた。

「そんなものでどうにかできると、ッ！？」

再びフェイトは驚愕に顔を染めた。

（な、んだ）

突然の出来事に声も漏らせなかった。

それはフェイトがのどかの魔法を迎撃しようとした瞬間のことだった。

フェイトの見ていた視界がいきなり『ブレた』のだ。

かと思えば光輝く魔法の射手は消え去り、代わりに見えるのは月光を湛える森の木々。

（視界への強制干渉！）

正体を看破したその瞬間にフェイトの胴に魔法の射手が突き刺さ

った。

「どう、これなら」

相手の視界に干渉し見ている方向とは違うほうを見せる魔法『琉眼』。仕込みに時間がかかる上、効果は一瞬。しかも上位のものには最初の一発しか効果を期待できない使いどころの難しい魔法だ。

しかし、一瞬でも成功すればその効果は非常に大きいものになる。フェイトほどの術者に一矢報いたのだから。正確には二十九矢だが。

無防備になったところへの二十九本の魔法の矢。さすがに効いたはず。

のどかは一撃もらった鳩尾を右手で押さえながら煙で見えなくなったフェイトを探す。

「これほどとは思っていなかった。認識を改めるよ。でも、ここまでだね」

その声は後ろから聞こえた。

のどかが振り向いた瞬間。体を細い光の線が貫いた。

「あ、う」

のどかは胸元から急速に感覚が消えていくのを感じた。それが、全身に広がっていく。

石化しているのだと、遅まきながら悟った。石になった後自分はどうなってしまうのか分からない。ここに来て僅かばかり考える時間を得たのどかの胸中には自分の未来や仲間の安否への不安。そして、最後の一撃がなぜ回避されたのかという疑問。そういったものがひたすらに渦巻いていた。

結局その問いに回答を得ることが出来ないままのどかは意識を手放した。

「幻術（イリュージョン）を使うのは君だけじゃないということだよ」

石像と成り果てて物言わぬのどかにフェイトはそう言って、消えた。

一時の安息と強襲（後書き）

投稿直前まで出雲大社のところを鳥取と書いていた。ゴメンナサイ！！つーか島根のネガティブＰＲ吹いたわ。すげーって思った。

とりあえず出雲と諏訪には行きたい。

新潟ちゃんとかは某都道府県擬人化漫画をそのまま持ってきちゃった。坂井家どこにしようかな。関東と関西から距離をとったとこが理想的。新潟、長野、山形あたりか・・・石川もアリかな？

エグゼ２とか分かるかなー

激闘の始まり

「みんな、大丈夫！！」

不安感に駆られた恋とアテナはのどかたちがいるであろう部屋に来た。しかし、ときすでに遅し。入り口には口元を手で覆った形で時を止めたハルナと奥には和美が石となってしまっていた。

「くっ・・・あそこ！」

恋は和美の後ろの戸が開いていることに気が付いた。そしてここには二人の石像しかない。

希望を抱きそこから外に出る。

「のどか！！」

外に出た恋を待っていたのは物言わぬ親友。周囲の状況を見る限り、ここで何者かと戦ったようだ。

「ッぅ・・・」

ギリッと奥歯を噛む恋。

その恋の服をアテナが引っ張る。

「アテナ」

「お姉ちゃん。今は」

「・・・そうね」

今は、やらなきゃいけないことがある。
そのとき、携帯が振動した。マナーモードのまま放っておいたのだった。

『恋!?大丈夫!?』

「こっちは・・・のどかがやられちゃったけどわたしはなんとか・・・アスナは?」

『ゴメン。このかが攫われちゃった。長さんも石にされたみたいで』

「西の長まで!」

いくら老いたとはいえ、両親と同格の人間が倒されたことは恋に大きな衝撃を与えた。
なにせ、近衛詠春といえば、母としのぎを削った剣士だったのだから。

『恋?大丈夫?』

「あ、うん、それで刹那たちは!?」

『今、追ってる。なんか追跡妨害(ジャミング)がどうとかですぐ行かないとって』

「わかった。わたしもすぐに向かう」

追跡妨害を掛けられれば確かにこのかを追うのは難しくなる。一分一秒を争うときにそれは拙い。

「行くよ、アテナ！！」

「うん！！」

恋とアテナはアスナたちを追って走り出した。

「お嬢様を返せ！！」

刹那を筆頭にネギとアスナが主犯・天ヶ崎千草に追いついた。

千草の後ろにはフェイトとこのかを抱いた猿のきぐるみが立っている。

単純な戦力的には3対3のガチンコだが、フェイトは三人がかりでもどうかという規格外。それが分かっているために迂闊に攻め込むことが出来ないでいた。

「千草さん、下がって」

刹那たちは敵の出方を伺っていると、フェイトのほうから前に出てきた。

来るか！刹那が身構えたときだった。

グワアアアアン・・・爆音が轟き、視界に紅蓮が走る。

「なんやーーーー！？」

「炎！？」

刹那の背後から夜空を切り裂いて紅い閃光が奔る。
それは矢だ。魔法の矢とは違う、武器の矢の形をした炎塊がフェイト目掛けて落ちてくる。

「フン・・・」

それをフェイトは右手で受け止めた。より正確に言うと、右手から展開した障壁が受け止めたのだ。矢が破裂し、紅蓮の炎が炸裂するも無傷。

「やっぱ、ダメだったか」

紅い弓を携えた恋とアテナが刹那たちに追いついた。
威力は高いが、フェイトが防ぐことを見越した上での射撃だった。

「恋さん！」

「よかった、無事でしたか」

ネギと刹那が恋の合流に喜ぶ。

「ふう、熱う・・・ふっ役者がやっと揃いましたな」

ワタワタとしていた千草だったが虚勢っぽく笑みを浮かべると話しだした。魔力も高まっていく。

「お嬢様の力の一端・・・見せたるわ」

オン　キリキリ　ヴァジャラ　ウーンハッタ・・・・

千草が奉献供養の真言を唱える。

このかの魔力が利用され、地面に現れた魔法陣から無数の魔物が現れる。数は優に百を超えており、もしかしたら二百を超えたかもしれない。

「ちょっと、何よこれ！こんなのアリなの！？」

「やろーこのか姉さんの魔力で手当たりしだいに呼びやがったな！」

鬼をはじめとする妖怪の壁が千草との間に並び立つ。攻め手の無いまま離れていく千草たちを見送るしか出来なかった。

「アニキ、時間が欲しい障壁を」

「わかった。逆巻け春の嵐、我らに風の加護を、風花旋風風障壁！！」

ネギの魔法で、周囲に竜巻が起き、外界から隔絶する。

「これは」

「風の障壁です、ただし一、二分しか持ちません」

一、二分。それがネギたちに与えられた時間。それまでに打開策を示さねばならない。

「二手に分かれましょう。わたしがここで鬼を相手にしている間にみなさんはお嬢様を」

「そんな、無茶です」

「大丈夫です。もともと鬼を退治するのが仕事ですから」

神鳴流が退魔の剣であることはネギもアスナも分かっていたが、多勢に無勢。さすがに反対する。

「刹那さんが残るならわたしも残る！！一人になんて出来ない！」

「ええ！？アスナさん！？」

アスナの言葉に一同驚く。しかしネギの肩にのったカモはそこから分析を進める。

「いや、案外いいかもしれねえ。姉さんのハマノツルギははたけば召喚魔を一発昇天させる優れものだ。この鬼には相性がいい。現状、無理にあの白髪の少年と戦う必要はねえ。このか姉さんさえ取り戻せればいいんだからな」

儀式の中核であるこのかを取り返せればいいのだ。規格外のフェイトと戦う必要は無い。

「じゃあさ、最悪の場合はどうする。つまり、敵の儀式が成功してしまった場合」

恋が口を開く。

「儀式の成功って？」

「向こうの狙いはよくわかんないけど、関東を力で制圧できるようなのをこのかで制御しようとしてる。もし成功したら被害は甚大になると言っていい。下手をすればこのかの命を狙わなくちゃいけなくなるかもしれない」

強大すぎる敵の心臓がこのかだとすればこのかを狙わねばならないのは当然のこと。そしてそれを為すのは必然的にこの場にいる自分達。

それは、誰もが予想し、それでも触れてこなかった、触れたくなかった事だった。一人を除いて。

「フン！！」

ゴスッ・・・

アスナの頭突きが恋の額にクリーンヒットした。障壁の貫通を確認。

「おおおおおおぉぅぅぅ・・・何すんじゃー！」

「それはこっちのセリフよ！言うに事欠いて何てこと言ってんの！バカじゃないの、失敗したときのこと考えるなんて！」

アスナにバカって言われた！？

「失敗したときのことを考えるのは当然」

「違う！わたし達の目的は『このかを助けること』よ！間に合わな

くてなんか出てきても、そっからこのかを助けんのが当然なの！このかが苦しんでるのは魔法使いの責任なんだから、魔法使いがなんとかしなきゃいけないでしょーが！」

細かいことは一切抜きにしてやらなければならないことに全力を傾けるという姿勢。

「アスナさん・・・」

（コイツは・・・思ってた以上に・・・）

「ぷっくく・・・アッハハハハハ！！」

「ちょ、なんでいきなり笑ってんのよ」

「いやぁ。わたしもまだまだ未熟だと思ってさ・・・たしかにわたしがバカだったよ。目標はなんでも前向きでないとね。このかを助ける。これ以外にわたし達の勝利は無いね」

この状況だ。悪いことを考えていくよりもポジティブなほうがいい結果を生むだろう。なによりアスナはなんかやってくれそうだ。

「ということだ。二手に分かれる。それで行こう。ただし、ここはわたし一人に任せてもらうよ」

「え！？」

「ここは刹那さんとわたしがやるって話だったじゃない」

「いや、刹那とアスナ二人でここの鬼を相手取るのは難しいでしょ

?二人とも一対一とかなら別だけど二対二百だよ?それに対してわたしには騎士団がある。数の差は覆せる」

二人の攻撃範囲以上の攻撃を可能とする、一対多を想定した戦闘が可能な恋こそここにふさわしい。

「策を言うわ。基本はさっきと同じ、ただしここはわたしがやる。ネギ先生とアテナは空から、刹那とアスナは森の最短ルートを通って祭壇へ、空と地上の二手から一気にこのかを救い出す」

「確かにそれならどちらかが足止めされてももう一方がお嬢様にたどり着けますね。」

恋にはアスナは石化を無効化できるのでは?という予測もあってこの案を提示した。最大の脅威である石化が効かないのならアスナがこのかのもとに向かったほうがずっとよいだろうと考えたのだ。

話しはまとまった。さあいこうという矢先、カモが叫ぶ。

「よし、緊急事態だ!手札は多いほうがいい!仮契約行ってみよー!」

「まさかここに来て揚げ足を取られた!?」

以前恋が注意したときの特例をここで持ち出された。たしかに法には引っかからないし、現状を打開するのに手札が多いほうがいいというのも悔しいが納得できる。

「・・・お嬢様の危機です。仕方ありません」

「すいません、刹那さん」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー仮契約ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「そろそろか」

「待たせよってからにッ！？」

竜巻が消えたときそこには右手を向けるネギがいた。

「雷の暴風！！」

竜巻を纏った雷撃が一直線に駆け抜ける。射線にいた鬼達は、一瞬にして消し飛ばされた。

その混乱の上をネギとアテナが飛び越えていった。

この派手な演出はアスナと刹那が森を移動するのを気づかせないようにする意味もある。

「西洋魔術師か！？」「連中は詫び寂びってもんがなくていかん」

「二十体は逝ったか！？」

予定通り、その脇をアスナたちはすり抜けていった。

「しゃーない、追うぞ」

リーダー格の鬼がそういった瞬間、ゴウッと猛烈な熱気とともに夜がかき消された。

「！？」

熱源を見れば大きな紅い馬に跨った少女が背後に山火事かと思えるほどの炎を従えてこちらを見つめていた。

「あなた達のあいてはこっち。せめて失言分は取り戻さないといけないからね、こんな小娘で悪いけど、ちょっと踊ってもらうわよ」

紅蓮の汗馬が鬼の集団に向かって走り出す。たった一人で何ができる。そう油断した鬼はその目を見開くことになる。

駆けてくる恋の後ろに多数の騎馬隊が続いている。

恋が従えていた炎が形を変えているのだ。

「おもろい嬢ちゃんや、やったろうやないか！！」

それは、輝く紅と漆黒の黒が食らい合う瞬間だった。

激闘の始まり（後書き）

体は炎で出来ている。

銀と黒

轟音とともに紅蓮の騎士が宙を舞い、悲鳴とともに鬼が地に伏す。
鬼と炎が入り混じるまさに地獄の具現。

「セイッヤア！」

恋がハルバードを振るう、刃の軌道上にいた妖怪はその存在を許されること無く塵となる。

「う、とぉ」

恋はほぼ真下から突き上げられた槍を手の甲で弾いて逸らす。そして跨る馬の頸を叩く。恋の馬が後ろ足だけで立ち上がり、強靭な前足に体重を掛けて振り下ろした。
紅蓮の蹄は下にいた子鬼の兜をものともせず、撃ち砕き、小さな体を粉砕した。

「徒歩の兵を蹄にかけるは戦の習い。悪く思わないでね」

ネギとアテナは空を進んでいた。

「恋さんは大丈夫でしょうか」

「姉さんは強い。心配しなくても大丈夫」

ともに過ごしてきた時間がアテナにそう確信させていた。それに

最悪、姉にはあの神力がある。

攻撃がきたのはそんなときだった。

後方の森の中から、数匹の黒い犬がネギとアテナに向かって飛んできたのだ。

「狗神！！」

「魔法の射手、連弾・闇の五矢」

アテナがすばやくこれを撃ち落した。

「ネギ君は先に行って。あの狗はわたしが何とかする」

「アテナさん！！」

アテナはネギの制止を振り切って、狗神が出てきた箇所に急降下して行った。

「見つけた。あなたが狗神使いだな」

「なんやお前は？俺は女を殴る趣味は無いで」

森の中で、月を背にしたアテナが小太郎と対峙した。

小太郎の目的はネギであってアテナではない。しかし、小太郎を抑えるのはアテナの役目である。

「フェミニストは結構だがそれを実現できるだけの実力があるのか

？」

「なんやと！？俺が弱いとでもゆーんか、この白髪頭。」

ビキィッ

アテナの表情が凍りついた。

そして、口元が引きつったようにひくひくさせて搾り出すようにこう言った。

「あ、あなたこそ、そんな狗耳つけて、ふざけているのか？」

「ああぁ！？」

今度は小太郎に怒マークが現れた。

「俺のこれは狼や！狗なんぞと一緒にすんな！！」

「ハッ！犬は狼に憧れたところで犬なのだよ！さっさと飼い主のところに戻れ駄犬！！それともわたしが鎖に繋いでやろうか？」

売り言葉に買い言葉。シリアスなムードは一転、子どもの喧嘩のようになってしまった。

「上等！俺はれっきとした狼やっちゅーことを分からせてやるわぁ！！」

「黒髪だからって調子に乗るなよ！わたしの髪色にはシルバーという高貴な呼び名があるのだということをその貧相な犬頭に刻み込んでやろう！！」

アテナと小太郎のファーストコンタクトは最悪な形で幕を開けた。

戦が始まって五分。戦いは恋の軍団が優勢だった。

「なんと奇怪な！たった一人で炎の兵を統率しているとは！」

「ぐわっはっはっは！！二百ちかくおったワイらがはや数十体！元気がええのー！！」

一回り大きな体格の大鬼がさも愉快そうに叫んでいる。

対する恋は今までと変わらず、ひたすら鬼退治を繰り返すだけ。

「次から次へと、この」

炎で焼き、ハルバードで叩き潰す。もう残っているのはそれなりの腕利きくらいになった。

「ざんがんけん」

「グック！」

恋が次の鬼を狙おうとしたときだった。

真横からの不意打ちをとっさに柄で防ぐ。衝撃は殺せず落馬してしまったが、身を翻して着地する。

「月詠！？」

「はいーお会いしたかったですえ、恋はん」

狂気の神鳴流剣士、月詠が現れたのだった。

（最悪だ、こんなところでコイツが出てくるなんて！このレベルを相手にしながらだと騎士団（ナイツ）を維持できるかどうか・・・・まずは、鬼の排除を急がないと！）

「世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ、それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり、それは穏やかな幸福を満たすと同時に冷たき闇を滅する凍える不幸なり、その名は炎、その役は剣。顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せ！魔女狩りの王（イノケンティウス）」

恋と月詠の間に三メートルほどの人型の炎が立ちはだかった。細身で腕の異様に長い奇怪な姿。尚且つその身は灼熱の炎で構成されている。

「行け！！」

合図とともに炎の巨人が月詠の襲い掛かる。

月詠はその腕を掻い潜り、熱い吐息をかわし、左の刀を一閃。ずるりと魔女狩りの王の上半身が下半身から切り離された。

「こんな木偶でうちを止められまへん。さあ、恋はん愛させてくだS！」

月詠が言い切る前に倒れたはずの魔女狩りの王が復活し、長い腕を振り下ろした。

「自動再生おすか～恋はんもつれない」

月詠はいやいやながらも魔女狩りの王を相手をはじめたのだった。

アテナと小太郎は森の中の開けた場所で戦っていた。

「おお！！」

小太郎の影から黒い犬が飛び出してアテナに迫る。それをアテナは小太郎に向かって走りながら、見えない力で犬を弾き飛ばした。

（またや！また弾かれる！）

すでに十柱近い狗神がアテナに喰らい付こうとして弾き飛ばされている。

「だったら接近戦で、！？」

アテナが小太郎の目の前まで来ていた。瞬動の移動距離以上の距離を地面の一蹴りで移動している。

（ありえへん！）

小太郎は繰り出される拳をいなして弾く。『女は殴らない』と豪語する以上カウンターを決めるわけにもいかない。

「ぬう、お！？」

アテナが小太郎の首を片手で掴み、さらにもう片方の手で、二の腕部分をガッシリと掴むと、そのまま小太郎の体を持ち上げて、投げた。

「シチリア島大暴投」

「うあああああああ！？」

驚くほど軽々と小太郎が砲弾のように吹っ飛んでいく、叩きつけられた地面が砕ける。

それでも地面を転がった小太郎はすぐに起き上がる。見た目ほどのダメージは無かったようだ。

「まだ立つのか？もうわたしが勝ちでいいんじゃないか」

「まだや！こんくらいでへこたれるわけないやろ！」

小太郎の振るった腕から気の塊が飛び出す。空牙という小太郎我流の技。しかしそれもアテナに触れることなく弾き返される。

「こんのお！」

八柱の狗神がそれぞれ別の軌道からアテナを目指すが、また弾かれる。

さらに、アテナが小太郎に右手の平を向けた瞬間。

「う、おぉ！？」

小太郎の足が浮き、アテナのほうに引き寄せられる。すんでのところで踏ん張り抵抗するも引き寄せる力が強い。

「ギギう、臨兵闘者皆陣裂在前！！」

小太郎は刀印を結んだ右手を縦横交互に動かす。

それだけでアテナの呪縛が解かれ、小太郎は自由を取り戻した。

「早九字か」

早九字護身法、大陰陽師・芦屋道満があみだしたのでドーマンとも呼ばれるこの呪法は鞘から抜き放たれた刀で邪悪を切る。もしくは空に描かれた格子状の結界で邪悪の侵入を防ぐとされる簡易結界。

ここでの効力は自身の体にかかる外界からの呪的干渉に対する抵抗力の増大。簡単に言えば抗魔力の強化である。

「だが、それだけでは勝てんぞ！！」

アテナが小太郎に手の平を向ける。小太郎は再び三柱の狗神を喚んで対抗する。あっけなく狗神は吹き散らされてしまった。

「バカの一つ覚えか、ッ！？」

そのとき、アテナの背後から一柱の狗神が牙を剥いて飛び掛ってきていた。

思わず飛びのいてかわすが頭に載せていたニット帽が地面に落ちてしまった。

「ハッ！今のではっきりしたで、お前の力の正体が」

「？」

「自分の体で何度か喰らってみて大体の予想はついとった。あれやろ、重力系ってやつや。弾くのも引き寄せるのもその応用や！」

アテナは何も言わなかった。確かに小太郎の言うとおりアテナが使っていたのは重力系の魔法だ。引力、斥力、重力といった力を操っている。これによってアテナは宙に浮けるし、相手を弾き飛ばすことも、引き寄せることも、押しつぶすことも自在に出来るし、物の重さを操って軽々と重いものを投げたり、自分の体重を軽減して高速移動をすることだってできる。それが小太郎にバレたからといって何が変わるわけでもない。

「んで！これは止められんのやろか？」

「！？」

アテナの周囲、木々の陰から狗神があふれ出す。三百六十度一斉攻撃だ。これをアテナは体を回転させて斥力をもって弾く。

ウォンという耳慣れない音が聞こえ、空間が揺らぎ、狗が弾け跳ぶ。

しかし、なぜか『弾かれなかった』狗たちがいる。

アテナは飛び掛ってくる狗神を拳で砕いたが、それこそ小太郎の狙いだった。

「やっぱりな、お前の弾く技は、手の平の向いてるほうにしか使えん上効果範囲が狭い。今のを見る限りせいぜいが三メートルってとこやろ」

そう、今回弾かれなかった狗神はアテナの力の効果範囲外にいたから弾かれなかった。それが小太郎の結論。

「そしてぇ！」

再度、狗神があふれ出す。今度はさらに数が多い。

「お前の力は同時には使えない！！」

それがアテナ攻略の糸口。

同時に力が使えるのなら、小太郎が引き寄せられている間に何かしらのアクションがあったはずだ。少なくともアテナには小太郎が身動きの取れないところに攻撃しない理由がない。直接小太郎に干渉できなくても足元の石ころでも弾けばよかったのに。

小太郎の狼が時間差でアテナに牙を剥く。

アテナは弾けるものを弾き、そうでないものを選別して体術で打ち倒していく。

「連続して攻撃すればお前の力も俺には届かんようになる！後は防戦一方のお前を倒せば終いや！」

小太郎の攻撃が苛烈さを増していく。持ち前の戦闘センスでアテナの弱点を探り出し的確に突こうとしている。

しかし、やられっぱなしはアテナの性に合わない。

「この、わたしを舐めるなァ！！」

バグン！とアテナの周りの地面が砕け、飛び上がった石礫が近く

にいた狗神を貫いていく、さらに体を一回転させ、斥力で舞う礫を全方向に射出した。
アテナを囲んでいた狗神はあっという間に一掃された。

「な！？」

さらにアテナは自らの体重を０近くにまでさげ、踏み込み、移動の瞬間に体重を戻す。きわめて繊細な術を一秒にも満たない時間で成し遂げてしまう。
アテナは弾丸の如く小太郎に接近し、右手で左手を払いのけ、地面を強く踏みしめて小太郎の無防備な腹部に正拳を突き入れる。

「不完全とはいえ、師匠との修練で会得したこの『貪恣掌』を攻略したことは誉めてやろう！だが、わたしの力がそれだけだと思ったら大間違いだ！！ヴィーナス・ヴァーサス・ヴァイアラス！闇よ来たれ、砂塵とともに！奏でよ、ネサを滅ぼす不吉なる調べを！！」

ザザザザザ――――――――――と、気味の悪い音が聞こえてくる。

地面を何かが這いずるかのような音。見れば右腕を真っ直ぐ天に向けているアテナの頭上に黒い渦が生まれている。

それは砂だ。砂をはじめとする細かい鉱物が集まっているのだ。
音の正体はアテナが地面から砂を掻き集めている音だった。

「そんなんアリか！？」

「なにを驚いている？重力は地と闇に精通する系統。砂を操ったと

しても不思議ではないだろう」

この技自体が未だに未完成。本来は自分の魔力で砂を構成して発動する術なのに、外部から掻き集めなくてはならない。それでも、闇と地を合わせたこの術の威力はなかなかのもの。

「本気を出せ、犬上小太郎！さもないと首に鎖をかけて市中引き回しの刑だ！」

「冗談抜かせ！女に本気が出せるか！！」

アテナと小太郎の激突は最終段階を迎えた。

銀と黒（後書き）

ふう・・・アテナと小太郎がやっと戦ったか。構想してからが長かったなあ・・・わざわざアテナを十歳にしたのもこの時のため。

紅い戦場

紅いハルバードが振り下ろされる。しかし今度ばかりは敵を屠るには至らず、大鬼が金棒でそれを受け止めた。
体の大きな大鬼は周囲の鬼たちからオヤビンと呼ばれていた。すなわち別格の存在。

「やるやないか、お嬢ちゃん！」

「それは、どうも！」

恋はすでに下馬している。馬に乗っていては小回りが利かず逆に不利になると判断したためだ。
魔力による強化を受けた恋の体はそこらの岩など目じゃないほどに頑丈だ。仮に鬼の一撃を貰っても重症は負わないだろうが、月詠がいるこの状況では僅かな損耗も避けておきたいところ。

「飛焔！！」

炎が濁流となって鬼を飲み込もうとする。その灼熱の炎は触れたありとあらゆるものを焼きつきし灰も残さない。

「小癪な！」

その炎を大鬼は金棒を振り回して吹き散らす。平安の世から存在する彼は今までにもこのような攻撃を受けたことがあるのだろう。
故に物怖じすることはなかった。

「はぁはぁ・・・さすがは鬼」

恋が鬼を睨み付けたその傍らに紅い塊が落ちてきた。

「!?」

それは重油が燃えているような炎を纏った腕。魔女狩りの王のものだ。

「まさか・・・」

腕が飛んできたほうに目を向けると、胴から切り落とされ消えていく魔女狩りの王の姿があった。

「そんな、再生術式ごと斬ったなんて」

「斬魔剣、二の太刀。神鳴流は斬るものを選びまへん」

月詠は、もはや風前の灯となってしまった魔人には眼もくれず恋に歩み寄ってくる。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーマズイ

鬼を相手にしながら月詠と戦うのは厳しすぎる。しかも自分が相手にしているのは飛焔すら防いでみせたリーダー格の大鬼。分が悪すぎる。

「クッ」

「さあ、恋はん。今度こそ美味しくいただきますえ〜」

「お嬢ちゃん、ワシらも相手してくれや！」

二方面から強敵が襲い掛かってくる。月詠など恋しか見ていない。覚悟を決めたそのとき、巨大な手裏剣が鬼の前に突き立った。そして銃声。月詠の手元から火花がはじける。

「らしくない苦戦をしているようだな、恋」

「強そうなのがいっぱいネ」

「ニンニン」

「おおおおおおに！？ほんとに鬼！？」

うれしい誤算。援軍。

銃を構えた真名に、古、手裏剣は楓。そこになぜかまき絵と夕映がいる。

「どうしてここに！？」

「わたしが呼んだのです。それしか思いつかなかったので」

答えたのは夕映だった。のどかがまき絵を逃がしたように、夕映は和美がすばやく逃がしていた。フェイトはおそらく気づいていただろうが、のどかの無力化に時間を食ったために追わなかったとも考えられる。極論ではあるが、のどかの奮戦がここに活きてきたのだ。

「ああ、綾瀬たちがいるのはここにおいたほうが守りやすいと思っ

たからだよ。この山はもうどこに行っても危ないからな」

とはいってもまき絵はもう顔面蒼白になっている。戦場の異質さに当てられているのだろう。

さっきまでお気楽中学生だったのが今はクラスメイトと本物の鬼が殺しあっている場面に放り込まれてしまったのだから無理もない。

「落ち着け佐々木、教えたとおりにやればいい。何かあってもわたしたちでなんとかする。その分の報酬も確約されているしな」

「う、うん・・・アデアット」

まき絵がアーティファクトを発動する。その銘は『夢幻の冠帯』。

「い、いくよ、それぇ！！」

まき絵の着物の袖から多数の包帯のような白い布が伸び、ある鬼に巻きついて放り投げ、ある鬼の足を取り、またある鬼の武器を奪う。

まき絵の意思、能力しだいであらゆる動きを可能とする超便利アイテムだった。

「おお！なんかいけるかも」

いまだ声は震えているが、多少落ち着きを取り戻したようだ。

まき絵が投げた鬼は真名が性格に撃ち抜いている。

「だそうだ恋よ、お前はそっちの剣士に集中すればいい。鬼どもは任せておけ」

「ありがと！みんな！」

恋はお言葉に甘えて、月詠と向かい合った。

バチィっと恋から魔力がはじける。月詠相手に出し惜しみはしないと、禁じ手を打つ。

見えない何かが恋の内から爆発的に膨張し、炎がその身を包んだかと思った次の瞬間には変わっていた。

制服姿の上から黒いロングコートを纏い、煌く火の粉が桜の花弁が散るかのごとく空を舞い、髪は紅蓮色に染まり、灼熱を湛えた両眼がキッと月詠を見据える。

神力を解放した恋の姿。

それは、純粋に母から受け継いだ力だけでそうなっているのではない。どうすれば力を使いこなせるのか？常に試行錯誤し続けた先に得た姿であった。

それは、恋の憧れであり、目標。圧倒的な紅を従え、万象の一切を焼き尽くす熾烈な炎の具現。

全てが燃える紅い世界に屹立する最強の象徴。

その姿を『炎髪灼眼』と、人は呼ぶ。

「はわ～綺麗やなーフェイトはんの言うとおり、二代目さんなんやね」

「残念、三代目よ。この姿、まだわたしには輝きが強すぎる」

一瞬の視線の交錯。

ヒュゴ！という空気の音。月詠が瞬動をした音だ。

「雷鳴剣！！」

「二刀生成！『剣』！！」

恋は月詠の剣を二刀をクロスさせて防ぐ。紫電が舞い、スパークするも恋は押し負けることはない。

「あっはは！うちに合わせてくれるなんて、気前がええな！」

「好きで合わせてんじゃない！」

月詠を押し返す。

刹那のような大太刀でない分小回りが利き、隙が少ない。

（やっぱり一筋縄ではいかないか）

恋は心の中でひとりごちた。軽い挙動やかわいらしい外見にだまされてはいけない。月詠という少女は、人を斬ることを愉しまんがために剣を学び極めたのだ。アーティファクトの加護があるといっても純粋な剣術勝負では月詠が一枚上手であろう。

（だったら、わたしの戦い方をするまで）

恋の背に紅い翼が現れる。紅蓮の双翼を羽ばたかせて急激に後方へ加速、月詠から距離をとる。

「魔法の射手、連弾・火の二十九矢！！」

炎の魔弾が月詠を襲うも、アトラクションを愉しむが如く黄色い声で叫びながらかわし続ける。
そこに。

「飛焔！！」

恋の振るった腕から紅蓮に染まった業火があふれ出す。指向性のある炎は瞬く間に速度を増して月詠を呑み込む。

「キャー！」

月詠は足を止め、恋の目論見通りに炎を防ぐのに二刀をクロスさせる。これで剣は塞いだ。
真紅で創った弓に三本の矢を番えて射出する。

恋の矢は一直線に月詠に向かい、直撃と同時に爆ぜ、それによって生じた衝撃波が木々を大きく揺さぶった。

その爆焔を月詠が突っ切ってくる。衣服はボロボロで焦げ付いているが、目だった外傷はなく、嬉々とした表情で迫ってくる。その様子に思わず恋は恐怖した。自らが傷つくことを恐れず、人を斬ることを快楽とし、異常な笑みとともに炎を背負う彼女こそ鬼と呼んでいいのではないか。

「チィ！」

月詠に気圧された一瞬の思考の空白が恋の対応を遅らせた。月詠が瞬動してから慌てて創った剣では神鳴流は防げなかった。まるでバターのように恋の短剣は切っ先を敵に向けることのないまま斬り

飛ばされてしまう。

「恋はん、き、ら、せ、て♪」

短剣を斬った剣とは逆の剣を恋の首に向けて振るう。恋の運動能力をしてこれは避けられない。迫り来る死の気配。ならばと恋は前に出る。恋の背にある双翼は死を前に硬直した体を押し出すくらいはしてくれた。

刃は触れなければ物を切ることは出来ない。斬られたくなければ刃の範囲外に行けばよいのだ。それが後ろだろうが前だろうが関係ない。むしろ剣士相手は前に出たほうがよかったかもしれない。

「ほ？」

月詠の左の刀はそれを支える腕の下に恋の肩がある。そして右の刀は恋が掴んで離さない。

つまり、今の月詠は無防備。

「だあ！」

恋は月詠にボディブローを打ち込む。今、恋は無手だ。よって『六面武帝』は『拳』の状態である。この超接近状態は刀にしては近すぎて振るえず、殴るにしては絶妙な距離である。

手榴弾が爆発したかのような衝撃が月詠を貫いた。恋の拳は炎の拳。その一撃は岩を砕き、鉄をも蒸散させるだろう。常人が受けては上半身から跡形もなく吹き飛ぶ、それだけの破壊力があるのだ。

しかして月詠も大した者。インパクトの瞬間に後方に飛んで衝撃を緩め、ダメージを緩和すると同時に恋から距離をとって仕切りなおしたのだ。

「痛ぅ・・・」

恋の頬から血が滴り落ちる。一条の赤い線が煤で汚れた恋の頬を彩っていた。

月詠が吹っ飛ぶ瞬間、恋の右肩にあった左腕がこすれ、その先の刀が掠めていたのだ。刃の傾きがもう少し首のほうを向いていたら、今頃恋は鮮血を撒き散らしていたかもしれない。これを狙ってやっていたのだとすれば・・・・

恋の背に冷たい汗が流れ落ちた。

しかし、恋は追撃をやめることは出来ない。月詠は今左の一振りしか刀を持っていない。なぜなら、もう一方は先の接触で恋が握りつぶしていたからだ。

すばやく接敵。刀を潜って右のジャブ。ダウンロードしたのはボクシング。当てたらすぐ引き、ワンツー。これだけでもプロボクサーの脳天を破砕できる威力がある。

「雷、鳴剣！！」

刃とともに雷撃が迸る。恋はバックステップで射程から逃れた。

恋の打撃をその身に受けてなお月詠の顔には凄絶な笑みが張り付いていた。

狂人の刃を恋の紅い刀が弾く。形状は中華双剣。左の剣を振り下ろし、かわされたと見るやそのまま回転し、月詠に回し蹴りを放つ。月詠の両腕のガードを叩いた足が爆発し月詠の体を跳ね飛ばす。

両手の剣を飛んでいく月詠に投げる。ブーメランのように回転する刃を切り落とされる前に恋は剣を創る。

細身の長剣。柄は短くその外見は十字架のように見える。斬るのではなく投擲し、突き刺すための剣。そのため、使用するのは『剣』

ではなく『弓』。
両の手にそれぞれ三本ずつ、計六本の剣を指に挟み、月詠を狙う。
ダウンロードしたのは『鉄甲作用』と呼ばれる投擲技法。
双剣を投げたのもこれを当てるための時間稼ぎ。
しかし、いざ投擲しようというときに、恋の意識が僅かに遠のく。
解剖図には載っていない恋の最も大切な部分が悲鳴をあげている。
炎で紅く染まった戦場で恋の体だけが冷えていくような感覚に、

「う、ぐ」

思わずよろめいてしまった。それは大きな失敗（ミス）。月詠ほどの手練に一瞬を与えてはならない。
目の前に刀が迫っている。
半ば反射で真横に跳んで事なきを得たが、これが炎髪灼眼でなければ、もしくは集中力や視力の高まる『弓』でなければ危なかった。
せっかく用意した剣もすべて放り投げてしまった。

「ふふっ。愉しい、ああ、愉しい・・・恋はんもそう思うやろ？」

本音を言えば今ので決めたかった。
炎髪灼眼は高い能力を得る代わりに消耗が激しすぎるのだ。
シャナのように自然にこの状態を維持できるならともかく、未熟な恋では身の内で暴れ狂う神力を『抑える』ために気やら魔力やらをガンガン消費してしまう。
今までの最長は四分。それが炎髪灼眼の限界であり、恋が精根尽き果てるリミットだ。
だいたい二分半をこえた頃から意識に障害が起こり、その後は全身を痛みが駆け巡る。リミットを過ぎれば、戦うことはおろか動くことすら出来なくなる。

「さあ、恋はん。うちが存分に愛してあげますえ！！」

月詠が駆ける。

炎髪灼眼となって三分を過ぎた。残り時間はほとんどない。故に恋は次の一撃に全てを賭けるよりほかにない。

イメージするのは一振りの刀。

頑丈で、何でも切り裂くのがいい。そうだ、以前博物館で見た童子切を真似るのがよさそうだ。月詠という鬼を切るのにこれほどのはまり役はあるまい。

恋の手に炎が集まり、日本刀の形となる。

刃長二尺六寸五分、反り？元（はばき）にて約一寸、横手にて約六分半、刀身の厚さはニ分。

目の前の鬼を討つためだけに創り出された紅蓮の太刀は恋の真紅のなかで最高傑作となる業物であった。

「貰いましたで！恋はん！！」

月詠が飛び込んでくる。

デザートを頬張る子どものような無邪気さで、刀を突き出してくる月詠に。

「断罪」

ただ恋は刀を振り下ろすだけだった。

紅い戦場（後書き）

変　身

そして、まき絵！！

総合評価２００超え！！ありがとうございます！！

復活と終結

アテナと別れ、空を飛ぶネギの前に、光の柱が立ち上がる。
大規模な召喚魔法の気配。

「わかってる、加速！！」

高度を下げ、湖面ギリギリで急加速。このかがいる祭壇に向かって真っ直ぐに突き進む。
祭壇にいるのは千草とフェイトの二人だけ。

「ラス・テル・マスキル・マギステル、吹け、一陣の風！風花風塵乱舞（フランスサルタティオー・プルウェレア）！！」

風で水を霧状に、大きな水煙が祭壇を覆いつくした。
そしてネギは体を強化してその中に突っ込む。

「水煙にまぎれて近づくつもりか、そんなことでどうにかできると思っているのかい」

無駄なことを

フェイトが見えないはずのネギに手の平をかざす。が、飛び込んできたのはネギではなくネギが乗っていた杖。
千の呪文の男の形見である杖を囮にしたのだ。本物のネギは、フェイトの背後、燈篭の側面を踏み台にしてフェイトに殴りかかっていた。

「はあああああ！！」

バチイイイイイィ！！

魔力で強化されたはずのネギの拳はフェイトの顔面を捉えることなく中空で止まっていた。

強固な障壁がネギのパンチを完全に封殺していたのだ。

「バカな！あれだけの威力の魔力パンチをピクリともせず障壁だけで！？」

「つまらないね・・・『千の呪文の男（サウザンドマスター）』の息子が、やはりただの子供か」

フェイトが手の平をネギに向ける。

「引っかかったね」

対するネギは不敵な笑みを浮かべて左手をフェイトの腹に押し当てる。

「魔法の射手、一戒めの風矢《アエール・カプトゥーラエ》！！」

押し当てた手から魔法が発動する。風属性の魔法の矢。その効果は捕縛。

フェイトの体に魔力のリボンが絡み付き、地面に縫いとめる。

「やったぜ兄貴！戒めの風矢は基本魔法だが、まともに食らった以上脱出にゃあ数十秒はかかるはずだぜ！！」

開放（エーミッタム）

強大な敵にネギが一矢報いた瞬間だった。

「なるほど、遅延呪文か。わずかな間に驚くべき成長だね。認識を改めよう」

「急げ兄貴！！」

「うん」

フェイトを抑えたネギが祭壇に駆け寄るもそこはもぬけの殻。冷たい石壇が安置されているのみ。

「そ、そんな！さっきまでここにいたのに！？」

「お、い兄貴」

「これは！？」

光の柱がよりいっそう強く輝く。おぞましくも神々しい魔力をあふれさせ、十年の眠りから鬼神が蘇った。

今までであったどんな鬼よりも巨大。まるでビル。

腕は四本。顔は前と後ろに一つずつ。上半身しか出ていないがそれでも二十メートルはある。

「オーホホホホホッ！勝ったで！二面四手の巨躯の大鬼『リョウメンスクナノカミ』！１６００年前に討ち倒された飛騨の大鬼神や」

「くっ、ラス・テル・マ・スキル・マギステル！来たれ雷精、風の精！！」

「アニキ！そんな技使ったら今度こそ倒れちまうぜ」

連戦に続く連戦でネギの魔力は限界を迎えつつある。こんな状態でネギが持つ最大の魔法を使えば、最悪ここで倒れることになろう。だが、効きそうなのはこれしかないというのも事実。故にネギは止まらない。止まれないのだ。

「アニキ！！」

アスナと刹那はネギに遅れる形で目的の湖までやってきた。ネギが注意を引いていたからか道中に妨害らしい妨害もなかった。

「なんなのよあのデカ物！！」

「おそらくはリョウメンスクナノカミ！お嬢様の力で伝説級の鬼神を使役するつもりか！！」

ネギが雷の暴風を撃ったのはそのときだった。

エヴァンジェリンとの撃ち合いを制したネギ最大の魔法は、巨大で分厚いスクナの胸板に当たるとまったく効果を発揮することなく掻き消えた。

「うそ！あの魔法当たってビクともしてない！？」

アスナが驚愕する。雷の暴風の威力をその目で見ていたアスナにとって信じがたいものであった。

さらに事態は悪化する。

拘束されていたフェイトがこの場面で復活したのだ。

「さて、善戦だったけどここまでだね」

フェイトがネギに歩み寄ってくる。

ネギの魔力はほとんどない。もちろん抵抗するだけの余裕もない。

「自ら向かってきたということは相応の代償も覚悟しているんだろう」

フェイトが手をかざす。使うのは間違いなく石化魔法であろう。

「それじゃあ、さようなら。ネギくん、！」

フェイトが体を捻る。そこを白い棒状のものがすり抜けた。

「斬岩剣！！」

フェイトを攻撃したのはアスナだった。そして、避けたフェイトに刹那の白刃が迫る。

もちろん達人たるフェイトにとってよけるのは造作もないことだった。しかし、ネギの石化には失敗した。

「ネギ！大丈夫！？」

「アスナさん・・すみません。このかさんが」

「大丈夫！！なんとかするわよ！」

ネギの元にアスナと刹那が駆け寄った。

「・・・ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト小さき王、八つ足の蜥蜴、邪眼の主よ」

「まずい！だれか詠唱を！」

「間に合いません！！」

「石の息吹」

ボウム！と祭壇に灰色の煙が現れる。

関西呪術協会の巫女やハルナたちを石にした石化魔法。喰らえば即アウトの必殺魔法だ。

この一撃をネギたちは辛うじて回避していた。

湖の上の祭壇へ続く、木造の通路に着地する。

「ネギ！？その手！！」

見れば右手の先が僅かに石化してしまっている。今はまだ、手先のみだがやがては腕、さらに体に及ぶだろう。

「ぐぅ・・」

その様子を見て刹那は臍を噛む。

自分の力のなさに、そしてこの状況に至るまで『自分の力を隠していたことに』だ。

そして決意する。

「ネギ先生、アスナさん。お二人はここで逃げてください。お嬢様はわたしが救い出します」

「でも、あんな高い場所にどうやって？」

このかと千草がいるのはスクナの肩。二十メートルも上。現状、強化した肉体であそこまで行けるのか疑問である。

そんなアスナに刹那は儚く微笑むとこういった。

「力を・・使います。わたしの」

バサッと羽音とともに、刹那の背に一対の白い羽が生えてきた。

「この羽で」

「刹那さん・・・・」

刹那は烏族のハーフであった。しかし、本来黒いはずの羽が白であったことが原因で一族を追われることになったのだった。

そのため刹那にとってその姿は禁忌（タブー）であり、そのトラウマの象徴。触れたくないコンプレックス。

バケモノの羽、見られたら嫌われる。それが刹那を臆病にしていた。

しかしながら、アスナからしてみれば羽が生えている同級生でしかなかった。

「こんなの背中に生えてくるなんてかっこいいじゃん」

「え」

刹那にとってそれは予期せぬ言葉だった。

「このかがこのくらいで人を嫌いになったりすると思う？ばかなんだからほんとに」

「アスナさん」

「いって。刹那さん！わたし達が援護するから！」

「ッ、はい！」

パン！と景気づけにアスナが刹那の背を叩いて送り出す。

刹那は勢いよくこのかを目指して飛び上がっていった。

「魔法の射手、光の一矢」

刹那を狙うフェイトの手を魔法の射手が弾く。

「さてこれからどうしようか、カモ君」

「へへ、こっちはもう手は出し尽くしたからな」

フェイトが向き直る。刹那よりもネギとアスナに狙いをつけたのだ。

ギュッと杖を握りこむネギたちの脳裏に声が響いた。

『聞こえているかボーヤ』

「エヴァちゃん！」

『あと一分半持ちこたえろ。そうすればわたし達が何とかしてやる』

フェイトには聞こえていない。

念話（テレパシー）である。

『ガキはガキらしく、後のことは大人に任せてな』

それを聞いてネギは奮い立った。一分半と期限を定められたのも大きい。

「行きましょう！」

「ＯＫぇ！！」

「来るのかい？いいだろう。相手になるよ」

アスナが床を蹴ってフェイトに向かう。

それをフェイトは高速移動で上を取り、蹴り飛ばす。あまりの速度に、アスナから見れば消えたように思えただろう。

さらにネギの背後に回ったフェイトはそのままネギを殴り飛ばす。

喧嘩のようなでたらめな動きではなく、型を極めた中国の拳法。

吹っ飛ばされたネギは起き上がったアスナとぶつかって二人揃って後方に投げ出される。

そこに容赦なくフェイトの追撃が襲い掛かる。

神速の拳がネギとアスナを翻弄する。

「わあああああ！？」

「ちょっ早！！う！」

タン、フェイトは軽い跳躍で数メートル飛び上がる。

「石化の邪眼！！」

「ネギ！」

アスナがネギを抱き寄せてフェイトから庇う。
その直後、フェイトの指先からレーザーが発せられる。触れたものを石化させる妖しき光。

「アスナさん！！」

「大丈夫」

確実に直撃したアスナは上着が石化しただけだった。

「やはり、魔力完全無効化能力者か。カグラザカアスナ、まずは君からだ」

フェイトが魔力を拳に集める。
アスナの力は打撃攻撃には作用しないらしい。フェイトの魔力パンチはアスナを倒すのに十分な威力があるはずである。

「！？」

ギリ・・・

アスナを討つはずの正拳をネギが石化していないほうの手で掴んでいた。

「喰らえぇ！！」

すぱーん

この場に似つかわしくない軽快な音。

ハリセンがフェイトの頭を叩いたのだ。

「障壁が！？」

フェイトの堅牢な障壁が粉々に砕け散った。

そして刹那がこのかのもとにたどり着く。

「おまえ、いつの間に！？」

「お嬢様を返してもらうぞ！」

刹那が羽ばたき、加速する。

ネギが魔力を右手に込める。

「「おおおおおおおおおあああぁぁぁ！！」」

ネギのパンチがフェイトを殴り飛ばし、刹那はこのかを取り戻した。

「体に直接拳を入れられたのは初めてだよ、ネギ・スプリングフィールド！」

今度はフェイトの拳がネギを狙う。

そこに

「な！？」

フェイトの腕を地面から伸びる腕がつかんでいた。

（影をつかったゲート！！）

「うちのボーヤが世話になったな。若造」

一撃。

影からずるりと這い出してきた金髪の少女にフェイトは数十メートルも飛ばされ、湖中に消えた。

「あ、え、エヴァンジェリンさん！？」

真打登場の瞬間であった。

「結界弾、発射」

上空をジェット噴射で滞空する茶々丸のもつ大口径の対戦車ライフルが火を噴いた。

撃ち出された弾は途中で弾け、装填された術式を発動させる。
半球状の結界がスクナを閉じ込めた。

「この質量では数十秒しか拘束できません。お急ぎを」

エヴァンジェリンは茶々丸の進言に分かっていると答えてこう言った。

「いやいや、ボーヤはがんばったよ。正直予想以上だ。だが、まだだ。いいか、このような大規模な戦闘においての魔法使いの役割とは究極的にはただの砲台。つまり火力が全てなのだ」

過去十五年で一番の上機嫌でエヴァンジェリンが語る。

「わたしの勇姿を、最強の魔法使いの最高の力を見せてやる」

エヴァンジェリンは飛び立った。高く高く、スクナよりも高く。
そして謳いあげる。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック、契約に従い、我に従え、氷の女王！来たれとこしえのやみ。えいえんのひょうが！！」

膨大な魔力の開放。
呪文の完成と同時に、スクナとその一帯が氷に閉ざされた。

「くくくく、相手が悪かったな女。ほぼ絶対零度、周囲１５０フィート四方を完全凍結する完全凍結殲滅呪文だ。そのデカ物でもかなわんぞ」

「ひ、ひぃ」

「全ての命あるものに等しき死を。其は安らぎ也。おわるせかい」

エヴァンジェリンが指を鳴らすと、凍結したスクナが粉々に砕け散った。

終わりは実にあっけないものだった。

「どうだぼーやわたしの力は」

「エヴァちゃんすごい！最強とか自慢してるだけのことはあるわね！」

「すごかったです！！」

「そーかそーかすごかったか！」

今日のエヴァンジェリンは最高にハイテンションだ。

「でも、エヴァンジェリンさん。登校地獄の呪いは？」

「それでしたら問題ありません。強力な呪いの精霊をだますために学園長が5秒に一回「エヴァンジェリンの修学旅行行きは学業の一環である」という書類に判子を押しています」

「五秒に一回って死ぬんじゃ・・・」

「！？」

ネギが血相変えてエヴァンジェリンに向かって駆ける。

エヴァンジェリンを庇うように抱き寄せる。エヴァンジェリンは

驚いたもののすぐにそれに気が付いた。

水溜りから顔を出す白髪の少年。

「ど、どけ」

エヴァンジェリンがネギを突き飛ばす。

「障壁突破、石の槍」

床がひび割れ、鋭い石柱が唸りをあげて突き出してくる。

「くっ・・」

「完全一式、障壁（フラグマ）」

エヴァンジェリンを串刺しにせんとする石柱を防いだのは、水色に輝く障壁だった。

「な!?」

フェイトは障壁突破呪文を障壁で防がれたことに目を見開いて。

「消えろ」

エヴァンジェリンの強烈な一撃で床ごと消し飛ばされた。

「少し遅かったんじゃないか。近衛」

「そう言わないでください。あなたを送り出すだけでも相当消耗し

たんですから。ここに来るのが遅れても仕方がないでしょう」

そこにやってきたのは遊環が三角形の杓杖を手に持った史菜であった。

「ええ!?寮長さん!?」

アスナが声を上げて驚く。ネギやアスナはまだ麻帆良の魔法使い達とあまり知り合っていない。史菜もあえて言わなかったということもあって、魔法使い近衛史菜としてははじめましてとなる。

「今のは、どうやった?障壁突破呪文がかかっていたはずだが?」

「あれは、完全一式という補助魔法で強化した障壁です。防御力はお墨付き。完全一式は装填した障壁などの防御力を高めるだけでなく、障壁解除などの外界からの影響を・・・」

そこで騒然となる事態が起きた。ネギが倒れたのだ。みれば石化が進み、首近くまで石になっている。

「危険な状態です。ネギ先生の抗魔力が高すぎて石化の進行速度が遅いのです。このままでは首まで石になった時点で窒息してしまいます」

茶々丸が倒れたネギの症状を分析する。

「そんな、エヴァちゃん何とかならないの?」

「わたしは治癒系は苦手なんだ。不死だから」

「わたしも初期段階なら何とかできるのですが、ここまでのものは」

エヴァンジェリンも史菜も治癒を専門に学んでいるわけではないし、解呪を得意としているわけでもなかった。

治せるとしたら。

「お嬢様」

「うん」

「そうか仮契約！シネマ村で見せた力を使えば」

前に出たこのかにカモが言う。

「うちにはこれくらいしかできひんから」

カモが魔法陣を描き、このかが倒れたネギに唇を重ねた。

京都のはずれにあるとある邸宅。

明かりのない一室から外を眺める青年がいた。

「すべて終わりました。恋様方の勝利でございます。恋様もアテナ様も存分に戦われました」

「そうか、ご苦労様」

窓から部屋に入り青年に報告したのは、まさしく異形。足は鳥で全身は羽毛に覆われ、両手は翼。首のあるべき部位にはなにもなく、胸に目が付いている。

「して、この惨状は」

「ああ、なんというか池田屋事件的な」

「はあ」

なんとなくいいにくそうに頬を掻く青年はその部屋の惨憺たる状況にあまりにミスマッチである。

部屋の中には物が散らばり、焼け焦げた呪符や切り刻まれた紙型が散乱しており、気絶した何人もの男が縛り上げられていた。

これがたった一人の女性によって成された光景であると世の誰が信じるだろうか。

「恋たちが勝って、中枢も今潰した。これで一件落着でしょ」

艶やかな長い黒髪を整えて、主犯たる女性が言った。

「とりあえず、コイツを引き渡したら、戻りましょ」

「よろしいので?せっかくなら・・・」

「いいのよ。わたしたちにはしなくちゃいけないことがあるし、恋

たちもそう。どこぞのお父さんみたく過保護すぎるのは良くないのよ」

「君も十分過保護だと思うけどね」

「なんか言った？」

「いいえ」

キッとにらまれて言葉を濁す。

なにはともあれ、とりあえずここに反・関東の根が潰れたのだった。

復活と終結（後書き）

戦が終わった。少しばかり急ぎ足でしたがどうでしたか？修学旅行編は次くらいで終わります。
巨人ころし？がカラドボルグ（笑）

友情の再確認

「痛いっ！あ、てたあああああ！？」

明朝、恋の本山に悲鳴がこだました。

「まったく。力の反動を無視して戦うから、こんなことになるんです」

「・・・・でも、アイツは強かった。こうでもしないと」

「それも含めて実力です。これからも修行に気を抜かないように」

「ん。いた！もうすこし優し、く」

恋は月詠との戦いで限界まで力を行使した結果、筋肉等に多大なダメージを負っていたのだ。

気が付いてみれば全身に激痛が走り、思いっきり叫んでしまった。

今は応援で駆けつけてきた治癒術師による治癒魔法を受け、それでも治りきらないところを史菜がシップとマッサージをしていた。

神力で傷ついた組織は治癒術の効きがよくないらしい。

「ま、早いうちに力を使いこなしてね。よっと」

「ひぎぃ！？ひあ、あ、ああ、あああああぁぁぁあうううあああああああ！！！」

恋が叫ぶ少し前。まだ日も昇っていない時。宛がわれた部屋の外に二人の人影があった。

のどかと夕映だ。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

無言。この状態がすでに五分以上続いている。お互いに言いたいことがあるが言い出すことができず、相手の様子を見ている。

のどかは石化が解かれた後夕映から事のあらましを聞いた。夕映が魔法に関わってしまったことに心中大いに荒れたが、のどか自身も魔法使いなのではないか、と疑問を投げかけられたときほどではなかった。

夕映はのどかが魔法使いである。もしくは関係があるのだとほぼ確信していた。まき絵から聞いた話では襲撃に対応していたそうではないか。

夕映は頭がいい。とくに物事を客観的に分析することにおいては同世代のなかでも群を抜いているといっていいだろう。それでいて本来はありえないと切り捨てる魔法を受け入れる柔軟性も併せ持っている。

もはや夕映に隠し通すことは出来そうになかった。

「あの・・・ゆえ」

だからのどかは全てを話すと決めた。

「わたしね、魔法使い・・・なの」

「やっぱり、そうだったんですか！？」

分かってはいたのだろうがのどかの口から聞いた夕映はやはり驚いたようだった。

興奮してのどかに詰め寄ってくる。

「ど、どうして今まで黙って・・いや、そういう規則とは聞きましたが、ぜひとも魔法について教えてほしいです！！」

「え、えう・・」

夕映の剣幕におされ気味になるのどか。

夕映は学問こそ面倒くさがるが一端興味を持ったものにはとことん深く掘り下げていく学者気質があった。未知の『魔法』について過剰に反応するのも頷ける。

「その、ゆえ、落ち着いて」

「ああ、すいません。興奮してしまいました」

ここまできたら魔法について話すのも仕方がないとして、まず話しておかなければいけないことがある。

己の出生と正体について。

のどかは意を決して話すこととした。

「その、わたしね、実は、魔法使いっていうよりも・・・・そのね・・・」

「？」

「吸血鬼、なの・・」

「・・・・へ？」

それは夕映にとって予期しないものだ。魔法使いは良いとして、よりにもよって『吸血鬼』だ。それは、訳分からんという顔になるのも当然である。

が、いろいろと追い詰められているのどかはそれを拒絶と受け取ってしまい。

「ご、ごめんね。だましてて、その、さよなら」

声を詰まらせながら走り出そうとしてしまう。

夕映はその手を反射的に掴んで、引き止めた。

「待ってくださいのどか！いきなりそんなこと言われても分からないです！説明してください！」

「あ、うん。そうだ、ね」

訥訥とのどかは語りだした。
はじめは浮かされたように聞いていた夕映ものどかの身の上のところからは表情を一転させた。
その顔に浮かんでいるのは踏み込みすぎたことへの後悔か。

語り終えたのどかはふうっと息をつき、縁側に腰掛けた。
夕映は体が硬直したかのように固まって動かない。

「それが、わたしの正体」

「なん、ですか、それ・・・そんなのって」

夕映が声を震わせる。

「ごめん、なさい。だまして、ごめん」

「ッ」

パン！・・・

白み始めた空に乾いた音が響き渡った。

「ゆえ？」

夕映がのどかの頬を思いっきり叩いた音だった。

「どうして謝るのですか・・・のどかは何も悪くないじゃないですか！！」

のどかが見上げた夕映の目は涙が溢れていた。
ヒリヒリとする頬を押させ、のどかは何も言わずに夕映を見る。
「なにがゴメンなんですか!?わたしにはのどかが謝っている理由が分かりません!!むしろ、謝罪すべきはわたしのほうでしょう!?」
わたしはなんてバカなことを!
夕映は激しく後悔していた。そして自分に激しく憤っていた。魔法というファンタジーに出会って浮かれていた。のどかの両親が亡くなっていることも、施設でうまくいかなかったことも聞き及んでいた。それなのに好奇心に駆られて親友のつらすぎる過去に土足で踏み込むような真似を平然としてしまった。
魔法というファンタジーがどのようなものか、のどかの話だけではなんともいえないが、自分が想像していたよりもずっと現実的な脅威があるのだと知った。
考えてみれば当然のこと。夕映がよく読む小説でも華々しい脚光を浴びるのは主人公とその仲間である。登場人物の大多数はファンタジーの世界で普通に生活をしている一般人で、中には理不尽な運命に翻弄されるものもいる。
まさか、自分の親友がそんな運命を背負わされているとは露ほども思わなかった。
「わたしは・・のどかが苦しんでいることにも気づけなかった大ばか者です」
「ゆえ・・・」

「わたしは、のどかに助けてもらったのに！変えてもらったのに！そんなのどかのことを二年もッ」

それはもはや慟哭であり懺悔だった。夕映は地を踏み、唇を噛み、涙を流す。

「ゆえっ・・・でもわたしは」

「吸血鬼だからとか言ったら本気で殴りますよ！！」

夕映の剣幕にのどかはビクッと体を固めて言葉を止めた。

「人の血を吸うだとか、昔やんちゃしたとかそういうのはいいんですよ！！それで離れていくような奴は金輪際会う必要はないです！！でも、わたしは違う！！！」

「！」

「わたしはのどかを裏切りません！吸血鬼？いいですよ、どーんとこいです！そんなものは友達でいるのに何にも関係ないでしょう！！なのに、のどかときたらビクビクビクビクと！わたしを誰だと思っているんです？綾瀬夕映、あなたの親友です！このくらいで離れていくとでも思ってんですか！！！！！！！！」

最後にはもう怒鳴っていた。まだ日も昇り始めたころだというのに信じられないくらいの、今まで出したこともないくらいの大声で夕映は叫んでいた。

「ゆえ」

「確かにわたしは恋さんのように強くないですし、あなたのことも知らなかった。だからわたしは強くなります。のどかが間違ったときはわたしが真っ先に駆けつけて止めてあげます。・・・わたしはのどかと友達でいたいんです」

「あ・・・」

そう言って微笑む夕映の顔が、不覚にも忘れかけていたあのときの恋と重なった。

『わたしのかち。だからわたしたちは友達』

『なんでよ』

理由は忘れた。ただ、女の子らしくない殴り合いの大喧嘩をしたことを思いだした。

『けんかするほど仲がいい・・・だからともだち・・・それに』

『わたしは強い。なにかあったらわたしが止めてあげられる』

ゆえ・・・恋と同じこと言うんだね。
わたし、本当にいろんな人に迷惑かけて、それだけじゃなくて、すごい心配されて・・・・
こんなにいい友達に恵まれて、何をおびえていたのだろう。

「ゆえっ・・・・ありがとうっ・・・ほんとうにっ」

のどかはただただ涙を流し、自分の幸福を噛み締めた。

友情の再確認（後書き）

わたしにはこれが精一杯

別荘

ネギと五班そしてエヴァンジェリン、茶々丸、和美は一時ホテルに戻った後、詠春との待ち合わせ場所に向かった。
目的はナギの別荘にお邪魔するためだ。
ちなみにこのときまき絵は自分の班の活動に行き、アテナも同じ。
史菜は朝一で麻帆良に戻った。

「やあ、みなさん。休めましたか？」

スーツ姿の詠春が待っていた。
ネギたちは詠春に案内され高台にあるナギの別荘に向かった。

「スクナの再封印は終了しました」

「面倒を押し付けてすまないな、近衛詠春」

「いえ、こちらこそ、何から何まで」

決戦の最後、エヴァンジェリンの殲滅魔法によって粉々に砕け散ったリョウメンスクナノカミであるが、実はまだ生きていた。
通常の召喚魔と違い、霊格の高い鬼神の類は肉体を失っても存在することができ、死ぬことがない。よって詠春は魂だけの存在となったスクナを再封印するという作業を必要としたのだった。

「あの、長さん。小太郎君は？」

「それほど重くはならないでしょうが、それなりの処罰があると思います。天ヶ崎千草についてもお任せください」

「そんなことより問題はあの白髪のガキだろう」

「はい、現在調査中ですが、わかっているのは彼がフェイト・アーウェルンクスと名乗っていること。一ヶ月前にイスタンブールの魔法協会から研修として派遣されているということしか」

おそらく偽証でしょうが。そう詠春は付け加えた。

「ああ、ここですよネギ君」

到着したのは草木が生い茂る中に建てられた白を基調とするモダンな建物。

ナギが最後に訪れた十年前のまま保存されているのだ。

ネギは期待に胸を躍らせて門を潜った。

中は京都とは思えぬ造りとなっていた。床も壁も白く塗られた三階建て、フロアの真ん中は吹き抜けとなっており、なんとそこの壁は本棚となっていて、数千冊の本が天井まで並べられていた。

「うおおお！すげえ！本がいっぱい！」

「ここに昔父さんが」

その後は各々が別々に行動し始めた。図書館探検部は真っ先に梯子をよじ登り本を手に取り始めた。しかしここの蔵書は魔法関係のものも多い、そのためあまり見せるのはよろしくないのだが、素人

目には関係ないだろう。

「どうだアニキ、手がかりは」

「うーん、なんとも」

いくつかの本を手にとって目を通したネギであるが父の行方に関する手がかりは出てきていなかった。

「できればもっと時間をかけてゆっくり調べてみたいんだけど。ラテン語、ギリシャ語、日本語、英語。いろんな国の本があるし。これだけの量はさすがに」

そこまで言ってふと、ネギは気になることがあった。

『使える魔法は5，6個しかねーよ。勉強は苦手でな』

それは赴任間もなく、エヴァンジェリンの夢を覗いた時に出てきた父のセリフ。

夢の中の父曰く、魔法学校も中退らしい。

ともすればこの状況にはなんとなく違和感を感じる。

（エヴァンジェリンさんの夢に出てきた父さんは確かにそう言ってた。でもここにはたくさんの本がある、それも普通の書物に混じってかなり高度な呪術書が）

ネギが今手にしている本もその一つ。

古代ギリシャ語の本で、タイトルは『異界考察』。とても勉強嫌いが読む本ではない。

（もしかして夕映さんみたいに勉強は嫌いでも本は好きとか？いや、そうだとしても専門書を読むかな）

ナギを知る者が聞けば即答したであろう。『読まない』と。

だがネギはナギについて知らなすぎた。それは周囲の大人が彼を守るために情報を管理していたからであるが。

（ぼくは父さんのことを何も知らないんだ）

このことも、ネギに情報不足を実感させた。

「あの、長さん。父さんのこと聞いても良いですか？」

だから、ネギはサウザンドマスターの戦友だという詠春に尋ねることにしたのだった。

「ふむ、そうですね。わかりました」

ネギとパートナーそして恋とエヴァンジェリン、茶々丸は詠春に促され三階のある場所までやって来ていた。魔法に関わらない和美とハルナと夕映はのどかと一緒に下にいる。

詠春が指差した机においてあったのは二つの写真たて。

「こちらに写っているのが二十年前のナギとその戦友。黒い服がわたしです」

そのうちの一つを手にとってネギたちに見せた。
そこに写っているのは六人の男たち。紅き翼のメンバーだ。

「これが、父さん」

「うっひゃー父様若い！」

このかが写真をアスナたちにも見せた。

みんなが写真に群がるその中で刹那はもう一方の写真に目を向けた。
そこに写っていた少女が持っているのは見覚えのある錫杖。

「長。もしかしてこの方は史菜さんでしょうか？」

刹那がその写真を指差して詠春に尋ねた。
それを聞いた詠春は頷いて。

「そのとおりです」

とそう答えた。

「ええ！！」

それを聞いて驚いたのはアスナたちだ。史菜が魔法使いであると先日判明したばかりであるのに、まさかネギの父親に関わりがあろうとは思っていなかった。

「へえーこの女の子が？」

「確かにそうやーわーかわええ」

「そしてその隣にいるのが垣根帝督です。今は麻帆良で教師をしていると聞いていますが」

「え!?垣根先生!?」

「うそうそ!ほんまに!?」

詠春が続けて言うことにネギも驚きを隠せない。帝督に関しては魔法使いということすら知らなかったのだから。

ここに恋がついに衝撃に事実を付け加える。

「この二人、わたしの両親」

恋は小さな史菜と帝督と一緒に写っている青年と少女を指差していった。

一瞬の静寂のあと、一際おおきな驚きの声が響き渡った。

「あれ?エヴァちゃん驚いてない。もしかして知ってた?」

「当然だろ。わたしは恋の両親とも面識がある。炎を操る恋は母親似だろう」

「そうですね、当時彼女は最強の炎使いとして恐れられていましたからね」

「そんなすごい人なんですか」

「ええ」

そこから詠春は本題に入った。

「二十年前の大戦は二つの大勢力のぶつかり合いでした。わたしはまだ少年だったナギとともにその一方の側で戦争に参加したのです」

詠春は懐かしむように少しずつ言葉をつむぐ。

「わたしたち紅き翼は出る戦出る戦で負けを知らない常勝のチームでした。そこに立ちふさがったのが祭礼の蛇坂井悠二率いる黒竜です」

「え？敵だったんですか！？」

「ええ・・わたし達と悠二達は何度も戦いましたが決着が付くことはありませんでした。そんなあるとき、とある事件をきっかけに我々は手を結ぶことになったのです。大戦が終結したとき数々の功績から英雄と呼ばれ、ナギもまたサウザンドマスターと呼び称えられるようになりました。以来わたしとナギは無二の親友であったと思います。しかし、彼は十年前に突然姿を消す・・・彼がどうなったのかを知るものはいません。ただ公式記録では１９９３年死亡・・・これ以上のことはわたしにも、すみませんネギ君」

「いえ、ありがとうございます」

結局父の足取りを掴むことはできなかったが、父の部屋にこれた

だけでも収穫は大きかったとネギは思う。
修学旅行はこの日最後。
また、明日からは麻帆良での忙しい日々が始まるのである。

別荘（後書き）

修学旅行完結！やっと麻帆良に戻れるぜ！

弟子入り試験？え、わたしが！？

エヴァンジェリンの別荘にて。

「魔法の射手、虹の二十九柱」

虹色に輝く魔法の矢が高速で空を切る。その先にいるのは小柄な少女。アテナ。

「くっ」

アテナはこれをひきつけて回避する。虹色の爆発にあおられるが避けきった。

「七条虹天剣」

アマネから虹が持つ七つの色をそれぞれ一色ずつもった魔力光線が七本射出された。それをまたギリギリで回避するアテナ。

この二人が何をしているのかといえば修行である。

アテナはひたすらアマネの攻撃を避け続け、アマネはそんなアテナに攻撃を当てる。それがこの日の修行内容。

エヴァンジェリン曰く、アテナは体の使い方がまだまだであり、アマネは術の精度が甘いのだとか。ラカンという大雑把な師の元にいたのも影響しているのだろうが。

ちなみに恋は部屋の中で精神修養中である。戦の傷が癒えきって

いないので体を動かすのはもう少し後になりそうだ。

「ほう、やってるな」

恋の元にやってきたのはここに主たるエヴァンジェリンとパートナーの茶々丸。妙に機嫌がいいのは気のせいか。

「なんかエヴァちゃん、機嫌いい？」

「そんなわけないだろう」

いや、すんごいにんまりしてるけど。なんというのかこうお日様みたいな気があふれているように見えるんだけど・・・・

否定を口にするエヴァンジェリンをさらに否定したのはなんと茶々丸。

「いえ、マスターは修学旅行以来の上機嫌です」

「茶々丸!?お前何を言って・・」

「先ほどネギ先生がマスターに師事しにきたのです」

「それで」

ネギ先生が師事するとなると弟子になるわけか。それはそれで面白そうだ。

「しかもネギ先生はマスターの「近衛史菜や垣根帝督でなくていいのか？」という問いに「はい！魔法使いの戦いを学ぶならエヴァン

ジェリンさん以外にいないと確信したのです！」と仰いました」

「それはたしかにうれしいね。それでエヴァちゃんはこみ上げてくる笑みを押し殺そうとして変な顔になっているんだね」

「はい、マスターは今にも跳んで跳ねて全身で喜びを表現したいという衝動を抑えるのに必死になっているのです」

「いいかげんにせんかお前らーーーーーー！！」

～閑話休題～

「まあボーヤが弟子になると決まったわけではない。今度試験をすることにしたからな」

「ん？試験？わたしたちの時はしたっけ？」

「もともと下地のある奴と下地のない奴を同列にするか。お前達は面白い情報の提供もそうだが、戦いの基本を徹底して仕込まれていたからな」

恋とアテナは主に母親のとんでも修行に付き合わされたり、史菜に魔力コントロールを仕込まれたりとしていたので弟子入り前の時点で魔法騎士団員よりもずっと強くなっていた。

「まあ、ボーヤが弟子になるとすると基礎からしなければならない

からな、お前達の修行を見る機会も減る。だから今のうちに叩き込んでおくことにする」

「ネギ先生が試験に合格することを見越してるんだね」

「マスターはネギ先生が試験に合格することに非常に高い期待を寄せていますから」

「それに今のは付きっ切りで教えてやるぞって言ってるようなもの。ネギ先生が羨ましい」

「だからなんでそういう話になるんだーーーーーー！！」

エヴァンジェリンの咆哮が響き渡った。

からかいすぎたために機嫌を損ねたエヴァンジェリンは恋に地獄の精神修養を課したのだった。

それから数日がたった。

学校では基本エヴァンジェリンと行動し、細かな教えを仰ぎつつ、放課後はダッシュで修行場行き、軽い組み手をして汗を流したら、精神修養の巻物のなかで精神を鍛え続ける日々。

肉体的疲労はそんなでもないが精神的疲労はかなりのものになってきた。

そして、木曜日早朝。事件が起こった。

ここ数日エヴァンジェリンの家に泊まりこみで修行していた恋は朝早くからエヴァンジェリンの見回り業務に連れ出されていた。

「・・・ねむい」

「さっきからそればかりだな」

「今何時だと思ってるの？4時！昨日何時まで起きてたかわかんないけど、ゼンゼン寝てない」

「まあまあ恋さん。わたしも早起きの吸血鬼はどうかと思いますが」

「ほんとに仲良くなったよなお前達」

エヴァンジェリンが青筋浮かべ始めたので恋はだまった。

そんな彼女達の元にパーンという音が聞こえてきた。

目を向けてみるとカンフーをしているネギとまき絵がいた。

恋からすれば頑張ってるなーと感心するところではあるが隣のエヴァンジェリンはそうもいかなかったらしい。

ムッとした表情で二人、主にネギを見ている。

あ、嫌な予感。

「ふんカンフーか。ずいぶん熱心じゃないかボーヤ」

「あ、エヴァンジェリンさん」

「エヴァ様、茶々丸さん、恋ちゃんおはよー」

「カンフーの修行をすることにしたのか。それならわたしへの弟子入りは白紙でいいな」

エヴァンジェリンはすこぶる機嫌悪そうに言う。

「え、いやこれはあの白髪の少年の研究で」

「いーよもともと弟子はとるつもりなかったしな」

「違うんです～」

もうすっかり拗ねてしまった。

「もーエヴァちゃん弟子くらいしてあげればいいじゃん。なんでそんな意地悪するのー？」

まき絵の問いにもエヴァンジェリンはいやみで返す。

「お前みたいなガキっぽい奴と話す気はないんだよ。ちょっと魔法に関わったからといっていい気になるなよ」

「ふ、ふーんだ！エヴァちゃんだってお子ちゃま体形の癖に！ネギ君あーんなに強かったんだもん、エヴァちゃんに教わらなくたってすぐに達人になっちゃうよーだ！！」

「？」

まき絵はネギの戦いを見てなかったはず。もしかして吸血鬼事件

の時のが仮契約で浮き出てきたとか？
と、恋は考えたが、ほうっておいてもいいだろうと捨て置いた。

「ぬ”」

まき絵の言葉にエヴァンジェリンも頭にきた。
ほんとに六百年生きてるの？というくらい単純なことで怒るのがエヴァンジェリンクオリティ。

「そうかわかった。今ボーヤへの試験の内容を決めたぞ。そのカンフーモドキで恋に一撃でも入れてみろ。それで合格にしてやろう」

「え”そこは茶々丸さんじゃないの！？」

愕然とする恋を無視して、というよりも当人のネギを無視してまき絵が勢いのまま言ってしまった。

「いいよ！ネギ君ならそんなの楽勝だよ！」

恋は小さいころから功夫を続けている。それは母に仕込まれたとか戦い方的にあっているだとか以前に神力を抑えるのに必須だったからだが、その積み重ねを一週間やそこらの素人に負けることはプライドが許さない。
楽勝とか言われたらさすがにムッとする。

「ハハッ！だそうだ恋。ちょっともんでやれ」

「む、よし。いくよネギ先生」

ト・・・十数メートルの距離をゼロにした恋の一撃がネギに入り、

吹っ飛んだネギは目を回して終了。

「ま、そんなところだろうな。試験の場所はここ、日曜日の午前０時にまけてやろう。せいぜい頑張ることだな」

「はあ・・・やっぱり巻き込まれたか・・・・」

弟子入り試験？え、わたしが！？（後書き）

区切りのいいところで切ります。短めですが。

試験の日

金曜放課後。
ほぼ日課となりつつあるネギと古の組み手が広い芝生の公園で行われていた。

「ネギ坊主は恐ろしく飲みこみが早いし、才能もあるが、二日ではどうにもならんアルよ」

ほい負けーと古がネギの足を引っ掛けて倒す。
その様子をアスナと刹那が眺めている。

「じゃあネギは勝てないって事？」

「ネギ先生は格闘の素人ですから、恋さんから一本となると厳しいですよ」

「ねえ、恋ってそんなに強いの？」

アスナは恋が格闘で戦っているところは見たことがない。というよりも恋の戦っているところをほとんど見ていないのでどの程度強いのかが分からないのだ。
京都のときはなんだかんだで一番危ないところを引き受けてくれたし、一番の重症だったが。

「恋さんは強いですよ。遠近中どの距離でも戦えますし、武術でも群を抜いているでしょうね」

「じゃあやっぱりやばいじゃん！」

「そう、はじめから勝ち目はない」

「ん？・・・・・恋！？アンタなんでここにいんのよ！！」

アスナと刹那の会話に割り込んできたのはネギの対戦相手の恋だった。

「まさか敵情視察！」

「ちがう。通りかかっただけ。そもそも刹那の言うとおり素人が二日頑張ったからって十年以上積み重ねたわたしに届くとは思えない。敵情視察しても無駄」

「・・・・」

残念ながらその通り。正論なのでアスナも口をつぐんだ。

「はあ・・・でもエヴァちゃんも厳しいよね。なにも恋に一発入れるなんて無茶な試験。意地悪すぎる」

「んー。たしかに意地悪とは思うけど、今回はエヴァちゃんにわたしは同情する」

「なんでよ？」

憮然とするアスナに恋はエヴァンジェリンがネギの弟子入りの件をどのように思っていたのか掻い摘んで話す。

「エヴァちゃんはネギ先生の弟子入りをすごく喜んでた。キャラ崩

壊するくらい」

「え!?そうなの?そうは見えなかったけど」

「それはプライドが邪魔したから。でもいざ蓋を開けてみたらくーにも弟子入りしてた。これにエヴァちゃんは大きなショックを受けたの。だからしょうがないよね、浮気みたいなものだし」

「あーーー」

アスナもそれを聞いて多少エヴァンジェリンに同情を示した。

そりゃネギが悪いわと

そこにまき絵と亜子がやってきた。

「ネギ君、たくさんお弁当作ってきたよ!食べて!」

まき絵が持っていたのはお弁当箱というよりは多数の重箱。十人前は軽く越えている。

「うむ。では休憩アル」

「うわーおいしそうですね」

「作りすぎじゃない?」

重箱が多すぎることもあり、少し早いがみんなで夕飯ということになった。

「・・・・・・・」

「・・・・・・」

みんなの箸が止まっている。視線は一点に釘づけ。
すなわち、恋。

「みんなどうした？食べないの？」

「いや、食べるけどさ。恋は食べるの？」

「おいしいよ」

なぜかみんな少し引いている。
恋はよくわからなかった。たかが重箱三つ一人で空けているからといって。

「おかしいでしょ！どんだけ食べんのよ！！」

恋の箸は止まることなくむしろ加速している。
堪らなくなったアスナがついにつっこんだ。
そうしている間にも四つ目に取り掛かる。

「すごいですね、恋さん」

「恋さんは食べるときは思いっきり食べますから」

「ほんまよー食べるなー」

「わたしもこんなに食べてくれるなら作った甲斐があったよーって、恋ちゃん！？」

まき絵が今さらながらに恋に気づいた。

「恋ちゃんってネギ君の仕合相手だよね！」

「そう。でもだからといってわたしは食べ物に釣られるほど貪欲ではない」

「じゃあ、もういいよね」

それを聞いたまき絵が恋の重箱を取り上げた。

「あ・・・・」

食を失った恋は未練たらたらな視線を向ける。

ジーーー・・・

「うっ・・わかった、返すから、返すからそんな雨にぬれた子犬のみたいな目でわたしを見ないでー！」

～閑話休題～

「でも、恋さんもエヴァンジェリンさんに弟子入りしてたんですね」

「うん。この業界で彼女ほど名の通ったのはいないからね」

一段落して各々が会話に花を咲かせている。

「わたしも半ば巻き込まれたよーなものだし、適当にやろうかとも思ってたんだけど、姉弟子になるわけだし、ネギ先生が頑張ってるとこみたら、手は抜けないよね」

「はう！？」

「先生、試合の日を楽しみにしてますよ」

恋はそう言って輪から抜けて、帰っていった。

「アア、アスナさん！恋さん本気になっちゃいましたー」

そして運命の日。

日曜午前０時。世界樹前広場。

「オイ、御主人コレジャ試合ガ見エネーゾ」

柱に立てかけられた茶々ゼロが文句を言っている。別荘と違いエヴァンジェリンの魔力の封じられた外では茶々ゼロは身動きが取れないのだ。

「たく、役立たずの癖にうるさい従者だ」

「そういいつつもちゃんと専用の椅子を用意してるマスター、かわいい」

「でもいいの？正直わたしに一発入れるのは無理だと思うけど」

「かまわん。大体恋に一発入れるなど破格の条件だ」

エヴァンジェリンが懐中時計を確認したとき、ちょうど長針が十二を指した。

「エヴァンジェリンさーん」

来た。

「ネギ・スプリングフィールド。弟子入り試験を受けに来ました」

「よく来たな。ぼーや。では早速はじめようか」

恋はネギのいるところまで階段を下りていく。

「お前がそのカンフーもどきで恋に一発入れることができればばばーやの弟子入りを認めてやろう。ただしくたばったらそこまでだ」

「はい！」

ネギは元気よく返事をした。

「だが、なあ」

しかし、ここでエヴァンジェリンはプルプルと震えだし、吼えた。

「そのギャラリーは何とかならんのか！！わらわらと！！」

エヴァンジェリンの咆哮の先にはネギの応援団がいた。

アスナや刹那たちは分かるとして裕奈や亜子のような魔法とは関係のない生徒までいる。そこにアマネも加わってかなりの大人数。

観衆から黄色い声援が飛ぶ。

「まあいい。これでだめだったら潔く諦めろ」

「いえ、絶対に合格します」

「いうね、先生。じゃあやろうか」

恋とネギが向き合った。

「ねえくーふぇ大丈夫だよね？」

「いや、はっきり言って恋は強いアル。長引けば不利。最初のカウンターが失敗すれば勝ちはないアル」

「そのカウンターも当たるかどうか分からんがな」

そこに割って入ったのはアマネ。

「アンタ誰よ？高等部？」

アスナの疑問にアマネが答える。

「俺はアマネ・オルディン。恋とは幼馴染で、仮契約してる」

そういってアマネはカードを見せる。そこには恋のイラストが描かれていて、それが真実であると物語っていた。

「ええ！？」

「恋は小さいころから功夫積んでるし、本能的に危機察知するからな。ちょっと齧った格闘術じゃ難しいな」

「そんな・・・」

そこに、バキッという派手な音が聞こえてきた。

ネギのカウンターが恋にかわされ、反撃を受けて地に伏せた音だった。

「たった二日でこんなになるなんて思わなかったけど。まだまだ」

恋はネギの動きを冷静に捉えていた。正直言って素人バリバリだったネギが数日で様になるまで鍛えてくるとは思ってなかった。恋はその恐ろしいまでの才能に驚いていた。

「残念だったなぼーや！それが貴様の器だ！顔を洗って出直して来い！！」

エヴァンジェリンはあっさり跳ばされたネギに失望したように言い放った。

しかし、ネギは諦めていなかった。すぐに立ち上がると再び構えを取る。

「条件は僕がくたばるまででしたよね。それに制限時間もなかったと思いますけど」

「まさかお前！」

「はい、一発はいるまで、何時間でも粘らせてもらいます」

そう言って恋に突っ込んでいくが、このときすでに肉体への契約執行が切れている。こうなってしまえばネギの身体能力はがた落ちだ。スピードもパワーも子どものそれだ。

案の定恋に迎撃される。

それでもネギはすぐに立ち上がって、我武者羅に向かっていく。

（収拾付かないよコレ。もう一時間以上も経ってるんだけど）

恋は向かってくるネギの手を絡めとり、投げながらそんなことを思っていた。

その戦いはもう戦いとはいえないほどひどいものとなっていた。

傍から見れば恋が子どもをひたすらぼこっていると言われても仕方がない。

「お、おいぼーやもういいだろ。お前のやる気は分かったから」

「はあはあ・・まだでひゅ」

ネギの顔も傷だらけで左目は腫れ上がっていて痛々しい。体の強化を後回しにして魔力を障壁に集中し、ダメージを緩和しているのだが、それにも限界がある。

刹那や古は武術をしているからいいが、このかや亜子等血を苦手とするほかのメンバーは目じりに涙をため直視しないようにしている。

彼女達には刺激が強すぎる。

「もう見れらんない。止めてくる！」

アスナがついに動いた。

今まで何も言わなかったアマネがそのアスナを止めようと振り返るが、アマネが何か言う前にまき絵が叫んだ。

「止めちゃダメーーーーーーーーーーーーーーー！！！」

まき絵はアスナの前に両手を広げて立ちふさがった。

まき絵もネギのことが心配ではある。傷ついて欲しくないとも思っている。しかし、今のネギを止めてはいけないのだと分かっていた。

「あいつ、あんなにボロボロになって。あそこまで頑張ることじゃないじゃない」

「ここでネギ君を止めるほうがひどいと思う。だってネギ君どんなことでも頑張るって言ってたもん！」

まき絵は涙を流しながらも必死にアスナを止めようとしている。

「なんで!?あいつのは子どものわがままじゃん。意地張ってるだけよ、止めてあげなきゃ」

「ちがうよ。あんなの子どもの意地でできないよ!!ネギ君はなにか目標があってそれに向かって一生懸命頑張ってる。それを止めちゃうなんて絶対ダメだよ!アスナの周りにいる?ネギ君みたいにはっきりとした目標を持ってる子?これだって決めて必死になって努力してる子が?だから止めちゃダメ。絶対に」

アスナはまき絵の思いを受けて、止まった。そしてつらそうにネギを見つめる。

「へえ・・・」

「中三のガキの割には・・・」

アマネもエヴァンジェリンもこのまき絵の行動には感心していた。まき絵のような者はあまり認めたがらないエヴァンジェリンにもこの言葉は認めようと思わせた。

しかし、現実問題として、ネギはボロボロ。立っているのもつらい状況で、恋は平然としている。勝敗は誰の目から見ても明らかであるし、これ以上やっても勝ちはない。

（まきちゃんはいいこと言ったけど、これ以上はネギ先生の体にも

悪い。これだけ頑張ったんだからもういいよね）

ゾグン・・・と大気が震えた気がした。

「あれは、気!?」

「まずい、恋の奴決める気だ」

刹那やアマネが指摘する通り、恋は気を使って体を強化した。ふつうこの状況ではここまでする必要はないだろうが、ネギを完膚なきまでに負けさせることで後に尾を引かないようにするために、あえて気を使う。魔力を使わないのは一応武術で相手をしているからというこだわり。

「はあはあ・・・・」

（意識も朦朧としてる。よく、ここまでする。でも、ここまで。今楽にしてあげる）

恋はふらふらとしているネギとの距離を詰め、掌底を鳩尾に叩き込んだ。

衝撃でネギの体が九の字に折れ曲がり、意識を失ったのだろう。恋の体にもたれかかってくる。

「ネギーーーーーーーッ!!」

「ネギ君!!」

これにはたまらずギャラリーが駆け寄ってくる。

エヴァンジェリンも心配そうに見つめている。

恋はネギを寝かしてやろうとネギの肩に手をかけたとき、だらりを垂れ下がったネギの手が動いた。

「！！」

恋は目を見開いた。

（そんな・・・）

「・・・・・つかまえまふぃた」

「なんだと！？」

帰ろうとしていたエヴァンジェリンも思わず身を乗り出した。

ネギは気を失っていたのではなかった。恋の一撃を残ったほぼ全魔力を集中した障壁でなんとかやり過ごしていたのだ。

もうネギは何もできないと油断した恋はネギが気を失っていると勝手に決めつけてしまっていた。その結果、恋の手はネギに掴まれ、密着状態に持ち込まれてしまった。

ぺし・・・・

なんともかわいらしい音が恋の頬から聞こえた。

「あ」

「あ・・・たり・・まふぃた」

掴んでいないほうの手が恋の頬に入った。弱弱しい一発だが恋はとても重いもののように感じた。

精根尽き果てたネギはそのまま倒れ今度こそ眠った。

ネギの勝利だった。

試験の日（後書き）

まき絵が従者らしいこととした。

そしてネギ君の根性勝ち。十歳って他の漫画の主人公よりもずっと年下だよな・・・

外伝　十年前の風景

坂井家は他の家よりも少し大きいくらいの一般的な二階建て。つい最近までは五人暮らしであったのだが、この前めでたく六人目が誕生し、いっそう賑やかになった。

その家主である悠二やシャナはこのころから魔法界の表向きの仕事から姿を消し、なにやら裏で暗躍しているらしい。それもこれもあのサウザンドマスターナギが死亡したという情報が入ったことが原因の一つだ。

そういうきな臭い空気が魔法界に流れる中、坂井家の中に関して言えば平穏の二文字が当てはまる。

ナギが死ぬとはとても思えませんが、ほかにもアルビレオも消えたようですし一体何が。詳しい状況は一切不明。ただ分かっているのはナギという英雄が消えたということと、紅き翼が散り散りになったということだけ。

痕跡を何も残すことなく、彼らは消えた。

結局、人並みの情報しかない現状ではわたしに納得のいく回答を出すことは不可能ですね。

「んあ～・・おねーちゃん、おかーさんたちはー」

そのように断じて、意識を戻したところに恋があくびをしながらトタトタとやってきた。

昨夜「アテナちゃんのめんどうは恋がみる」と言って聞かず、アテナをかまわせていたが、気が付いてみれば一緒に眠っているのだから見ているこちらとしても笑みをこぼしてしまうのも仕方がない。

「お母さんは外でお花に水をあげてるよ」

わたしがそういうと恋は眠たげなまなこをこすりながら玄関へ向かっていった。

玄関へ・・・しまった、そういえば今日は火曜日だ。生徒会の集まりがあったんだった。

時計に目をやれば時刻は9時20分。思い出してよかった、集合時刻は10時だから今出ても余裕で間に合う。

必要な道具を纏めて、恋を追うように外に出た。

史菜が通っているのは魔法使いが多数在籍している麻帆良学園ではない。魔法とは縁も縁もない一般の公立中学校。

この近辺の中学では抜きん出て生徒数が多く、史菜の代は7クラス、その下は8クラスという大所帯。マンションも増えてきて少子化、なにそれ美味しいの？と、言わんばかりばかりの状況に学校側も頭を悩ませているのである。

ここは一応県庁所在地ではあるが、市の中心部からはそれなりに離れていて、ビジネス系のビルと呼べるものはほとんどない。かといって自然が豊かかといえばそうでなく、住宅密集地というのが正しい表現だろう。

麻帆良学園のようなとんでも技術はまるでなく、いたって普通。最大の違いは夕日が沈んでいくところが綺麗に見えるということだと史菜は思っているのだが笑われてしまいそうなので口には出していない。

学校からは様々な音が聞こえてくる。

それは8月の第一週、すなわち夏休み期間でも変わらない。いや、

この時期は特に部活動が盛んな時期なのでもしかしたら一年で一番うるさい時節かもしれない。

おまけに外はいつ止むとも思えぬアブラゼミの大合唱。不快指数がそれだけで急上昇する。少しは鈴虫を見習って納涼って感じの鳴き方にして欲しい。あれではステージに上がったはいいが、一人一人が違う曲を奏でているような不協和音ではないか。

わたしはそんなことを考えながら内履きに履き替える。足音、掛け声、吹奏楽の演奏などが聞こえてやはり騒がしい。

県大会を勝ち抜いて3年生が残っているのは女バレと剣道だったか。ほかも世代交代をした新体制で新人戦に臨むべく練習に励んでいるし、文化部も来る文化祭に向けた作品作りに余念がない。かくいうわたしも文化祭に向けた会議のためにわざわざ学校に足を運んでいるのだ。

わたしは日本の四季は美しいし好きではるが実生活ではあまり好まない。

冬の寒さはイギリス生活の経験から我慢できる程度だが、雪が普通に積もる。そこがまず気に入らない。さらに夏はもっと嫌いだ。なにせ暑いしじめじめして気持ちが悪い。さわやかな汗？いえいえとんでもない。ぐっしょりしてシャツが張り付いて気持ち悪いだけでしょう。

生徒会室は扇風機が付いているはずだ。クーラーなどというお高いものは残念ながら取り付けられていないが今は扇風機の起こす僅かな風も希少価値だ。歩を早めて部屋の扉を開けた。

「皆さんおはようございます」

わたしは柔和な笑みを浮かべて最初の挨拶をする。それは会議の始まりを告げる定型句であるが、みんな律儀に返してくれた。

わたしが座っているのは憎らしいことに最も窓際の席。なんの因果か生徒会長という役職に就いているわたしは照りつける太陽の日差しを背に浴びて玉のような汗を額ににじませている。

この学校の生徒会は6月の体育祭で世代交代することになっている。二ヶ月前の選挙で圧倒的勝利を収めたわたしは来年の6月までこのイスに座ることになるのだが、如何せん座り心地が悪い。環境も悪い。少しでも改善しようと導入した扇風機も、なんと言うことでしょう・・・顧問に占拠されている。

そんな感じで始まった会議だったが、ひどくグダグダ。夏休みになってまで登校し、蒸し暑い部屋で会議をするなどアリエナイ。

当然、やる気のある輩はほとんどいない。顧問に何とかしてもらおうにも・・なんと言うことでしょう・・教務室に戻ってしまってもぬけの殻。OH・・・くれいじー。

わたしはあんまりやる気がないし、副会長の池君がいればもうすこしマシだったかもしれないが今日は欠席。結論は午後に持ち越しで昼休みとなった。

「で、結局なんもやらないで終わったって?」

「そうなりますね」

「意味ねー」

風通りの良い部屋で昼食をとろうと生徒会室を出たわたしは、クラスメイトで部活終わりの真竹と運よく会うことができ、自分の教室で昼食をとろうということになったのだった。
ちなみにわたしは女子友達は下の名前、男子苗字と呼び方を変えている。これは外国から来たときのファーストネーム癖を直すようにした結果である。

「部活のほうはやっぱり大変ですか？」

「ああ、部活？そりゃ大変よ。なんたって今年はマジで全国狙えるかもしれないしね」

「緒方さんはバレー部だったよね。しかもレギュラー。すごいなあ」

誰もいないと思っていた教室には二人の人影が有った。それが今一緒になって弁当をつついている吉田一美と平井ゆかりである。なぜここにいるのかと問えば、暇だからという返事が返ってきた。
さすが厨二。いや、中二。中だるみの時期。

「毎日毎日部活だらけよ。これじゃあ彼氏もできやしない」

「彼氏、やっぱ欲しいの！？」

「え、いや別にー」

興味津々といった風のゆかりに、問いを投げかけられた真竹はしまった。と、一瞬表情を変え、すぐ顔をもどして否定した。

「わたしのことはいいって。それより史菜はどうなのよ。さっきもなんか話してたじゃん」

ほんとにー?と訳知り顔で真竹に迫っていたゆかりが今度は顔を輝かせてこっちを向いた。
さっきというのは生徒会の男子に遊びに誘われていたときに事だろう。
「話してた!?何々どんな!?」
「普通にプールに行かないかって言われただけですよ」
「それ、デートやん!もう完璧!!で!?」
「もちろん断りました」
わたしがにべもなく言うと、えーとがっかりした様子でゆかりはテンションをがた落ちさせてしまった。
「でも一回くらい行ってもいいんじゃない。あんた結構断ってるでしょ」
真竹の言うとおり、わたしはもうこの手の話をずいぶん断っている。わざわざ知らない人と遊びに行く必要を感じないという単純な思いからだった。おまけに最近は坂井家の事情で忙しい。
「必要性がないです」
家のことまで話すことも無いだろうと、ただそれだけ言ってしまいにしようと思った。
「かわいそうな男共だねー。ってわたしはもっとふーちゃんの旬の

話が聞きたいんだよ！なんかないの！？」

「旬って・・・」

あまりの物言いに一美も苦笑い。ていうかふーちゃんってわたしのこと？

「旬といえば甲子園！もうすぐ開幕だけどどこが優勝するか賭けない！？」

今までの流れを完全に無視した真竹の提案が炸裂した。

いや、旬の部分は流してないか。

「ちなみにわたしはここに十円。名門だしね」

「じゃあわたしはここにします」

「んじゃあわたしはこの学校。ふーちゃんは？」

ふーちゃんは？といわれても甲子園はあんまり興味ないし。わたしはむしろ開幕したばかりのＪリーグに目を向けているんだが。

仕方なしにわたしは勘で『育英』と答えておいた。

「話を戻そう。ふーちゃん。ないの？こう惚れた男とか。気になる奴とか」

そう言われても、仲のいい男は帝督くらいしかいないし。恋愛もよくわからない。

「第一候補は垣根君になるでしょうね」

真竹がそんなことを言った。帝督と一緒に暮らしていることは周知の事実。今までもそういった話になることは多かった。

「そーなる？やっぱ？わが校のアニキとはどうなっているんですかッ！はい、ふーちゃん！！」

「どうって、どうとも」

今のわたしにはそのように答えるよりない。

帝督とは長い付き合いだ。いつ出会ったのかも覚えていないくらい昔から施設の門番として使役されていたころからのパートナーである。

わたしには二人に救い出される前までの一世紀近くの記憶がほとんどないがその傍らにいつも帝督がいたのは厳然たる事実である。

しかしながらそれが恋愛感情になるかと言えば違うだろう。

「てか、史菜って、垣根君のことどう思ってるわけ？」

真竹の質問の真意が図りかねる。恋愛はよくわからないといったはずだから、この質問はそういった感情以外のものを聞いているのだろう。そう思って率直な思いを伝えた。

「信頼してますよ」

「ほう、信頼ときたか。それはどのくらい？」

「誰よりも、ですが」

わたしは当然の事を聞くなとでも言うように迷うことなくそう言った。それに対する反応は三人揃って呆気にとられるというものだった。

「ねえ、どう思うこれ？」

「どうといわれてもねえ」

「恋愛感情を超越してるとかでしょうか？」

ひそひそと話す三人にわたしは首をかしげた。

生徒会室から続々と人が出てくる。

会議が終わって解散になったのだ。結果としてはベストではなくベターな回答に終わったが、それはまあ仕方ないことだろう。

史菜は誰もいなくなった部屋の中で書類をまとめ、下校の準備をしていた。

「恋、ですか」

何気なくつぶやくそれはここことは別の場所で行われた会議の主な議題。

友人達曰く帝督が一番近い場所にいるらしい。

ふと、帝督の隣を歩く自分を想像してみる。

「？」

すこし脈拍があがったような、おまけに少し暑い。人がいなくなったのをいいことに使った冷温魔法の効きが悪かったか？

わたしはパタパタと妙に火照った顔を手で仰ぎながら退室した。

三階の廊下を歩きながら窓の外を見ると、日は西に傾き橙色に変わった光が、東から迫る夜の闇が混ざり合い、空という画用紙に絶妙なコントラストを描き出していた。

その美しい光景を足を止めて眺めていると、下に見知った顔を見つけた。帝督だ。

お、と思った次の瞬間思わず体が固まった。

帝督が誰かと話している。いや、誰かとは言うまい。なにせそこまで仲良くないが顔見知りだ。

「たしか野球部のマネージャーの・・・」

帝督と話をしているのは野球部の女子マネージャー。しかも珍しく意気投合したようで楽しそう。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーイラッーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

今のわたしなら今日の議論にも回答が出せそうだ。

真竹が言うには恋をすると胸がドキドキするのだそうだ。

ゆかりが言うには胸がきゅんきゅんするのだそうだ。

一美が言うには相手を想うと幸せな気持ちになるのだそうだ。

ところがどうだ。わたしは今帝督を見てるとイライラしてしょうがない。かなり不愉快である。

だからこう結論する。

「帝督との恋はないでしょう」

わたしはそのまま、得体の知れない感情を引き連れて家まで帰った。

初の訓練と夕映

とある休日。恋たちは中世のヨーロッパにありそうな遺跡のような場所に来ていた。
目的は新弟子たるネギの初訓練のためだ。
集められたのは恋とアテナにのどか、そして修学旅行以降魔法に関わったメンバーである。

この日は恋の修行の予定はない。当初の予定通りにエヴァンジェリンがネギに付きっ切りになるというので休みを言い渡されていた。しかし、この陽気である。おまけに修行場所が図書館島の裏手にある遺跡っぽい趣の場所とあっては同行するよりないだろう。
家で羽を伸ばすより、ここで弟子を観察しながらまったりしているほうがよほど建設的であると思ったのだ。

すでに結界が張ってあるため只人がここを訪れることはない。故に恋にとってこの日は最高のピクニック日和となった。――――恋にとっては、だが。

恋が見つめる先にはアスナ、このか、刹那、まき絵が横一列になって並んでいる。

四人ともネギの仮契約者だ。
指導するエヴァンジェリンは杖を構えたネギを見ている。

「刹那、気は抑えておけ。相応の練習がなければ魔力と気は相反するだけだ」

「はい」

魔力と気というのは同じような性質を持ちながらも、水と油のように反発しあうエネルギーである。究極技法の咸卦法使いや恋のようにお互いが反発しない程度の距離感を体に覚えこませているような者でなければ同時使用は難しい。

「行きます！！契約執行１８０秒間！ネギの従者神楽坂明日菜！桜咲刹那！近衛木乃香！佐々木まき絵！」

ネギから四人に魔力が供給され、その体を焔のような光が包む。四人同時の契約執行は辛いのだろう、ネギの顔が歪んでいる。

エヴァンジェリンはそんなことには眼もくれず、矢継ぎ早に指示を出す。

「それを維持したまま、対物・魔法障壁全方位展開（アンチマテリアルシールド）」

「はい！」

「次！対魔・魔法障壁全方位展開（アンチマジックシールド）！！」

「はい」

アスナがネギを心配そうに見つめている。恋としてはガキは嫌いと言っておきながらもなにかとネギを心配するその姿勢は好感が持てる。少々過干渉な気もするが。

そんなネギをみながら恋は数ヶ月前を思い出す。

あの時は騎士団（ナイツ）の召喚、破棄、召喚、破棄の無限ループだったなあ・・・・

人間を追い込む方法として非生産的行動をひたすら強制させられるというものがある。有名どころでは穴を掘らせた後に埋めなおすを繰り返させるというものがあるが、エヴァンジェリンが恋に課したのもその類だ。

そのおかげで精神力はずいぶんと強くなった気がする。

「その状態を3分保持、その後北の空に魔法に射手１９９本」

「う、はい、光の精霊１９９柱、集い来たりて敵を射て！魔王の射手・連弾・光の１９９柱！！」

ネギの手から光が束となって撃ちだされ、結界にぶつかって光り輝いて霧散した。

「きれー」

「これが、魔法」

見ているものたちから感嘆の声が上がる。その光景は確かに一見の価値があるだろう。空に撃ち出された光がプリズムのように光って消える幻想的で美しい光景だ。

しかし魔法を使った当人はというとそれどころではなかった。

「あうう～～～」

ネギは目を回してその場に倒れこんでしまった。一気にこれだけの魔法の矢を撃てば倒れるのも無理はない。１９９本はネギが麻帆

良に来てから使った中で最も多い本数だ。

「今程度で気絶とは話しにならんわ！いくら奴隷りの膨大な魔力があったとしても使えなければ宝の持ち腐れだ！！」

「よーよーエヴァンジェリンさんよお、さすがにそれは言いすぎだろう、兄貴はまだ十歳なんだぜ。四人同時契約3分＋魔法の射手１９９本なんて修学旅行以上の魔力消費量じゃねーか。気絶して当然だぜ。並みの術者なら当然」

「だまれゴミムシが、わたしが主だ。だいたい並の従者で満足するはずなかろう・・・アテナ！手本だ！」

アテナが指名された。おそらくは同じ十歳だからということだろう。年齢は言い訳にならないと示しておきたいのだ。それにしてもエヴァンジェリンの覇気はおそろしい。淫獣・契約マスコットの先駆者（パイオニア）であるカモも恐れをなしてアスナの肩で震えている。

「わたしは何をすれば」

「そうだな、闇の吹雪に奈落の業火、間髪いれずに魔法の射手１９９本だ」

また無茶振りな、と思うなかれ。今のアテナにとってこのくらい朝飯前なのだ。

「ヴィーナス・ヴァーサス・ヴァイアラス、来たれ氷精、闇の精！闇を従え、吹雪け、常夜の氷雪。闇の吹雪！！来たれ深遠の闇、燃え盛る大剣！！闇と影と憎悪と破壊、復讐の大焔！！我を焼け、彼を焼け、そはただ焼き尽くすもの！！奈落の業火！！」

氷を従えた闇と炎を纏った漆黒が結界に妨げられ、はじける。熱と冷気が混ざり合って空気が揺らぐ。

「魔法の射手・連弾・闇の１９９柱」

揺らめく空気のカーテンを押しのけるように黒の魔弾が突き立つ。爆発し魔力が拡散して空を一転暗い気が満たす。

そして、アテナは泰然とした様子でそこに立っている。倒れる様子も、息を荒げている様子もない。

エヴァンジェリンは満足そうに鼻を鳴らすと、ネギに向き直り言い放つ。

「歳など関係ない。わたしに師事した以上は生半可な修行で済むと思うな・・・・・いいかぼーや。今後わたしの前では一切の泣き言も口答えも許さん。一度でも口にしたらその生き血を一滴残らず吸い上げてやるから覚悟しろ」

「はい！！」

「む・・・」

エヴァンジェリンは脅そうとしていたようだが、ネギの真っ直ぐな返事に思わずたじろぐ。

すこしひねているだけ真っ直ぐさには弱いエヴァなのだった。

ネギの鍛錬は続いていく。

同い年のアテナの力を垣間見てネギも発奮した。

空高い場所で魔法の射手が輝いているとき地上のギャラリーはというと。

「いやー魔法というのは興味深いアルな」

「確かにです」

古と夕映はその光景をじっと眺め。

早くも退屈し始めた恋等はネギの修行を意識の端に置きつつも勝手気ままに過ごしている。

「ほらアテナも横になったら?芝の上で寝るなんてそうそうできないよ」

「やです。服が汚れる」

「それならわたしシート持って来てますよ」

のどかが大きめのバックからブルーシートを取り出した。他にも水筒などが入っているのを見ると恋以上にピクニック気分でここにきたようだ。

「ナイスのどか!よし引こう。四隅持ってー」

「確かにそれなら横になれる――――――――――――って無理!!ムシがっ!バッタがシートにっ!集ってる!!」

「ど、どうしよー、ひゃああー跳んだぁ」

「お姉ちゃん、さっき寝転んでたから背中にムシが！！」

「うそ！？とって、ヘルプーッ！」

「騒がしいわお前らー！！！」

その日、ネギは新しい魔法を教わるでなくひたすらに魔力を使い続けることに終始した。

一時は解散したが、結局その後、流れでエヴァンジェリンの家に集まることになってしまった。

エヴァンジェリンがこのかとネギに話があると言い出したところに他が食いついたからだ。

「このかとぼーやはでかい魔力を持っているがーーーーーーーーーーーー」

エヴァンジェリンがこのかとネギに魔力の何たるかを説いている。

この二人は魔力は膨大だが扱いが下手という特徴を持つ。そのためネギとこのかはエヴァンジェリンからこのような話を受けているのだ。

「どうかしました？」

「あ、夕映。いやね修学旅行ときから疑問がね。なんでスクナが京都にいたのかなーと」

恋は日本神話にはあまり詳しくない。雨ヶ崎千草が飛騨の大鬼神と言っていたのにそれほどの霊格の存在がなぜ京都にいたのか気にかかっていたのだ。

「私の考えでよければお話しますが」

「なにか知ってるの？」

「知ってるというか予想でしかありませんが。そもそも日本人の宗教観には邪神の類も丁重に御祀りすれば守護してくれるという考えがあります。崇徳天皇や菅原道真に見られるように。さらに飛騨という国は京都と深い関係にあります。お寺の荘園があったり、都の造営に多数の技術者を飛騨から集めたり。そう考えれば飛騨の鬼神の御霊を呪術の中心であり、国の中心である京都に連れ帰り監視ついでに守護してもらおうとなるのは合理的な考えかと」

「な、なるほど。すごい夕映さすが寺社仏閣マニアだね！」

たしかに納得のいく説だ。今回のように兵器としても使えるのなら、国の中心に置くことにさほど違和感はない。

「はい、・・・それで一つお話したいことが「なんですってー！！もう一度言ってみなさいよ！！」！？」

夕映が何か言おうとしたときアスナが叫び声をあげた。

なにやら激高したアスナがネギの胸倉を掴んで吊り上げている。

「ですからアスナさんはもともと無関係な一般人ですし」

「な、何よそのいいかた！わたしが時間もない中で刹那さんに剣道教わってるのなんでだと思ってんのよ！！」

「そんなの僕頼んでないですし」

さっきまでエヴァンジェリンの話を聞くだけだったのに周囲を置いてけぼりにしてあっという間にヒートアップしている二人。

喧嘩の理由は、まあ大体の予想は付くが。

「とめないのですか」

「えーエヴァちゃん止めないの」

「この二人には辛酸を舐めさせられたからな。いい気味だ」

さぞ迷惑がるだろうと思ってみたらなんとも器の小さいことを言う。

小さいのは体だけではないようで。

「しょーがないなあ」

えい、と指を鳴らす。その瞬間、アスナの後頭部にオレンジ色の花が咲いた。同時に火薬が炸裂したような音。

「えーーーーーーーーーー！！」

「恋さんやりすぎではッ！！」

「アスナー！し、しんでもーた・・？」

喧嘩の仲裁に入るのかと思ったところにまさかの爆殺。これには一同度肝を抜かれた。

「まあ、静かになった？」

「「アホかーーーーーッ！！」」

「ひでぶッ！？」

アスナのハリセンとエヴァンジェリンのパンチが同時に入った。障壁破壊コンボはさすがに効く。

「人の家を燃やす気か！木造で燃えるものしかないんだぞ、ここはッ！！」

「びっくりしたじゃないのもう！死ぬかと思ったわよッ！！」

「いや、予想通りとはいえ、自慢の一撃をなんでもないかのようにされるのはショックというか」

ヒリヒリする頬を押さえている恋をアスナとエヴァンジェリンが目を吊り上げてにらんでいる。

「うんとりあえず痴話喧嘩も終わったことだし「な、なにが痴話喧嘩よ」本題に入ってもいいんじゃないかと」

アスナは華麗にスルー。

「アスナが怒っているのは無関係だからと今までのことも含めて否定されたような気になったからでしょ」

「そんな、僕そんなこと言ってないです。ただアスナさんは元々一般人なので危険には巻き込めないと」

恋の言にネギが反論するも、それを聞いたアスナがキッと睨んだので言葉が続かなかった。

その会話に恋の思惑通りに疑問を抱いた者がいた。

「えっ！アスナさんは魔法使いではないんですか！？」

夕映である。

「そうよ。このバカネギが魔法使ってるの見てから関わってるの」

「はあ、それならどうやってさっきの爆発を防いだのですか？」

「！？」

そういえばと今になって気が付く。

アスナが魔法使いでないならどうやって防いだのか。刹那たちは修学旅行でも石化を防ぐアスナを見ていた。そのときはアーティファクトの力かと思っていたが、さっきは何も持っていなかった。

「そう、わたしが言いたいのはそれ。たぶんアスナは魔法に対する強い抵抗力。いや、無効化能力を持ってる。と思う」

「なるほど、それでわたしの障壁を」

何を言われているのか分かっていない様子のアスナ。思ったとおり無自覚の能力のようだ。

「だからさ、ネギ先生。わたしはアスナが関わることにはむしろ賛成なの。こんな貴重な力ただの一般人だったなら隠し通せても、一度関わって、しかも白髪頭に見られたでしょ。とすればこのかみたいに狙われることになってもおかしくないと思う」

「え、狙われるの？わたし」

「そんな」

「だからアスナには自衛のためにも力をつけたほうがいい。でないと修学旅行みたいに今度はアスナ救出戦になるかもしれないし。あとはパートナーどうし話し合って決めて」

そしてネギとアスナは二人で話し合えるように別室に移動していった。

「うまいこと治めたなー、恋」

「しかし、カグラザカアスナが魔法無効化能力者とはな」

皆口々にアスナの話をする中で夕映だけが、黙然とした様子で座っていた。

その思いつめたような様子に気になったのどかが話しかけた。

「ゆえー、なにかあった？浮かない顔して」

「のどか・・・そうですね。その、わたしも魔法を使うことはできるんでしょうか」

「ゆえ、それは・・・・」

夕映の言葉に恋も意識を向ける。

「実は昨日、学園長先生から呼び出されたのです。それでいろんな話を聞きました。その、わたしの家のことも」

家？

「俄かには信じられないのですが、わたしの家はおじい様の代までは魔法使いだったと」

「へ？」

「えええええっ！？」

夕映が魔法使いの家系？いやそういうこともあるのか、裕奈のこともあるし。学園長はそれを知っていたからあのクラスにしたという訳か。

「なるほど、タイゾーの事を聞いたか」

「やはりご存知でしたか」

「なに、面識まではないがな。魔法使いから表の思想家に転進した稀有な男だ。それなりに名は知れている。はじめは従者（ミニステル）として戦地を回っていたらしいが、まああの時代は今以上に紛争が多かったし

な。耐え切れず戦場を離れていくものも多かった。奴の場合は主人を亡くしたことが大きかったと聞くが」

「はい。おじい様はわたしが魔法に関わることにがいいのか悪いのか最期まで考えていたようです。だからこの麻帆良に入るようにしたのだと。知らなければそのまま。知れば自由にと。そしてわたしは魔法に出会いました。のどかの話を聞いて悩みましたが、やっぱりわたしは魔法を学びたい」

「わかったよゆえ。わたしも未熟だけど一緒に頑張ろう」

「うちも初心者やし。仲間やな」

「はい。頑張るです」

このとき、夕映は本格的に魔法に関わるようになった。

空は気まぐれ

キーンコーンカーンコーン・・・・・

六限終了を知らせるチャイムが校内に響き渡った。

「・・・やっと・・・オワタ」

この日の最終授業は古典だった。正直、俺ことアマネ・オルディンには辛すぎる内容。

フジワラノ・・・何？知らんわ。家業変革活用？一体どんな事業に手を出すつもりやら。

だいたい漢字とか魔法界じゃ使わんて。

「魂抜けそうだなーアマネ君」

「あ？」

机に突っ伏して、開放感に浸っていたところに誰か、いや何か来た。

突っ伏したまま頭だけ声に方向に向けると、不自然なツンツン頭が姿を見せる。

たしか、名前は山田太郎でよかったか。

「よくねーよ！俺には高田金一っつう名前があるんだよ！そんなジョン・スミスみたいにすんな！」

なんということだ。アーティファクトも使わずに読心術を！？コイツ、できる！！などということはまったく、これっぽっちも思わ

ない。
　コイツにそのような美味しい役回りを演じさせるつもりは毛頭無い。
　しかし、ジョン・スミスときたか。意味合い的には同じなのに無理にでもかっこいい方向につなげようとするあたりいい根性してんなーと感心する。

「そうそうタカタタカタ。で、俺の独白にまで突っ込みを入れて、一体何が目的だ？」

「ヒドッ！」

　ががーん、と打ちひしがれているように見える高田に冷ややかな視線を送りつつ、明日の時間表に目を向ける。四時間目に古典。憂鬱だ。

「で、なんかようか」

「完全に流したな！・・・いや、今日の俺は心が広い。今のお前の失言は水に流してやろう」

　クックックッと悪そうにのどを鳴らす高田。しかし何故だろう。いかにも三下な雰囲気が溢れ出ているのは。
　大体『今日の』って言ってる時点で器の小ささを露呈してるぞ。
　という俺の指摘はこたえた様子もなく、ポケットを漁る高田。

「これだー！泣いて喜べ。俺様がお前を合コンに誘ってやる！」

　高田が揚々と俺の鼻先に突きつけたのは一枚のチラシ。タイトルはドキッ！ＧＷ後の先取り合コン！？である。

なるほど、それはGW中にリア充を見せ付けられた者達が爆発しろと怨嗟の念を抱いていたところに舞い込んだ吉報だったのだろう。

ネーミングセンスの無さはこの際置いておいて、残念な連中が意図も簡単に食いつく内容。コイツもものの見事にフィッシュされたと見ていいだろう。

かわいそうな奴だ。あとで生八橋をおすそ分けしてやろう。恋やのどかから貰ったのがまだ残ってるし。

それで合コンの話だが丁重にお断りした。

まったく興味が無いなどと強がるつもりは無いし、そこまで禁欲的でもない。大体高一の合コンなど集まってドンちゃん騒ぐだけだ。知り合いが増えるという意味でも参加することに否があるわけではない。俺が断ったのは単にスケジュールの問題。勉強と魔法を両立させるのが思っていた以上に厳しかったということだ。

「こ、き、く、くる・・・くる」

あの後俺は追いすがる邪派ネットをかわして、学外へ出た。

件のカ行を暗唱しながら道を行く。暗記物は魔法で何とかなるが読解となるとそうも行かないので厄介だ。

「日本語は表現が多様すぎるんだよ」

しかも古語とか完全に外国語じゃねーか、と忌々しげに参考書に目を落とす。偉大な先達に文句を言っても始まらないと分かっては

いるが、恨み言の一つも言わなければ収まりそうもない。

はあ、とため息。

見上げる空も俺の心情を映したかのように鈍い色の厚い雲が絶賛勢力拡大中。どうやらお天道様も五月病を患ったようだ。

「こりゃ一雨来るな」

水も風も俺の得意属性。大気に満ちる水気が俺に雨の到来を告げている。

・・・見れば分かるか。

周りの人も雨の気配を感じたのかあわただしく家路を急いでいる。学生だらけのこの街は六限あとが最も人通りが多い。

今もこうしてどっから湧いたんだと思ってしまうほどの学生が歩道を行き来している。

俺も帰路を急ぐ。が、ついにそれがやってきた。

ポツポツと水滴が頬に落ちる。

「傘あったかな」

手探りでスクールバックの底をあさると幸いなことに折り畳み傘を発掘できた。手早く広げるとすぐにザーと驚くくらいの雨が降り注いでくる。あと数瞬遅ければ水も滴るなんとやらになっていたかもしれん。

昼間は晴れていたんだが・・・

日本は天気も多様すぎる。

歩くこと数分。雨のせいなのか人気はまばらになった。
そんな時、はたと目に映ったのは見覚えのある制服。麻帆良中の服だ。黒い短髪に二本長いくせっ毛が後ろを向いている独特の髪形。
閉まった店の軒先に雨宿りをしている。
天から降る恵みの雨もこの石の街では恵みたりえず、恨めしげに黒く変色した雲を見上げている。

「よう」

「・・・アマネ？」

声をかけると不思議そうにこっちを見つめてきた。この辺りに俺がいるのが不思議なのか。一応帰り道なのだが。

「雨宿りか、恋」

「うん。いきなりだったから傘がなくて」

そう言う恋は少し雨に打たれて服が湿っていた。残念ながら麻帆良中の夏服はワイシャツの上からさらに一枚ベストを着ているので下が見えることは無い。まったく持って残念だ。

「？」

恋が年甲斐も無い純真さを湛えた瞳で？を浮かべている。俺は邪念を抱いた自分を恥じた。
とりあえずなにか話題はないかと辺りを見回してみる。

「そういやのどかは一緒じゃねーの？」

仲がいいんだし一緒に帰ってもおかしくは無いだろう。見たところ恋はひとりのようだし話としても無難な選択だと思ったんだが、当の恋はそれを聞くと憮然とした表情を作って。

「いた方が良かった？」

と、逆に尋ねてきた。

なんでだろう。なんとなく悪い気がして、いや、と否定する。返事はそう、の一言だったが雰囲気は和らいだ気がする。

「ね」

「ん？」

「そっち行っていい？」

え？と返事をする前に、恋はこちら側にぴょんと足を踏み出した。雨が当たらないように傘を恋のほうに向ける。

「ありがと」

「いや、いいんだが」

これはあれですかい。

「あいあいがさ、だね」

クスリ、とこの日初めての笑みを恋がもらす。間近でそれを見た俺は不覚にもドキッとしてしまった。見慣れていたとはいっても恋は美人に属するし、至近で微笑まれれば誰でもこうなる。

「じゃ、このまま寮までよろしく」

「寮までかよ」

それはまたずいぶんな遠回りになりそうだな、と内心思ったが、まあたまにはそういうのもいいかなと思い直した。

雨は依然として止む気配を見せないが、それも胸のうちの暗い気持ちを洗い流してくれるものと捉えよう。

少なくとも今はそう前向きにとることができそうな気がした。

ちゃぷん・・・・

二人の後ろで雨に打たれる水溜りが不自然に揺らめいた。

空は気まぐれ（後書き）

なんとなく暗い話になった。暗いっつーか、うん。当初の予定とずれたね。

この話書いてるときに外から子供たちのマルモソングが聞こえてきてこれが光かッ！！と思った。

共同戦線ー1

「ただいまー・・・・・・・返事なし。そうか今日は二人とも出張だった」

アテナは雨にぬれた銀色の髪をタオルで拭きながら、寮長室に入る。ここの主である史菜や帝督は二人とも海外に出ている。よってしばらくアテナは一人になるわけだ。

やはり恋の部屋に行こうか。

「お姉ちゃんは帰ってるのかな」

思えば一人というのは今まで経験したことがなかった。両親が忙しくても必ず近くには誰かいたので、寂しい思いもしたことがなかった。

それはネギや小太郎に比べればずっと幸運なことだった。

「？」

ちょっと姉のところに行こうかと思い至ったところで、知覚の端になにかが引っかかった。

この女子寮の上の階だ。

ちょうど人肌が恋しかったところ。様子を見に外へ出た。

「まさかネギせんせーにあんな過去があるなんて」

「はい、ただの天才魔法少年ではなかったということですね。」

のどかと夕映は先ほどまでエヴァンジェリン宅の魔法球にいた。そこで思いもかけないことにネギの過去を知ってしまったのである。

6年前にネギの村が焼かれ、村人達が石化させられてしまった一大事件も表向きにはなかったことになっている。

「よし、ネギ先生に関わった以上わたしたちももっと力を身につけないといけないです。プラクテ・ビギナル、火よ灯れ」

夕映が練習用の杖を振るも何も出ず。魔法に関わると決めて以来毎日練習しているのだがまだ一度もうまくいったためしがない。

「やはりまだだめですね」

「魔力を感覚的に捉えられるようになると早いんだけどね。一朝一夕にはいかないよ」

二人が向かっているのは大浴場。この寮は使用時間帯が定められているので今行かなければ他のシャワーなどを使わなければならない。

「なにやら中が騒がしいです」

「何してるんだろ」

脱衣所に入ると浴場内からキャーキャーと騒ぐ声が聞こえる。この時間は3－Aしかいないはずなので、この騒ぎはクラスメイト達によるもので決まりだ。

「ん、なんや夕映にのどかやないか。遅かったなぁ」

「このかさん、もう上がりですか？」

「うん、うちはちょっと長湯しすぎたかなー」

バスタオルを巻いた湯上りこのかと夕映が話しをしている。なんてことのないいつもの光景。しかし、のどかはふと、妙な感覚を覚えた。

（このかの魔力が、いつもと違う？）

それは解析の目を持っていたから気づけたこと。通常人の魔力の質が一日やそこらで変わることはありえない（恋のような違う力によるブーストは別として）。ましてこのかとはさっきまで別荘で一緒だったのだ。見紛うことはない。

それはつまり、目の前の人物が『近衛木乃香』ではないということ。

（これは水・・・スライム系の魔物！？）

「ゆえ！それはこのかさんじゃない！離れて！！」

「え？」

夕映がのどかのほうを見たとき、このかの体が崩れ液体状に変化、夕映の体を飲み込んだ。

「ゆえ！このッ・・！？」

のどかの足元からスライム状の手が伸び、足に絡み付いていた。

（しまった！）

そう思ったのもつかの間。のどかも夕映同様多量の水に飲まれてそのまま床に吸い込まれるようにして消えた。

敵は湿った莫蓙に体を浸み込ませていたのだ。

このかの擬態に気づいたのはさすがだが、これにはのどかも気がつかなかった。

アテナは階段を駆け上がり、妙な気配を追っていた。

ついさっき魔力が脈動するのを感じていたので、侵入者は何かしらのアクションをしたということ。

アテナの知覚能力は父譲り、姉の恋以上の正確さを備えている。

そのアテナをしてこの建物内に侵入されあまつさえ活動されるまで気がつかなかったのは驚嘆に値する。

「わ！？」

「！？」

階段から廊下に飛び出たところで、誰かとぶつかりそうになった。

「すみません！！」

「いえ、こちらこそ・・・」

アテナがぶつかりそうになったのはネギだった。

「たしかあなたは恋さんの妹の・・・」

「アテナ。ところでネギ君はこの気配を追ってきた、ということでいいのか」

「やっぱりなにかあったんですね！」

ネギも感づいていたようだ。魔力を辿り、ネギとアテナはそこにやってきた。

半開きになったドア、その中からは物が倒れ壊れる破壊音。

３－Ａ生徒の那波千鶴、村上夏美等の居室である。

「いいんちょさん！？」

玄関先にはあやかが倒れこんでいた。アテナはすばやく状態を確認するが目立った外傷は無く、眠っているだけのようだ。

「きゃあああ！！」

「いまのは村上さんの悲鳴！？」

ネギとアテナは悲鳴を聞くや否やリビングまで駆け出した。乱暴にドアを開け中に入ってみると、部屋の中央に見知らぬ老紳士風の男が屹立している。

「那波さん！？」

その男は気を失った千鶴を抱きかかえている。

「その人を放してください」

「ネギ・スプリングフィールド君、君の仲間と思われる8人はすでに預かっている。返して欲しくば私と一勝負したまえ」

「な!?」

「学園中央の巨木の下にあるステージで待っている。仲間のことを思うのなら助けを請うのも控えるのが賢明だね」

ザザザっと老紳士の足元から水が湧き上がってくる。修学旅行でフェイトが使ったものと同じ、水を使った転移(ゲート)。

ネギが制止するまもなくその黒いロングコートは水面に消えた。

「くっ」

「ん?」

アテナの視線の先には壊れたクローゼットとその前に倒れた黒髪の少年。その髪を押しのけるように見えているのは犬耳。

「もしかして犬上小太郎か」

「え、あ、本当だ」

ネギもその存在に気がついた。

修学旅行では敵対し、ネギを苦しめ、アテナの弱点を的確についた戦いで互角にまで持ってきた少年。　フェミニストが祟って最後はアテナが勝利したのだが。

「おい、起きろ狗」

アテナは小太郎の胸倉を掴みべべべべっと往復びんたをかます。

「い、痛いわアホー！！」

「あ、おきた」

小太郎の目が覚めた。

「ん？お前は確かアテナ、それにネギ！どうしてここに！？」

「それはこっちのセリフだよ！あのおじさんは誰なの！？どうして小太郎君がいるの！？」

すぐに出て行きたいところだったが如何せん情報が少なすぎた。事情を知っているであろう小太郎と話をする時間はとらなければならない。

「そうか、俺は記憶を飛ばされてたんか。無関係の千鶴ねーちゃんをまきこんでもーた」

「ぼくの仲間も捕まったみたいなんだ」

「なんやて！？のどかとかアスナとか本家の神鳴流剣士までおるやん！？」

「さっきのおじさんが言ってたし、アスナさんはすごくても元はただの中学生だから」

それでも最近は信じられないくらいの上達はしてるけど、とネギは付け加えた。

「なあ、このビンなんやけど」

小太郎が髪の中から小さな小瓶をとりだした。

陶器でできた丸底フラスコのような形状の小瓶はコルクで栓がしてある。

小太郎曰く、呪文を一声唱えるだけで『奴等』を封印できるらしい。非常に強力な対魔封印具のようだ。

敵の狙いはこれか。

「千鶴ねーちゃんを巻き込んだのは俺の責任や、助けられた恩義もある。俺も一緒に行く」

「こんな場面に出くわしてほうって置けるはずも無い。わたしもいくぞ」

「わかった。共同戦線だね」

三人は夏美にあやかを診るように頼むと豪雨の中を世界樹に向けて飛んでいった。

共同戦線－１（後書き）

夏の暑さが和らいで秋の気配が感じられる今日この頃。みなさん如何お過ごしですか？

わたしは今日仮免を取りました。ＹＥＳ、ＹＥＳ、ＹＥＳ！！

そして総合ＰＶ１０万アクセスでっす！ありがとうございます！！！

共同戦線ー2

目が覚めた。
眠った記憶などまったく無いのだが、自分でも気づかぬうちに意識を手放していたようだ。

「は？」

どこよここ。
少なくとも自分の部屋でないことは確かだ、というか屋外。記憶が正しければ大学部が使う特設のステージだったはず。
どうしてそんなところにわたしが。

「きゃあああ！？なによこの格好ッ！！」

しかもパジャマ姿から下着にスタイルチェンジを果たしていた。
すぐに前を隠そうとして腕が動かないことにかが付いた。ゼリー状の紐が腕に絡まり拘束していた。

「お目覚めかなお嬢さん」

「誰！？」

声のほうには黒いロングコートにツバの拾い帽子を目深にかぶった老紳士が立っていた。
あっ！シヴイおじ様！！

「囚われのお姫様がパジャマ姿では雰囲気も出ないかと思ってね、少し趣向を凝らさせてもらったよ」

「何なのよこのエロジジイーーーーッ!!!」

「ろもっ!!」

口より先に足が出た。

変態ジジイの横顔をを思いっきり蹴り飛ばしてやった。

「ハッハッハッネギ君の仲間は生きがいいのが多くてうれしいね」

「鼻血流してなに気取ってんのよ」

え?てゆーかネギの仲間って言った?

「あすなー」

「な!?みんな!!」

背後を振り返ると半球状の水のドームが張られ中にこのか、夕映、和美、古、まきちゃんが閉じ込められていた。

さらにそのドームとは別のドームには刹那さんと本屋ちゃんが眠ったように漂い、なぜか那波さんも閉じ込められている。

おじさんが言うには成り行きの飛び入りとの事だが。

「そうだ、恋は!?」

この中に恋がいない。だったら助けに来てくれるかもしれない。

「レン?・・ああ坂井恋君のことだね。彼女なら来ないよ」

「え」

何よその言い方。まるで恋がもうやられちゃったみたいじゃない。

「そのような顔はしなくてもいいぞ。別に恋君に危害を加えたわけではない。むしろ加えられないといったほうが正しいかな。なにせ無詠唱で業火を作り出してしまうような才能の持ち主だ、スライムたちでは荷が重い」

だから彼女に気づかれないように事を運んでいるのだよ。

老紳士はそう付け加えた。

「あんた、なにが目的よ」

「学園の調査が主な依頼内容だが、『ネギ・スプリングフィールド』と君『カグラザカ・アスナ』が今後どの程度の脅威になるか、というのも調査内容に含まれている」

「わたしッ！？」

く、狙われるかもしれないって警告されてたのに、結局捕まるなんて。

なんとか脱出しようとしているのに腕に絡みついた拘束具が切れる様子は無い。

「そろそろ着たようだ」

「いた、あそこだ！」

「確かにみんな捕まっているようだな」

ネギは小太郎を杖に乗せ、アテナは持ち前の魔法で空を飛ぶ。

「ネギ君射て！」

「え、でも」

「牽制や」

「魔法の射手・戒めの風矢」

フェイトすらも拘束した捕縛魔法が豪雨を切り裂いてヘルマンに迫る。

直撃すれば確実に拘束できる。それは先の修学旅行で実証済み。しかし、ネギの魔法の射手はヘルマンに触れる前にかき消されてしまった。

「弾かれた！？」

「いや、かき消されたように見えたが」

スタンド席の一番上に着陸し、目下のヘルマンと捕らえられたネギの仲間を見る。

「あ、アスナさんがまたエッチなことに～！！」

「ちがーう！！」

吊り下げられたアスナを見たネギの第一声はそれだった。
いまいちシリアスにならない。

「あなたは誰ですか！？どうしてこんなことを！？」

「私のことはヘルマンと呼んでくれてかまわない・・・・いや、そんなことはどうでもいい。私はただ君の実力が知りたくてね、私に勝ったら彼女達は返す。・・・・これ以上話すことは無い」

「ハッそれでえーんやな」

小太郎があっさりと了承し前に出る。
ヘルマンもそうだが小太郎の性格も単純明快なことこの上ない。

「まって小太郎君。これは僕の責任なんだし、僕がやるよ」

その小太郎を止めてネギがさらに前に出た。

それに対して小太郎が魔法使いだから勝てるはずが無いといい、ネギはヘルマンに負けたばかりじゃないかと言い返す。共同戦線といっておきながらこの時点で内部分裂してしまっていた。

「ここで白黒つけたるわ、ネギ！！」

「いーよ、わかった！！」

「フン！」

ゴスッとアテナの鉄拳が二人の頭頂部に落ちた。

「いってえぇー」

「あぶぶ」

「いい加減にしろ、バカ。共同戦線なのだろう、三人纏めてかかっていくのが筋じゃないか」

ハッと目的を思い出した二人は改めてヘルマンに向き直る。

「うむ、では始めるかね」

パチンとヘルマンが指を鳴らすとそれを合図に三人の背後から同数の少女が飛び出し、アテナたちを蹴落とした。

スタンド席を転げ落ち、一番下にまで落とされたがすぐに体勢を立て直す。

視線の先には水の少女達。

「なんだあいつら？」

「ありゃスライムって奴だぜ」

ちなみに固体名もある。髪が長いのがプリン、メガネをかけているのがあめ子、活発そうなのがすらむぃ。

アテナは飛び掛ってくるスライムがタマネギ型でないことに軽いショックを受けつつ、迎撃に入る。

基本的にスライムたちの攻撃は打撃系。近接で対応するがプリンにカウンターを当てたときに衝撃がうまく伝わっていないような感

覚を覚えた。
やはり、スライム系にこちらの打撃は効果が薄いようだ。
ネギの沈み込むような掌底がすらむぃに入る。八極拳・双撞掌。
ダメージにはならないが大きく跳ね飛ばすことはできた。

「ヤルネ」

さらに襲い掛かるスライム三人をアテナの貪恣掌によって生じた力場が弾き返した。

「やつ等の相手は俺がする」

小太郎が三人に分身しスライムに向かう。

「よし、いくぞネギ君」

「はい」

アテナとネギがヘルマンに向かって走り出す。
封印の小瓶が効果を発揮できるのは2．8メートルまで。ネギはなんとしてでもそこまで近づく必要がある。だからその隙を作るのはアテナの役目。
無詠唱砂のサギタ・マギカを三矢放つ。どうなっているのかアテナの矢はヘルマンの面前で掻き消えたが目くらましには十分だった。

「む」

「僕達の勝ちです」

後ろに回りこんだネギが瓶を構えた。

「封魔の瓶（ラグーナ・シグナートーリア）！！」

ネギが呪文を唱えると瓶のコルク栓が抜け、ヘルマンを吸い込もうとする。勝敗は決したかに見えた。少なくともネギたちには。

「ひ、ひやあああああ！！」

しかし、小瓶はヘルマンを封印することは無く、アスナが悲鳴をあげるという結果になった。

「な！？」

「ふむ、実験は成功のようだね。放出系の呪文に対しては完全だ」

まるでグローブをはめなおすかのように黒手袋を締める。

「この一帯に結界を張らせていただいた、これでどんなに騒いでも周囲に気づかれることは無いよ」

キュッという足音とともにネギの背後に回りこむヘルマン。ネギが対応する前にその右が放たれる。

悪魔パンチ（デーモニッシェア・シュラーク）

ヤバイッ　感じる前にアテナは身を投げ出した。その脇を高圧のナニカが駆け抜けていく。直後の轟音。

直撃したスタンド席が粉砕され、見るも無残な姿となっていた。

射線上にいたネギや小太郎も辛うじて回避できたようだ。

「呪文なしで西洋魔術みたいな攻撃が来る。これがおっさんの本気か」

ボクシングの構えを取る老紳士にはまったく隙が無く、その動きに無駄は見受けられない。長年積み上げた功夫がそお戦闘力を確かなものにしていた。

おまけに、

「犬上流空牙」

「白き雷」

「潜影蛇手」

小太郎の気弾が、ネギの雷が、アテナの石蛇がことごとくかき消される。

「マジックキャンセル・・・・魔法無効化能力という奴だよ、極めてレアかつ極めて危険な能力だ。今回はこちらが利用させてもらったよ」

「なんやて!?魔法無効化!?」

それを聞いてネギは唇を噛む。

アスナの能力を狙い輩はいるのだといわれた矢先に誘拐されあまつさえ逆に利用されるなど。

「アスナさん!」

「わたしは大丈夫、だから、はやくこのエロジジイぶっ飛ばしちゃ

って」

「これで私には放出系の魔法は効かない。男なら、拳で語りたまえ」

「わたしは女だ」

ヘルマンがパンチが襲う。一撃がコンクリートを砕く威力。

さらに左の連続ジャブ、息つく間もなく右が放たれる。

上位悪魔たるヘルマン卿の能力は他の悪魔と一線を画す。いままで幾人もの強者を屠ってきた衝撃砲に人間の戦闘術を組み合わせた独自の戦法はネギの修める中国拳法のような柔軟性はないが、直線的で無骨な体術は彼の力をさらに上に押し上げた。

「悪魔アッパー！！」

「うおおおあ！！」

速く、重い攻撃。

魔法を封じておいて卑怯な、とアテナは心の中で毒づくもそれが魔法の戦いであると割り切るしかないことは分かっているし、その不当性を指摘したところで状況が変わるわけでもない。

冷静に分析しても分が悪い。魔法が効かない上に強い。しかも相手は放出系が使えると来た。まったくもって悪魔の所業。

「ネギ君、本気で戦いたまえよ。義務感での戦いなど面白みが無くていかん」

アテナも小太郎もヘルマンの衝撃砲で大きく跳ね飛ばされたときのこと。ヘルマンの物静かで重厚な声が降り注ぐ雨音を上書きしてステージに響く。

「君は何のために戦っているのかね・・・・・あの、雪の夜の記憶から逃げるためじゃあないだろうな」
「どうして、それを・・・・・違います、僕は！」

「そうかね、では」

ヘルマンがやけに緩慢な動作で帽子に手をかける。演技がかった所作で出し惜しみするかのごとく。

「ッ！」

ネギの目が驚愕に見開かれた。
ヘルマンの顔が老紳士のものからのっぺりとした硬質な悪魔の顔に変化したことにではない。
それは彼にとって忘れられない記憶の一つ。
行動原理の原風景を植え付けた張本人だったからだ。

「そうだ。君の仇だよ、ネギ君」

六年前、ネギの故郷の村は無数の悪魔に襲撃され燃え落ちた。助かったのはネギを含めて数人だけという大惨事。多くの住人達は悪魔の強力な石化魔法を受けて石像と化し、その所在は生き残ったネギには一切知らされてはいない。

「私はあの日召喚された悪魔の中でも極僅かに召喚された爵位級の上位悪魔の一人でね、君のおじさんやその仲間を石に変えたのは私だよ。あの老魔法使いにはしてやられたがね」

ヘルマンがそれを言い終えたとき、ネギは彼の足元に踏み込んで

いた。

「！」

ネギがヘルマンを打ち上げ、さらに高速でその軌跡を追う。

「なんやあれは！？」

「魔力の暴走（オーバードライブ）かッ！」

ネギがもつ潜在的な魔力は非常に多い。使いこなせていないとはいえ、それが暴走すれば一時的にではあるが極めて高い戦闘力を得ることができるだろう。

しかし、

「これは・・・」

「ああ、まずいな」

ネギの動きは直線的過ぎる。威力は高くともその動きは読み易い。突っ込んでくると分かっている列車にぶつかるバカはいまい。そしてネギは列車ではなくただの人間の子どもである。上位悪魔ならカウンターを決めることも容易にできる。

ヘルマンの姿が変わる。特徴的な左右にねじれた銀の髪はそのままヤギの角を髣髴させる物質に、顔は能面の如きのっぺりして凹凸の無い黒いものに変わり、腕は伸び、ロングコートは漆黒の羽に変化する。

人化が解けて誰がどう見ても悪魔としか言いようの無い、彼本来の姿に戻る。

カパッと口が開く。口内には妖しい光。

「ック！小太郎、受け取れ！！」

アテナがネギに手をむける。引力、重力、斥力を簡易ながらも操る貪恣掌でネギを引き寄せる。

見えない力に引かれたネギが空中で向きを変え、一瞬遅れてヘルマンの永久石化光線が撃ちだされた。

落ちてくるネギを小太郎が受けとめる。

「邪魔をしないでもらいた、グオ！？」

列車でも衝突したかのような衝撃にヘルマンは跳ね飛ばされた。

（バカな！！）

辛うじて体勢を立て直し、驚愕を押し殺して自分を跳ね飛ばしたものを見る。

それは巨大な塊。その下には主たる少女がこちらを見据えている。

魔法が自分に効力を発揮することは無い、という前提のもと、なぜあれが自分を跳ね飛ばすことができたのか。その答えはアテナの足元に在った。

「なるほど、瓦礫を組み合わせた巨腕か。考えたね」

アテナが操っているのはヘルマンが破壊したスタンドなどの瓦礫。コンクリートの破片やベンチ椅子などが黒い炎で結合しているのが見て取れる。

アテナの足元に散乱しているのはヘルマンを殴ったときに魔法無効化の影響を受けて結合を解かれた瓦礫の山。それも黒炎の糸に導

かれ五指の巨腕へと吸収される。
闇は万物を吸収し飲み込むもの。
うまくすれば吸着させることなどお手の物。

「たいした魔法だ。だがその愚鈍な術で私と張り合えるのかね」

「愚鈍とは言ってくれる」

後ろでは小太郎がネギに説教している。
はてさて、魔力のオーバードライブ。似たものとしては姉である恋の炎髪灼眼があるが、あれは使用後に戦闘不能になってしまう。
ネギをこのまま戦力に数えていいものか。

アテナがヘルマンとにらみ合っていると動きがあった。アテナでもなければヘルマンでもない、ましてやネギ、小太郎でもない。
水牢に閉じ込められていたこのかたちだ。

「プラクテ・ビギナル、火よ灯れ、プラクテ・ビギナル、火よ灯れ」

「誰でもいい！一瞬でいいから発動させてくれ！火種ができればこのか姉さんの力で燃え盛るはず」

夕映が隠し持っていた練習用折りたたみ式の杖に五人が呪文を唱える。

「プラクテ・ビギナル、火よ灯れ、プラクテ・ビギナル、火よ灯れ」

素人がよって集ったところで扱える魔力は大したことは無い。たとえ人の息吹に魔力が宿るといっても微々たる量で五人いたとしても火種すら起こすことはできない。

しかし、ここにいるのは『気』を扱える古に日々魔法の練習をしている夕映、ネギの仮契約者のまき絵とこのかである。ただの一般人よりも『力』は強くこのかに関しては極東最大級の魔力保持者だ。それが集まっているのだからつかない方がおかしい。

「プラクテ・ビギナル、火よ灯れ！！」

杖の先端にライターほどの火がついたと思ったとたん、焚き火のように一気に燃え上がった。このかの魔力がガソリンのような役割を果たしたのだ。

「ひゃわ！」

火は燃え上がり内側から強固な水牢を破裂させた。

和美がアスナに駆け寄り、魔法無効化能力を奪うネックレスを引き千切った。

これでヘルマンは魔法無効化を使えない。

「なんと！！」

夕映が放置されていた小瓶を拾う。

「その瓶をわたしてくださーイ」

スライムたちが夕映に飛び掛る。

しかして夕映は冷静。たった一度聞いた呪文を思い出し、口早に叫ぶ。

「封魔の瓶（ラグーナ・シグナートーリア）！！」

夕映が構えるその魔法の小瓶は今度こそ己の存在意義を確固たるものにする。

「いやあああああんデスゥー」

「ま、悪役ですし」

光り輝く瓶にスライムが吸い込まれていく。

しかし、

「あぶネーあぶネー」

一体、すらむぃだけが難を逃れていた。

夕映の失策は封魔の瓶の有効範囲を知らなかったこと。そのため発動させたとき、範囲外にいたすらむぃを封じることができなかったのだ。

「もう一度水牢に閉じ込めてやル」

「くっ」

「魔法の射手・連弾・光の三矢」

「お！？」

夕映に攻撃を仕掛けたすらむぃに真横から光の矢が突き刺さる。

相変わらずダメージなし。

「のどか！！」

「わたしにまかせて！紅き焔（フラグランティア・ルビカンス）！！」

ドグン・・熾烈な炎の花が咲き、すらむぃを焼く。

「あちちちち！沸騰しちまウ！」

「あ！まちなさーい」

「蒸発させられるとわかってて待つ奴がいるカ！！」

逃げ出すすらむぃをのどかが追いかけた。

「やるやないかねーちゃんたち！！」

「へへっもうやるしかないね」

「何だネギ君、まだ戦えるのか」

形勢逆転、魔法を使えるようになったからにはもう今までのようにやられっぱなしではいかない。

「しかし、奴に長い呪文は使えないぞ。速さのある術を叩き込まねば」

「それなら僕にとっておきの奴があるよ、たぶんいけるはず」

「よし、小太郎！畳み掛けるぞ！ネギ君を懐に入れる！」

「よっしゃ！任せとき！」

「ふふふやるじゃないか。いいぞ、さあやろう！」

ヘルマンが左足を前に半身となって構えを取る。その顔に焦りは無く、喜びといってもいい笑みで彩られている。

元より魔法無効化など本意に在らず。サシでの勝負こそ彼の望む戦いだ。

「ハッなに笑っとるんやおっさん・・・もう魔法は防げへんのやで！！」

小太郎が六人に分身し、ヘルマンに殴りかかる。

「退きたまえ小太郎君。私の狙いはネギ君ただ一人だよ！！」

強力なジャブがマシンガンの如く放たれ、六人の小太郎をことごとく打ち付ける。

「ネギ君一人とは連れないおじさんだなッ」

「ぬぅ！？」

小太郎を打ち払ったヘルマンの目前に黒く燃える岩塊が迫っていた。

アテンの拳。

瓦礫に巨腕を構成する闇色の炎を推進力にしてのロケットパンチ。

ヘルマンは愚鈍と評したが、これを見る限り決してそんなことは無い。

さらにその質量と内包した魔力が合わさって超重量の爆弾となっているのだ。威力は絶大。あらゆるものを押しつぶし粉砕する破壊の暴風となる必殺の大技。

「おおお！！」

その岩塊をヘルマンは一瞬で扱える限界にまで高めた魔力を使った悪魔パンチで辛うじて防いだ。

砕けた岩塊から黒い炎が噴出し、噴石のようにあたりに瓦礫をばら撒いた。

「ネギ！！」

ネギはヘルマンが全力で振り切った腕を掻い潜るように、その内に入り込んだ。

「魔法の射手・雷の一矢、霍打頂肘！！」

八極拳の真髄は超接近戦で発揮される。凄絶な震脚から至近で肘を繰り出す。ネギはここに雷の矢を乗せて威力を底上げし、ヘルマンの胴を打ち抜く。

「ぐ！？」

「来たれ虚空の雷、薙ぎ払え、雷の斧！！」

強大な雷撃がヘルマンの全身を駆け抜けた。

「わたしも頑張らないと追い抜かれちゃいそうだな」

恋とアマネは世界樹の枝の上から一部始終を見ていた。

すぐにでも助けに行きたかったが隣のお嬢ちゃんに止められていたのだ。

「ふん、まだまだだが、確かに教えたことをすぐにものにする力は飛びぬけているな。ふふ、ぼーやの潜在能力を見れたのは収穫だったよ。ヘルマンとやらには礼を言わねばな」

その後の話

ヘルマンは打ち倒されたが、ネギは彼を殺さなかった為にそのまま故郷に帰っていった。

小太郎は修学旅行の一件で特殊能力を封じられて反省室に閉じ込められていたのを抜け出してきたので、なにかしらの罰があるものと思われたが、学園長が詠春に掛け合って恩赦され、これからは麻帆良でくらすことになるようだ。

おそらくアテナと同じクラスになると思われる。

そしてネギはこの件で魔法拳士にするように決めたという。

「よっ！ニンゲン！」

「な！？あんた」

翌日、ネギを心配していたアスナと刹那、このかの前に現れたのはスライム筆頭のすらむぃ、を頭に載せたアテナだった。

「どういうこと？」

「ネギ君がヘルマン伯爵を許した（？）のにこいつを処分できるはずも無く、使えるので使い魔＆友達契約を結びました」

「おはようからお休みまでアテナの警護をすることになっタ。つーわけで、よろしくナ、ニンゲン」

「ええーーーーーーーーーー！！！」

まさかの展開に人目も憚らずに大声で叫んだアスナたちであった。

「それにしてもわたしを友達とはナ、ニンゲンっておもしロ」

共同戦線ー2（後書き）

すらむぃが生き残りました。今後はアテナの寂しさ解消、潜入捜査などで活躍してくれるでしょう。

ついに九月ですか、早いものですねー。

お祭り前に新事実

ヘルマンとの戦いから数日がたったある日の放課後。

「・・・ですので陰陽道というのは中国の五行思想から・・・」

「ただいま、ってあれ？刹那さん、夕映ちゃんに本屋ちゃんまでどうしたの？」

アスナが帰宅するとルームメイトのこのかの他にも刹那、夕映、のどか、そして影になっていて見えなかったところにまき絵がいた。

「このまえのことからせめて身が守れるくらいにはなっておいたほうがいいと思いまして、こうして刹那さんやのどかから魔法について教わっているのです」

「はー」

刹那は特に東洋系の呪術についてこのかに教えているようだ。このかも詠春の口ぞえでエヴァンジェリンに教えを請うているが頻度はネギや恋ほどでなく自主練を必要としていた。

「つまり魔力というのは空気、水、その他すべてに宿るエネルギーということです」

「うん、わかんない」

のどかはまき絵に説明しているが、なんといっても抽象的な概念だけに伝えるのは難しい。

「やはり感覚で掴んだほうがいいでしょうね、プラクテ・ビギナル、火よ灯れ！」

夕映が突き出した杖の先からボッと火が現れた。

「わっすごいゆえ！もうできるようになったんだ！」

「はい、ヘルマン卿のときの感覚をなぞったら割りと早くできるようになりました」

「ええーーいーなーわたしもはやくできるようになりたい」

まき絵もここ最近魔法の勉強をしているようで、普段はのどかに教わっている。新体操は三年の六月なので先日引退した。

しばらくは傷心気味であったのだが、魔法に打ち込んでいるあいだに元に戻った。

魔法成功率は未だにゼロ。

「せっちゃんこれなに？曼荼羅？」

「はい、えとこれは仏教系の術で座壇といって、個々人に割り当てられた守護仏尊によって効力が・・・」

「なんか大変そうね」

アスナもアスナで刹那から剣術の手ほどきを受けている。魔法よりも体を動かしたほうがいいと思っているし、周囲もそう判断している。よって杖を振ることはまだしていないのだが、みんながこうして練習していると取り残されたような気になってしまう。

「とりあえずお茶出すか」

アスナはキッチンの冷蔵庫に向かう。

必要なのは自分を入れてコップ六個か。

「麦茶でいい？」

「ええよー」

「すみませんアスナさん」

了承が下りたところで冷蔵庫を開ける。

「おお！帰ってたんだナ」

バタム！！

勢いよく扉を閉めた。

それはもう豪快に。

金具が外れそうになるくらいのハイパワーで閉めてやった。

「乱暴ダナ、壊れちまうゼ」

にゅろーんという擬音さながらに隙間から出てくる液体が声を発している。

液体はアスナの目線の高さで二等身の幼女になった。アテナの使い魔になったすらむぃだ。

「何でアンタがうちにいんのよ、おはようからお休みまでアテナち

ゃんっとこいるんじゃなかったの！！てゆーか人んちの冷蔵庫の中でなにやってんのよ！！」

「涼んでたんだヨ、外暑いしナ・・・いーじゃネーカ、それくらイ」

「いいわけないわよ！アンタ一人冷やすのにどんだけ電力かかると思ってんのよ！」

アスナは麦茶を入れながらもすらむぃとの口論を続ける。

「マッしょーがネーカ器が小さそうだシナ。ああ、そういやおまえ失恋の相が、ぶぺ！？」

「それはもういいのよ」

すらむぃが言い切る前に顔面ストレートで黙らせた。

「まきちゃん、お茶もってってくれる？」

「はいよー！」

とりあえずすらむぃを拘束せねば。と思った矢先、白い包帯が六本アスナの元に伸びてきて、コップにまきつき、こぼすことなく持ち去った。

「え？」

アスナの超人的視力ではコップ内のお茶がこぼれることはおろかゆれることも無く持ち去られたのを確認できた。

「アイツもニンゲン止めてたんだナー」

「そうね」

否定できなかった。

ガンガンガン！！

教室に金槌の音が響く。

学園祭まで残り数日となり、アテナ達初等部もギリギリの修羅場を迎えつつあった。

「やばやば！終わらないって！」

「その絵の具とってー」

「うそッ！白無くなった」

このクラスの出し物はテンプレでお化け屋敷であったのだが、それじゃあ面白くないと言い張る連中によってアレンジされ、恐怖ものからドンドンと遠ざかって、クリスマスエディションに変貌しつつあったのだがさらにそこから白熊の着ぐるみを着てクレープを売ろうという話になって完全にもとの路線から外れているのだった。

「やっぱり髑髏サンタっておかしい～」

「面白いだろー」

「うそだー、絶対違うって！」

髑髏の面をかぶったサンタや、トナカイ化したパンプキン等わけの分からないキャラクターが闊歩する魔窟となっている。

「男子働けー！！」

「ギャー、鬼が来る！」

「誰が鬼かー！！」

「委員長気が立ってるな」

クレープ用の台を製作しているアテナが指揮を執るクラス委員長を見て誰ともなしにつぶやいた。

「う、うんいろいろ変わって大変だったからね・・・」

「なあ、雪、ネジを打っても意味無いんじゃないか」

アテナの隣で悪戦苦闘していた雪は指摘されて始めて叩いていたのが釘ではなくネジであると気づいたのだった。

「あ、えと、ひぎゃ！」

動転し思わず自分の指を叩く雪。

「おい、大丈夫か？」

「つー」

「保健室行くか？」

「あ、はる樹くん・・」

アテナが何か言う前に心配した男子生徒、はる樹が雪の手を引いて保健室に行ってしまった。

「なんや、あれ」

「愛だよ、愛」

アテナはどこぞで聞いたフレーズを小太郎への返答に使った。
アテナの携帯がなったのはその直後のことだった。

夕方、アテナと小太郎は世界樹前広場にやって来ていた。
学園長からメールで呼び出されたからだ。

「アテナーこっちこっち」

「史菜おねーちゃん」

そこには多くの魔法使いが招集されていた。すでに人払いの結界が張られているために魔法使い以外の一般人はここにいない。
つまり、魔法関係の連絡。それもかなり重大な。

「オッスアテナ、遅かったじゃねーカ」

「すらむぃ、アスナさんのところにいたんじゃないの？」

たしかそんなことを言って外出したはずなのだが。

「オオ、実はアイツに流されちまってナ。配水管を通ってここまで来たんだヨ」

「それ下水だから！！」

家に帰ったらちゃんと洗ってやらなくちゃ。

「お、ネギ君、来たか」

学園長のつぶやく先に、ネギと刹那、そして恋がいた。

「さて、皆に集まってもらったのは他でもない。問題が起こっておる」

学園長の言葉に耳を傾ける。

どうにも敵襲というわけではないようだが。

「世界樹伝説を知っておるかの」

「あー俺のクラスのガキどもの間でも有名やで。学祭最終日に世界樹にお願いすると願いがかなうんやてな。七夕かっつーの」

「あれー恋人になれるんじゃなかったの？」

噂は場所によって差異はあれども願いがかなうということでは共通しているようだ。単なる都市伝説の一つかとも思ったが。

「実はの、本当に叶ってしまうんじゃ」

「ええー叶ってしまうんじゃって」

学園長のそれは予想を上回る回答だった。

説明によると世界樹の正式名称は『神木・蟠桃』といって、二十二年に一度膨大な魔力溜まりを世界樹を中心とする六ヶ所に形成する。

その魔力は絶大で、特に人の精神に強く干渉するというのだ。

つまり学祭期間、とくに魔力量が極大になる最終日は告白成就率１２０％という呪い級の威力を発揮するのだという。

「特に占いや迷信を好きな女子を中心に実行したがる生徒は多いかと思われます」

（確かにうちのクラスにも実行しそうなの何人かいるしな）

アテナの脳裏に真っ先に思い浮かんだのは雪の顔だった。

「生徒達には悪いがこの六ヶ所での告白が起きないように監視して欲しい」

（これは・・誰かに見られてる）

アテナが感じたとき他の魔法使いも気づいたようだ。神多良木のフィンガースナップの心地よい音が響き、不可視の斬撃が飛ぶ。
風の刃が切り裂いたのは機械駆動のカメラだった。

「追いますか」

「深追いはせんでいいよ、こんなことができる生徒は限られとる」

学園長は前に向き直って付け加える。

「ことは生徒達の青春に関わることじゃ、くれぐれも慎重にな。以上解散！」

人払いが解除され、一気に広場に人が増え始めた。魔法使い達は雑踏に紛れて一人、また一人と去っていった。

「ふう、アテナ、恋。ご飯食べに行きましょうか」

「ん」

「はい、じゃ、小太郎、ネギ君」

恋とアテナは史菜と帝督と一緒に帰宅した。

その夜。

「ネギ先生はどうでした、超さん」

「茶々丸やハカセのデータで知ってはいたが、思ったよりもいいやつだたヨ、気に入ったネ。ついとっておきの魔導器（ブラスティア）も渡してしまったヨ」

「恋さんはどうです」

「・・・・できることなら彼女とは敵対したくないものだネ」

「まあ予定が早まったが、それは逆に都合がいいネ。計画は必ず成功させるヨ」

お祭り前に新事実（後書き）

ブラスティア・・・まんまＴＯＶですね。ここでは未来の魔法科学の産物をそう呼ぶようにします。

そして座壇、これは屍姫です。

次回から麻帆良祭です。

麻帆良祭

『只今より、第７８回、麻帆良祭を開催します！！』

ポンポンと花火が上がる。

年に一度のお祭り。主役は学生。しかしその規模は間違いなく日本最大級のイベントといっても良いだろう。

三日間で延べ４０万人を動員し、一説によると二億六千万もの金が動くとまで言われるほどの祭典なのだ。

幸いにして今日は晴天。一週間は晴れマークが続き、気温もそう高くはない。絶好のお祭り日和となった。

「コタロー、ほら早くしろ」

「わーってるっての。始まったばかりやないか、仕事もまだやし、何もそないに急がんでも」

「お前バカダロ、これだけの人数がいるのにチンタラしてたらすぐに行列ができちまうダロ。考えろ犬」

アテナの手提げ袋からひょっこり顔をだすすらむぃがケケケ、と笑う。

「軟体動物にんなこと言われんでもわかっとるわ！」

「どーだかナ」

すらむぃと小太郎はちょくちょくこうして喧嘩をする。
どうにもこの二人は相性が悪いようだ。もともとは敵同士であったし仲良くしろと言うつもりもアテナにはなかった。

とりあえず、手近な科学部の出し物を見るために小太郎を引っ張ろうとしたときだった。

行く手を謎の集団が遮った。

「？」

異様な風体の集団だった。
真っ黒なローブに身を包み、目の部分にだけ穴を開けた真っ黒なとんがり頭巾をかぶっている。
人数は6。身長から察するに年のころはアテナと同じくらい。少なくとも中等部ではないだろう。

「え、と・・なんでしょう」

この麻帆良祭、仮装ＯＫである。生徒達、そして一般参加者達は各々の趣味嗜好に合わせて仮装を選び乱痴気騒ぎをする。
かく言うアテナも今着ているのはフードが猫のようになっている真っ白なローブ。魔法界でデザインローブとして人気を博している代物だ。一着日本円で６５００円、まほネットオリジナル価格。

問題なのはその死神集団があえて、アテナ達の行く手を塞いでいることだ。

そして、その手に握られているのは手錠、荒縄、木製鎌、ｅｔｃ。

いかに麻帆良祭とはいえ異様過ぎた。

コファアアア、コフォオオオ・・・・

不気味な息遣い。人のものとは思えない。

「ご心配めされるな、女神さま。我等は正義の使者でありますれば、あなた様を害することは決してありませぬ」

そして真ん中の一人がやけに慇懃な口調で語りだした。

なぜアテナのことを女神などと呼ぶのかは別にして、この集団の目的はアテナ達であるのは間違いないようだ。正確には小太郎に用があるように見える。

「なんや?」

小太郎は自分に向けられる負の視線に気が付いたようだ。

じろり、と全十二の穴から視線という名の針がびしびしと小太郎に放たれる。

「言いたいことがあるならはっきりいいな、俺は恨まれるようなことは・・・まあ、したかもしれんが、少なくともこっちで恨みを買った覚えはないで」

「なるほど、恨みを買った覚えは無いと・・・いけしゃあしゃあとぬかしおるわ。まあ、我々はなにも恨み辛みで動いているわけではない。ただお前の行う悪逆非道を打ちのめし、世に正義とは何たるかを示す。それが我等ＡＡＡの偉大なる職務!!」

「その通り!」「小太郎を倒せ!」「アテナ様を解放するのだ!!」

取り巻きが息も高らかに声を荒げる。

世の中にはＡＡＡというグループは数多く存在している。
音楽グループしかり、悠久の風しかり。
そして、この半年で、麻帆良学園の特に初等部で勢力を拡大しつつあるのが彼等の所属するＡＡＡであった。
正式名称『愛アイアテナちゃん』と名乗る、非公式ファンクラブであった。

「よーわからんが、売られた喧嘩は買うで」

「ふっ、この人数相手にどうこうできると思うな」

今までは水面下で細々と活動してきたのが、村上小太郎の登場で大きな揺らぎが生じたのだった。
それが麻帆良祭の浮ついた空気に触発され、一部がこうして暴走することになった。

ジリジリと、死神たちが隊列を崩し、囲むように移動し始める。
一触即発の張り詰めた空気。さながら並々と注がれたグラスの水のごとく、もうあと一滴滴れば溢れてしまう。そんな状況。

しかしてその状況を最も楽しんでいるのは実のところアテナだった。

ＡＡＡがなんの頭文字をとった、どんな組織か知らないが、彼等の目的そのものは容易に想像することができた。
故に、グラスをあふれさせる最後の一滴にならんと行動することにした。

「キャー、小太郎助けてー（棒読み）」

「はあ!?」

「!?」

アテナはひしと腕に小太郎の腕に抱きついて、ＡＡＡの様子を探る。

案の定、一瞬の硬直のあと、どす黒い邪気（オーラ）が噴出した。

麻帆良祭の初日の朝からアテナと行動をともにする小太郎を見ただけで衆目に姿を見せたのだ、彼等に目の前の光景を見て衝動を我慢する理性などもはやなく。

「死に晒せーッ!!!」

「え?ちょ、アテナ離れ、うおおおお!?」

こうして不毛な争いは不可避のものとなった。

その後どうなったのか、別段語ることもないだろう。小太郎が一対六で大立ち回りしたとか、最後の一人はアテナが踵落としをして沈めたとか、どうでもいい話である。

「ムダに疲れたわ」

「いやいや、愉しかったぞ、わたしは」

「お前はなァ！」

あれから、適当にその辺をぶらぶらとしていたアテナ達であったが、そろそろ店番の時間。

少し惜しいが、ここで一旦解散となった。

「おい、あれ見ろヨ」

すらむぃのいう方に目をやると、そこには人込みの中に見覚えのある黒い髪。

「お姉ちゃん？」

記憶によればこの日の昼間はアマネとデートだったはず。

周りにくすんだ金髪も見えない。

と、そこに来たのは団子頭の女子。アテナも知っている天才女子中学生の超鈴音。

なにか話して、そのまま連れ立って雑踏に消えた。

宮崎のどかは麻帆良祭を満喫していた。

時刻はもう夕方。オレンジ色の空も太陽とは逆のほうから徐々に夜の闇が迫っている。

午前中は、まあいろいろあったがそれももういい。
後ろから尾行しているものがいることは分かっているが、むしろ見せ付けてやると思えるくらいに気分は高揚していた。

「それにしても麻帆良祭って人多すぎだよな」

「はい、もう人込みに酔ってしまいそうで」

「ああーそういうのに弱そうだもんな」

隣を歩くのはアマネ・オルディン。のどかが密かに?想いを寄せる高等部の一年生。
当初、誘ったときにほぼ同じタイミングで恋が誘うという騒動があり、紆余曲折のすえに午前が恋、午後がのどかというように決まった。
無論午後のほうが良いに決まっている。

「それなら少し休んだほうがいいかもな」

「え?」

トン、と跳躍。のどかを抱えたアマネはそれだけで数十メートルを飛び上がった。

「だ、大丈夫なんですか!?」

「大丈夫、大丈夫。ちゃんと認識阻害はしてるよ」

「そう、なんですか」

降り立ったのは高い建物の屋上。
人目が苦手なのどかに配慮して、この場には誰一人として人はいない。

「おお、おお、これはいい眺めだなー」

年甲斐もなく無邪気な笑顔で町並みを見渡すアマネ。
思わず見ほれてしまう笑顔だった。

「あの、魔法世界にはこういうの、なかったんですか？」

「あるにはあるが、ここはまた別だね。口では説明できないけど。こんど行くことになったら見てみるといいよ」

「はい、そのときは一緒に・・・」

「？」

最後のほうはごにょごにょとしていてよく聞き取れなかった。

しかし、確かにこの屋上から眺める光景は一見の価値アリだと、のどかは思う。

煌びやかな街の明かりと暮れかけの太陽はとてもじゃないが言葉で表現できるものではなかった。
まして隣に想い人がいるのでは少し浮かれてしまうのも無理はない。

「あの」

だからだろうか、そんなことを口走ってしまうのは。

「仮契約、してもらえませんか」

「？」

ボウ、と世界樹が光を放った。

新仮契約者!?

ボウ、と世界樹が光度を上げた。
それが意味するのは・・・・

「あの、アマネさん?」

ついつい仮契約したいと口走ってしまいどうなることかと思ったが、それ以上に、アマネの足元から立ち上った魔力光に驚いた。

「わかった、仮契約しよう」

「へ!?」

アマネは手早く陣を整え、のどかを引き寄せた。

「あ、アマネさん!?」

(何?何?どういうこと!?アマネさんが光って、仮契約って、わあああああ!?)

状況が掴めず、動転している内にもうアマネの顔を目と鼻の先。

「そ、れ、は、やりすぎでしょおーーーー!!」

「きゃあ!?」

アマネとのどかの間に断ち切るように紅い斧が振り下ろされた。
結果としてアマネはのどかから距離をとった。

助かったような、残念なような。

「恋、やっぱり付けてたんだ」

「そ、それはのどかもそうだったでしょ」

「う・・・」

非難の視線を向けようとしたが、昼間の恋のデートを盗み見ていたのは事実。言い返せはしなかった。

「お邪魔虫か」

恋には目もくれずのどかを注視しているアマネ。

どうみても操られている。

まだ初日でありながらすごい魔力だ。これが最終日であったなら、アマネは生涯囚われていたかもしれない。

「どうしてこんなことになってるの!?てゆうか何言ったの!?」

「仮契約を・・・・」

「仮契約?それでどうしてこんなことになったのよ!!」

アマネの様子は仮契約とはまったく違う雰囲気。捕まったらいろいろとやばそうな。

「アマネ!本当に仮契約だけなの!!」

「もちろん。仮契約＝キスだろう。まかせておけ」

「なにを!?つーか何言ってんの!?」

どっから来た、キス

この場にいる者たちには知る由もないが、のどかが仮契約してほしいと申し出たその瞬間。奇跡に近いジャストタイミングで別の場所でも同じように願いを言った者がいたのだ。その内容はフレンチキス。

結果、ある種の混線を引き起こし、仮契約とキスというものがこういう形となって現れたのだった。

のどかの願望の中にキスというニュアンスが含まれていたことも大きい。

「完全に操られてるよ、もう!」

「あのー恋、わたしが仮契約しちゃえば」

「言うはやすし、よね。アレよ」

「うぅ」

今のアマネは目が逝ってる。

あんなのにキスされたら、いったいどうなることか。

「邪魔をするなら実力行使だ」

突如放たれた、アマネの正拳突きを恋は辛うじて避けた。

操られているためか攻撃にまったく躊躇がない。

「ちょ、まって、アマネ」

高速の振り下ろし、防いだと思えば蹴り、アマネは目の前の障害を突破するための最善を選択し続けている。
攻防の末に、アマネの手の平が眼前に迫る。

「ダイモーン」

「わぷ!?」

ボフン、と霧が生じた。
建物の屋上ということもあってすぐに吹き散らされたが、顔面に直撃した恋にはその効果が十全に発揮されていた。

「ふにゃああ?」

悪名高きダイモーン。
効果は相手を酩酊状態にさせるというもの。
本来は複数の敵に使用して、相手を無力化するだけでなく同士討ちを誘発させるなど、同種の眠りの霧以上に悪用の目立つ魔法である。

その場に崩れ落ちた恋を乗り越え、アマネはのどかに迫る。

「あ、あの、今のナシ、とかそういうのは・・・」

「ムリ」

「まッむぐぅ!?」

魔法陣が光量を増し、強く輝く。

「ん”ん”ーーーふむ、ぷあ、はあ、はむううう」

（し、舌がぁぁ）

普段のアマネからは想像もつかない強引なキス。

まさしく、肉食系男子。飢えた獣のごとく、貪る。

（これ以上は、ダメですぅ）

そう思ったとき不意に唇が離れた。

「ふえ？」

恋がアマネにしがみついていた。

頬が上気しており、明らかに心ここにあらずといった感じである。

「恋？」

「アマネぇ・・・わたしもぉ」

「恋ーーーーッ！！」

なんてことを！？

恋のとんでもない発言にのどかは声も出なかった。

ボウ、再び世界樹が発光した。

「わかった」

「ええー！？」

急展開も急展開。

「まって、二人ともさすがにそれはまずいですよ、正気にもどって、あ、ちょっと、ま・・・」

しばらくそのままでお待ちください。

「あれ？俺はいったい何を？」

世界樹の魔法が解けたとき、アマネはその間のことを忘れていた。

記憶を辿ってみても、のどかと夜景を眺めていたことしか思い出せない。

少なくとも足元に恋が転がっていて、のどかが魂の抜けたようになっている状況は記憶にない。

「おい、なにかあったのか？」

「・・・・はい！アマネさん、大丈夫なんですか？」

「俺？いや、俺は特に何もないけど・・・・本当に何があったんだ」

「何がって・・・・ッ」

のどかは一気に顔を真っ赤にしてわたわたとし始めた。

「あの、その、わたし、今日はこの辺で！・・・・失礼します！！」

のどかはそう言うと、酔いつぶれた恋を背負って走り去った。

事情の飲み込めないアマネの手元にはのどかとの仮契約カードのみが残されていた。

そのころ、龍宮神社前には屈強な猛者たちが集結していた。

超が麻帆良中の格闘大会をＭ＆Ａして伝説の格闘大会を復活させたのだ。

ここはその予選会場。

「よっす小太郎」

「アテナ来たんか」

「アテナさんこんばんは」

ネギと小太郎の下にアテナがやってきた。目的はもちろん大会に出場するためだ。

「なあ、アテナ。お前のねーちゃんは出ないんか？そうとうできるやろ」

「ああ、姉さんは出ないと言ってたよ。興味ないって」

「そうか、そら残念だわ」

ここにはタカミチもいれば真名や古までいる。容易く優勝することはできないだろう。

「ネギ、アテナ。予選なんかで負けたりしたら許さへんからな」

「もちろんだよ」

「無論だ」

予選の結果、三人とも決勝トーナメントに駒を進めることができた。

新仮契約者！？（後書き）

のどかの新アーティファクトは前衛武器です。

大会前日

『麻帆良祭は中夜祭に突入します！！』

威勢のいいアナウンスとともに町中から歓声が上がる。

３－Ａが会場として使うのはカフェテリア『スターブックス』。

アテナや小太郎、そしてタカミチも参加して大層な賑わいを見せている。

「聞いたか小太郎、雪とはる樹が付き合うことになったらしいぞ」

「ほー」

とか、

「ネギ君、今日は来てくれてありがとー」

「ドラキュラ少年似合ってたよ」

と言った愉しそうな会話が方々から聞こえてくる。

（ネギ先生ってどうやってみんなのとこ回ったんだろ）

気が付いたら公園のベンチで爆睡していて記憶が一部欠落していた恋もこのころにはだいぶ回復していた。

ネギのスケジュールを鑑みるにどうやってもアレだけの数をこなすことはできないはずなのだが、

「そのあたりは流石というべきかな」

しかし、妙に頭が痛い。

体調も悪いみたいだし、今日のところは早めに抜けさせてもらおうかな、と恋は考えていた。

ふと目を向けてみるとネギと小太郎、それにアテナがみんなの輪から離れてどこかにいくのが見えた。

「その懐中時計が？」

「うん、これ、航時機（タイムマシーン）なんだよ」

「俄かには信じられないが・・・・」

アテナと小太郎が興味深そうにそれを眺めている。

超が『好意』で渡した正体不明の化学の産物。

過去、現代、洋の東西、裏表に限らず不可能とされていた夢の技術がそこにはあった。

「三人揃って何してるの？」

「！？」

ビックゥ、と飛び上がるように驚いている。

話しかけたのは恋だった。

「いや、そこまで驚かなくても」

「す、すいません」

「ふーん、一般生徒には見せられない代物って訳」

恋の視線はネギの手元。航時機『カシオペア』に向けられている。
そこに宿る魔力からアーティファクトの類ではないかと推測したのだ。

「はい、実はこれ航時機なんですよ！！」

「？・・・・航時機・・・・はあ・・・・」

珍妙な物を見る目つきで値踏みするように眺める。
ありえない、と一蹴するにはネギの表情は輝きすぎていた。

「姉さん、信じるの？」

「信じられないと言えば信じられないけど・・・・他の娘達の話を聞く限り、ネギ先生が二人いたとしかいえない部分もあったし、むしろすっきりしたかな・・・・出所は超かな」

「はい、そうです。よくわかりましたね」

「そんな出鱈目な代物、それ以外に考えられないって」

そうはいっても航時機はやりすぎだと思うが。

「あ、どうですか。恋さんも一緒に学祭を回りませんか？」

「あー・・・わたしは遠慮しておこうかな、実は妙に体調が優れなくてね、そろそろ休もうと思ってたとこなの」

「姉さん、風邪？」

「そうじゃないんだけど、まー大丈夫じゃない？」

記憶までぶっ飛んでいるが、特にこれといって悪い感じはしないので休めばいいか、くらいに思っている。

「そうですか、あまり無理しないでくださいね。倒れたりしたらせっかくの学園祭が台無しになってしまいますから」

「それを言うならネギ先生のほうでしょう。ちゃんと休まないと、格闘大会にも響くよ」

「はい、それじゃ行こう」

ネギがカシオペアを起動させると三人は恋の前から一瞬にして消えた。

移動したような気配はなし、本当に消えたのだ。この時間軸から。

ネギのタイムスリップを見届けてから、恋は席に戻った。

「お姉ちゃん」

くいくい、と袖が引かれて振り向くとそこには消えたはずのアテナがいた。

周りを見ればネギと小太郎が普通に宴会を楽しんでいる。

「・・・・ああッ！そういうことか！」

記憶の欠落に白昼夢、いよいよ持ってまずいことになったかと思ったが、どうやら要らぬ心配だったようだ。

このアテナはタイムスリップしたあとで、学園祭を存分に楽しんできたアテナなのだ。

「なるほど、不思議なものね、消えたと思ったら一日分の経験を積んだ妹がポンと現れるというのは」

「お姉ちゃんも来ればよかったのに」

「いやいや、体調優れないからね」

この日、何度目かになる口上を並べる。

「それに、時間というのは有限だからこそ大切にしようと思うのだし、安易な時間移動はよくないと思うのよね」

「あ、そうだ恋ちゃん！昼間の凄かったね！！」

「？」

そこにやってきたのはチアリーダー部の三人。

「昼間？」

「そうそう、倒れたオブジェをスパーンてやったの！かっこよかっ

たーなんかの拳法？」

「え？オブジェ？」

昼間はデートしてたし、オブジェをぶった切ったりしたのは、まったく身に覚えがない。

と、するならば。

「お姉ちゃん・・・」

「立つ瀬がないよッ！！」

未来（かこ）の自分にツッコムことしかできなかった。

近く漣の音を聞く。

「ふあ～」

ネギは休めていた体を起こし、外に出た。

広がっているのは青い空に白い砂浜。南国のリゾート。

エヴァンジェリンの別荘である。

「ネギ君休めたんかー」

「はい、もうすっかり」

中夜祭は朝の四時まで続き、そのまま格闘大会には出られないと、急遽エヴァンジェリンの別荘を拝借したのだった。

ここならば外での一時間が中では丸一日。

ゆっくり休んでなお時間が有り余る。

「しっかし、ここは反則やで、ネギ」

「先生しながらだと、こうしなきゃ修行できないんだよ」

「せっかく時間ができたのだし、明日の準備を万全にしておいたほうがいいんじゃないか」

「せやな、アテナの言うとおりや」

「兄貴、タカミチって実際どうなんだよ」

カモの質問にネギは考える。

実際、ネギはタカミチに関する情報を持っていない。強いということは分かっているが、それがどのくらいなのかは知らないのだ。

「たぶんだけど、戦士系かな。僕の目の前で１００ｍの滝を割ってくれたことがあったよ」

「１００ｍの滝を！？」

「それは間違いなく戦士系だな」

「ネギ君が無詠唱で使えるのはサギタ・マギカくらいなのだろう。

ならば、瞬動術とサギタ・マギカをどう使うのかで勝率は大きく変わると言っていいだろう」

魔法の射手（サギタ・マギカ）は初級の初級。基礎魔法でありながらも汎用性が広く、実戦でも大いに役に立つ魔法だ。

ネギが無詠唱で使えるのは最大で九本。一本以上だとタメに時間がかかってしまう。

「つーかアテナのほうは大丈夫なんか？楓姉ちゃんやろ」

「あの人の実力がよく分からないからなんとも言えないなあ。ただかなりできるとしか。まあ全力を尽くすことに変わりはない」

アテナの初戦の相手は楓だった。

京都での戦いのときに手を貸してくれた忍者、という風にしか聞いていないし、本人も魔法使いについて知ったのはつい最近だという。

「とにかく優勝するのはわたしだし、小太郎もネギ君も倒すからそのつもりで」

「ぬかせ、勝つのは俺や」

「僕だって負けないよ」

三人は互いに勝利を確信する。

翌日の大会に備えて、ただ修行を繰り返した。

決勝トーナメント　？

麻帆良祭二日目。この日最大の目玉イベントはなんといっても武道大会の決勝トーナメントだろう。

別荘での休息を終えて選手控え室にやってきたアテナたち。

そこにはすでにほとんどの出場選手が今か今かと開幕の合図を待ちわびていた。

「なんというか、とても武道大会の本戦出場者とは思えない面子ばっかり」

「それを言ってはいけないのではないでしょうか」

アテナのつぶやきに刹那が苦笑しながら答える。

まっとうな武道家の姿をしたものの方が少ない。刹那とアスナはセーラー服だし、子どもが四人もいる（エヴァ込み）。

真っ当な人間が見れば見世物（ショー）にしか見えないだろう。

「すらむぃ、あんまり人に見られないようにしててよ。もしくは人化して」

「分かってル分かってル。メンドー事はゴメンだからナ」

すらむぃが人化すると小さな女の子になる。人の中でも過ごせるように人間と同じような体色に変化までして、だ。

普段は手提げ袋やリュックサックに入っているのが常であり、今も手提げ袋から頭だけ出している状態だ。

よほどのイレギュラーがない限りは優勝圏内は狙える。そうアテナは思っている。しかし、気がかりな者がいることもまた事実。

アテナは視線だけそのローブ姿の人物に向ける。

生来勘の鋭いアテナだ。あの人物の厄介さがなんとなく掴めていた。

客入りは上上。第一回戦が始まる前にすでに客席は満員状態になっていた。

「気、ねえ。どんな非現実（ファンタジー）だよ」

千雨は持ち込んだノートパソコンで大会情報を閲覧しながら、嘆息した。ばかばかしいと。

「いやいや、いきなり非現実と決め付けちゃうのは良くないんじゃないかな」

「なんだ、お前かよ」

話しかけたのは恋。

アテナの試合を見るためにここまでやってきた。

「お前は信じてるのかよ、気ってのをよ」

「さあ、あっても不思議じゃないと思ってるけど」

「いや、ありえねーだろ。気だぞ！」

「人間にとっての非現実なんて、ひどく曖昧だよ。昨日までありえなかったことが今日現実になってたなんてことはよくある事じゃない。昔の人にとっては月に行く事だって非現実（ファンタジー）だったんだし」

「ぐッ」

「それにそっちだって仮想現実（ファンタジー）の住人でしょ。『ちぅちゃん』」

「ッ！？・・・な、なんのことだよ」

千雨は密かな趣味としてネットアイドルをしている。もちろん人に言ったことはない。

しかしもうどう言い訳しても無駄な気がする。

恋は確かに、千雨とちうを同一人物と認識している。

「ＨＰチェックしてるからね。かわいらしい文体の癖に毒があって読ませると思うよ」

「な！？」

つい最近、というか昨日同じ事を担任から言われた。

『友達』もかわいらしい文体の癖に毒があって読ませるって言ってました。しかとこの耳でそう聞いた。

つまり・・・・・・・・

「あのガキにＣＰ教えたのはお前かーーーーーーッ！！！」

『ご来場の皆さん、お待たせしました！只今より、まほら武道会第一試合に入らせていただきます！！』

アテナは試合会場となる能舞台に立つ二人を注視する。

第一試合は小太郎と愛衣。

高音の語るところによると、愛衣はジョンソン魔法学校でオールAをとった秀才だという。

その能力はこの学校に来たばかりのころの見回り任務で見せてもらっている。

あれから半年ほど。

実力がそう変わっていないのなら、小太郎に負けはないと考えられる。

そしてその予想の通り、開始早々、小太郎は愛衣と距離を詰め掌底一発。実際に殴らず、風圧だけで場外に吹き飛ばすことで勝利した。

第二回戦。アテナが注目する、ローブの男――――――――――クウネル・サンダース――――――――――と一般武芸者との試合。

当初は押されているかに見えたクウネルの掌底が決まり、一撃で勝利した。

そして第三試合。

アテナは向かい合う相手選手に言葉を投げかける。

「そういえば、手合わせするのはこれが初めてですね」

「そうでござるな。初戦からあの恋殿の妹君と戦えるとは、エントリーした甲斐があったというものでござる」

「そう言ってもらえるとうれしいです」

アテナは言葉を交わしながらも一挙手一投足を見逃さないようにする。

未だ開始の合図はないが、その立ち居振る舞いを見てもただならぬ相手である事が容易に見て取れる。

『それでは第三試合、長瀬楓選手対坂井アテナ選手の試合を始めます！！』

戦いの火蓋は気って落とされた。

しかしアテナも楓も様子を伺って動かない。ただ肌を刺すような緊張感だけが会場を満たしている。

（忍術に関することは小太郎から聞いた程度の知識しかない。迂闊な攻めは旗色を悪くするだけ）

（ふむ、向かってはこないか。ネギ坊主のように自信がないわけで

はない、かといってコタローのように気負っている風でもない。なるほど、精神と身体のバランスがきちんと取れているようでござるな）

互いが互いを観察しあう。
見た目とは裏腹にそこには戦人の駆け引きが行われていた。

（このままじゃ埒が明かないか、仕掛けてみるか）

（む？来るでござるか）

アテナがローブを纏った手を向ける。
一瞬で床が見えない力に押しつぶされて潰れた。大きなクレーターの中心にはうつぶせの楓。

「初撃から物騒でござるよ、アテナ殿」

「！」

楓は背後から攻撃を仕掛けてきた。
頭を伏せて避ける。しかし、左右から『同時』に拳が迫る。

（分身かッ）

そうと分かれば避けるまでもない。
斥力場は発生させて分身の二人を弾き飛ばす。

そこに楓の蹴り。避けられる体勢ではなく手の平を向けるのも間に合わない。
しかしこの攻撃は空振りに終わる。

アテナの体がありえない方向に引っ張られていったからだ。

「なるほど。引力でござるか。どんな体勢でも自在に動けるのは聊か卑怯でござるな」

「そちらの分身も反則並みでしょう。本体と同等の密度の分身なんて」

アテナの超感覚を持ってしても、楓の分身体は本体と見分けが付かないほど精巧だった。

おまけに縮地の完成度の高さ。

『入り』も『抜き』もまったく気配がない。

（さて、どうするか。太陽さえなければ神力を使っていたところなんだが・・・・）

アテナの神力は太陽光の元では使えない。

これほどの使い手を相手にするとなると無詠唱魔法限定というのは少々厳しい。

「くッ」

アテナの顔に焦りが浮かぶ。

影分身の連続攻撃が捌きれなくなってきたからだ。

「楓忍法・四つ身朧十時！！」

「ジシュカの丘！！」

四方から楓がすれ違うように移動しアテナを攻撃する。

これをアテナは地面から自分を囲むように岩を出して盾として防いだ。
本体を見つけ出し、確実に仕留める。
これしかない。

「ハッ！！」

斥力場で二人同時に弾き飛ばす。
はずれ。分身体だった。

楓が次に分身する前に、重力球を発生させ、叩き付ける。

「クッ！」

直撃の直前に縮地で回避した楓。標的を捉えそこなった重力球は舞台周囲の池に落ち、盛大にスプラッシュ。客席から悲鳴が上がる。

「これは！！」

水煙が立ちこめる中、楓だけがその異変に襲われていた。
鴉。真っ黒な鴉の大群が水煙を突き抜けて楓を貫かんを突撃してくる。
全身に気を循環させ、防御力を強化。影分身に気を使う余裕はない。気弾を生成し影のワタリガラスの群れに叩き付けた。
再び大規模な爆発。

「くう」

余波を受けた楓がたたらを踏む。鴉そのものが爆発する魔法だった様子。影分身体も吹き散らされた。

そして、それこそがアテナの狙い。

本体さえ分かれば、全力の一撃を放てばいいだけなのだから。

身体強化に引力まで使い、制御できる限界ギリギリまで速度を高め、楓に特攻する。

「しまった！？」

「解放（エーミッタム）、魔法の射手・連弾・闇の九柱！！」

楓の懐に入り込んだアテナはその勢いのまま体当たりし、魔法の射手を纏った拳を捻りこむように叩き込んだ。

「はあ、はあ・・・今のは、確実に決まった」

手応えがあった。影分身ではない。逸らされたわけもない。

その証拠に、楓はその場に伏しているのだから。

『これは決まったのか！？楓選手ピクリとも動かない』

「いやー参ったでござるよ、アテナ殿」

仰向けに転がった状態で楓が言う。

「まさかあの水煙が魔法を衆目と拙者から隠すための物だとは、おまけにそうまでして出した魔法は本体を見抜くためのブラフとは、

一本とられたでござるよ」

『ここで１０カウント！この試合、坂井アテナ選手の勝利です！！』

アテナは次に駒を進めた。

後問題はネギの試合か。タカミチとネギがどう戦うのか、アテナは楽しみだった。

決勝トーナメント　？（後書き）

記念すべき第五十部です。
ヤッフー！！

決勝トーナメント　？

「あーくっそう・・・俺もトーナメント見たかった～」

アマネは愚痴を言いながら街道を歩いていた。
首に紐をかけ、腹の辺りに画板のようなものを装備している。
薄い箱のようにも見えるその中にはアクセサリーなどの小物類が並んでおり、値札もつけられている。
アマネのクラスの出し物である、アクセサリーショップの売り子をしているところなのである。

「盛り上がってんだろうなー。アテナも勝ったって言うし、さっさと売り切れないと見に行けないな」

というように愚痴りながら渡り歩いて幾星霜。ぶっちゃけ売り上げはかなりのものになっている。
売り子も物も、それなりに高いレベルにいるからだ。
と、そこの出店に見知った人物。

「あれ？恋じゃないか。武道会見に行ったんじゃなかったのか？」

恋は聞こえなかったのだろう。特にこちらを向くことなく、受け取ったジュースを持ってベンチまで歩いていく。

「そんな露骨に無視しないでくれよ」

そばまで駆け寄って話しかける。ここにきて初めてアマネの存在に気が付いたのかビクッ、と跳ねた。

「わッ！びっくりした。なん、だ・・・・！」

アマネを見る恋の目が見開かれる。

「いや、何をそんなに驚いてるんだよ、恋」

「あ、いや、なんでもないんだ。ほんとに、えーと、そっちはこんなところで何して、るの？」

「何って、俺はこれだよ。アクセサリー売ってんだよ」

恋もやはり女の子。吸い寄せられるようにアクセサリーに視線が行く。

美術部員の割合の多いアマネのクラスは帝督監修の下で下地を作った部員たちを中心に非常に高いレベルのアクセサリーの生産に成功した。

もちろん数自体は多くないので、ほかにも押し花の栞などを販売している。

「それより、何でこんな所にいるんだ？武道大会はどうした？」

「あーとぉ・・・ちょっと野暮用で、抜けてきたんだよ、うん」

なにやら、目が泳いでいる。目を合わせるのが恥ずかしいというのではなく、後ろ暗い何かを隠そうとしている、というのか、誤魔化そうとしているようである。

まあ、武道大会のほうは波乱の幕開けだったようだし、アテナがスプラッシュしたとか文句の電話も恋自身からはいっていたから、アレからまた何かあったんだろう、とアマネは思った。

「はあ、そうか。まあいいか、とりあえずコレ、やるよ」

「え？」

アマネはネックレスを一つ取ると恋に手渡した。
渡されたほうは一瞬ボウとしてからハッと我に返ってこう言った。

「いいのか、こんなの貰って。そ、それは売り物なんだろ」

アマネの渡したネックレスは銀色を基調とする簡素な造り。ワンポイントとして指輪のような環が三つ通っているだけ。

「ああ、俺からプレゼントってことで。似合うと思うぜ」

「似合う・・・そうか」

なぜか頬を染め、しばしネックレスを見つめた後、突然ブンブンと頭を振りだす。

「じゃあ、急がなきゃならないからこれで！！」

「あ、おい！」

ベンチから立ち上がった恋は振り返ることなく走り出し、雑踏に消えていった。

「急ぐんなら抜け出さなければよかったのに」

アマネは恋の消えたほうを見ながらつぶやく。

「それにしても、妙にどもってたな・・・なんかあったか？」

何かあったというよりも、何かしてしまったか、と思ってしまう。なにせ記憶がかけている上、のどかとの仮契約カードが知らないうちに手元にあったのだ。恋にも何かしてしまった可能性は高い。

「謝んなきゃいけないのかなぁ」

龍宮神社内、能舞台。

まほら武道会決勝トーナメントで使用される戦場はいま、かつてない破壊行為によって半壊状態になっていた。

フィールドに開いたいくつもの大穴。それがたった一人の攻撃によって生じたものだとは、少なくともこの場にいなかったものは信じることはあるまい。

「おーいアスナーッ！」

「恋！」

舞台修理の待ち時間に外に出ていたアスナと刹那を見つけて恋は駆け寄った。

「もしかして、ネギ先生の試合もう終わっちゃった？」

「ええー恋見てなかったの！？」

「すごい試合でしたよ」

観客もかなり盛り上がっていたからそれはもうすごい試合だったんだろうと予想は付くが・・・・

「もったいなかったな。着替えるんなら見てからにすればよかった」

アテナの起こしたスプラッシュから千雨を、より正確に言うなら千雨のノートパソコンを庇ったがために下着までずぶぬれになってしまった。

人目につくところで乾かすわけにもいかないからこそこそと外に出る必要があった。

「次はアスナと刹那の試合か。どっちを応援するとかはいえないけど、頑張って」

「もちろんよ」

「ありがとうございます」

舞台の修理も終わったようだ。

選手はまた選手席に戻る。恋も千雨のいるところへと急いだ。

選手席にメイドが二人。

何を隠そうアスナと刹那だ。

事もあろうに超鈴音、ユニフォームとしてメイド服を指定したのだった。

アスナと刹那を知る者たちの評価はアスナにとって厳しいものだ。なにせ、下地が違いすぎる。基本動作、出力、運動性能。どれをとってもアスナに勝ち目はない。

しかし、それを否定する者が現れた。本当に突然。予兆もなしに出現したのだ。

未だ素顔を晒すことのないその人物。名をクウネル・サンダースという。

「ぎゃ！？いきなりなにするんですか！？」

その怪人物は登場するなりアスナの頭をなでたのだ。

突然のことにさすがのアスナも飛びのいた。

「人形のようだったあなたがこんなに元気で快活な女の子に成長してしまうなんて・・・ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグがあなたをタカミチ君に託したのは正解だったようですね・・・何も考えずに自分を無にしてみなさい」

アスナのことを知っているかのような口ぶり。

さらに、いぶかしむアテナのほうを見て、笑みを浮かべる。

「あなたがアテナさんですか」

「・・・そう、ですが」

「あれからもう十年ですか、早いものです。以前シャナとあったときにはまだあなたはお腹の中にいましたからね」

「!?」

驚いた。この男、母と知り合いのようだ。極めて高い実力。魔法使い。なによりフードから伺えるこの顔は・・・・・・・・・

「あなたは・・・・まさかッ」

アテナはその顔を知っている。
両親とともに写る写真をいくつか見たことがある。

その男はアテナが正体に勘付いたの知ったのか、人差し指を立てて口元に持っていく。

「あの親にしてこの子あり。勘が鋭いのはいいことですが、今しばらくは御内密に」

ニコッと笑って消えた。

アスナと刹那の試合は前評判を覆すものとなった。
すなわち、あの男の言うとおりになったのだ。

「すごいです、アスナさん!」

刹那が賞賛の声を上げる。
それほどまでにアスナの動きは見違えてよくなっていたのだ。
おまけに、

「えーと、左手に魔力で右手に気?」

ボッとアスナを気が包む。
ただの気ではない、咸卦法による強力な『気』である。

「バカな！気と魔力の合一はタカミチもわたしも別荘で数年かけて会得したんだぞ！！」

試合を見ていたエヴァンジェリンが声を荒げてクウネルに食ってかかる。

「ええ、タカミチ君はがんばりましたねぇ」

「それをなぜあの女が使える！！」

「どうしてでしょうねぇ」

「貴様！！」

むきになるほど空回りしていくエヴァンジェリン。いいようにあしらうクウネル。選手席が遊んでいる間にも試合は進んでいく。

デッキブラシとハリセンが本物の武具であるかのように打ちあわされる。

一方が切りかかればもう一方は弾く。
一方が突きを放てば、もう一方は受け流す。
さながら演舞のように美しい、完成された一つの作品であった。

しかしそれも長くは続かない。
物事には必ず終わりがあるものだ。

「いきます、アスナさん！！」

刹那が飛び上がり、得意の秘剣を放とうとする。

それを見たアスナの脳裏に、頭痛とともにフラッシュバックするのはいつかの光景。

目の前で、大切な誰かが、その生命が絶たれようとする。その瞬間。

知っていたはずの。知らないはずの風景。

「斬岩剣！！」

目を見開くアスナは刹那の秘剣を受け止めた。

ハリセンから変化した、長大な片刃の剣で。

「気で強化された神鳴流の得物が真っ二つに・・・」

触れた瞬間に危険を感じ、距離を置いた刹那の手には綺麗に切断されたデッキブラシがあった。

アスナの身の丈ほどもある無骨な剣。

かつて、異界から渡り来た英雄が、己の知識、技術、そして半身たる愛剣の欠片を持って創り上げた異界の神剣。

神にすら届く刃の真なる姿であった。

「アスナさん・・・」

明らかに正気ではないアスナに、刹那は油断も驕りも一切を捨てて臨む。

振り下ろされる兇刃を紙一重でかわし、返す刀で神鳴流の投げ技を披露する。
空中で三回転。
地面に叩きつけられて、アスナは敗北した。

決勝トーナメント　？（後書き）

今回はアスナ回でした。クウネルも接触し、次から小太郎戦に入ります。

決勝トーナメント　？

準々決勝においてアテナと戦うはずだった古が初戦の真名との試合で受けた怪我によって戦えないということが分かり、アテナは誰よりも早く準決勝に進出を決めていた。

もちろん、古と戦ってみたいという気持ちはあった。

魔法が使える自分と今の古では、能力の相性からいっても勝敗は分かりきっているようなものだったが、勝利、そして強さを希求してやまない彼女との対戦はアテナにとって大いに得るものがあると感じていただけに、不戦勝という結果は非情に残念なことであった。

今、舞台に上がっているのは小太郎とクウネル。この戦いを制した方が次のアテナの対戦相手となる。

（小太郎には悪いがこの試合、勝ちはない）

戦地に赴く小太郎にアテナは敢えてなにも言わなかった。

ただ見送っただけ、そうすべきだと思ったからだ。

こと戦いにおいて他人からの助言を簡単に受け入れる男ではないと短い付き合いながら知っていた。

故にこの戦い、最後まで見届けよう。

そう思った。

小太郎の戦いはアテナの予想したとおりクウネル優位で進んでいた。

攻め立てているのは小太郎である。しかし、得意の分身も瞬動も

全て見切られ、重い一撃を受けて跳ね飛ばされる。
たったの二打で小太郎は脚が笑うほどのダメージを受けていた。

（なんやコイツ！攻撃がまったく効かん！？）

小太郎の驚愕は、相手の武芸の錬度だけでない。相対し、拳を交えてはじめて分かる異常性にあった。
すなわち、手応えがなさ過ぎる、ということ。
いままで、何度も攻撃を繰り返し、その多くをガードされはしたものの、確実に入ったと思えるものも何度かあったのだ。
しかし、その攻撃が当たると決まって手応えがなくなる。
霧を殴ったように忽然と存在感が消える。一瞬だけ。そして数瞬ののちに反撃を受けるのだった。

「こんなところで、終われへんわ！！」

多数の影狼を放つ疾空黒狼牙。
狼がクウネルに殺到する間にその懐に飛び込んでいく。

「我流・犬上流・狼牙双掌打」

両腕による漆黒の打撃。
渾身の一撃をぶつけた小太郎だが、ぶつけられたほうは微動だにせず、笑みすら浮かべている。

「今のは良い攻めです」

「ばかな、直撃のはずや！？」

クウネルは打ち下ろした肘鉄で小太郎を叩き落すと、スッと虚空

に手を差し出す。
直後、小太郎の体が大きく沈んだ。
見えない力に押しつぶされるように。

「がッ！」

「その真っ直ぐな心意気、気に入りましたよ。あなたがネギ君やアテナさんの友人で安心しました」

クレーターの中で伏す小太郎は薄れ行く意識の中でその言葉を聴いていた。
相手にダメージを負わせた様子はない。
まったく歯が立たないという現実。

（強すぎやな、こいつ）

ネギとアテナしか眼中にはなかった。
戦って勝ったると、堂々と宣言までしてこのざまか。

（俺はここまでやな）

思えばネギは初めから父親を目指して修行していた。『世界最強の魔法使い』を目指して。
アテナはなにを目指しているとか聞いたことはないが、自分とは違う世界を見ているはずだ。
二人に比べて、今までの自分が見ていたものは何だったのか。
どうやら自分の見ていた世界はひどくちっぽけなものだったようだ。
そして自分も、実際の世界からしたら矮小な存在でしかなかった。

（悪いな、ネギ、アテナ）

１０カウントを待たずして、小太郎の意識は闇に沈んでいった。

――――――――――――――――――――君！――
――――――――――――――――――――――――

沈み行く意識に語りかける声。

（なんや・・・・）

「小太郎君！！」

はっきりと聞こえた。

（ネギ、か？）

声を出そうとして声が出ないことに気が付いた。
起き上がろうとして、力がはいらなかった。

（すまん、俺、もう動けんのや）

心がもう折れかけていた。
いままでの修行が、まったく無意味であったと、そう思わされるほどに相手の力は強すぎた。
屹立する山は小太郎にとって険しすぎた。

「バッカが！いつまで寝てる気だ！」

たまらずアテナが叫んだ。

まだやれるはずだと。諦めるには早すぎると。

（アテナか）

「小太郎君起きて！」

「戦え、小太郎！！」

「ッ！！」

カッと小太郎は目を見開いた。

声援の中に聞こえた二人の声が、小太郎の折れかけたこころを立て直した。

（そうや、何を弱気になっとんねん。これは戦いや。勝つか負けるか、それだけや。ただそれだけのことに、死力を尽くすんが俺のやり方やろ）

ギリ、と奥歯をかみ締めて、弛緩した体に鞭を入れる。

勝てるとは思えない。だが勝利を諦めるわけにはいかない。

少なくとも、あの二人の前で情けない姿は晒せないから。

（お前達の見る世界に俺はまだ映っとるか、ネギ、アテナ）

小太郎を打ち倒したクウネルは舞台から降りようとしていた。

カウントはまだ終わっていないが、自身の主要魔法の一撃を受け

て意識があるとは思えなかった。
事実彼は未だ動くそぶりすら見せていない。

（コタロー君の成長が実に楽しみですね）

クウネルの意識は次に向いていた。
かつての戦友の娘との試合。
この大会にエントリーしたのはネギが第一の目的であったが、小太郎といいアテナといい、実に楽しませてくれる。

また一歩、歩を進めたとき、観客席がおお！とどよめいた。

「おや？」

振り向けば小太郎が立っていた。
満身創痍。風が吹けば倒れてしまいそうなボロボロの体。
しかし、それでも彼は立っていた。
その目が、今までのそれと変わっていることに気が付き、あらためて向き直った。

（不思議な感覚や）

立ち上がった小太郎は特に感慨もなくそう思った。
さっきまで諦めていた心も立ち直った。おまけに勝利を求める熱い情熱も鳴りを潜めている。
今、小太郎の心は草原に吹く一陣の涼風のごとく、澄み切っていた。
この感覚は、初めてだった。

（ここってこんなに広かったんか）

新たな発見。

否、今まで見えていなかっただけだろう。

沸き立つ観客の声も、なぜか聞こえない。

ただ、目の前の強大な敵に己の全てをぶつけよう。

勝つとか負けるとか、もう気にならなかった。

小手先の技ももう忘れた。

必要性も感じない。

為すべきは、挑むこと。ただそれだけがこの犬上小太郎のあり方だから。

「う・・・」

「起きたか」

「アテナか」

気が付けばベッドの上だった。

選手用の医務室。

ベッドの脇にはアテナが座っていた。

「準決勝にはネギ君と刹那さんが進んだよ二人とも、見事な試合だ

った」

「そうか」

小太郎は横に向けていた視線を天井に移した。

「俺は負けたんやな」

「ああ、負けた」

「そうか」

小太郎は身を起こし、上半身を少しずつ動かしていく。体の状態を確認するように。

それが以外でアテナは少し驚いた。

てっきり、負けた悔しさで飛び出したりするのかと思っていたから。

「負けて悔しくないのか」

小太郎の態度が気になってつい、尋ねてしまった。

「そら、悔しいわ。でもな、クウネルって奴と戦えてよかったと思う気持ちのほうがずっと大きいんや」

「それは、勝利に勝るとも劣らないなにかを掴んだということなんだろうな」

変わるときは早いんだなと、少し大人になった小太郎の横顔を眺めながらアテナは思った。

「確かに、戦ってるときのお前はかっこよかったと思うし、成長したなと思ったが」

「？」

「あ、いや忘れてくれ・・・・・・はあ」

アテナはついつい漏らした言葉をすぐに撤回した。

「次はわたしの試合だ。クウネルとのな。体が動くんなら見に来るといい」

そういって、アテナは医務室から出て行った。

決勝トーナメント　？（後書き）

少し成長して思慮深くなった小太郎君でした。

決勝トーナメント　？

アスナたちは選手席を抜け出して麻帆良の地下を流れる下水道にやって来ていた。
それもこれもこの先にタカミチとチビセツナが捕らえられているという情報が入ったからだ。

「こんなところに高畑先生が」

「何かの研究施設の可能性もありますね」

この下水道の大きさはかなりのものになる。
まるでトンネル。

「わたしも棄権してついていきます」

「ダメよ刹那さん、剣も幸せも取るってエヴァちゃんにいったでしょ」

「しかし、超さんは高畑先生も捕らえてしまったわけですし」

刹那は逡巡する。
学園長を除けば学園最強とも言われる実力者を捕らえたというのなら、用心してしかるべき。
そう思って言ったのだがアスナに拒否されてしまった。
アスナと愛衣を残すのはさすがに危険すぎではないか。
なおも食い下がろうとする刹那に声がかけられたのはそのときだった。

「それなら尚のこと誰かが外にいたほうがいいと思います」

「え？」

声がしたほうを向けば、そこにはのどかとまき絵が立っていた。

「どうしてここに！？」

「アスナさんから連絡を受けたので」

「刹那さんが棄権することないよ！ここはわたし達にどーんとまかせて！」

のどかとまき絵が救援として駆けつけてくれた。
どちらも戦力としては申し分ない。

「ありがとうございます」

「よーし、高畑先生救援チーム。いくわよ」

アスナを先頭に、敵地へと踏み入っていった。

アテナとクウネルの戦いは熾烈を極めていた。

戦い自体はクウネルが優勢。
クウネルは事もあろうに空まで飛んでしまっている。

対峙するアテナは舞台に足を付けたままひたすらに攻撃をしのぐ。
そして、隙を見つければすかさず飛び掛るということを繰り返していた。

「驚きました。コタロー君といいあなたといい、本当に楽しませてくれます」

五つの重力球がアテナに向かって落ちてくる。
これをアテナは重力球の五つの真ん中に別の重力球を創り上げて逸らした。

「ぐっ」

クウネルが小太郎にしたようにアテナの周囲に超重力空間を作る。
一瞬にして修繕されたばかりの床板が砕けクレーターが生まれる。
アテナの立っているところを残して。

「ほう、その歳でそこまで重力場を操れるとは」

アテナがしたのはクウネルの重力場に干渉して無力化するというもの。
術自体を解くというのではなく、重力魔法によって相殺するというような感覚だ。
圧倒的な実力をもつクウネルの魔法に真正面から抵抗することはできないが、自分に影響する部分にだけ干渉すればその限りではない。

「そこまで重力を扱えるのなら、なぜここまで来ないのです」

「墜とされると分かっていて飛ぶとでも」

「なるほど、賢明な判断です。あなたとわたしでは同じ重力使いでも積み重ねたモノが違います。あなたが重力を操って飛んだ瞬間、わたしはその重力を無力化するでしょう」

「簡単に言ってくれるな！」

闇が走る。石が吼える。

アテナの魔法がクウネルを撃ち落すために放たれるが、牽制にもならない。

そもそも無詠唱呪文だけで戦うという状況がありえないのだ。

まして相手は世界最強の魔法使いの一人。

今、戦えているのも守勢の回っているということと、手加減してもらえているということで成り立っているのだ。

「そこ！！」

アテナがクウネルに手を向ける。

貪恣掌が確かにクウネルの体を掴んだ。そのまま地面に引き落とす。力を込めた瞬間、クウネルの体がスッとすり抜けた。

見えない力場から予備動作なしで脱出してのけたのだ。

「やはり、実体がないのでは戦いようがないな」

「気づいていましたか」

「不自然すぎる耐久力。本体が別にあって、意識だけを表出させているようなものではないか？」

「そのようなものです。すみません、なんとしても決勝に進まなけ

ればならないもので」

「目的はやはりネギ君、ということでいいのか」

「イエス、とだけ答えておきましょう」

なんとも胡散臭い笑顔を浮かべるなと、アテナは思う。

この男の目的自体はよく分からないが進んでかなえてやるつもりはない。

小太郎の戦いぶりを目の当たりにした以上、無様な戦はできない。

（あれを倒すとなると、一瞬で蒸発させるだけの魔力をぶつける必要がありそうだ）

それはきわめて難しいことだ。

呪文詠唱が認められているならともかくとして無詠唱限定ではどうにもならない。

とすれば方法は一つ。

原始的な、純粋な魔力弾によって勝敗を決するよりほかにない。

勝負は一瞬。

分身体を一撃で消滅させる。

それには相応の魔力を一箇所に集中させる必要がある。

時間もかかる。

時間を稼がねば。

（残り時間は三分を切っている。このままではメール投票となるから向こうはその前に決着をつけようとするはず。必要な魔力を充填するまでにかかる時間は二分ほど。それまでに本気を出させないよ

うにしなければ)

　アテナは戦い方を切り替え攻勢にでる。
　魔力をタメながら、相手がその気にならないようにそれなりに相手をする。
　かなりきわどい戦いだ。

(く、うぅ・・あと、少し)

　叩き落された衝撃が芯に響いている。
　まだ足りない。まだ撃てない。
　アテナに重力球が襲い掛かる。直撃を貰えばそれで終わり。身を翻してかわしたアテナの体を砕けた床の破片が打つ。
　今さらながらその技量に舌を巻かざるを得ない。
　ただでさえ高度な重力魔法。
　普通これほどの威力を出すには詠唱しなければ不可能だ。目の前で見せ付けられても信じられない。
　司会を務める和美が叫ぶ。

　残り時間は――――――――――――――一分半――――――――――――――――――充填まであと三十秒ッ

「さすがにそろそろまずいですね・・・・・・コレを使わせていただきましょう」

「仮契約(パクティオー)カード!!クッ、させるか!!」

　アテナは瞬時に出せる限界の速度でクウネルへ跳んだ。
　弾丸のような速度で飛ぶアテナの前に悠然と浮かぶクウネルを無数の本が取り巻く。

彼のアーティファクトだろう。

「おおおおおおおおお！！」

雄叫びに近い咆哮を上げ、溜め込んでいた魔力を至近で開放する。

一瞬の交錯。

迸る閃光。

――――――――――――――――――――――そして

「く、は」

空には頸を掴まれているアテナの姿があった。

「そ、んな！？」

アテナは見た。

フードのうちに隠れた素顔。

それを理解し、なお否定しようとする。

自分の記憶のものよりも若干幼い気がするが、強い意思を湛えた眼光、あこがれた艶やかな黒髪。

見違えるはずのない、その姿。

その『少女』がフッと笑ったように見えた次の瞬間、信じられない力で振り回され、地面に向かって投げられた。

アテナが全力で落下速度を落とそうとする中で、彼女の視界を埋めるのは紅蓮の大輪。

灼熱の流星がアテナを巻き込み能舞台に降り注いだ。

下水という名の迷宮（ダンジョン）を行くアスナ一行はついに魔物と遭遇（エンカウント）していた。

これがＲＰＧであれば即戦闘画面突入となるわけだが、この世界はそう単純な構造をしていない。

主役の少女達が戦いを躊躇うと同時に、相手のほうも仕掛けてくる様子がないからである。

そして少女達が仕掛けないのは相手が彼女達にとって戦いたくない部類に入るからである。

その魔物（モンスター）の名を田中さんといった。

「これってあれだよね、『脱げビーム』のやつ」

「ど、どうしてこんなにいっぱいいるのよ」

アスナの前にいる田中さんは一人や二人ではない。人が三人横に並べるか、という通路にぞろぞろと。まさしく無数という言葉が当てはまる。

武道会に参加、もしくは観戦していた彼女達だからこそ知っている田中シリーズの脅威。

それはなんといっても口から放たれる低出力のビームに帰結する。

通称脱げビーム。

見た目派手な割りに効果は衣服を焼失させるだけという摩訶不思議な化学光線。

物理的な攻撃力は皆無。しかし、少女達からすれば一撃必殺の攻撃性能といえた。

「こんなところで脱ぎ殺されてたまるもんですか！アデアット！！」

アスナがハリセンを取り出す。

それを敵対意思アリと判断したのか田中さんが動き出した。

「来るよ」

「やるしかないですね」

こうして、魔法使い見習い達と超化学の結晶による死闘が始まった。

「紅き焔」

愛衣の発する熾烈な炎が炸裂する。

同時にアスナが一体破壊。

しかし、如何せん数が多すぎた。

加えて、後ろから団体さんご到着。

逃げ場がなくなった。

ちなみにこの時点で美空を戦線を離脱。ココネをつれて先に行ってしまっている。

「アスナ、後ろは任せて！！『夢幻の冠帯』・・・絢爛舞踏！！」

まき絵は無数のリボンを巧みに繰って、後方から現れた田中さん等を投げる。

時に引き、時にいなし、時に固定する。

一本一本のリボンの動きがそれぞれ別になっている。

まき絵自身もステップを踏み、まるで田中さんとダンスしているかのように華麗。

まき絵もまた、コレを使えるようになるのに苦労したのだ。

「アスナさん、引いてください！」

のどかの声にアスナは後退する。

紫電が走り、目の前の田中さんたちが大音響を上げて殲滅される。

痕に残されたのは無残に破壊されつくした田中さんの部品（パーツ）と直径にして二メートルはありそうな大きな車輪。外縁部には鋸状の刃が並んでおり、人目でその凶悪性を知ることができる。

車輪というよりは歯が刃となった歯車のように見える。

のどかの新アーティファクト『解体一式』によって現れる四つの魔法具の一つ。

その名も『神狂いの車輪』。

雷撃を纏った車輪はその通り道のあらゆるものを破壊殲滅する。

のどかのアーティファクトの中で最も高い攻撃力を持つ殲滅宝具であった。

「スゴッ！！」

その様たるや惨憺たるものだった。

おそらく、いどのえにっきがのどかの人見知りで誠実な面を表し

たものなら、この解体一式はその内に封じた狂気が表出したものなのだろう。

しかし、田中さんはいくらでも壊してみろと言わんばかりにぞろぞろと湧き出してくる。

「限がありません！！」

「ええーい、こうなったらやるだけやってやるわよ！！」

アスナたちはすらむぃの手引きで抜け出したタカミチがやってくるまでそこで戦い続けた。

「大会の主催者がわたしなんかを呼び出して何のよう？」

率直に恋は尋ねた。

相手はもちろん超鈴音。

そしてこの場は大会をモニターする管制室のような場所。いくつものコンピューターが配置されているが電源は入っておらず、舞台の様子を写した大きなスクリーンだけが唯一の明かりとなっている。

超は珍しく緊張しているような面持ちで恋の質問に答えた。

「少し話してみたいことがあってネ」

「話？」

そういえば、今までまともに超と話したことは無かったと恋はここにきて思った。

それにしても何故・・・・

「恋さんは過去を変えたいと思ったことはないカ。なんでもいい、どんな些細なことでも、もし帰ることができたならと、そう思ったことはないカ」

「いきなりどうしたの、そんなことを」

「答えて欲しいネ」

超の真剣な眼差しに少し気圧されながら、恋は記憶の糸を手繰る。

「ないわね」

「即答だナ」

「幸いなことにそこまでの不幸を味わったことがないのよ。思い当たるのも若気の至りでしちゃった恥ずかしいことばかり・・・これを語れとか言わないでよ」

「はっはっは、恋さんにもそういうことがあったんだナ。少し意外だたヨ」

「わたしだって人の子だって」

「『人の子』ネ、それはいいとして、仮に歴史の改変が可能として

それをすることが許されると思うカ？人類が犯してきた過ちすらも正すことができるとしてそれを行うことは正義だと思うカ？」

歴史の改変。それが本当に可能だとすればとんでもないことだ。人は簡単に自分の都合の良い歴史を作ることができる。そしてそれは人の、人類の歩みを真っ向から否定するに等しい。

「それは善くないんじゃないかな。歴史を変えようっていう人は素直にすごいって思うよ。だってそれは何万年の積み重ねた人類史に喧嘩を売るって事だから。まあ、歴史を変えることで未来における世界の破滅とかっていうのを回避できるんなら改変もしかたがないかもしれないけど・・・・・超が言ってるのはどういう前提の話？」

「そうネ・・・・・・・」

超はしばし、沈黙した後、言葉を続けた。

「わたしの前提は今、この時間帯でも普通に起きているありふれた悲劇と変わらないよ」

「それならわたしの意見はＮＯ。過去は人にとって大いなる指針。悲劇もまたその一つだと思う。わたしはね、人間ていうのは過去から学べると思ってる。それで未来にもちゃんと救いがある、そう思ってるのよ。変えるべきは過去ではなく、未来」

「未来にも、救いがある、カ。いい言葉だネ」

「ま、わたしの言ってることなんて子どもの戯言かもしれないけどね」

「そんなことはないヨ。寧ろ納得しタ・・・・・」

恋が出て行った部屋に超は一人残されていた。

「なんだ、ふられちまったのか？鈴音（スズネ）」

一人ではない、奥の扉からもう一人入ってきた。

ジャージ姿にピンピンとはねた寝癖、ふあーと欠伸までしているところを見るとさっきまでは眠っていたようだ。

暗い室内ではその顔までは読み取れない。

「本名で呼ばれるのはこそばゆいネ」

「いっそのことそのしゃべり方も止めればいいんだよ。無理して中国人（チャイニーズ）の振りしなくてもよかったんじゃね」

「もともと素性不明でもぐりこんだのだヨ。多少あからさまなほうがいいと思ったんだがネ。実際こうして目的を達しようとしているヨ」

その人影の口調はどこか投げやりでいい加減。それでいて楽しんでいるようにも感じられる。

「それでどうだったよ、居住区（コロニー）連合の主神サマは」

「思ったとおりの人だたヨ。それに、長年の疑問も晴れタ。『彼女はあの絶望の中でいったい何を見出したのか』・・・・・あの人にとっては生きること自体が希望だったんだヨ」

超は少し悲しげに俯いた。

「ふーん。まあ火巫女が何をしたとか、英雄達がどうしたとか興味ねーしなあ・・・・鈴音がなんでアレに入れ込んでんのかよくわかんねぇな」

「何を言うカ、ご先祖様が考案した救世の法を戦争を望む悪鬼羅刹から命がけで守り通した英雄たちの話はコロニーでは最も有名な話ネ・・・・特に彼女は最期が最期だからネ。祭り上げられるのは当然ヨ」

「そりゃお前がコロニー側だからな、オレが産まれた新メガロ側からすれば極悪人だったはずだぜ」

「それは奴等のほうが悪い！地球との無益な戦いを望み救われるはずだった多くの命を散らせたのだから！！」

超はそれまでの陰鬱な口調とはうって変わって声を荒げた。

言葉遣いも変わっている。

超は言葉のところどころに憎悪をにじませて叫んだ。

「だから我々は早々に奴等を駆逐して母なる大地に秩序をもたらさなければならないのよ！！」

息を整えた超はすまなかったネと我を忘れたことを謝罪した。

（お前だってちゃんと未来に希望をもってんじゃねーか・・・・・・でも、ま、しかたねえか。戦場は荒野と屍だけだしな。なまじ航時機なんて造れちまったから歴史改変に走るのもムリはねえかもな）

「本気で歴史変えるってんならそれぐらいの覇気がねーとな」

「むむ」

「ま、歴史云々はオレには分からんよ。なんせ産まれてこの方戦場しか知らないしな。それでもお前に拾われたんだ、オレはそっちの都合を優先してやるぜ」

「フッ・・・そうね明日、全てが決まル。ここで止まるわけにはいかないヨ。なんとしても成功させるネ。ああ、それと咲さん」

「ん？」

「そのネックレス、似合ってるヨ」

「バ、バカ言ってんじゃねえッ」

胸元の、三つの指輪を通したアクセサリーが小さく光を反射した。

決勝トーナメント　？（後書き）

ツッコミどころは多すぎるとして・・・・新キャラ登場です。
クウネルの無敵具合、サブラクじゃねえか！！と一瞬思ってしまった。

幕間

まほら武道会はクウネル・サンダースの優勝で幕を閉じた。
クウネルの実名をアルビレオ・イマといい、ナギ・スプリングフィールドの遺言をネギに伝えるためだけにこの舞台にやってきたというのだから驚きだ。

アルビレオのアーティファクトの能力は二つ。
他人の身体的特徴の再現と、全人格の完全再現の二つ。
アルビレオは後者を使い、『十年前のナギ』として、ネギと試合をしたのだった。

「それで、史菜姉さんはアルビレオ・イマがこの学園にいるって知っていたの？」

「ええ、といってもこの学園に来るまではまったく知らなかったのだけれど・・・ほら、恋のクラスの娘が図書館島に潜り込もうとしたことがあったじゃない、あのときにね」

「ああ、懐かしの」

恋、史菜、アテナは大会の後落ち合い、喫茶店でランチを楽しんでいた。
普段の光景ではあるのだが、唯一つ違うところとしてはアテナとして話しかけられている女性にあろう。
年のころは十四、五歳。肩口で整えられた銀色の髪と白い肌。そしてどことなくギリシアを髣髴させる白いワンピースが清楚ながら強い存在感を醸しだしており、見た目よりもずっと年上のような、

落ち着いた様子だ。

実はこの女性こそ、アテナその人だった。

大会出場という経緯から、マスコミなどに囲まれてしまうという予想外のアクシデントに見舞われたアテナはネギや小太郎がそうしているように年齢詐称薬という薬による高度な幻術で外見年齢を誤魔化しているのだ。

「お、おいあそこ見てみろよ」

「やべー超美人」

三人が見えるところにいる者達は男女の別無く感嘆の声を漏らし、見惚れるほうに視線を止める。

それでも、誰一人として話しかけようとはしていない。それどころか避けるようにしている。

それもそのはず、三人の顔立ちは整いすぎており、活人形が食事をしているかのような光景はあまりにも現実感が無さ過ぎた。

それはもう一つの異界の様相を呈している。

「それで、ネギ先生はどうしてるの？」

史菜の問いにアテナと恋は目をあわせ、互いに答えられないと悟って知らない、とだけ答えた。

航時機を使っているために迂闊にアレしてますとはいえないのだ。

事実恋が知っているのはネギは図書館島にいるはずだし、アテナの知っているネギは小太郎と行動をともにしている。

この時間帯に少なくとも二人のネギが存在してしまっているのだ

った。

「それで、姉さんはこの後デートですぴゃ！」

「よけいな詮索しないの。言っとくけど付いてきたって分かるからね」

「もちろんです」

恋のからかい混じりの言葉を史菜がデコピンで止めた。

余計な詮索をしようものなら後々恐ろしいことになりかねないので恋は押し黙った。

この世には魔法が存在する。

そんなことを大真面目に言ったなら、十人中九人は間違いなく一笑して去るだろう。残りの一人は相手にもしてくれないかもしれない。

それが世間一般の常識であり、わたし、こと綾瀬夕映もまたそんな一般常識に生きる人間だった。

その常識が覆されたのはつい最近、修学旅行で本物の魔法に出会ったことがきっかけだ。

不思議とすんなり受け入れられたと思う。

のどかとおじい様が魔法使いであったこともある。ファンタジーにあこがれたこともある。とにかくわたしは魔法について時間の許す限り学ぶようにした。

そしていつしか、ネギ先生に――――――――――――――――

―――――――――――――

図書館島。

麻帆良学園が有する世界最大規模の図書館であり、その名の通り湖に浮かぶ島一つが図書館としての機能を持っているのだった。

そしてその蔵書量はすでに学園の把握能力を超えており、どこにどんな本が死蔵されているのか、それを調査することを目的に創設されたのが『図書館島探検部』という部活動なのだった。

もっともその活動内容はかなり過酷（ハード）である。

図書館島をただの図書館と思う無かれ。そこに挑むことはすなわち、屹立する岩山に挑むことと同義なのだから。

と、それは言いすぎであるとしても、やはりちょっとした運動部以上の過酷さがあるのは事実。登山するくらいの思いでないとやっていられない。

そして、図書館探検部は他の部活と同様麻帆良祭でのイベント収益の多くを活動費に当てているということもあって、恒例のツアーはとても力の入ったものになっている。

３－Ａからも四人が探検部に所属していて、今は担任のネギを招待して図書館内を案内しよう、というところだった。

「知っていることを洗いざらい吐いてもらいましょうか」

ハルナに魔法がばれていた。

それはもう完璧に。

武道会をインチキと解釈せず、雰囲気とのどかたちの様子からそこまでの解にたどり着いた柔軟な頭脳には感服せざるを得ない。

「どうします、のどか」

「はう！ど、どうといっても・・・記憶操作をしてもハルナなら何とかしてしまいそうな気がするし３－Ａにいれば必ずどこかに接点があるし・・・・」

「何をゴチャゴチャと話しているかーーーー」

どうやら話さざるをえないところまで来たようだ

「おおっ！！リアル魔女っ子！！魔法の道具、すばらっすぃ！！」

のどかとこのかは仕方なしにアーティファクトを見せた。

反応はこの通り、上上。

「へーなるほどなるほど、のどかは読心術にこのかが治癒ねえ」

「のどかはほかにもアーティファクトもっとるし、うちも戦えるように地獄の特訓しとるんよ」

「そっかそっかアーティファクトかあ・・・・・・・・いい！！わたしもそれ欲しい！！」

「ええ！？」

「言うと思ったです！！」

目を輝かせてアーティファクトを欲するハルナ。
しかし、アーティファクトを入手するにはそれなりの手順を踏まねばならないのが道理。

（勝手に仮契約っていいのかな）

恋が言うには仮契約には安易にできないようにする法律があるらしい。
しかし、ネギを見る限りそうでもないような気もするし、一定の権力がある人が認めれば許可されるとも聞く。ここでは学園長がそれに当たる。

「仮契約なんて簡単に言ってはだめです。ネギ先生にも迷惑がかかるです！」

「そうなの？」

「手続きとかあるんやけど、一番簡単な契約方法がキスっていうのが大きいんよ」

「キス!?はあああ・・・なるほど、それでねぇ」

「なんです？」

「いんやあああ、夕映って仮契約しないのかなぁ？」

「わ、わたしは、仮契約はしないです！」

「ふーん」

断固として契約はしないといいはる夕映。
その様子を見て、我が意を得たり。
そういった風な顔つきでハルナは夕映を見ると、のどかを引き寄せてひそひそと話しかける。

「夕映ってネギ君が好きなんだよね」

「うん、そのはずなんだけど」

「なのに仮契約はしない、ねえ・・・・・ルールとかでできないってことじゃないんでしょ」

「規制はあるけど、夕映は仮契約の資格が無いわけじゃないはず」

そもそも資格自体は誰にでもあるのだ。恐ろしいことに魔法を使えなくても仮契約はできる。夕映は基本魔法は扱えるし、真摯な姿勢で魔法に取り組んでいるので学園長も期待しているのだった。

「みなさん、何しているんですか？」

そうしているところにネギがやってきた。

「おお、来たね魔法少年！実は夕映が仮契約ｗ」

「わあああああああああ！」

何勝手なことを言ってるんですか、と夕映がハルナに掴みかかった。
とうのネギは魔法を知らないはずのハルナから仮契約の話が出たことに動転していた。

「どうしてハルナさんがそのことを！？」

「そりゃ武道会であれだけやったら気が付くってもんよ！この早乙女ハルナ、そんじょそこらの人間とは頭のつくりが違いますから！」

「よく言うです、まあ確かにネギ先生は少々迂闊すぎたかもしれませんが」

「はう！？」

「ま、まあそんなことはいいんじゃない？ほら、そろそろ行かないと怒られちゃう」

のどかが強引に話を打ち切ると、ツアーの列に近づいていく。

「このあたりは夕映が一番詳しいんですよ」

「ちょっと、のどか！？」

「そうなんですかーお願いします夕映さん」

「う、はい」

図書館内の橋を渡っている夕映とネギ。

橋というと奇妙に思えるかもしれないが、マジで橋なのだからしかたない。轟々と流れ落ちる滝まである。

「ここが、北端大絶壁で、設計当時の資料が散逸しているためになぜこのようなものができたのかよくわかっていないのです」

「へー、やっぱりここはすごいんですね」

目を爛々とさせるネギとギクシャクとした夕映。まるで対比されているかのよう。

「くぁーさっきから事務的な会話ばかりッ。もっとこう気の利いたことが言えんのかね、ばかゆえが！」

「ハルナーもう少し落ちつこか」

先行する二人の後ろを付いてくその他。

探検部の仕事などするつもりは無く、夕映の動向をひたすら観察していた。

夕映も夕映で後ろを気にする精神的余裕を失っていた。

思えば今までネギと二人っきりという機会はほとんど無かったからだ。

（か、会話が続かないです・・・そもそも何故このような状況に、まさかみんなわたしの気持ちを知って？いやいやそんなはずは）

「夕映さん、どうかしましたか？」

「いや、なんでもないです！！」

「そうですか？」

結局、その探検大会において夕映は終始ぎこちない態度を一貫し、それを眺める友人達は一度も救いの手を差し伸べることは無かった。

「さてっお待ちかねのおーーーー仮契約ターイム!!」

「何をバカなことを言ってるんですかハルナァ!!」

事が事なので人目に着かないところではあるが二人とも声が大きすぎる。

「ゆえーちょっと」

そんななかのどかが夕映を呼び出した。

少しはなれたところ、ネギたちから見えないところまで来るとおもむろに

「ゆえは、ネギせんせーのことが好きなんだよね」

「ぐふっ!?な!」

「ムリに否定しなくてもいいよ、バレバレだし。ただねこのまま見てるだけっていうのはダメなんじゃないかと思って」

「いや、だから」

「わたしが言いたいのはね、魔法使いっていう情報を共有しているだけで満足しちゃいけないよってこと」

単なる憧れという感情であればそれでもいいだろう。しかし、夕映の想いはそうではないとのどかは分かっている。当の本人の気持ちの整理が付いていないのが問題ではあるが。

ネギを想っている人は多い。

その際たる者はまき絵やアスナだろう。

すでに彼女たちは従者という立ち位置を獲得している。

つまりこの時点で夕映は一歩出遅れているのだ。

「と、ゆーわけで、頑張って！」

「ええ、頑張るって・・・」

「おーい、早くしなよー」

「今行くー」

夕映を連れ立ってのどかはネギたちのところに戻った。

そしてこの日、ネギに新たな仮契約者が二人誕生した。

幕間（後書き）

二人のカードは原作準拠

状況確認

「で、何でパルたちがいんのよ！！」

「いやー魔法のことがバレちゃいまして」

「バレちゃいまして、じゃないわよ！どうすんのよもうあんたオコジョ決定じゃないの！！」

エヴァンジェリンの別荘で作戦会議をしようという魂胆だったネギだが意に反して女子中学生たちの遊び場となっていた。

そんな中いままでの仲間に加えハルナと千雨がいるのだから驚きだ。

下に見える海では爆発音が聞こえる。

小太郎とアテナが実践的な戦闘訓練を行っているのだった。

「それで超さんなんですが・・・・・」

「未来人で子孫！？」

驚愕の声を上げるのはアスナ。

ほかのメンバーはこの情報をすでに知っているためにそれほどの驚きは無い。

むしろ、そのまま信じていいのか、なにかのブラフではないのかというような疑念の感情のほうが強い。

「はい、超さんが言うには１００年以上先から来た未来人で、火星人。しかもなんとネギ先生の子孫」

「目的は航時機による歴史の改変でそのために魔法を全世界にバラそうとしている」

「学園祭三日目にそれを行動に移す・・・・でござるか」

正直、信じられないことのオンパレードである。
いろいろとコアな要素が満載されていてどこからつっこめばいいのやら。

「俄かには信じられないことだな」

「だけど、超さんの航時機は本物だったんでしょ、じゃあ頭っから全否定ってわけにもいかないよね」

恋の言葉に皆一様に押し黙った。
この場にいる多くが航時機を威力を体験している。残念なことに否定できる要素がすくなかった。

「しかし、疑問も残るのです。一つはなぜ魔法をばらすことが歴史を変えることになるのか。もう一つはなぜ超さんが１００年も先からこの時代までやってきてそのようなことをやっているのか」

「それはわたし答えられるかもしれない」

「本当ですか！？」

「うん、実は武道会のときに超さんに呼び出されて少し話をしたんだけど、そのときにもし歴史を変えられたらどうするのかって聞かれたわ。そのときの超の前提が世界滅亡とかって規模じゃなくてこの時代にもある普遍的な悲劇の一つを回避するためって言ってたから、超の目的はそれと見て間違いないでしょう。それに、今まで隠されてきたものが公になれば歴史の一つや二つ、簡単に変わると思うよ。政治資金とかそういうレベルじゃないから」

「なるほど」

「それならば、超さんが完全に正しいというわけには行きませんね」

恋の語った内容に納得したもの、いまだ得心いかぬものと様々だったが、分かりきっていることは超と戦わなければならないということだった。

そして、なにをおもったか唐突にハルナが。

「なら、戦力の確認は必要だよね」

と言い出した。

以下カモ独自メモ

ネギ・スプリングフィールド　魔法拳士

ｃｌａｓｓ　西洋魔術・中国拳法

ａｂｉｌｉｔｙ

神楽坂明日菜

ｃｌａｓｓ
ａｒｔｉｆａｃｔ
ａｂｉｌｉｔｙ
技・魔法無効化

近衛木乃香

ｃｌａｓｓ
ａｒｔｉｆａｃｔ
エノスエヒロ
ａｂｉｌｉｔｙ
東洋魔術（初歩）

桜咲刹那

ｃｌａｓｓ
ａｒｔｉｆａｃｔ
ａｂｉｌｉｔｙ
退魔戦術・陰陽術

古菲

ｃｌａｓｓ

破魔剣士
ハマノツルギ
咸卦法・刹那直伝剣

見習い魔法使い
コチノヒオウギ・ハ
西洋魔術（初歩）・

剣士
匕首・十六串呂
神鳴流剣術・神鳴流

拳士

ａｂｉｌｉｔｙ

中国拳法

長瀬楓

ｃｌａｓｓ
ａｂｉｌｉｔｙ

忍者
甲賀忍術・楓忍法

佐々木まき絵

ｃｌａｓｓ
ａｒｔｉｆａｃｔ
ａｂｉｌｉｔｙ

見習い魔法使い
夢幻の冠帯
西洋魔術（初歩）

坂井恋

ｃｌａｓｓ
ａｒｔｉｆａｃｔ
ａｂｉｌｉｔｙ

魔法拳士
六面武帝
西洋魔術・体術・剣術・槍術・弓術・坂井家秘術・神力

坂井アテナ

ｃｌａｓｓ
ａｂｉｌｉｔｙ

魔法拳士
西洋魔術・体術・神力（太陽光の下では使用不可）

犬上小太郎

ｃｌａｓｓ
ａｂｉｌｉｔｙ
忍術・陰陽術・獣化

宮崎のどか

ｃｌａｓｓ
ａｒｔｉｆａｃｔ
体一式（神狂いの車輪・雛見沢・吊鉄鎖・切り裂く匕首）
ａｂｉｌｉｔｙ
眼

綾瀬夕映

ｃｌａｓｓ
ａｒｔｉｆａｃｔ
ａｂｉｌｉｔｙ
初歩）

早乙女ハルナ

ｃｌａｓｓ
ａｒｔｉｆａｃｔ
ａｂｉｌｉｔｙ

狗神使い
我流拳法・我流狗神・

吸血魔法使い
いどのえにっき・解

西洋魔術・吸血・魔

見習い魔法使い
世界図絵
西洋魔術（補助中心・

召喚絵師
落書帝国
噂拡大・ラブ臭感知

「即席にしちゃあ結構いいんじゃねーか」

カモが自分で纏めた情報を見てつぶやく。

そしてアーティファクトを試していたハルナたちからも歓声が上がる。

ハルナの落書きが三次元に現れ動き出したのだ。

描いた絵が簡易ゴーレムとなる。それが落書帝国の能力のようだ。

長年魔法に関わってきた恋もこのアーティファクトには感動した。

なにせ現実の魔法のなかでもずっとファンタジーだからだ。

今まで出てきたアーティファクトを思い返しても、物語に出てくるようなメルヘンチックの物品はなかった。

のどかにいたっては刃物つき車輪に分銅つき鎖、大鉈、匕首ときた。

不吉な匂いしかしない。

解体一式というが一体ナニを解体（バラ）すつもりなのか。

そう言おうとして止めた。

後ろで鉈を持っているのどかが妙にキャラ立っていて怖かったからだ。

「とにかく、超さんを止めないことには始まらないわ。わたしはこの歳でオコジョなんてゴメンだし」

魔法がバレればオコジョは免れない。それが世界規模ともなれば、成人していなくとも何かしらの罰は避けられないことだろう。

その日、別荘での話し合いは夜遅くまで続いた。

そして翌日。
ネギはゲートで決意表明を行った。
超の行いを止めなければならないと、そうはっきりと宣言した。

「みなさん、力を貸してください」

「もちろん！」

「ネギ先生よく言った！！」

「しゃーッやったるで！！」

意気も高揚しいつでも戦えるというところに来ている。
超の具体的な作戦については不明。
しかし、そうであっても引くことはできない。まずは外に出て、タカミチたちと合流しなければ。

「待て」

そこに声をかけたのはエヴァンジェリンだった。
狙ったような間の悪さに全員がくっとなった。

「恋、お前はちょっとこっちに来い。渡し忘れたものがあった」

「え、うん。みんな先行ってて」

エヴァンジェリンに従ってゲートを離れる恋。

恋の後ろで光が溢れ、ネギ一向は外の世界に戻っていった。

再び別荘に戻った恋は物置のような部屋の一つでごそごそとなにかを探しているエヴァンジェリンに尋ねた。

「それで、エヴァちゃん。わたしに渡したい物っていうのは？」

「ああ、これだ」

そういってエヴァンジェリンは引っ張り出してきたものを投げてよこす。

それは銀色の指輪。

これといって凝ったデザインではない。

「これは？」

「ぼーやには指輪をくれてやったのに一番弟子に何もないというのでは不公平だろう」

「それは、ありがとう・・・・・てゆーかこれ、どうみてもお父さんの創ったやつでしょ」

「チッさすがに気づくか」

「何で舌打ちしてんの」

「ふん、それはお前達がわたしに弟子入りしたときにヤツから送られてきたものだ。コルデーとかいってな、それ自体が発動体になる上、込めた魔法を無詠唱で使えるとか言ってたが、はっきりいって

使い道が無かった。それにヤツが創ったものはわたしからしてもブラックボックスな物が多いからなそうそう使えん」

「なるほど、それでわたしに使わせてみようと。ふーん込められるのは一回に付き一つ？・・・じゃあやっぱり緊急用を入れといたほうがいいかな」

一つしかこめられないという制約はあるものの、遅延呪文のように使用できるというのは魔法拳士の恋にとってはそれなりに役に立つものである。

「じゃ、ありがたく使わせてもらうよ」

コルデーを指に嵌めて恋はゲートに向かった。

外で待つネギたちのもとに。

転換期

恋は人でごったがえす道を走っていた。
その顔には不安という感情が張り付いている。
それもこれもエヴァンジェリンの別荘を出たときに、先に出ていたはずの仲間とまったく連絡が取れないということが原因だ。

――――――――――――――いやな予感がする。

恋は怖気立つ思いだった。
明らかな異常。超鈴音が何かしたとしか思えなかった。

『おかけになった電話番号は――――――』

手当たりしだいに仲間達に電話をかけるがどれも同じ。機械的な音声が返ってくるだけ。
いよいよもってまずいと判断し、タカミチに連絡を入れる。

（早く出てッ！）

『はい』

「高畑先生！やられました！ネギ先生たちが！」

『恋君落ち着いて。一体何があったんだい？』

「はい。実は――――――――――」

「ネギ先生たちが行方不明！？」

その報せは瞬く間に魔法関係者中に知れ渡った。

超鈴音が麻帆良祭三日目、すなわち今日何かしらの行動を起こす。そのための対策を練るために設立された対策本部は騒然となった。

これは超からの先制攻撃と言ってもよく、また罠に嵌められてどこかに監禁されていると見られるネギとその仲間たちの中には、アテナや刹那といった腕利きとして知られている生徒も含まれている。

麻帆良側はそれなりの損害を戦う前から被ったという状況だ。

「超鈴音・・・ネギ先生の信頼を裏切るとは」

「まだ彼女の居場所はつかめませんか！？」

「警戒態勢を強めろ！学園内の認識阻害を強化するんだ！！」

怒号が飛び交い、学園側の魔法使い達の戦意も否応無く上昇していった。

学園所属の魔法使いは優秀である。

なによりここは東日本を統括する総本山。魔法と科学の両方で守護されたある種の要塞なのだ。未だかつてこの要塞を破ったものはおらず、その力は自惚れでもなんでもなく、厳然たる事実として存在していた。

故に超という一生徒が世界に魔法をバラすという愚行を行おうとしていると聞いても、超を知らない魔法使いはそれを脅威として受け取っていなかった。

たった一人で何ができる。

そう、超はたったの一人。それでできることなどそうありはしない。まして世界に魔法をバラすなど到底不可能。

それが大勢を占める考え方であり、超の脅威を知るのが極僅かな魔法使いたちしかいないというのが恋の不安要素であった。

そして、慌ててネギの捜索と超の対策に乗り出す魔法使い達を超はほくそ笑みながら俯瞰している。

彼女がいるのは遥か上空４０００ｍの蒼い空。

その大海を漂うくじら、もとい飛行船こそ彼女の本拠地であった。

「恋さんは引っかかってくれなかったみたいですね」

「本当にあの人は想定外なことをしでかす人ネ」

飛行船の中でハカセと超が話している。

作戦開始前で多少緊張している様子だが概ね普段通り。それくらいの度量がなければこれほど大規模な作戦は結構できないのだろう。

「だがネギ坊主たちは予定通り跳ばした。残りの魔法先生たちも強[B]
C.T.L

制時間跳躍弾を前にすれば脅威ではないネ」

「しかし垣根先生や近衛さん、高畑先生はどうでしょう。素直に中ってくれるとは思えないんですけど」

「うむ、そうね。それについても考えがある。まずB・C・T・Lの情報が漏れる前に垣根サンと近衛サンは退場してもらう。障壁ごと飲み込む防御不可、という特性を知られてしまえば彼等は絶対に撃たれてくれないからネ」

「つまり最初の二発は垣根先生と近衛さんを撃つ事に使うということですね。たしかに近衛さんは放置できませんよね。転移に策敵。気が付いたらここにいたとかって事態にもなりえますからね」

「その通りネ。実際彼女の目を誤魔化すためだけに幾重にも偽装を施しているのだからネ」

超たちの乗っている飛行船は史菜の策敵に引っかからないように偽装されている。それは魔法というよりも心理学的なもの。こんな所にいるはずが無いと思わせ、そもそも探させないという方法だった。

「それに確実に中てるための策もある。少なくとも史菜サンと垣根サンはまず避けられないネ」

超はにやり、と不適に笑った。

そして麻帆良祭三日目午後7時を回ったころ、ついに運命が動き出す。

協会本部に鳴り響く警報。

麻帆良湖から大量の機械人形が出現。中央に向けて進軍を開始したのだ。

「ついに来たか、回線を開け！戦闘員各位に通達、敵魔力駆動体出現！各々所定の位置で対応に当たってくれ！！事態が事態だ、魔法の使用も許可する！！」

「敵機総数２２００、２２５０、２３００、まだ増えます！」

「おい、どうした！？」

「学園のメインコンピュータが何者かにハッキングを受けています！！」

「なんだと！？」

混乱しているのは裏方だけではない。

突如現れた機械軍団、その多くが田中シリーズであるがその混乱は何も知らない一般人に波及し、パニック状態を引き起こしていた。

「とにかく迎撃するぞ！」

「魔導人形なのか！？数が多すぎる！！」

逃げ惑う一般人に配慮しながら戦わざるを得ない魔法使い側にとって、敵機２５００オーバーという数はまさに多勢に無勢という状態だった。
なおかつ、目的が分からない。
いったいこの機械は何を目指しているのか。

「く、な、あれは！？」

驚愕に目をむく魔法使いの前に巨大な鬼が姿を現す。
その大きさは３０ｍもあろうか。それが計六体。学園結界がハッキングによって落ち、高位の魔物も活動できるようになったのだ。
科学の力で現代に蘇った鬼神は一路世界樹の魔力溜まりを目指す。

「なんつー度派手なことを」

「鬼神まで制御してしまうとは、超鈴音、恐るべしと言ったところでしょうか」

状況を見つつ帝督と史菜は対策を進める。
輝く槍を放ち機械人形を串刺しに、そうしている間に史菜は超を探す。
そして、反応があった。
それが指し示す先は遥か上空。それも４０００ｍの高み。

「見つけた！！」

しかし、伝える手段がない。電波、念話ともに封じられている。
自分と帝督で乗り込むか。
そう考えたときだった。

「姉さん」

後ろから話しかけられた。
自分を姉さんと呼ぶのは今恋一人しか居ない。声も恋だった。だから振り向いた。特にに警戒無く。
振り返って、そして、目を疑った。

「じゃあな」

銃口が向けられていた。
ほかでもない史菜に。

「くッ！」

「テメッ！」

パンパン！

驚くほど軽い音。たったの二つの銃声。それだけで勝敗はついた。
誰もが予想していなかった、大戦の英雄がこの時間軸から消滅するという結果で。

「痛ーーーッ」

瞬時に英雄を屠った襲撃者は顔に苦悶を浮かべうずくまっていた。

「くっそ、何本逝った・・・」

B．C．T．Lによって撃たれたものは3時間先へ強制的に跳ばされる。
一度撃たれればあのエヴァンジェリンでさえも脱出は不可能。
驚くべき銃弾である。
しかし、ここでさらに驚愕すべきは完全に油断した状況から一瞬で反撃に出た帝督と史菜の技量だろう。
撃たれた瞬間。ほぼ同時に一撃ずつ叩き込んでいた。
一撃必殺の銃弾でなければ、もしくは敵を油断させていなければ、間違いなく作戦は失敗していただろう。

「一瞬で生体強化体（バイオ・ブースト）のオレをここまで・・・・さすが、伝説の英雄か」

右の肩からごき、という嫌な音。
反撃で外れた肩を入れなおした音だ。
アバラに関しては治癒呪文が効いている。なおかつこの身体は特別製だ。ただの人間よりも怪我には強い。

「肩とアバラで最強二人を始末した。成果としては上々なんじゃねーかな」

ふう、と一息をついて立ち上がる。
超と同じ最新式軍用強化服を着込んだ黒髪の『少女』。
その外見、とくに容貌は、坂井恋と瓜二つだった。

転換期（後書き）

なんとあっさり退場の最強二人。

そして、ついに動き出す超一派。

その名は・・・

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー血と硝煙の匂い
風に乗って運ばれる異臭が鼻を突く。
数刻ほど前までここに木霊していた怒号も怨嗟の声も今や過去のものとなった。

視線の先、紅い大地に黒い点がポツポツと浮かんでいる。それがヒトだったものなんだと朧げながら感じた。
自分の手にかかったのはあのうちのいったいどれくらいなのだろう、と一瞬思ったがすぐに思考を透明化（クリア）にした。
己の存在意義は戦うこと、敵を排除すること。すでに動くことなく、放置すれば砂塵に巻かれ、いずれ消えてゆくただの物に払う関心は無い。
そのように教育（プログラム）されているわけではないのだ。

「時化た面（ツラ）してんじゃねーか、サキよお」

「少佐」

『少佐』
将校の階級の一つ。佐官の最下位。中佐の下、大尉の上。

少佐と呼ばれた金色に光る長い髪を後頭部に高く束ねた女性は人好きのする笑みを浮かべてサキの隣に座り込んだ。
傍から見れば妖精のような端整な顔立ちであるが、その内面はまったくの逆。
今までに上官を殴る、命令は無視する、態度が悪い、などの理由

で何度も営倉送りにされている軍部の厄介者だ。
それでいて一度戦場に出れば無双の働き。外見もあって軍部の実情を知らぬ市井の民から、カリスマ的人気を誇っている。とどのつまりとてつもなく扱いにくい人材なのだった。

「たった一人でなにしてんだい」

「別に何もしていません」

「ふーんそうかい。で、この戦いで何を思った？」

「特に何も。そういったことは教育（プログラム）されていません」

「教育（プログラム）ねぇ」

教育（プログラム）とは学習装置と呼ばれる特殊な機器によって本来習得に時間のかかる様々な技能を短時間で教え込むことである。
少佐はその学習装置の使用を快く思っていなかった。

「なあサキ」

「少佐、わたしの型番はＲＳＢＣ－ｔｙｐ・・」

「長え！つーかロボットじゃあるまいし型番とか言ってんじゃねえ。ほかも連中と見分けつかねえんだから名前くらいちゃんと付けたっていいだろうが。つーわけだからお前はサキだ。いいな。上官（オレ）の命令だ」

酒瓶を煽りながら叫ぶように言い放った。

他の連中と見分けがつかないと言ったが、それもこの戦いまでのことかもしれない。
プラントが破壊され、保存されていた本体も奪取された。データも失われている以上プロジェクトは中止せざるを得ない。
今頃不良品の烙印を押されたサキと同型の少女達が命令になんの疑問も抱かず特攻をかけているころだ。
それを思うと否応無くやるせない気持ちになる。

「少佐、女性なのに一人称がオレというのはおかしくありませんか」

ふと疑問に思ったことをサキは自身の上官に率直に尋ねた。

「うっせー。こうも戦ってばかりだと心も荒むんだよ」

戦うと心が荒むのか、新しい発見だ。
戦いしか知らないサキにはよくわからない概念だったが、なんとなく新鮮な感じがした。
本来プログラムに従い動く彼女達にありえざる、感情という名の付属品。
それが芽生え始めていることに気づいているのは未だ少佐だけだった。

「高畑・T・タカミチは狙撃できず、か。仕方ない仕事を進めよう」

真名は茂みに隠れ潜み、スパイパーライフルをのスコープを覗き

込む。
真名の技術をもってすれば、本来の射程を優に上回る距離の相手に正確にB．C．T．Lを叩き込める。
焦ることなく普段通りの冷静さで引き金を引く。
一人、また一人と魔法使いたちが黒い時間の渦に飲み込まれ、消えていく。

「む、あれは」

狙撃銃の先にこちらを見る金髪の青年。

「確か恋の・・・なるほどわたしに気づいたのか」

しかし真名は躊躇い無く引き金を引く。
消音装置の取り付けられた銃口からほとんど音が漏れずに弾が飛ぶ。
黒い渦はアマネを捕らえることは無かったが、彼我の距離は歴然。
次の弾を込めて撃っても十分な距離である。
ところが、次に身を翻したのは真名のほうだった。

「この距離でこれか」

真名が茂みから逃れた刹那の後に、虹色の閃光が通り過ぎていった。
アマネの虹天剣は同系統の雷の暴風などにくらべ遠距離の敵に対する攻撃性が高いのが特徴だ。

B．C．T．Lがある限り簡単には負けることは無いのだが、さてどうするか。

真名が思案したときだった。
遠く、数百メートル先のアマネが急に動いた。真名に対する攻撃のためではない。まったく別方向からの不意打ちを回避するための行動だった。

「あれは！なるほど、超の言っていたことは本当だったか・・・・・・あれが彼の相手をするのなら、わたしは他を叩くとするか」

真名は思わず驚愕の声を漏らす。
半信半疑ではあったが、こうして実物を見ると信じざるを得ない。
現れた少女は、本当に恋と同じ顔をしている。

「な、に？」

アマネはその光景が信じられなかった。
恋と同じ顔をした人物が敵にいるということに思考が膠着した。

「お前は誰だ」

「超の仲間だよ、アマネ・オルディン。ここは久しぶり、と言っておこうか」

会った覚えはない、と答えようとしたがその胸元に光るネックレスを見てその言葉に得心がいった。
三つの指環を通したシルバーチェーン。
それはアマネが武道大会を抜け出してきた恋に渡した彼のクラスの出し物の品物の一つ。アマネは恋だと思っていたのだが、その実

受け取っていたのはこのそっくりさんだったというわけだ。

「悪かったな、だますつもりは無かったんだ。ただあの時はまだ表舞台に出れなくてな・・・・・コレ、返すぜ」

ニセ恋はアクセサリーをアマネに投げ渡した。

それを受け取ったアマネは問いを投げる。

「で、君は何者なんだ？」

「それに関しちゃあ話せねーな。ぶっちゃけめんどい・・・・・・ただなオレには春野咲って名前がある。それは覚えとけ」

「春野、咲」

アマネはその名前を飲み込むようにつぶやくと、相手を具に観察する。

咲と名乗る少女の外見は恋そのもの。ただし一人称を初めとして口調は男っぽい。よく見れば目つきとかも微妙に違う気がする。

「な、なんだよ・・じろじろ見るなよ」

「あ、すまん」

男っぽい口調で話しているかと思えば、急にしおらしく恥らう。

今までに出会ったことのない人種であることは理解した。

「はあ、とりあえず考えてもしょうがないな。ほら」

アマネは再びネックレスを投げ返した。

「え、おいどういうつもりだ？コイツは恋（アイツ）に渡すつもりじゃなかったのかよ」

「あのな、勘違いだったとはいえ一度渡したものを返せってわけにはいかんだろ。それは君にやったんだし、そのまま持っててくれよ。プレゼントを女の子からつき返されたなんて笑い話にもならん」

「プレゼント・・・いいんだな、もう返してやらないからな！」

「だからいいって」

それを聞いた咲はいそいそとネックレスを付け直した。

多少手間取っていて、もたついていたので完全無防備だったのだがアマネは決して鬼ではない。その隙を突くような非道なマネはしない。いや、ここ以外の場面なら遠慮なく虹天剣をぶっ放したかもしれない。

なにせ敵だし。

ただアマネの頭を悩ませているのはこの春野咲と名乗った少女とどう戦端を開いたらいいのか皆目見当がつかないということであった。

「いよっし、なんか悪いなーただで貰っちまって」

「いや、それはいいんだが」

なんかこいつと戦える気がしない。

後ろで鬼神とか暴れているからのんきに会話しているわけに行かないのだが、かといって敵に背を向けるわけにも行かないし・・・・

「しかしどうすっかな・・・オレは見ての通り蝮蛄（オケラ）だしな。返せるもんがない」

しかも律儀にもお礼を返そうとしている。

うんうん唸って閃いたとばかりに顔を輝かせると、こう言った。

「アデアット！」

「うん？」

その手に現れたのは無骨な拳銃。

その形状は銃身の大きなオートマチックに無理やりリボルバーを装着したようで、全体の大きさもかなりのもの。

咲は銃口をアマネに向け、徐に引き金を引いた。

「うおおおおッ！？」

とにかく銃弾は大きく回避がこの戦いのポイント。

それが功を奏し時空の歪に呑まれることはなかった。B．C．T．Lを装填しているようだ。

「てめえ！今の流れでいきなり撃つか！？」

「いや、なんつーかさ、戦利品？みたいにすれば解決じゃね、て思ったんだよ」

「ふざけんな！今時海賊行為なんて流行らねえよ！！」

銃弾を避けながらアマネはすばやく移動する。

「理解したよ、お前実はすんげえバカだろッ」

「言いやがったな！バカっていうほうがバカなんだよ！」

アマネと咲の戦闘はアマネが思っていたよりもずっとあっさり始まってしまった。

決戦

六箇所の魔力溜まりのうちすでに四箇所が鬼神によって制圧されている。
ここまでくれば超の目的は明白。
彼女の狙いは世界樹の膨大な魔力であり、鬼神はそれをさらに増幅するための装置である。

そこまでは分かった。後はそうした上でどうやって魔法をバラすのか。その方法だった。

恋は紅蓮の双翼を羽ばたかせて空を翔る。
天に紅い軌跡を残し、空高く舞い上がっていく。
目的地は唯一つ。
超鈴音の待つ飛行船。

「必ず、倒す！！」

紅く染めた瞳は高みにいる超を確かに捉えている。
そしてその近くに展開されている超巨大な魔法陣も。

「来たカ、恋サン！」

ガガッ！！

恋の戦斧と超の拳が激しくぶつかりあった。

「グウッ」

押し負けたのは超のほうだった。
上昇とはいえ４０００ｍにもなる助走は待ち構えていた超の身体一つでは受け止められなかった。

「さすがに高畑先生のあとの連荘はきついネ」

「超、すぐに儀式を止めて」

恋は制服の上に黒い外套を着込み、超を睨み付ける。
対する超は恋の視線に晒されても微動だにせず、拒否の意を示す。

「それはできない相談ネ」

「なら、止めさせる！！」

恋は紅蓮の炎を纏い、燃える流星となる。
超はＢ．Ｃ．Ｔ．Ｌの弾丸を湯水の如く消費して恋を捕らえようとする。
しかし、当たらない。
超高速で飛行する恋はその動きに緩急をつけ超の射撃を回避し続けている。

「飛焔！」

放たれる紅蓮の炎。
迫り来る炎は超の視界を紅く染め上げる。
たとえ直撃せずとも炎から溢れ出す熱波だけでも十分な殺傷力がある。この炎の塊を超は全力で避けた。

「む！」

「だあああああああッ！！」

紅の戦斧が従える劫火が長大な剣へと変化する。
断罪の刃が超に襲い掛かる。
侵略すること火の如し。恋は超に反撃させまいと一気呵成の攻め立てる。

しかし必殺をきした刃は超を討つことなく大きなストロークで上から下に落ちただけ。
同時に恋は武器を全てかなぐり捨てて、背面とびの要領で真上に跳ねた。
それは本能的な行動で、なにか理屈があったわけではなかった。
目で見て、耳で聞き、肌で感じるよりも前に、研ぎ澄まされた感覚が恋の脳裏に警鐘を鳴らしたのだった。
それはちょうど恋の背後に現れた超がＢ．Ｃ．Ｔ．Ｌを指に挟んで突き出したところだった。
勘が時間に先行した。
超の真上で身を捻り、生成した炎塊を叩き付ける。武器化している余裕は無い。

そして超がまた消える。消えたと思えば真横に現れ今度こそはと弾を撃ち込んでくる。
半ば反射的に羽を爆発させ間一髪、距離をとる。
炎弾をばら撒いて弾丸の追撃を抑える事も忘れない。

「驚いたヨ。まさかここまで付いてくるとハ。さすが恋サンネ」

「驚いたのはこっちのほう、予想してたとはいえほぼタイムラグなしで後ろを取られるのはやりにくいってものじゃない」

「時間跳躍による絶対回避をそのくらいの感想で閉められるのはなにか悔しいものがあるヨ」

「ようは後ろを取らせなければ良いんでしょ」

恋の身体が紅く輝いた。

炎髪灼眼か！？身構える超だったが、髪色に変化は無い。かわりに現れたのは野球ボール大の炎塊。

幾十、幾百の炎のボールが恋の周囲を取り巻いている。

半径は十メートルを越える炎球の壁。

「真紅を応用すればこんなこともできる。いくら超でもこのなかに跳躍してくることはできないでしょう」

「・・・・考えたネ」

超は内心の舌打ちを隠して恋を見つめ返す。

（小さな騎士団のようなものか。存在が小さい分、数を増やせたわけカ）

超は視線を逸らさず手元の武器を確認する。

自分の頼みとするカシオペアによる時間跳躍戦術は恋の機転で攻撃に転用できなくなった。

恋の周囲にたゆたう炎は超の接近を許しはしない。

あの中に飛び込めばどうなるか。

弾丸を撃ち込む前に炎に触れるのは必至。爆発するか重なった箇所が抉れるかわからないがとにかく一瞬にして大打撃を受けることは間違いない。

（無理やりこじ開けるしかないカ）

超は覚悟を決めて禁呪を口にする。

「呪文回路開放、封印解除・・・・・ラスト・テイル・マイ・マジック・スキル・マギステル」

「な！？」

超が口にするフレーズ。間違いなく始動キー。

超は火の精を招来し、恋に向けて解き放った。

それ自体は脅威ではない。いま恋は完全に全方位を守られている状態だから。

そして周囲に浮かぶ火球は攻撃にも転用できる。

火蜥蜴を打ち抜き、爆散させることなど造作も無いことだった。

「オオオオオオオオオオ！！」

超の雄叫び

B．C．T．Lを恋に向けてひたすら乱射。

その全てが炎塊に触れて黒い渦を巻くが、恋には通らない。

さらにサギタ・マギカの応酬。

超本人が密度の減った炎の中へ飛び込み、穴を掘るように炎塊のなかを突き進んでくる。

恋も気づかざるを得ない。超は力ずくで炎塊の壁を突破しようとしている。

かといって今ここを動けば必殺の弾頭に狙われるリスクがある。
恋は新たに炎塊を補充しつつ時間の渦で掘削してくる超に炎を動員した。
飛焔を放ち、断罪を飛ばし、焔塊で殴りつける。
しかしどれもB．C．T．Lの創る時間という壁に飲まれ、超には届かない。
勝負は消耗戦、喰らいあいに突入していた。

「ラスト・テイル・マイ・マジック・スキル・マギステル！契約に従い我に従え炎の覇王！」

（この呪文は！）

呪文の構成からして間違いない。炎熱系最強クラスの殲滅呪文。
数百メートル規模の大爆発で敵部隊を一掃するものであり、個人に対して使うものではない。
しかも彼我の距離は数メートルしかないのだ。この至近で放てば術者も巻き込まれるに違いない。狂気の沙汰とは思えない。
そして恋の審判の眼は超の身体に刻み込まれる不可解な文様を読み取っていた。
既存の魔法とは違う、見たことのない魔法様式。しかし効果ははっきりとしている。
無理やり超の魔力を引き上げているのだ。

（ありえない！術者すら破滅させるような代物を！）

「もう魔法は使わないで、超！呪文を唱えるだけで全身を痛みが襲っているはずでしょ！！」

「さすがに分かるカッ・・だが！」

血が出そうなほど歯を食いしばった超が叫ぶ。

「止まれはしないのだヨ！絶対ニッ！！」

そして超は限界を超えて最後の呪を紡ぐ。

「燃える天空！！」

世界から音が消えた。

恋の目の前、超至近距離で発生した炎は火山噴火のような爆発的速度で広がり、一秒と経たず数百メートルの爆発へと成長していた。

「げ、ほッ」

ありったけの魔力を総動員し、神力まで開放して防御した結果、恋は辛うじて耐えることができた。

しかし準備していた炎塊はことごとく吹き散らされた。

（超は！？）

自由落下から体勢を立て直し、未だ空を染める炎の中から超を見つけ出す。

恋が超を見つけるよりも先に恋を捕捉していた超は恋に向かって勢いよく突進してきていた。

（今なら恋サンの守りは無い！いけル！！）

炎髪灼眼となった恋は見つけやすい。
一瞬見失った後も、紅い軌跡を残して落下していく恋をすぐに見つけることができた。
弾を連射する。
もちろん撃ち落されるが所詮眼くらましでしかない。
本命は、

（獲っタ！！）

カシオペアによる時間跳躍。
超はついに背後を取った。今までと違い、気づかれている様子もない。Ｂ．Ｃ．Ｔ．Ｌで三時間後に跳ばす。
少々手こずったが。

（わたしの勝ちネ！！）

勝利を確信して振り下ろした手は恋を捕らえることなく、再度空を切った。

「な！？」

超は驚愕の声をもらす。
避けられたのではない。恋が目の前から忽然と姿を消したのだ。
と、すぐさま超の背後に握り拳を作った恋が現れる。
握りこまれた指に嵌められた指輪が明るすぎる水色の炎を揺らめかせている。

（近衛史菜の転移魔法！？）

気づいたときにはもう遅かった。
疲労と痛みで判断能力、反射が致命的に遅れていた超は恋の一撃をかわす事も時間跳躍することもできなかった。

「ぐ、あ」

意識を奪うには至らず、まだ空中で立てる超だが、頼みの綱のカシオペアを破壊され、満身創痍の様相だ。
恋もまた疲労困憊。炎髪灼眼も解除され、これ以上戦闘が長引くのは厳しいという状況。

「はあはあ・・・まさか、カシオペアを破るとは・・・・その指輪に転移魔法を仕込んでいたカ・・・・その構造、まるで原初の魔導器（プラステイア）のようだネ」

「その身体ではもう何もできないでしょう。諦めて」

恋は超よりもまず儀式を止めなければならない。
超に時間をとられるわけにはいかないのだ。

しかし、超はまだ戦う意思を見せている。
残り少ないであろうB．C．T．Lを撃って来る。

「くッ」

恋はやや緩慢な動きでなんとか避けた。
足が棒になっているように重い。

「限界はそちらも同じことネ」

超は全身の呪紋回路を励起させた。
これがあれば限界など簡単に越えられる。その後のことはどうなってもかまわない。あとほんの数分持ってくれればそれで済む。

「紅き焔！！」

「く、あああ！！」

爆発に晒され、恋が吹き飛ぶ。追い討ちをかけるサギタ・マギカをかわす体力が無い。意思一つで魔力を総動員し防御する。

「残念だたネ、恋サン。わたし達の勝ちネ」

超が一方的な勝利宣言をした。
『わたし』ではなく『わたし達』それの意味するところはつまり・・・・

「ッ！」

恋の右下あたり、聳え立つ世界樹がかつて無い発光を見せる。
幻想的な輝き。文字どおり、世界を、歴史を変える神秘の光だ。

「そんな・・・」

同時にそれは恋をはじめとするとする、いまだこの麻帆良で戦っている魔法使いを絶望させる悪魔の光でもあった。

世界樹の魔力を吸い上げ高々と打ち上げられる大魔法。

頂く天蓋が光輝に満ちた魔力で溢れ渦を巻く。
それが全世界に対する強制認識魔法であると知るのはもう少し後のことであった。

「まだ、間に合う・・・あれが完全に発動する前に・・・・止めれば・・・ゲホッ、ガハ！？」

よろよろと飛行船に向かおうとする恋が激しく吐血した。
ついに肉体の限界がやってきたのだ。
受けたダメージは修学旅行の比ではない。
超の計画が成功した時点で精神的な柱も失った。

「ハッハッ・・・真、紅」

なけなしの力で剣を創る。
普段のそれよりもずっと細く折れてしまいそうな剣。

「そうカ、そうだったナ。あなたはこの程度では止まらなイ。知っての通りわたしももう限界だ。お互い次が最後の一手となるダロウ・・・決着をつけようカ」

恋を飛行船に行かせまいと立ちはだかる超が恋に向かって疾駆する。
恋もまた、そんな超を倒すため剣を振り上げた。

戻れ！ネギパーティー！！

あれから一週間がたった。
超鈴音の計画は辛くも成功し、世界に魔法の存在が公表されてしまったのだった。

しかしこの現代社会において魔法は実在します！と声高に叫んだとしても一部のカルト的な信者以外は間に受けることは無いだろう。
それどころか世間からの嘲笑はさけられないし、魔法使い側も魔法の秘匿に関してはいくつもの防衛機構を配して数百年にわたってこの秘密を守り続けてきた。
超が何をしようとも、今の地球、それも先進諸国の人々に魔法の存在を認識させることなど不可能、なはずだった。

ところが、だ。

終わってみれば超の目論見通りに魔法の存在が知られてしまっている。
一週間がたった今、学園のほとんど全ての人間は魔法を信じてしまっているし、あと一月もすれば先進諸国の一般人も魔法を自明のものとして認識することになるだろう。

世界樹の魔力を用いた全世界に対する強制認識魔法は実のところ魔法はあってもおかしくは無い、と言う程度に認識のハードルを下げるだけのものであったが、規模が違う。
なによりインターネットが普及した今、超がネットに流出させた情報はネットという特性もあって削除が難しく、武道大会の映像などが真実として受け入れられてしまっている。

超はたった一人で魔法使い達に勝利したのだ。

「どうだった」

「オコジョ刑二年だそうだ」

綺麗に掃除された白を基調とする部屋。
漂う消毒液のにおいがそこを医務室であると告げている。

アマネは一番奥のベッドに近寄りその脇の腰掛にどっかと座り込んだ。
彼は齢十五の若者であり、麻帆良の一般的な高校に通う高校生であるのだが、今の彼は学生というより仕事に疲れたサラリーマンというほうが似合っている。
アイロンがけされてピシッとしたブレザーの制服も疲労、というよりも悲壮な雰囲気に呑まれ、どことなく縒れたスーツを思わせた。

「そう、いつからなの？」

「来月の初めから、表向きには転校ということにするらしいが」

ベッドに横たわるのは坂井恋。
一週間前の戦いで受けたダメージからずっと寝込んでいたのだ。

外傷は治癒術によってほぼ完璧に修復されたのだが、神力の過剰使用が原因の心身トラブルから入院しているのだった。使いこなすための修行を積んでいたのに情けない。恋は自嘲気味に笑みをうかべる。
扱いとしてはただ一人の重傷者となるらしい。

「そんなに心配しなくてもいいだろ、別に犯罪者ってわけじゃない」

「でも、だったらわたしもオコジョになるべきじゃない」

麻帆良の魔法使い達は本国からの指示で、この事件の責任をとってオコジョとなることが決まっていた。

今は学園長が本国に出向き、無罪放免とはいかないまでも所属している魔法使い達の減刑を願い出ているところである。

ところが恋は早い段階からオコジョ刑から除外されていた。かわりに一年の福祉活動が言い渡されているが。

まだ中学生ということ、最後まで戦い重症を負ったということもあるのだろうがなんらかの政治的なうごきがあったのだと恋は思っている。

坂井という苗字は魔法界ではかなり影響力のある名だ。

帝国ではそれが特に顕著だが、本国の元老院にも顔が利く。

両親が現オスティア総督の影のパトロンをしているからだ。

「それで、アテナたちは」

「まだ見つかっていないようだ。まあ心配いらんだろ」

恋の予想ではアテナたちはB．C．T．Lの強化版のようなものでやられたのだと思う。

故に待っていればいずれ現れると思っていたのだが、あれからすでに七日。

さすがに心配にもなってくる。

と、そこでアマネの携帯電話が震えた。

マナーモードに設定していた携帯のデジタル画面を覗き込むアマネ。

電話ではなくメールだったようだ。

「朗報だ――――――――――――そのアテナたちだが、見つかったらしい」

超の罠に嵌り一週間後に強制転移させられたネギたちは魔法使いから追われる立場となっていた。

すでにネギは拘束されており、エヴァンジェリンの家で策を練っていたときに魔法先生二名が投降を勧告してきたのだった。

ネギの使い魔であるカモミールが閃いた打開策を敢行するためにはいつ解放されるかも分からない投降要請に従えるはずも無く、刹那と楓を残して逃亡しているのだった。

「とんでもないことになっとるな」

「本当になんとかできるんだろーなオコジョ」

千雨がパソコンを閉じたとき、声がかけられた。

「お待ちなさい！！」

影法師を引き連れた金髪の女生徒。

ウルスラの脱げ女という不名誉極まりない称号を与えられてしまった高音は逃亡したネギの仲間を捕縛するために従者である愛衣と

ナツメグを従えアスナたちの前に立ちはだかったのだった。

「おとなしくわたし達に同行してください」

「高音さん、それはできません」

高音の申し入れを明確に拒否する。

今、アスナたちのもとにはこの状況を打開しうるジョーカーが残されている。

そしてそれを使うための方法もある。

五分五分の可能性ではあるが、ここで捕まってはできることもできなくなってしまう。

戦えるものは武器を取る。

アスナは剣を、古は拳を、のどかは鉈をそれぞれ握る。

ほかの者達も杖に手をかけ、呪符を指で挟み、術行使の準備を図る。

「仕方ありませんね」

反抗の意思ありと判断した高音は近接最強モードへ移行する。

背後に巨大な人形を背負うその立ち方は、高音のほうがマリオネットになっているようにも見えなくは無い。

一触即発のにらみ合いは長くは続かず、双方同時に動くことで開戦となった。

ところが、先鋒のアスナと高音が激突する前に、二人を線で結ぶちょうど真ん中あたりに幾本もの虹の煌きが落ちてきた。

地に突きたった極光はその場で炸裂し、虹色に輝く靄となって立ち込めた。

「うひゃ！？」

「な！？」

「双方そこまで！」

割って入ったのはアマネだった。

「なぜ、邪魔をするのです、アマネさん！！」

「なぜって、罪の無い人に攻撃するのは魔法使いの本義に反するからですよ。先輩」

激高する高音にしらじらしい言い訳をするアマネ。

「そこにいる連中は超鈴音の罠で戦闘不能でした。ヤツが行動する前には戦えない状況だったのだから責任を追及するのはおかしいでしょ。なにより魔法に関わってそんなに経っていないヤツも多いんだ。そんなのに魔法使いとして～とか言うつもりですか」

「それは、そうですが。しかし、そうであったとしても、もともと一般人の彼女達が魔法に関わっているということだけでも」

「それを言いますか、この世界で？」

アマネの切り替えしに高音が色を失い言葉に詰まる。

魔法に関わった云々もはや追及のしようが無くなった世界でそのことを罪に問えはしないだろう。

認めたくないが、認めねばならぬ事実だった。

「君達、コレやるからさっさと行け」

アマネはアスナに大きな封筒を投げ渡す。

そこに入っているのは超の起こした事件の顛末、そして今の麻帆良の状況、ネギの居場所までの仔細が記された報告書の束。

こうなることを予期した恋に頼まれて密かに写していたものだった。

「ま、まちなｓ」

走り去っていくアスナたちを追おうとする高音に虹の魔弾が炸裂する。

「アマネさん！」

「あいつ等にはこの状況を何とかする策もあるみたいだし、信じてみるのも一興。で、だ先輩。ここで一勝負してくれません？オコジョ刑に重症の従者（ミニステル）。ストレスたまってるんですよ」

「・・・・いいでしょう。わたしも振り上げた拳をどこに下ろそうかと考えていたところです。そういうことなら、あなたに叩き落すことにしますッ！！」

お姉様ー！という制止を振り切って高音が挑発に乗った。

お互い本当に余裕が無いな、と思いながらアマネは迎え撃つべく呪文を唱えた。

アマネの手渡した資料に導かれてアスナたちは魔法使いの本部に潜入を果たしていた。

オオオオオオオオオオオォォォォォォォォンン・・・・

異界の獣の叫び声のような音が響き渡る。

彼女達が駆け下りている螺旋階段は地下三十階まで達する。中央は吹き抜けで下から吹き上げる風がいような風鳴りとなっているのだ。

「やっとついた。地下三十階！！」

「長すぎだっての」

「魔法による妨害等を考慮すれば無難な選択だったかと思うのですが」

はあはあ、と息と乱して休む一行。

それでもネギが待っているのはこの先である。止まっている時間はない。

「いくわよみんな」

真っ先にアスナが薄暗いトンネルのような道に足を踏み入れる。

声をかけられた皆もアスナについて先にすすもうとする。

ところが、そこで予期せぬ事態が起きた。

アスナが勢いよくふきとんで来たからだ

オレンジ色のツインテールは放物線を描くことなく背にした石壁

に叩きつけられた。

「な、これは！？」

漏れでた声は誰のものであったのか。

その場にいる誰もが我が目を疑った。

黒い獣毛。筋肉質な四肢に力を漲らせるその姿は犬のそれに他ならない。

しかし、ただの犬ではないことは見て明らか。頭から尾までざっと５ｍほど。地面からでも３ｍに達する巨体。しかも頭が三つに蛇の鬣。ケルベロス、そしてオルトロスという神話の怪物の特徴を併せ持った魔獣だ。

さらに新手。翼を持った四足生物。馬と鳥をあわせた外見はヒポグリフとよばれる獣。

「やべえぞ！」

「どんな化物よ！！」

悲鳴と咆哮が響き渡る。

ハルナと千雨がケルベロスに追われて通路に逃れた。

ヒポグリフもこのかを襲い守ろうとするアテナや小太郎、まき絵等とともに別の道に行ってしまった。

「あ、ぐあッ」

通路の一つではケルベロスが千雨を前足で踏みつけ押さえ込んでいた。

（い、いてえ・・幻じゃねえ）

背中にかかる重圧は確かに、疑いようも無く本物。
つまりコレはファンタジーではなく、現実。

「ぎゃあああ!?へびぃ!!」

ハルナもこのときすでに鬣の蛇に巻きつかれ身動きを封じられてしまっていた。

ケルベロスの虜となった二人には共通の危機感があった。
ギラリと光る無数の牙。犬は肉食。そしてこの巨体。

「は、なせ!」

「ちょ、ちょっとまって」

ケルベロスの一噛みで一介の女子中学生である自分達はあの世行き。想像に難くない。

ザン!肉を切り裂く鈍い音。同時に大量の血液が零れ落ち地面を赤く染める。

「かはッはっはぁ」

「のどか!!」

切り落とされたのは蛇とケルベロスの両前足。
駆けつけたのどかの鉈の一振りで綺麗に切断されたのだった。

「二人とも大丈夫？」

ギャアアオオオオ！！

脚を再生したケルベロスが咆哮する。
大気が振るえる轟音にのどかは泰然として動じない。

襲い来るケルベロスに神狂いの車輪を叩きつける
真ん中の頭を潰され、さらに背中を大きく抉られて倒れるケルベロス。のどかは激痛に叫ぶ魔物を冷ややかに見下ろす。
金色の魔眼を爛と光らせ、再生を始めるケルベロスを、正確にはそれを構成する術式を視る。

「幻覚としてはそこそこ強力な部類です。が、わたしも幻術使いです。この程度ではこの魔眼をだませませんよ」

「！？」

のどかを黙らせようとしているのか、再生しきっていないケルベロスが手を伸ばす。
それに先んじてのどかは紡ぐ。

「ほどけよ偽りの世界」

世界に亀裂が走り、ガラスのように砕け散る。
瞬く間に犬は消え、全員揃って階段を下りた場所に立っていた。

「は！？」

「なになに！？どういうこと！？」

「すべて幻です」

のどかは瞳をもとに戻し説明した。

眼前に座り込む小さな子どもがこの幻術の犯人であるということを。

「ごめんなひゃあい」

目深にかぶったとんがり帽子を落とした素顔はかわいらしいおかっぱ頭の女の子。小学校に上がるくらいだろうか。

「パパがオコジョになっちゃうから、なにかお手伝いがしたくて」

ぽろぽろ、涙をこぼす。あげく泣き叫んで走り去ってしまった。

魔獣の件が解決し、安堵したがだからといって休む間は無い。女の子を追う形になってしまうがその方向に目的地があるのだから仕方ない。

トンネルを抜けると立ちはだかるのはタカミチと弐集院。

逃げ去った女の子が抱きついているところをみると間違いなく二集院が父なのだろうが、鳶が鷹を産むというのか、ふっくらした体格に似合わぬ娘だ。蛙の子は蛙ということにならないことを祈ろう。

「行きなさい、アスナ君」

戦わなければならないかと身構えていたところにかけられたのは意外な言葉だった。

「立場上協力はできないけど、僕でも十分くらい居眠りしちゃうことはあるかもしれないからね」

「ありがとうございます！！」

タカミチの好意で道は開けた。

このさきにいるであろうネギを求めてアスナたちは駆ける。

「たのもしい子達じゃないか」

「ええ・・・」

この日一日でどれだけの距離を走っただろうか。

麻帆良の地下にコレだけ広大な土地が広がっていることにも驚いた。認識阻害があるとはいえよく今まで隠し通せたなと感心してしまうくらいだ。

「おい、アレみろ」

カモが声を張り上げる。

その先からやってくる小柄な人影。長い杖を背負った少年。

「ネギ！！」

「アスナさん！？それに皆さんまで！！」

ネギもまた彼を閉じ込めていた牢から抜け出してきたのだ。

「牢破りか！やるやないかネギ！！」

「小太郎君危ない」

やっと待ちに待った再開を喜び分かち合う。

「あー楽しい雰囲気のところ悪いが時間がねえ。聞いてくれ、このまま世界樹の最下層にまで潜る。それが唯一の打開策だ」

カモの策単純明快。世界樹も魔力でしか動かないカシオペアを使うために、一週間経っても辛うじて魔力が残っているであろう最深部にまでいくことで時間跳躍を図ろうというのだ。

「本当に根っこのほうには魔力が残ってるの？」

「ここ一世紀の発光記録が「世界樹をこよなく愛する会」のホームページに乗っています。それを見ると二十二年に一度の大発光は概ね一週間光を放っているようなんです」

千雨がパソコンの画面を見せながら説明する。

「だがグラフを見てわかるように消えかけだ。五分五分の可能性に賭けるしかねえ」

「カモさん、見てください」

夕映の声。

薄暗い通路が淡く輝いている。

通路内の根が魔力を伴う光を放っているのだ。

「針が動いてる。戻れるよ！！」

「刹那さんと楓さんを」

「おい、アレ！！」

やっとのことでゴールかと思った矢先のことだった。

「冗談じゃないぞこれ」

誰が思うだろうか、学園の地下にドラゴンがいようとは。

腕の無いワイバーン。

恐竜のような硬い外皮。太い牙。

「ギャオオオオオオオオオ！！」

「きゃあああああああああ！？」

脱兎の如く逃げ出した。

竜はさすがに手に負えない。あいにくと仲間の中に竜殺し（ドラゴンスレイヤー）はいないのだ。

召喚した刹那も竜を殺すには専門の装備を用意して数日かかる大仕事だと言っていた。
よってネギたちはひたすら駆ける。
ドラゴンと戦う余裕は無いのだ。
抜けた先は開けた空間。全体を淡い光がやさしく包んでいる。

「あそこに光の球体があります！」

「おそらくあれが世界樹の魔力の集積だ、急げ！！」

千雨以外は体力に自身のあるメンバーだがここに来ては息が上がる。
最後の数十メートルを走りきったときは倒れこみそうになっていた。

「楓さんは！！」

「拙者ならここに」

忍の術の移動法だろうか。ベストタイミングで現れた楓。
楓の登場と同時に翼を広げて飛び立とうとする竜。

「アニキ！押せ！！」

そのときネギは葛藤していた。本当に戻ることが正しいことなのか。

「アニキ！！」

「ネギ！！」

超は悲劇を回避するために事件を起こしたのではないのか。

（今は戻ろう！みんなそのために頑張ってくれたのだから）

ネギは迷いながらも覚悟を決め、カシオペアを起動した。

戻れ！ネギパーティー！！（後書き）

明日から、学校始まるぜえい・・・・

新学期始まる前に学祭終わらせたかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4674u/

紅蓮の御子は虹とともに

2011年10月5日19時03分発行